

第十一章 北遣艦隊	四六四
第一節 行動ノ概要	四六四
第二節 戦闘創傷	四六五
第一目 軍艦霰	四六五
第二目 軍艦吹雪及ヒ軍艦日進裝砲艇	四六六

戦傷寫眞説明

明治三十七八年海戦史

第七部 醫務衛生

第一篇 戦闘時軍醫部員ノ作業及ヒ戦闘創傷

第八章 沈没軍艦

第一節 概要

我カ聯合艦隊ハ旅順港外ニ於テ、敵艦隊ニ最初ノ打撃ヲ加ヘタル後、港内ノ間接射撃ヲ行フコト數次、港口ノ閉塞ヲ企圖スルコト三回、敵ノ港内ニ退嬰シテ復出動ヲ屢セサルニ及ヒテハ、更ニ假裝砲艦、艦載水雷艇ヲ以テ、絶エス敵前ニ機械水雷ヲ敷設シ、敵ヲシテ容易ニ遁逃スルコトヲ得サラシメ、又或ハ未知ノ海面ニ掃海隊ヲ放チ、驅逐艦及ヒ水雷艇ヲ派シテ敵艦ノ行動ヲ監視シ、或ハ支隊ヲ編制シテ遼東半島ニ於ル陸軍ノ作戰ニ協力セシムル等、一ハ以テ旅順ノ封鎖ヲ嚴ニシ、一ハ以テ其ノ陷落ヲ速ナラシメンコトニ勵メタリ、

旅順口ニ對スル此ノ期ノ作戰ニ於テ、我カ艦隊ノ將士ハ、常ニ機械水雷ノ危険ヲ冒シ、要塞ノ砲火ニ堪ヘ、強風怒濤ヲ凌ギ、又時ニ襲來スル濃霧ト戦ヒ、終始一貫營々トシテ各自ノ任務ヲ遂行シタルヲ以テ、艦艇ノ罹災沈没眞ニ少カラサリキ、即チ戦闘艦二隻、巡洋艦四隻、海防艦、砲艦四隻、驅逐艦二隻ハ、前後相踵テ黃海ノ海底ニ沈ミ、其ノ他水雷艇第四十八號、第五十一號、第五十三號、第四十二號假裝砲艦太田川丸及ヒ富士、明石、三笠、淺間、橋立ノ艦載水雷艇、第二十二號掃

海汽艇等モ亦沈没ノ悲運ヲ免レス、或ハ千代田、春雨、鵬、第七號、第八號假裝砲艦ノ遭難トナリ、從テ將卒ノ戰歿多ク此ノ間ニ生シ、日露戰役總戰死者ノ約五分ノ三ヲ占ムルニ至リ、其ノ忠烈慘憺タル遭難當時ノ實況ト、之カ救護ニ從事シタル僚艦將士ノ苦心トハ、記シテ以テ永ク後昆ニ傳フ可キモノ鮮シト爲サルナリ、乃チ左ニ表示シテ、以テ艦船ノ沈没ト死傷者トノ關係ヲ明瞭ナラシム、

沈没艦艇死傷者艦艇別轉歸表

艦艇名	記 事	在艦人員	死傷總數	即死	傷後死	入院死	免留退院	治愈退院	入院ヲ要セサル輕傷
宮 古	三十七年五月十四日大霧日ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	二二八	二四	二				四	(業一八)
初 瀨	三十七年五月十五日旅順港外ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	八三四	五八六	四九三	一			(業一五)	(業一三九)
八 島	同前	七四一	三				(業一)	(業一)	(業一)
吉 野	三十七年五月十五日黃海ニ於テ春日ト衝突沈没ス	四二三	三二四	(業一九)				(業一)	(業四)
大 島	三十七年五月十七日遼東灣ニ於テ赤城ト衝突沈没ス	一三七	〇						
曉	三十七年五月十七日旅順港外ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	五九	二三	二三					
海 門	三十七年七月五日大連灣外ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	一七〇	三一	二二				(業一五)	(業四)
速 島	三十七年九月三日旅順港外ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	五三	三五	二〇				三	(業一〇)
平 遠	三十七年九月十八日渤海方面ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	二〇一	一九七	一九七					

愛 宕	三十七年十一月六日直隸海峽ニ於テ暗礁ニ觸レ沈没ス	一〇一	〇						
濟 遠	三十七年十一月三十日渤海方面ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	二三三	六七	三八					(業二)
高 砂	三十七年十二月十三日旅順港外ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	四三六	三〇三	二七四	九				(業一)
小 計	軍艦十二隻	三、六〇六	一、五九三	一、三八八	一〇	一	三	七五	一一六
水雷艇第四十	三十七年五月十二日大霧日ニ於テ水雷二觸レ沈没ス	二三	一七	六		一		八	一
水雷艇第五十	三十七年六月二十八日小霧日ニ於テ暗礁ニ觸レ沈没ス	一六	一三	一三					
水雷艇第五十	三十七年十二月十四日セレストトリニ水雷二觸レ沈没ス	一八	一八	一八					
水雷艇第四十	三十七年十二月十五日「セレスト」トリニ水雷二觸レ沈没ス	二一	八	七		一			
小 計	水雷艇四隻	七八	五六	四四		二	一	八	一
總 計	軍艦十二隻水雷艇四隻	三、六八四	一、六四九	一、四三二	一〇	三	四	八三	一二七

日露ノ全戰役中、戰役ニ參與シタル我カ帝國軍艦ハ、戰艦六隻、(八六二)裝甲巡洋艦八隻、(七四二)裝甲海防艦二隻、(一一二)巡洋艦二十隻、(六八四)其ノ他ノ軍艦十八隻、(八九六)驅逐艦二十二隻、(五四二)ニシテ、總計七十六隻二十七萬四千八百八十四噸ナリシカ、戰艦二隻、(二七七)巡洋艦四隻、(三三三)其ノ他ノ軍艦四隻、(七九)驅逐艦二隻、(八七三)ハ、戰役ノ第一期ニ於テ沈没シ、水雷艇、假裝砲艦、艦載水雷艇ヲ除キ、軍艦十二隻、四萬六千二百五噸ノ喪失アリ、即チ其ノ隻數及ヒ噸數ニ於テ約六分一ノ多數ヲ失ヒ、軍艦水雷艇遭難當時ノ在艦人員三千六百八十四名ニ對シテ、死亡者一千四百四十五名、(三九二)死傷總計一千六百四十九名、(四四七)ト爲リ、軍艦ノミニアリテハ在

艦人員三千六百六名ニ對シテ死者一千三百九十九名^(三八・七%)死傷者一千五百九十三名^(四四・一%)ニ達シ、又最多ク戦死者ヲ出シタル初瀬、吉野、平遠、高砂ノ四隻ニアリテハ、一千八百九十四名ノ在艦者ニ對シテ、實ニ乗員ノ六八、三二「パーセント」ノ多數ヲ占メタリ、左ニ以上諸艦遭難ノ概況ト、之カ救護ノ方法トヲ摘録ス、

戦艦初瀬ノ旅順港外ニ於テ、敵ノ敷設セル水雷ニ罹リテ舵機ヲ損シ、次テ第二ノ爆發ニ因リテ火藥庫ヲ破ラレ、艦體破壊セラル、ヤ、多數ノ兵員迅速上甲板ニ集リ、避難ノ準備ヲ爲セシヲ以テ、爆沈ト同時ニ身ヲ海ニ跳ラシタルモノ多ク、又被害ノ激烈ニシテ沈没ノ咄嗟ニ起リタルニ拘ラス、僚艦ノ赴援其ノ時ヲ失セサリシニ因リ、比較的多數ノ傷溺者ヲ救助スルコトヲ得タリ、吉野ハ濃霧海面ヲ壅塞シテ咫尺ヲ辨セサル夜間、後續艦ノ撞頭ニ後部水線下ヲ破壊セラレ、乗員ノ退去未タ全ク終ラサルニ、艦體既ニ右舷ニ傾斜シ、兵員ヲ滿載セル二隻ノ大艇、爲メニ壓セラレテ顛覆シタルニ因リ、多クノ溺死者ヲ出セリ、平遠ハ、九月十八日夕陽將ニ没セントスル頃、鳩灣方面ニ在リテ浮流水雷ニ觸レ、同夜海上險惡ナルニ加ヘテ、艦ノ沈没最急劇ニ、且鐵島ニ遮ラレテ僚艦濟遠ノ視界内ニ在ラサリシカ爲メ、乗員四名ノ礁脈島ニ漂著セル外悉ク溺死セリ、高砂ハ、寒風厲ヲ劈クノ雪夜、旅順港外ニ於テ浮流水雷ニ觸レ、防水作業ノ功無キヲ見ルニ及ヒ、無線電信ヲ以テ救ヲ僚艦ニ求メシカ、音羽ノ赴援セル頃ハ艦影已ニ没シ、二隻ノ端舟避難者ヲ乗セテ彷徨セルアルノ外、艦長以下凡テ海中ニ漂ヒ、其ノ過半ハ救助ノ前後ニ於テ、不幸ナル凍溺死ヲ爲セリ、官古、海門、濟遠、曉、速鳥モ亦水雷ニ破ラレシモ、乗員ノ多數ハ僚艦ニ救助セラ

レ、八島、大島、愛宕ノ沈没ニ際シテハ、幸ニ一名ノ戦死者ヲ見スシテ止ミタリ、

艦船沈没ノ際ニ於ル軍醫部員ハ、豫メ配置ノ定ムル所ニ隨ヒテ作動シ、先ツ在艦傷病者ヲ避難セシメ、其ノ職責ヲ完ウシタル後、自己ノ運命ヲ決シタリシ跡、歴然トシテ掩フ可カラス、之カ爲メ、高砂ニ於ルカ如ク、軍醫部員悉ク戦没シテ、病者ノ全キヲ得タルアリ、初瀬ニ、海門ニ、濟遠ニ、皆概ネ然ラサルナシ、而テ軍醫ノ多クハ、之カ爲メニ難ニ殉シ、幸ニシテ生命ヲ全ウシタルモノト雖モ、或ハ身ニ創傷ヲ負ヒ、或ハ沈溺シテ、殆ト瀕死ノ状態ニアリテ、多クノ戦友ト共ニ救助ヲ受ケシヲ以テ、復自艦將士ノ救護ヲ事トスル能ハス、是ヲ以テ艦船沈没當時ノ狀況及ヒ救護ノ實況ニ關シテハ、多クハ之カ救護ニ赴キタル僚艦軍醫ノ主掌スル所ニ係リ、救助ノ方法ト治療ノ效果トニ至リテハ、避難軍醫ノ業績ト相俟チテ、海軍衛生上參考ニ資スヘキモノ多シ、若シ夫水雷ノ難ニ遭フモ沈没ノ悲運ニ陷ラサリシ艦艇、及ヒ沈没セル水雷艇、假裝砲艦ノ死傷者、其ノ他ニ就テハ、第四章ニ之ヲ編入シ、軍艦沈没當時ノ狀況及ヒ死傷者トヲ述フルニ當リ、其ノ原因ノ水雷ニアルト否ラサルトニ據リ、節ヲ換ヘ目ヲ逐ウテ記載セントス、

第二節 機械水雷ニ因ル沈没

第一目 軍艦官古

第三戦隊ノ通報艦官古^(一八〇噸)ハ、第五戦隊ノ嚴島、松島、橋立、鎮遠、千代田及ヒ第三戦隊ノ日進ト共ニ、三十七年五月十二日大密口沖ニ達ス、戦隊ハ此ノ日先ツ陸上ノ敵兵ニ砲火ヲ加ヘ、次テ各艦ヨリ多數ノ汽艇掃海艇ヲ放チ、第二、第六、第二十、第二十一艇隊ト協力シテ、灣内ノ掃海ヲ

開始セシカ、陸上ノ敵兵ハ翌日ニ至リ俄ニ其ノ兵力ヲ増シ且野砲ヲ操縦シテ屢我カ掃海隊ヲ
 苦シマシム、依テ十四日官古ハ、陸岸ニ近ク錨地ヲ換ヘ、敵兵ヲ威嚇砲撃シ、掃海艇隊ノ掩護ニ任
 シタリ、既ニシテ午後四時各艦ヨリ派遣セル掃海艇ハ、其ノ作業ヲ終リテ歸來シタルヲ以テ、官
 古ハ其ノ二艇ヲ左舷ニ收メ、更ニ小蒸氣船ヲ右舷側ヨリ引揚ケタルヲ以テ、艦體少シク右舷側
 ニ傾斜セシカ、同三十分敵ノ敷設セシ水雷ニ觸レ、爆發ト共ニ機關室右舷側ニ於テ船底ニ近ク
 破孔ヲ生シ、海水速ニ中甲板ヲ浸シ、約二十分時ヲ經テ全ク海底ニ膠著セリ、
 官古ハ、遭難ノ際二百十八名ノ乗員ヲ有セシカ、機關部下士二名戰死シ輕傷二十二名ヲ生ス、孰
 レモ嚴島及ヒ橋立ニ收容後治療ヲ加ヘ、翌十五日其ノ四名ヲ神戸丸ニ送院シ、殘餘ハ大義丸ニ
 便乗シテ、二十一日佐世保ニ歸著ス、官古遭難當時ノ狀況ニ就キ、左ニ同艦乗組海軍中軍醫爾見
 淳太郎提出ノ報告ヲ掲ク、

軍艦官古沈没時ノ狀況

軍艦官古乗組 海軍中軍醫 爾見 淳 太郎

明治三十七年五月十四日午後四時三十分軍艦官古ハ大霧口ニ於テ敵ノ沈置セル機械水雷ニ觸レ沈没スルノ悲運ニ遭遇
 セリ是ヨリ先キ第三艦隊第五戰隊ノ諸艦ハ大霧口掃海ノ命ヲ受ケ此ノ月十二日ヨリ危險多キ該事業ニ著手セシカ未
 タ其ノ目的ノ半ヲ達スルニ至ラズシテ既ニ四十八號艇爆沈ノ不幸アリ更ニ二十四日第五戰隊ノ各艦ヨリ掃海隊ヲ編制シ
 大舉其ノ目的ヲ遂行セントシ此ノ日早朝ヨリ掃海艇ハ各艦ヨリ派遣セラレテ各部署ニ就キ專ラ其ノ任務ニ從事セリ而
 テ本隊ハ二三海里ノ沖合ニ投錨シテ之ヲ監視シツ、アリシカ此ノ日陸上ニ於ル敵ノ守備兵ハ前日ニ比シテ其ノ兵力ヲ
 増加シタルモノ、如ク天然ノ掩護物ヲ利用シテ屢猛烈ナル一齊射撃ヲ試ミ又ハ徐家屯附近ノ高地ヨリ砲撃ヲ行フ等掃

海隊ノ作業ヲ妨害スルコト甚シカリシヲ以テ旗艦嚴島ハ命シテ我カ官古ヲ出來得ル丈ケ陸岸ニ接近セシメ敵兵ニ砲撃
 ヲ加ヘ以テ之ヲ威嚇セシム是ニ於テ官古ハ進ンテ陸岸附近ニ錨地ヲ變更シ敵ニ砲火ヲ加フルコト數次敵兵遂ニ沈黙
 シテ掩護ノ效果ヲ全ウシ此ノ日ノ事業ヲ完成スルコトヲ得午後二時頃ニ至リテ其ノ作業ヲ止メ掃海艇ハ將ニ各所
 屬ニ歸ラントス本艦ノ掃海隊ハ素ヨリ附近ニ在リテ作業シ逸早く復歸セシヲ以テ之ニ使用セシ短艇二隻ヲ左舷ニ取
 リ入レ更ニ小蒸氣船ヲ右舷ニ引揚ケントシ小蒸氣船ノ水面ヲ離ル、コト數尺ニ及ヒ其ノ重力ノ爲メ艦體少シク右舷
 ニ傾キタリト思フ間モナク轟然タル爆發ハ機關室附近ニ當リテ起レリ同時ニ艦體ハ非常ナル「ショック」ヲ受ケ稍上方
 ニ跳上ルト共ニ急ニ甚シク左舷ニ傾キタル爲メ甲板上ニ在リタル者及ヒ室内ニ倚坐セシ者ハ孰レモ其ノ場ニ顛倒シ小
 官ノ如キモ他ノ士官ト共ニ「プープ、デッキ」ニ在リシカ起立ノ姿勢ヲ失フルニ由ナク左舷側ニ撥飛ハサレ繼ニ「オーニ
 ング、スタンション」ニ頼リテ海中ニ墜落スルヲ防キ得タリ斯テ艦體ノ傾斜ハ須臾ニシテ舊位ニ復セシモ甲板上ノ光景
 ハ實ニ慘酷ヲ極メ機關室ニ通スル「ベンチレーター」ノ「カウル」ハ甲板上ニ墜落シ該「ベンチレーター」ヨリハ盛ニ白色油
 狀ノ流動物ヲ噴出シ前後後橋階梯ノ多數ハ撥飛ハサレ多クノ硝子類ハ粉碎セラレタリ而テ彼ノ小蒸氣船引揚ケニ從事
 セシ兩舷直竝ニ直外兵ノ如キハ此ノ「ショック」ノ爲メ多クハ甲板上ニ顛倒シ小蒸氣「ホール」ヲ離手スルニ至リシ爲メ汽
 艇ハ水面ニ落下シ此ノ際汽艇「クリュー」一名ハ海中ニ墜落セシモ直ニ救助セラレタリト云フ又汽罐竝ニ機關室ニ在リ
 タル當直機關部員ノ語ル所ニヨレハ爆發後ノ狀況ハ略甲板上ニ於ルモノト類似セルモ兩室ノ浸水ハ甚タ急速ニシテ彼
 等ノ多數ハ其ノ身體ノ一部ヲ海水ニ浸サレ辛ウシテ身ヲ以テ甲板上ニ免ル、ヲ得タリト云フ又後部下甲板ニ在リタル
 診察室ニ在リテハ爆發後小官ノ目撃セシ所ニヨレハ治療準備ノ爲メ机上ニ出シ置キタル小外科器ハ甲板上ニ墜落シテ
 其ノ内容物ハ悉ク室内ニ散亂シ其ノ他藥瓶若クハ治療品ノ飛散セル有様ハ恰モ曩ニ踏査シタルコトアル尾濃震災當時
 ノ光景ニ喟然トシテ殆ト手ヲ下スヘキ所ヲ知ラス僅ニ疾病要略其ノ他數種ノ治療品ヲ搬出セル外多クハ艦ト運命ヲ共
 ニシ小官再診察室ニ到リテ治療品及ヒ書類ヲ取り集メントセシ時ハ浸水既ニ甚シクシテ其ノ目的ヲ果ス能ハサリシハ

遺憾ナリ但獨リ軍醫部ノミ然リシニアラサルヲ一言セントス斯テ艦體ハ漸次後部ヨリ沈降シ初メシヲ以テ小官ハ命ニヨリ休業患者並ニ當時ノ負傷者兩三名(内准士官)ヲ小蒸氣船ニ收容シ主計長ト共ニ之ニ同乗シ船内ニ於テ負傷者二名ニ應急處置ヲ施シ軍艦嚴島ニ向テ避難セリ小官ノ本艦ヲ離ルハ暫時ニシテ本艦總員ハ短艇並ニ他艦ノ救助艇及ヒ掃海艇ニ分乗シテ其ノ大部ハ嚴島ニ他ノ小部ハ他艦ニ向テ避難シ艦體モ亦漸次後部ヨリ沈降シ初メハ徐々ニ後ニハ「ケビ」砲門ヨリ浸水スルト共ニ急速ニ艦尾ヲ水中ニ没シ前部ハ高ク水面ヲ離レ艦體ハ殆ト直立シテ艦腹ヲ露出シ更ニ再舊位ニ復シ僅ニ兩櫓ノ一部ヲ殘シテ全ク海底ニ膠著セリ本艦ノ爆發セシヨリ茲ニ至ル迄約二十分ヲ經過セリト云フ本艦爆發ノ爲メニ生シ戦死者並ニ重傷者ハ皆機關部當直員ニシテ前者ハ倉庫當直ニ服セシモノナリシカ遂ニ其ノ死體ヲ發見スルコト能ハサリキ思フニ爆發ノ部位ニ近カリシ爲メ之ニ殉シタルモノナラン後者ハ多クハ機關室ニ當直中器機類或ハ防水扉等ニ觸レ負傷セシモノニシテ何レモ前額若クハ頭部ヲ傷ツケタルモノナリ

勤務場所	負傷ノ動機	負傷部位並ニ創傷名	官姓名
左舷機械室ノ中央	「シヨック」ノ爲メ起立ノ儘前方ニ轉倒シ左右機械室中央ノ防水扉ニ衝突シ負傷ス	左前額部挫創	海軍少機關士 佐藤 達
右舷機中央「スター」チング、ハンドルノ前	「シヨック」ノ爲メ前方ニ顛倒シ該「ハンドル」ニ衝突シ負傷ス	前額部挫創及ヒ右膝關節部ノ内上方ニ於ル挫傷	海軍上等機關兵曹 能勢源太郎
左舷機械室ノ蒸化器ト後罐トノ間	不明(恐ラクハ勤務場所ノ爆發部ニ近カリシ爲メ「シヨック」ノ爲メ前方ニ顛倒シ該「ハンドル」ニ衝突シタルモノナラン)	左前額部挫創(頭蓋骨一處損傷)	海軍二等機關兵 多田 庄助

以上三名ハ稍重傷ト見做スヘキ者ナリ其ノ他輕傷者ニ至リテハ枚舉スルニ暇アラス多クハ小蒸氣船揚ケ方ニ從事中顛倒シテ或物體ニ撞突シ負傷セシモノニシテ四肢ノ挫傷ヲ多シトスレトモ或ハ爆發後艦内ヲ疾走中機械室ヨリ噴出セシ油狀

物ノ爲メニ滑倒シ或ハ階梯ノ撥飛ハサレタルヲ知ラスシテ降下ヲ試ミ高處ヨリ墜落セシモノ或ハ其ノ他ノ作業ニ從事シ(水雷爆發ノ際艦前「プレート」上ニ在リテ送水ニ從事中該「プレート」ト共ニ上方ニ撥飛ハサレ「プレート」ノ爲メニ左大腿ニ擦過傷ヲ受ケタルモノ又ハ本艦ノ將ニ沈没セントスル際「プレート」ヲ用ヒテ二號離ノ安全扉ヲ開ク爲メ強ク牽引セルニ該「プレート」逸脱シテ胸部ヲ打撲セシモノ等)負傷セシモノ等アリト雖モ孰レモ輕傷ニシテ殆ト治療ノ要ヲ認メサル程ナリキ而テ前記佐藤少機關士外二名ノ比較的重傷者ハ軍艦嚴島ニ收容後同艦治療室ニ於テ宮川同艦軍醫長執刀ノ下ニ縫合(佐藤)若クハ開放ノ儘(多)防腐の處置ヲ施シ鹽大

澳歸著後翌十五日水雷艇ニ便乗セシメ第三地點ニ在ル病院船神戸丸ニ送院セリ

本艦總員ハ前ニ記載セルカ如ク大部ハ嚴島ニ他ノ一部ハ橋立ニ收容セラレシカ翌十五日ニ至リ更ニ第五戰隊ノ各艦ニ分乗ヲ命セラレ富川軍醫長ハ嚴島ニ留リ小官ハ中機關士一名並ニ機關兵若干名ト共ニ日進ニ收容セラレタリ次テ五月十九日ニ至リ各艦ニ分乗セル宮古ノ殘員ハ艦長以下一同第三地點ニ於テ通信船大義丸ニ便乗シ此ノ日同地點ヲ發シ二十一日佐世保ニ歸著シ下士卒一同ハ佐世保海兵團ニ入團ヲ命セラレ准士官以上ハ同鎮守府内ニ宮古殘務取扱所ヲ開キ以テ殘務整理ニ從事セリ

宮古遭難時ノ死傷者ヲ左ニ摘錄ス

傷溺死

軍艦宮古乗組	海軍一等機關兵曹	吉 松 末 松(二五五)
同	海軍三等機關兵曹	戸崎喜右衛門(二五六)
明治三十七年五月十四日宮古沈没ノ際戰死シ死體ヲ收容スル能ハス		

前額部挫創

同	海軍少機關士	佐 藤 達(二五七)
明治三十七年五月十四日午後四時三十分宮古沈没ノ際左舷機械室中央ニ在リ激動ノ爲メ防水		
第八章 第二節 第一目 軍艦宮古		

扉ニ衝突シテ負傷シ五時五分嚴島ニ收容セラル之ヲ診スルニ左上眼窩縁ノ中央ヨリ外方ヘ距
ル一五仙迷ノ部ヨリ上外方ニ向ヒ長サ三仙迷ノ不正形挫創アリ深サ骨膜ニ達ス仍テ縫合防腐
糊ヲ施シ翌十五日病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス縫合部ハ第一期癒
合ヲ營爲シ其ノ中央米粒大ノ肉芽面ヲ殘シ、モ速ニ治癒シ五月二十八日全治退院ス 經過
日數十四日

前額部挫創 右膝關節部挫傷 左耳後部擦過傷

軍艦宮古乗組 海軍上等機關兵曹 能勢源太郎(三五八)

明治三十七年五月十四日午後四時三十分宮古沈没ノ際右舷機中央スターチングハンドルノ前
ニ在リ激動ノ爲メスターチングハンドルニ撞突シテ負傷シ五時五分嚴島ニ收容セラル之ヲ診
スルニ右眉ノ内端ヲ上方ニ距ル三仙迷ノ部ニ斜ニ左上方ニ走ル長サ三仙迷ノ挫創アリ周圍少
シク腫脹ス右膝關節ノ周圍肌熱高ク且稍腫脹シテ壓痛アリ其ノ他左耳後部ニ小擦過傷ヲ認ム
仍テ前額ノ挫創ヲ縫合シテ防腐糊ヲ施シ翌十五日病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍
病院ニ轉院ス縫合創ハ第一期癒合ヲ營ミ縫絲ヲ拔去セシニ中央ニ小豆大ノ肉芽面ヲ殘シ、モ
日ナラスシテ治シ右大腿内側及ヒ腓腸部ノ壓痛同膝關節部ノ腫脹モ亦全ク消散シテ六月十日
全治退院ス 經過日數二十七日

左大腿挫傷

同 海軍一等機關兵 溝口 甚(二五九)

明治三十七年五月十四日午後四時三十分宮古沈没ノ際艦前ノ「プレート」上ニ在リ送水ニ從事中
激動ノ爲メ「プレート」ト共ニ撥上ケラレ左大腿ヲ該「プレート」ニ撞突シテ負傷シ五時三十分橋立
ニ收容セラル之ヲ診スルニ左大腿外側上部ニ三條ノ擦過傷アリ一ハ大轉子上ヲ越エテ前上方
ヨリ後下方ニ走リ其ノ長サ六仙迷他ノ二條ハ其ノ下方ニ在リテ之ト竝行ス該部較腫脹シ溢血
ヲ伴ヒ劇痛ヲ訴フ依テ鉛糖水浴法ヲ處シ加療日數七日ニシテ休業ヲ要セス二十一日治癒ス其
ノ後ハ第十六艇隊ニ轉シ勤務セシニ七月上旬ニ至リ舊傷痕ノ深部ニ發痛シ益増劇スルノ傾ア
リ此ノ月十四日熊野丸ニ於テ需診ス當時左大轉子ノ後部ニ甚シキ疼痛アリ視診上左股關節稍
腫脹セル觀アリ關節ノ運動少シク碍ケラル十五日西京丸ニ送院スプリンスニツツ氏浴法ヲ處
シ疼痛徐々緩解ス經過中痔核ノ手術ヲ受ケ八月六日佐世保海軍病院ニ轉院ス爾後壓痛全ク消
退シ股關節ノ運動モ亦自在トナリ八月十三日全治退院ス 經過日數九十一日在院日數二十
九日

左顱頂部挫創兼顱頂骨外板氷裂骨折 右鼓膜裂創

同 海軍二等機關兵 多田 庄助(二六〇)

明治三十七年五月十四日午後四時三十分宮古沈没ノ際左舷機械室蒸化器ト後罐トノ間ニ在リ
不明ノ固形物ニ打タレテ頭部ニ負傷シ五時五分嚴島ニ收容セラル之ヲ診スルニ左外耳道ノ上
方約九仙迷ノ部ヨリ斜ニ後上方ニ向ヘル挫創面アリ長サ七仙迷深サ骨膜ニ達シ創縁比較的銳
利ナリ骨膜ハ創下ニ於テ剝離セラレ骨質ハ外顱頂結節ノ外方ニ於テ前下方ヨリ後上方ニ走ル

長サ四仙迷ノ外板氷裂骨折ヲ呈ス、仍テ乾ガーゼヲ創面ニ貼シ、繃帶ヲ施シ翌十五日神戶丸ニ送院ス、同病院船ニ於テ骨折ノ周圍ニ在ル骨膜ヲ近接セシメ創腔ヲ清拭シ創縁ヲ縫合シテ防腐繃帶ヲ貼シ十九日佐世保海軍病院ニ送院ス、當時縫合部已ニ癒著スルヲ以テ縫絲ヲ拔去ス、而テ右耳聽力減退スルヲ以テ診スルニ骨導右側ニ強ク右鼓膜ハ溷濁シテ其ノ前下方ニ小裂孔ヲ認メ聽力ハ二百分ノ觸ナリ加療ニ依リ穿孔狹小シ聽力二百分三十ト爲リ六月四日全治退院ス
經過日數二十一日

右顳顬部挫傷

軍艦宮古乗組

海軍上等兵曹

石澤源右衛門(三六二)

五月十四日宮古沈没ノ際掃海艇用彈藥收メ方ニ從事中爆發ノ爲メ上方ニ振投セラレ後艦橋ニ衝突シテ右顳顬部ニ負傷ス、同部ニ約掌大ノ腫起セル部アリ皮膚及ヒ在下骨質ニ異常ヲ認メス依テ石炭酸水罌法ヲ處セシニ經過良好ニシテ五月二十一日治癒ス
受療日數七日

右膝關節部挫傷

同

海軍一等兵曹

北野直四郎(三六二)

五月十四日宮古沈没ノ際水雷調整室ニ在リテ掃海用具收メ方ニ從事中爆發ニ遭ヒ強ク振投セラレテ十六斤四分一裝藥ニ衝突シ右膝關節部ニ負傷ス、同部内側ニ二三ノ小溢血斑アリ該部多少腫大シ疼痛及ヒ少許ノ運動障礙アリ石炭酸水罌法ヲ處シ五月十九日全治ス
受療日數五日

右外踝部擦過傷

同

海軍一等機關兵曹

森 清 次(三六三)

五月十四日宮古沈没ノ際小蒸氣船揚ケ方ニ從事セシ際爆發ニ遭ヒ強ク振投セラレテ何物ニカ衝突シ右外踝部ヲ擦過シ橋立ニ收容セラル、之ヲ診スルニ該部ニ徑約六仙迷ノ擦過傷アリ其ノ中央ニ溢血ヲ徴シ疼痛アルモ内部損傷ノ徴ナシ仍テ鉛糖水罌法ヲ施シ五月二十一日全治ス
受療日數七日

右下腿挫傷

同

海軍二等兵曹

島見又次郎(三六四)

五月十四日宮古沈没ノ際掌帆長屬當直トシテ後甲板右舷側ニ在リ小蒸氣船揚ケ方ニ從事中爆發ニ遭ヒエンザン、スカイライト上ニ投擲セラレ何物ニカ衝突シ右下腿ニ負傷シ同部内側上三分一部ニ二箇ノ溢血斑アリ石炭酸水罌法ヲ處シ五月十九日全治ス
受療日數五日

左臀部打撲

同

海軍一等水兵

濱田 佐三(三六五)

五月十四日宮古沈没ノ際フライイングブリッジニ在リテ小蒸氣船揚ケ方傳令ニ從事中爆發ニ遭ヒ振投セラレテ甲板上ニ轉倒シ左臀部ヲ打撲シ該部ニ疼痛アリ他覺的検査上異常ナシ石炭酸水罌法ヲ處シ五月二十日全治ス
受療日數六日

左下腿挫傷

同

海軍一等水兵

河村 貞七(三六六)

五月十四日宮古沈没ノ際上甲板中央左舷「エンジン、スカイライト」ノ傍ニ在リテ小蒸氣船揚ケ方ニ從事中爆發ニ遭ヒ強ク振投セラレテ何物ニカ衝突シ左下腿ニ負傷シ同部内側上部ニ約掌大ノ腫起部アリ處々ニ皮下溢血ヲ呈ス疼痛アリ、石炭酸水罌法ヲ施シ五月二十一日全治ス 受療日數七日

右顙頂部、左膝部挫傷(業)

軍艦宮古乗組 海軍一等機關兵 立石 米吉(二六七)

五月十四日宮古沈没ノ際蒸餾器室ニ於テ作業中浸水甚シキニ至ルヲ以テ右舷機上ヨリ同機室下甲板壁ニ存スル小窓孔ヲ潜リテ出テントスルトキ右顙頂部及ヒ左膝關節部ニ負傷ス、右顙頂部中央ニ二錢銅貨大ノ腫脹アリ又左膝關節ノ内側ニ雞卵大ノ發赤部アリテ何レモ疼痛ヲ有ス、石炭酸水罌法ヲ施シ五月十八日全治ス 受療日數四日

前胸部打撲(業)

同 海軍一等機關兵 佐々木新之助(二六八)

五月十四日宮古沈没ノ際罐室内ニ於テ勤務中爆發ニ遭ヒ本艦ノ將ニ沈没セントスルヲ知リス「パンナー」ヲ用ヒテ二號罐ノ安全瓣ヲ開ク爲メ強ク之ヲ牽引セシニ該「スパンナー」逸脱シテ胸部ヲ打撲シ負傷ス、胸骨體部ニ於テ第四肋軟骨ニ近ク二錢銅貨大ノ皮膚潮紅部ヲ存ス疼痛アリ、橋立ニ於テ樟腦精ヲ塗布シ五月十六日全治ス 受療日數二日

右拇指掌骨指骨間關節捻挫

同 海軍一等主廚 川原 八六(二六九)

五月十四日宮古沈没ノ際小蒸氣船揚ケ方ニ從事中爆發ニ遭ヒ振動ノ爲メ右手ヲ右舷側ニ撞突シ右拇指掌骨指骨間關節部ニ負傷ス、該部少シク腫脹シ運動少シク碍ケラレ疼痛ヲ存ス、鉛糖水罌法ヲ施シ五月十八日全治ス 受療日數四日

左大腿挫傷

同 海軍二等水兵 林 直熊(二七〇)

五月十四日宮古沈没ノ際上甲板右舷中央「エンジン、スカイライト」ノ傍ニ在リテ小蒸氣船揚ケ方ニ從事中爆發ニ遭ヒ振投セラレテ「ベンチレーター」ニ衝突シ負傷ス、左大腿下部外側ニ約掌大ノ腫脹部アリ疼痛ヲ訴フ、石炭酸水罌法ヲ施シ五月十九日全治ス 受療日數五日

右前脛部挫傷

同 海軍二等水兵 市川 惣馬(二七一)

五月十四日宮古沈没ノ際第二「カッター」内ニ在リテ作業中爆發ニ遭ヒ振動ニヨリテ顙倒シ「スオールド」ニ撞突シ右前脛部ニ負傷ス、同部中央ニ徑一時ノ挫傷アリ不正圓形ヲ呈ス、乾「ガト」セラ貼シ繃帶ヲ施シ五月十七日全治ス 受療日數三日

右下腿挫傷

同 海軍二等水兵 池田 良吉(二七二)

五月十四日宮古沈没ノ際上甲板右舷「エンジン、スカイライト」左側ニ在リテ小蒸氣船揚ケ方ニ從

事中爆發ニ遭ヒ強ク振投セラレ「ベンチレーター」ニ衝突シ右下腿ニ負傷ス、同外踝部ニ疼痛ヲ訴ヘ且少シク腫脹ス、石炭酸水罌法ヲ處シ五月十九日全治ス 受療日數五日

下口唇挫創

軍艦宮古乗組 海軍二等水兵 新開 龜 三(三七三)

五月十四日宮古沈没ノ際上甲板中央左舷エンジン、スカイライトノ傍ニ在リテ小蒸氣船揚ケ方ニ從事中爆發ニ遭ヒ小木片飛來シテ下口唇ニ負傷ス、同部一般ニ腫脹シ中央ニ不正形淺キ小挫創ヲ認ム、防腐繃帶ヲ施シ五月十九日全治ス 受療日數五日

左環指挫創(業)

同 海軍二等機關兵 信田 岩 吉(三七四)

五月十四日宮古爆發ノ際命ニ依リ「プームス」上ニ在リシ木材ヲ海中ニ投スルニ當リ左環指ニ負傷ス、同指末節爪甲剝離シ同指小指側ニ挫創ヲ認ム、防腐繃帶ヲ施シ五月十八日全治ス 受療日數四日

右膝關節部挫傷

同 海軍二等機關兵 桂樹竹次郎(三七五)

五月十四日宮古沈没ノ際後部機關室ニ在リテ作業中爆發ニ遭ヒ震動ノ爲メ左舷側ニ撞突シ右膝關節部ニ負傷ス、同時少シク腫脹シ疼痛アリ歩行少シク妨ケラル、石炭酸水罌法ヲ處シ五月十九日全治ス 受療日數五日

右小指球部切創

同 海軍二等機關兵 吉原房太郎(三七六)

五月十四日宮古沈没ノ際後部罐室ニ在リテ作業中爆發ニ遭ヒ激動ニヨリ搬上ケラレ何物ニカ衝突シテ右小指球部ニ負傷ス、同部ニ縱走セル長サ三仙迷ノ皮膚切創アリ、乾「ガーゼ」貼シ繃帶ヲ施シ五月十九日全治ス 受療日數五日

右上顎右側門齒折傷

同 海軍三等水兵 山口米太郎(三七七)

五月十四日宮古沈没ノ際上甲板ニ在リテ作業中爆發ニ遭ヒ激動ニ依リテ撥飛ハサレ何物ニカ衝突シテ右側上顎門齒二板ヲ折斷セラレタルヲ以テ鹽剝含嗽劑ヲ與フ、五月十九日知覺過敏去ルヲ以テ全治トス 受療日數五日

右下腿部挫傷

同 海軍四等機關兵 林 梢 美(三七八)

五月十四日宮古沈没ノ際後部罐室ニ在リテ作業中爆發ニ遭ヒ右下腿ニ負傷ス、同部中央ニ於テ脛骨ニ沿ヒ約掌大ノ腫脹セル部アリ皮下溢血ヲ認メ疼痛アリ石炭酸水罌法ヲ施シ五月十九日全治ス 受療日數五日

第二目 軍艦初瀬

戰艦初瀬(四五二噸)ハ第一艦隊司令官海軍少將梨羽時起ノ旗艦トシテ、敷島、八島、笠置及ヒ龍田

ト共ニ、三十七年五月十四日午後六時第三地點ヲ發シ、十五日午前十時五十分初瀬、敷島、八島ノ
序列ヲ以テ、老鐵山ヲ南東ニ距ル十海里ノ地點ニ達シタリシニ、遇敵ノ敷設セル機械水雷ニ衝
觸シテ、後部舵機室左舷側ヲ破ラレ、艦ノ運轉自在ナラサルニ至レルヲ以テ、笠置ニ曳カレテ避
難ノ準備ニ汲々タリシ際、午後零時三十四分再機械水雷ニ罹リ、後部火藥庫ニ大爆發ヲ起シ、艦
體之カ爲メニ破壊セラレ、轟然タル音響ト共ニ瞬時ニシテ海底ニ沈没セリ、

初瀬遭難當時ノ乗組人員ハ、八百三十四名ナリシカ、第一回ノ爆發ニ於テハ、後部操舵室ニ於テ
機關兵一名戰死セシアルノミ、第一回爆發後、兵員多クハ上甲板ニ於テ作業シ、不幸ニシテ中及
ヒ後部ニ在リタルモノハ、第二回ノ爆發ニ於テ重大ナル創傷ヲ受ケ、且擲撥セラレテ海中ニ陷
リタルモノ多ケレトモ、前部ニアリタル兵員ハ、自ヲ跳リテ海中ニ入り浮流セル釣床、筏、木材等
ニ頼リテ、水面ニ漂ヒ生命ヲ全ウシタルモノ三百四十名アリ、即チ龍田ニ收容セラレタル梨羽
第一艦隊司令官以下二百十六名、笠置ニ收容セラレタル海軍主計少監藤野理吉以下百二十四
名ニシテ、同艦副長海軍中佐有森元吉以下士官准士官三十六名、下士卒及ヒ軍屬四百五十八名
ハ戰死シ、四等水兵一名ヲ除クノ外、悉ク其ノ死體ヲ收容スル能ハサリキ、又遭難時ノ負傷者ハ
九十二名ニシテ、病院船神戸丸ニ二十六名、西京丸ニ二十六名ノ入院者アリ、其ノ神戸丸ニ收
容セルモノハ、十九日佐世保海軍病院ニ轉院シ、西京丸ハ二十日其ノ十四名ヲ退船セシメタル
後、二十八日吳ニ於テ殘餘ノ十二名ヲ海軍病院ニ送り、此ノ外士官一名病院船ヲ經スシテ佐世
保海軍病院ニ入院シタルヲ以テ、内地ノ病院ニ轉療シタルモノ三十九名ニ達シ、内軍屬一名佐

世保海軍病院ニ於テ死亡シ、機關兵一名ハ兵役ヲ免セラレタル外、負傷者ノ創狀概ネ輕微ニシ
テ孰レモ久シカラスシテ治癒シ、福岡丸其ノ他ニ於テ加療セル三十九名ハ、輕微ノ創傷ニ屬ス、
而テ初瀬遭難ノ實況ニ關シテハ、同艦乗組海軍中軍醫布上義一ノ報告ニ詳細ナルヲ以テ、負傷
者ノ創狀及ヒ當時救助收容ニ從事シタル諸艦船軍醫長ノ報告ト併セテ左ニ掲載ス、

軍艦初瀬遭難報告

初瀬軍醫長代理 海軍中軍醫 布 上 義 一

初瀬ハ我カ艦隊ノ中堅ナル一等戰艦ニシテ長サ(垂線)一二二、九一九迷突幅最大二三三、八迷突吃水平均八、二三〇迷突排
水量一五、二四〇實馬力(通)一四、七〇〇速力一八、八帶九吋大砲十二門安砲四門十五擲速射砲十四門十二斤速射砲十二門
水雷發射管四門ヲ有シ英國「アームストロング」會社ノ製造ニ係ル其ノ進水ハ明治三十二年六月二十七日ニシテ領收
シタルハ三十四年一月十八日ナリ四月十五日横須賀著後或ハ常備艦隊司令官官旗艦トナリ或ハ司令官官旗艦トナリ三
十六年十二月二十八日聯合艦隊ニ編入セラル日露ノ國交斷絶スルヤ本艦ハ第一艦隊第一戰隊司令官官旗艦トシテ明治
三十七年二月六日他ノ戰隊ト共ニ堂々佐世保軍港ヲ發シ猛烈敵海ニ向フ九日旅順口外ニ於テ第一戰隊ノ殿艦トシテ
敵艦隊ト戰ヒ以來屢該港口外ニ迫リ敵艦及ヒ要塞ヲ攻撃シ偉功ヲ奏セリ然ルニ五月十五日旅順口直接封鎖ニ從事
中敵ノ機械水雷ニ罹リ瞬時ニシテ爆沈ノ不幸ヲ見ルニ至ル其ノ狀況ヲ左ニ詳記スヘシ

艦隊ノ位置、航路及ヒ初瀬沈没狀況其ノ他

明治三十七年五月十四日午後六時初瀬ハ梨羽司令官ノ旗艦トシテ敷島、八島笠置、龍田ト共ニ第三集合地點ヲ發シ旅
順口直接封鎖ニ向フ別ニ高砂ハ特務ヲ帶ヒ本艦ニ隨從ス翌十五日午前一時三十分龍田ハ驅逐隊ト聯絡通信ヲ交換スル
爲メ南三川島沖ニ向ヒ四時笠置ハ速力ヲ増シ旅順口監視ニ向フ此ノ日天氣晴朗波浪靜穩ニシテ偏南微風アリ午前七

時戰闘準備ヲ爲シ八時四十五分戰闘部署ニ就キ整備後各砲ニ當直一名ヲ、ヲ殘シ他ハ開散休憩ス本隊(一初回二數)ノ針路ハ西微南ニシテ半速力ヲ以テ航行シ旅順口前ヲ通過シ老鐵山南方ニ於テ左ニ十六點針路ヲ變換シ東微北ニ定針ス筈置ハ旅順口南東方面ニ於テ敵ヲ監視シ龍田ハ老鐵山南方ニ於テ敵ヲ監視スル爲メ轉針セシニ第三回閉塞隊ノ戰死者ノ死體浮流セルヲ發見シ之ヲ收容中午前十時五十分初瀬ハ老鐵山頂ヲ北三十八度西黃金山ヲ北微西ニ見ルノ位置ニ於テ俄然艦尾ニ震動ヲ感ス小官ハ休憩中ナリシヲ以テ後部シエルターデッキニ上リ遙ニ旅順口方面ヲ觀望シツ、アリシニ此ノ劇動ヲ感スルヤ黑煙ハ殆ト艦尾ヲ沒シ艦ハ次第ニ左舷ニ傾斜スルヲ以テ水雷ノ爆發ナルヲ自覺シ直ニ治療所ニ走リ看護手看護等ト疾病要略原簿其ノ他ノ緊要書類ヲ纏メ一方ニハ看護ニ命シテ休業患者ヲ集メシム此ノ時下甲板ハ已ニ防水扉ヲ閉鎖シタル爲メ戰時治療所ノ交通ハ全ク杜絶セリ是ニ於テ治療部員ハ總テ後甲板砲塔ノ右舷側ニテ兵員ノ動作ヲ妨ケサル位置ニ集合シ此ノ處ニ總テノ緊要書類ヲ整頓シタリ(此等ノ書類ハ後部一ノ關軍醫長ハ下甲板後部右舷側ノ私室ニ在リテ椅子ニ倚リ執務中激動ニ因リ椅子ト共ニ數尺彈ネ揚ケラレ同時ニ電燈消滅シ諸器具ノ墜落破壊セルヲ見火藥瓦斯ノ臭氣ヲ感シ乃チ水雷爆發シタルヲ覺リ速ニ上甲板ニ上ラントセシニ士官室ノ階梯ハ墜落セシモ幸ニ「メンロープ」垂下セシヲ以テ之ニ依リ上甲板ニ出デタリトテ其ノ職ニ就カレタリ上宮中軍醫ハ士官室ニ在リシカ急キ治療所ニ至リ救急治療品ノ準備等ヲ指揮セリ此ノ日休業患者ハ總計四名ニシテ内三名ハ直ニ集リシモ一名ハ來ヲス百方搜索ノ末遂ニ之ヲ發見シタリ當時下甲板ニ在リテ劇動ノ爲メ人事不省ニ陥リシモノアリシモ即時救急法ヲ施シ忽ニシテ回復セリ以上ノ休業患者ヲ看護シ兼テ救急治療品ノ準備ニ著手セリ

開ク所ニ據レハ右ノ水雷ハ後操舵機室左舷側ニ觸發セルモノニシテ當時該室内ニハ一名ノ機關兵當直シ前操舵機室内ニハ機關兵三名アリシカ後室ノ者ハ遂ニ出デ來ラス前室ニ在リシ者ハ兩室間防水扉ヲ閉鎖スルノ暇ナク倏チ浸水シ辛ウシテ脱出シ直ニ操舵機室昇降口防水扉ヲ閉鎖シタリ操舵機室前方ハ直ニ後部水雷室ニシテ其ノ防水扉ヲ鎖シタルトキハ防禦甲板下二二尺マテ浸水セリ此ノ如クシテ防禦甲板ノ防水扉ハ渾テ閉鎖セラレシモ士官室左舷ニ在ル「レリー

ビングテークル」ノ索ヲ通スル管ヨリ甚シク噴水シ士官室壁間ヨリモ亦劇シク噴水シタリト云フ各員ハ熱心其ノ作業ニ努メタリシモ海水次第ニ侵入シ艦體ハ漸々左舷ニ傾斜シ後部沈降シ午後零時二十分頃ニハ既ニ浸水面「スターンウオーク」ニ達シ内外水面ノ差二四呎傾斜約四度ニシテ尙徐々ニ浸水スルモ漸次其ノ勢ヲ減シ設使海水後甲板ニ達スルコトアルモ沈没ノ不幸ヲ免ル、ヲ得ヘカリシト又機關室ハ只少シ浸水シ傳話管ヨリ噴水セシノミ而テ左舷機ノ使用ハ當時不可能ナリシモ右舷「シヤフトタンネル」ニハ尙浸水セサリシト是ヨリ先キ上甲板ニ於テハ總員ヲ以テ被曳船準備ヲ爲シ笠置ヲ招致シ第二「カッター」ニヨリ先ツ左舷ノ鋼索ヲ笠置ニ取リ次ニ右舷鋼索ヲ取ル爲メ「リービングライン」ヲ笠置ニ送ラントシ之ト同時ニ一方ニ於テハ萬一ヲ慮リ第一第三「カッター」及ヒ外舷艇ヲ外方ニ回シ小蒸氣船ニ點火シ各艇卸シ方ノ準備ヲ爲シ上甲板豫備圓材端舟甲板敷板食卓豫備木板等ヲ以テ右舷端舟甲板及ヒ後甲板ニ數個ノ筏ヲ作り又後甲板ニ固縛シタル舷梯汽機室上ノ竹製防敵物前後艦橋ノ釣床等總テ浮上スヘキ物體ノ固縛ヲ解キ下甲板ヨリ可及的食卓及ヒ腰掛ヲ後甲板ニ運ヒ前後「デリック」ヲ用意シ大艇卸シ方ニ從事シ初メ「ピンネース」ヲ卸シ次ニ「ランチャ」ヲ卸シ終リテ「デリック」ヲ收メントシタリ當時小官等ハ前ニ記スルカ如ク救急治療品ノ準備中ナリキ然ルニ何ソ測ラン時恰モ午後零時三十四分艦首東北東ニ在リ老鐵山頂ヲ北四十度西ニ見ルニ及ヒ後部砲塔下附近ニ於テ再甚シキ激動ヲ感スルヤ忽チ猛烈ニ爆發シ轟然タル音響ト共ニ火煙噴騰シ後橋「メンデリック」及ヒ煙突倒レ甲板飛ビ木片鐵片等縱横ニ飛散シ艦體ハ急ニ左舷ニ傾斜シ後部ヨリ沈降シ一分三十秒餘ニシテ全然艦影ヲ沒セリ此ノ際本艦ヲ近ク目撃シタル笠置及ヒ本艦ノ兵員等ニ質シ、ニ艦體前部ハ急激ニ舉揚シ遂ニ全ク直立シ衝角ハ數十尺ノ高サニ聳立シ多數ノ人員右舷側外舷ヲ滑リテ海中ニ落下スルアリ或ハ炎々タル爆火ノ中ニ葬ラル、アリ或ハ後艦橋ヨリ後甲板ニ飛ハサル、アリ而テ破壊ノ音響ハ溺者ノ叫聲ト相和セリ此ノ如クシテ艦ハ左舷ニ捻レツ、沈没スルヤ忽チ大渦流ヲ生シ夥多ノ釣床筏木材等浮出シ溺者ト共ニ幾回カ浮沈シ溺者或ハ頭部ヲ失ヒ或ハ手足ヲ斷タレ或ハ各人縋リ合ヘルアリ或ハ足ヲ引ケルアリ其ノ慘憺タル光景實ニ名狀スヘカラサリシト

小官ハ爆發ノ激動ニ因リ震盪症ヲ起シ其ノ場ニ倒レ(位)失神セシモ後艦橋若クハ「シエルター」デッキ邊ニアリシ兵員(或

ハ物體(小官ノ背部ニ墜落シ圖ヲ醒覺スレハ漂々タル黒煙ノ裡ニ包マレ周圍暗慘トシテ咫尺ヲ辨セザリシカ吹キ來レル風ノ其ノ煙ヲ拂フヤ身邊ニハ無數ノ破片霰ノ如ク飛散シ且附近ニ倒レタル死傷者ノ出血淋漓タルヲ目撃セリ此ノ際後甲板ハ水面ヲ距ル僅ニ尺餘小官ハ著服帶劔ノマ、海中ニ投シ一タヒハ渦中ノ人トナリシモ直ニ水面ニ浮ヘルヲ以テ游泳シツ、之ヲ顧ミレハ艦ハ直立シテ已ニ一半ハ海中ニ没シ黃褐色ノ濃煙燻ニ昇騰シ猛烈ナル火焰ヲ吐キツ、覆没セリ尙游泳ヲ續ケシニ大渦ノ周圍ニ起リシ波浪ハ屢小官ヲ纏弄シテ爲メニ海水ヲ呑ムコト數次呼吸切迫シ疲勞甚シク游泳ヲ續行スルコト能ハサルニ至レリ恰モ好シ「ハンモック」ノ波上ニ浮流セルモノヲ發見シ之ヲ抱持シタリ此ノ時海面ヲ一望スレハ今迄アリシ初瀬ハ已ニ艦影ヲ留メス其ノ沈沒點ニハ只波浪湧キ無數ノ水泡揚ルアルノミ又其ノ周圍ニハ數多ノ釣床「筏」木材ノ如キモノ浮流シ其ノ間ニ點綴セル溺者ノ頭部ハ宛然黒豆ヲ撒布シタルカ如シ我カ忠勇ナル士卒ハ斯カル酸鼻ノ光景ニ遭遇シ身ハ九死ノ境ニ在ルモ尙一人トシテ救助ヲ乞フモノナリ只殘念、ロスケ奴復讐スルゾ等ノ聲ヲ聞クノミナリキ而テ救助艇ノ來ルヤ先ツ上官ノ所在ヲ示シ其ノ救助セラル、ニ非サレハ以テ自己ニ及サシメザリシハ實ニ感嘆ノ外ナカリキ小官カ「ハンモック」ニ縋リシ際ニハ近傍ニアリシ多數ノ兵員ハ只管救助艇ニ向テ此處ニ士官アリト大聲疾呼シテ報シツ、アリキ斯テ小官ハ救助艇ニ救ヒ揚ケラレ笠置ニ收容セラレタリ當時氣温ハ蓋華氏五十度前後ナリシナラン而モ水中ニ在ルコト約二十分時以上其ノ間幾回ノ波浪ニ掀弄セラレシ爲メ救助艇ニ收容セラレシ際ハ全身氷ノ如ク厥冷シ殆ト人事不省ノ狀態ナリキ救助艇ノ兵員ハ直ニ小官ノ被服ヲ脱シ自己ノ腹巻服等ヲ以テ溫包シタリ如何ナル場合ニモ我カ兵士カ規律正シク奉公ノ誠ヲ致スハ詢ニ嘆美スルニ堪ヘタリ尙救助艇ニアル間ニ數回ノ嘔吐ヲ來セシヲ恍然記憶セリ此ノ日救助ニ努力シタルハ龍田並ニ笠置ノ二艦ニシテ此ノ慘狀ノ内ヨリ比較的多數ノ人員ヲ救助シ得タルハ實ニ兩艦ノ勇敢ナル動作ニ由ラスンハアラス生存者一同其ノ厚意ニ對シテハ畢生忘却スル能ハサルヘシ

司令官ノ龍田ニ乗艦セラル、ヤ龍田ハ直ニ司令官旗ヲ掲揚セリ時ニ人員ノ救助已ニ了リ將ニ出航セントスルヤ旅順港内ヨリ敵ノ驅逐艦十六隻舳艫相叩ミ出現シテ追尾シ來リシモ笠置高砂來リ第六戰隊須磨、千代田、秋津洲應援トシ

テ來リ遂ニ之ヲ擊退シタリ而テ龍田ハ第三地點ニ向ヒテ急航シ笠置モ亦第三地點ニ向フ

沈沒後梨羽司令官以下二百十六名ハ龍田ニ藤野主計長以下百二十四名ハ笠置ニ收容セラレタリ其ノ官職氏名左ノ如シ

一軍艦龍田ニ收容セラレタル分

司令官	海軍少將	梨羽時起	乗組	海軍上等筆記	齋九雄藏(負傷)
艦長	海軍大佐	中尾雄(負傷)	同	海軍一等兵曹	南正右衛門
機關長	海軍機關大監	佐藤龜太郎	同	海軍一等兵曹	水川熊吉(負傷)
航海長	海軍中佐	千坂智次郎(負傷)	同	海軍一等兵曹	百田利助
水雷長	海軍少佐	小林惠吉郎(負傷)	同	海軍一等兵曹	富永寅彦
砲術長	海軍少佐	白井兼太郎(負傷)	同	海軍一等兵曹	絲山三一
分隊長	海軍大尉	小倉卯之助	同	海軍二等兵曹	前田三之助(負傷)
乗組	海軍少尉	中根正方(負傷)	同	海軍二等兵曹	大野十五郎
同	海軍少尉	横田亨(負傷)	同	海軍二等兵曹	柚木伸助(負傷)
同	海軍少尉	中村熊三(負傷)	同	海軍二等兵曹	高橋三郎
同	海軍少尉候補生	秀島政一	同	海軍二等兵曹	竹下藏助
同	海軍少尉候補生	清遠光禮	同	海軍二等兵曹	岩坂奎三郎
同	海軍少尉候補生	宮島敬次郎	同	海軍二等兵曹	大曲權七
掌帆長	海軍兵曹長	上野直吉	同	海軍二等兵曹	北原三藏
乗組	海軍機關兵曹長	三富喜三郎	同	海軍二等兵曹	松永圓次郎(負傷)
同	海軍上等機關兵曹	國廣虎吉	同	海軍二等兵曹	澄井豐藏(負傷)

同	乘組	海軍三等水兵	坂本金太郎
同	同	海軍三等水兵	三浦新吉
同	同	海軍三等水兵	辻堂一松
同	同	海軍三等水兵	伊藤平三郎
同	同	海軍三等水兵	荒木十米藏
同	同	海軍三等水兵	中原實藏
同	同	海軍三等水兵	長谷川寛勝
同	同	海軍三等水兵	田中十内
同	同	海軍三等水兵	秋元長次郎(負傷)
同	同	海軍三等水兵	田岡熊吉
同	同	海軍三等水兵	伊藤清若
同	同	海軍三等水兵	永井信次郎
同	同	海軍三等水兵	萩尾源太郎
同	同	海軍三等水兵	須子武一
同	同	海軍三等水兵	田島健治
同	同	海軍三等水兵	金居兵一(負傷)
同	同	海軍三等水兵	松木由松
同	同	海軍三等水兵	龜田圓吉(負傷)
同	同	海軍三等水兵	小川宇佐吉

同	乘組	海軍三等水兵	奥野守吉(負傷)
同	同	海軍三等水兵	新崎幸三郎
同	同	海軍三等水兵	中島萬之助
同	同	海軍三等水兵	田中八助
同	同	海軍三等水兵	西井上吉之助
同	同	海軍三等水兵	今東萬次郎
同	同	海軍三等水兵	知識直八
同	同	海軍三等水兵	萩原喜之助
同	同	海軍三等水兵	高田彌三平
同	同	海軍三等水兵	佐々木寛次郎
同	同	海軍三等水兵	水上源太郎
同	同	海軍三等水兵	増田龜治郎(負傷)
同	同	海軍三等水兵	菅 豊吉
同	同	海軍三等水兵	小林種一(負傷)
同	同	海軍三等水兵	大井光次郎(負傷)
同	同	海軍三等水兵	其田久吉(負傷)
同	同	海軍四等水兵	山下卯七
同	同	海軍四等水兵	今久留主早市
同	同	海軍四等水兵	今田政喜

同	海軍四等水兵	古賀伍平
同	海軍四等水兵	石田太一郎
同	海軍四等水兵	田中伊八
同	海軍四等水兵	川上末八
同	海軍四等水兵	衛 藤 饒
同	海軍四等水兵	森永清太郎
同	海軍四等水兵	徳重市藏
同	海軍四等水兵	桐野正夫
同	海軍四等水兵	平井徳兵衛
同	海軍四等水兵	佐藤充雄
同	海軍四等水兵	友貞多一
同	海軍四等水兵	金森梅次
同	海軍四等水兵	恆川 恆
同	海軍四等水兵	宮本榮三郎(負傷)
同	海軍四等水兵	山下辰五郎
同	海軍四等水兵	安部納喜
同	海軍四等水兵	緒方房松(負傷)
同	海軍四等水兵	古里吹一(負傷)
同	海軍四等水兵	下崗八太郎(負傷)

同	海軍四等水兵	原口初太郎(負傷)
同	海軍四等水兵	井之原戸一(負傷)
同	海軍四等水兵	田中喜代次(負傷)
同	海軍一等信號兵曹	大迫 幹雄
同	海軍一等信號兵曹	京谷松次郎
同	海軍二等信號兵曹	山崎良右衛門
同	海軍三等信號兵曹	美座周藏
同	海軍三等信號兵曹	兒玉 喜市
同	海軍三等信號兵	吉村守太郎
同	海軍一等木工	荒川 正路
同	海軍一等機關兵曹	池田三之助
同	海軍一等機關兵曹	竹内源太郎
同	海軍一等機關兵曹	中野愛之助
同	海軍一等機關兵曹	荒牧 一造
同	海軍一等機關兵曹	樺山宗之丞
同	海軍一等機關兵曹	藤山新吾(負傷)
同	海軍二等機關兵曹	小堀太平(負傷)
同	海軍二等機關兵曹	佐古寅次郎
同	海軍二等機關兵曹	横枕 團作

乘組	海軍二等機關兵曹	首藤謙一(負傷)
同	海軍三等機關兵曹	上妻五郎七
同	海軍三等機關兵曹	石井勘助
同	海軍一等機關兵	守永要次郎
同	海軍一等機關兵	島津倉次
同	海軍一等機關兵	今村郡三
同	海軍一等機關兵	八島長次郎
同	海軍一等機關兵	名倉力三郎
同	海軍一等機關兵	下川與次郎
同	海軍一等機關兵	内田喜久治
同	海軍一等機關兵	庄村初太郎(負傷)
同	海軍一等機關兵	佃寅次(負傷)
同	海軍二等機關兵	高松已之吉
同	海軍二等機關兵	山下甚作
同	海軍二等機關兵	近藤鐵藏
同	海軍二等機關兵	吉柳 紘(負傷)

合 計 二二六名(准士官以上 一七名 下士官以下 一九九名)

内 負傷者 六十一名

二、軍艦笠置ニ收容セラレタル分

乘組	海軍二等機關兵	永松達實(負傷)
同	海軍二等機關兵	金丸直次
同	海軍二等機關兵	田窪馬吉
同	海軍二等機關兵	宮下幸吉(負傷)
同	海軍三等機關兵	多田品吉(負傷)
同	海軍四等機關兵	川崎岫吉
同	海軍一等看護手	安田幸太郎(負傷)
同	海軍一等筆記	末松津代作
同	海軍二等筆記	永田友太郎
同	海軍二等筆記	清藤直衛(負傷)
同	海軍三等廚宰	前田與四郎
同	海軍一等主廚	岩田金太郎
同	給仕	宮崎末人(負傷)
同	給仕	吉田武男
同	剃 夫	野口伊八(負傷)
同	剃 夫	蒲原七太郎(負傷)

二十八

主計長	海軍主計少監	藤野理吉
乗組	海軍中軍醫	布上堯一(負傷)
同	海軍少尉	品川一郎
同	海軍少主計	川添真壽
同	海軍上等兵曹	三戸次吉郎
同	海軍上等兵曹	龍本兎一(負傷)
同	海軍一等兵曹	大森延之助
同	海軍一等兵曹	丸野敷嘉
同	海軍一等兵曹	古賀儀正(負傷)
同	海軍一等兵曹	山口武一
同	海軍二等兵曹	後藤清太郎
同	海軍二等兵曹	森 太兵衛(負傷)
同	海軍二等兵曹	三井多治郎(負傷)
同	海軍二等兵曹	田上嘉久次
同	海軍二等兵曹	藥平源藏
同	海軍三等兵曹	本山助次郎(負傷)
同	海軍三等兵曹	中熊萬平(負傷)
同	海軍一等水兵	山崎幸平
同	海軍一等水兵	菊野八十八

乗組	海軍一等水兵	大石儀七
同	海軍一等水兵	寺澤桑三郎(負傷)
同	海軍一等水兵	桃田庄太郎
同	海軍一等水兵	魚見彌三郎
同	海軍一等水兵	長澤四郎
同	海軍一等水兵	那口榮三
同	海軍一等水兵	坂元淺助
同	海軍一等水兵	高松已之八
同	海軍一等水兵	尾關竹三郎
同	海軍一等水兵	七田友吉(負傷)
同	海軍一等水兵	加古辰吉
同	海軍一等水兵	田中治三郎
同	海軍二等水兵	龜岡嘉助
同	海軍二等水兵	渡海谷良藏
同	海軍二等水兵	小山巳之助(負傷)
同	海軍二等水兵	後藤寅吉
同	海軍二等水兵	松本信一
同	海軍二等水兵	川畑熊八
同	海軍二等水兵	山中三四郎(負傷)

第八章 第二節 第二目 軍艦初瀬

二十九

乗組	海軍二等機関兵	向田 又七	乗組	海軍一等看護	中村 軍治(負傷)
同	海軍二等機関兵	前田 鶴次(負傷)	同	海軍一等主廚	竹原 潤吾
同	海軍三等機関兵	服部 峯太郎	同	海軍一等主廚	新屋 末吉
同	海軍四等機関兵	田原 文吉	同	海軍三等主廚	小島 吉五郎(負傷)
同	海軍四等機関兵	米村 清八	同	海軍三等主廚	矢野 茂佑

合 計 一二四名(准士官以上 六名
下士官以下 二八名)

内 負傷者 三〇名

總 計 三四〇名

内 負傷者 九一名(准士官以上 一〇名
下士官以下 八一一名)

内 重傷 四名

輕傷 八七名

此ノ如ク意外ニ多數ノ生存者ヲ得タルハ第一回ノ爆發ヲ受ケタルカ爲メ乗員ノ上甲板ニ作業スルモノ多カリシト海面ニ浮游シタル釣床、筏、木材等ノ多カリシトニ因ルモノニシテ釣床ニ頼リテ生ヲ得タルモノ實ニ少カラザリキ若シ斯カル浮流物ナク第一回ノ爆發ナカリシナラハ彼ノ「ペトロパウロウスク」ト同一ノ運命ニ陥リタルナルヘシ此ノ實驗ハ吾人ニ教フルニ「ハンモック」ノ駢列カ合戰準備ノ一トシテ如何ニ必要ナルカヲ以テセリ之ヲ艦橋等ニ駢列スルトキハ當ニ交戰中弱力ノ彈片若クハ鐵片等ヲ避ケ得ルコト少カラサルノミナラス斯ノ如キ際ニモ亦「ライフブイ」ノ代用ヲ爲スヲ以テナリ而テ爰ニ特筆スヘキハ前記休業患者ノ四名ト先ニ救急法ヲ施シ静臥セシメ居タル患者ノ一名トカ幸ニ總テ其ノ生ヲ全ウシタルコト是ナリ其ノ病名及ヒ官氏名左ノ如シ

右下腿挫創

二等兵曹

高 橋 三 郎

右鼠蹊部癰腫同鼠蹊腺炎

二等水兵

向 井 徳 太 郎

急性氣管支加答兒

二等水兵

薄 彌 助

右環指挫創

二等機関兵

吉 柳 紇

以上休業患者

一等水兵

柳 本 榮 吉

右ハ先ニ救急法ヲ施シ静臥セシメ居タルモノ

戦死者ハ准士官以上三十六名下士以下四百五十八名計四百九十四名トス

我カ治療所員中生存者及ヒ戦死者ノ官職氏名ハ左ノ如シ

生存者

戦死者

乗組	海軍中軍醫	布 上 堯 一
同	一等看護手	安 田 幸 太 郎
同	一等看護	中 村 軍 治
軍醫長	海軍軍醫中監	關 文 之 助
乗組	海軍中軍醫	上 宮 繁 吉
同	看護師	吉 田 義 行
同	二等看護手	河 野 種 吉
同	二等看護	新 里 徳 清
同	二等看護	今 村 吹 次 郎

治療品並ニ醫務衛生ニ關スル諸帳簿及ヒ文書類ハ咸ク艦ト運命ヲ共ニシタリシモ疾病要略ノ大部ハ幸ニ收拾セラレタリ尙二三日後某驅逐艦ニヨリ更ニ其ノ一部ヲ拾ヒ揚ケラレタル爲メ亡失セシハ僅ニ三十一名分ニ過キサリキ又前記生存者ノ外當日ノ慘禍ニ遭遇セサリシモノ准士官以上三名下士以下三十二名計三十五名アリ即チ左ノ如シ

- 一、五月十四日本艦出艦ノ際第一艦載水雷艇修理ノ爲メ同艇ニ乗組ミ長山列島錨地ニ留リシモノ下士以下九名
- 二、哨艇トシテ第二艦載水雷艇ニ乗組ミ同地ニ留リシモノ士官一、下士以下十三名
- 三、閉塞隊員トシテ同地ニ殘リシモノ士官二、下士卒七名
- 四、當時佐世保海軍病院入院中ノモノ卒三名

依テ生殘者總計三百七十五名ナリ之ヲ等級別ニスレハ左ノ如シ

將官	一	上長官士官	一八	候補生	三
准士官	四	下士卒	三四五	備人	四
收容人員ハ十六日臺南丸ニ移サレ同日負傷者二十六名ヲ病院船神戸丸ニ送り其ノ他ハ福岡丸ニ移サル又笠置收容人員ハ十六日重傷者一名(十七日笠置ヨリ)ノ外富士ニ移サレ翌十七日負傷者ハ病院船西京丸ニ送り其ノ他ハ福岡丸ニ移サル翌十八日尙負傷者十二名ヲ同船ヨリ西京丸ニ送致ス小官モ亦西京丸入院者ノ一人トナレリ然ルニ二十日福岡丸ハ佐世保ヘ歸航スルヲ以テ輕傷者ハ成ルヘク同船ニ託セントノ艦長ノ希望ニヨリ小官外輕傷者十三名ハ輕快若クハ全治退院シテ福岡丸ニ乗船ス同船ハ此ノ日午後四時第三地點ヲ抜錨シ二十三日午前七時佐世保ニ歸著シタリ福岡丸ニテ受療中ノ負傷者ハ航海中又ハ其ノ以前ニ全治シタルモノ多ク佐世保到著ノ際入院ヲ要スヘキハ左ノ三名ノミナリキ					
海軍少佐	白井兼太郎				
海軍少尉	中根正男				
海軍少尉	横田亨				

以上ハ即時佐世保海軍病院ニ送院セリ

佐世保歸著後海兵團内ニ初瀬事務所ヲ設ケ各員熱心ニ其ノ職務ニ執掌ス翌二十四日本艦ハ第三像艦ニ編入セラレ(當分定員)准士官以上ハ佐世保鎮守府附ニ下士以下ハ佐世保海兵團ニ轉ス是ヨリ先キ小官ハ本艦軍醫長代理ヲ命セラレ爾來一等看護手安田幸太郎及ヒ一等看護中村軍治ノ兩名ト共ニ専心殘務ニ從事シ整理上幾多ノ迷惑及ヒ困難ト戰ヒ六月二十一日ニ至リ戰時衛生記事、生殘者疾病要略亡失分ノ不易番號及ヒ入籍當時ノ體格狀態記入ヲ除クノ外事務漸ク完結セリ

水雷爆發當時一般乗員ノ所在位置及ヒ狀態並ニ艦内破損ノ狀況

第一回爆發ノ際乗員多クハ中甲板以下ニ在リタルヲ以テ一時稍混亂シタルモ一人トシテ秩序ヲ紊リ驚愕ノ餘喧嘩ヲ極ムル等ノコト無ク又周章狼狽海中ニ投シタルモノナク直ニ平靜ニ復シ極テ沈著ニ各自ノ作業ニ從事シ最敏活ニ動作シタリ第二回爆發アルヤ艦長ハ到底艦ノ救フヘカラサルヲ知り總端艇卸シ方ヲ命シタルモ奈何セン咄嗟ノ間未ダ第一「第三「カッター」ノ「ホール」ヲ解キ終ラサルニ水ハ已ニ端舟ニ達シ「ダビット」ニ吊リタル儘覆没セリト云フ當時各乗員所在ノ位置ヲ按スルニ水兵部ノ大部分ハ前甲板ニ在リテ被曳船作業ニ從事シ一部ハ左右兩舷端舟甲板ニ分レテ「デリックガイ」ニ就キ水兵部十數名及ヒ船匠手木工數名ハ後部中甲板及ヒ上甲板ニ在リテ防水ニ從事シ又後砲塔ノ後左舷「リール」ニ在ル鋼索ヲ前甲板ニ運ハントセル多數ノ水兵部員ハ上甲板左舷側ニ於テ前部ニ向ヒ鋼索ヲ引キ行キツ、アリキ而テ機關部員半數以上ハ汽機室內ニ於テ作業シ殘部ハ主廚傭人ト共ニ乾麵包ヲ各所ニ配備セントシ上甲板前部彈藥昇降口ヨリ「ビスケット」函ヲ受取リ中下甲板ヲ往來セリ我カ治療所員中關軍醫長、上宮中軍醫、河野二等看護手、中村一等看護、新里、今村ノ兩二等看護及ヒ小官ノ七名ハ前記ノ如ク後甲板砲塔右舷側ニ在リシカ當時吉田看護師及ヒ安田一等看護手ノ兩名ハ所要ノ爲メ此處ニ在ラサリキ主計部員ハ前部「シエルターデッキ」ニ於テ書類ヲ保管シ幕僚附筆記ハ艦長豫備室前ニ書類ヲ保管セリ而テ爆發ノ最激烈ナリレハ大橋附近ナリシヲ以テ其ノ近傍

上甲板ニ在リシ者ハ悉ク爆死シ其ノ前方及ヒ後甲板ニ在リシ者ハ煙焰ニ包マレテ火傷シ若クハ破片ニヨリテ負傷シ或ハ斃レタルカ如シ又激動ノ爲メ震盪症ヲ發シ失神ノ儘艦ト共ニ沈溺シタル者モアルヘシ
艦内破損ノ狀況ハ固ヨリ之ヲ知ルニ由ナシト雖モ第二回水雷ハ忍ラク後部火藥庫下ニ於テ爆發シ激動ニ由リ彈藥庫内ノ彈藥爆發セシモノナラント云フ煙突及ヒ「ケーシング」ヨリ熾ニ火焰ヲ噴出シタルヨリ觀ルモ爆裂ノ勢ハ直ニ汽機室室内ヲ粉碎シタルヘク是當時偶「ビスケット」運搬ニ從事シツ、アリシモノヲ除キ同部員ノ一人トシテ救助セラレタルモノナキ所以ナリ又中下甲板ニ在リシモノハ上甲板ヲ出テントスルモ或ハ階梯墜落シ或ハ防水扉閉鎖セラレタル等ノ爲メ生ヲ得タルハ僅ニ數人ニ過キサリキ或ハ曰フ艦ハ中央ヨリ斷裂セリト

本艦ノ兵員等ヲ集合シ精神感覺ノ狀態等ヲ調査セシ際彼等ノ話頭ニ上リシ二三ヲ左ニ附記ス

第二回爆發當時第二「カッター」「ピンネース」「ランチ」ノ三舟ヲ卸シアリシカ第二「カッター」ハ笠置ニ「リービング」インヲ送レルモノニシテ本艦ヨリ稍隔離シタルハ同舟ニ乗組ミシモノハ皆其ノ生ヲ全ウシ「ランチ」ハ後部ニ「モヤイ」ヲ附ケシカ「ダビット」ニテ其ノ外舷ヲ壓セラレシヲ以テ該乗員ハ海中ニ飛込ミ大渦中ノ人トナリテ溺没シタルカ如シ但其ノ二名ハ躊躇シテ舟中ニ殘留セシ爲メ生存セリ「ピンネース」ハ前部右舷側ニ繫キ「グリウー」四名乗艇シ居リシニ「モヤイ」ヲ切斷スルノ望ナキヲ以テ二名飛込ミタルモ皆幸ニ生ヲ得タリ
又左舷「ボートデッキ」下ニ二三ノ頭部ノミヲ目撃シ右舷「ボートデッキ」ニ「ビスケット」ヲ嚙ミナカラ倒レタルモノアリシト云フ

治療所員爆沈時ノ狀態

海軍軍醫中監 關 友之助

右ハ後甲板砲塔右舷側ニ於テ直立ノ姿勢ニテ後部ニ向ヒ望遠鏡ヲ以テ軍艦八島ヲ望見シアリシカ第二回ノ爆發ニヨリ仰臥位ニ倒レ一腕及ヒ一肢ヲ失ヒ居レリト致命ノ主因ハ小官自ラ目撃シタルニ非サレハ詳ナラスト雖モ或ハ外傷

ニ因スル貴要脈管ノ大出血ニハ非サルカ抑又爆傷ナルカ二者中ノ一ナルヘシ

海軍中軍醫 上 宮 繁 吉

右ハ爆發前右舷側ニ向ヒ直立シ居リシカ爆發ニヨリ小官ノ後方ニ倒レタリト但外傷ノ有無ハ一人トシテ目撃シタルモノナキモ該附近ノ狀況ヨリ考フレハ或ハ破片ニ打タレ若クハ火傷ヲ蒙リタルモノナラン蓋致命ノ主因ハ破片ノ打撃ニ因スル貴要部分ノ外傷若クハ爆傷ナルヘシ

海軍看護師 吉 田 義 行

右ハ上甲板左舷前部ノ卒便所前ニ前部ニ向ヒ直立シ居レリト此ノ部ハ比較的安全ノ場所ニシテ震動モ亦激シカラス又此ノ近傍ニ在リテ震盪症ヲ發シタルモノヲ耳ニヒサレハ如何ニシテ死シタルカ想像スルニ難シ或ハ船ト共ニ溺歿シタルナランカ

海軍二等看護手 河 野 種 吉

右ハ第二回爆發ノ際大橋附近ニ走り火焰中ニ投セリト云フ致命ノ原因ハ全身ノ劇烈ナル火傷ナラン

海軍二等看護 新 里 德 清

同 今 村 畝 次 郎

右二者ハ生存者中村看護ノ説ク所ニ據レハ爆發前ハ同一ノ場所ニ在リシカ爆發後自己ノ氣附キタル際ハ既ニ其ノ場ニ影ヲ認メサリシト恐クハ此モ亦河野看護手ト同一ノ運命ニ陥リタルナランカ
聞クカ如クンハ右ノ六名ハ全ク游泳ノ術ナカリシト云フ

海軍一等看護手 安 田 幸 太 郎

右ハ游泳ニ堪能ナリ藥室ニ至リ緊要書類ノ殘レルモノナキヲ點檢スル際第二ノ爆發ニ遭フ其ノ際著シキ震動ハ感セサリシモ水雷爆發ナルヲ自覺シ倉皇前部第一「ハッチ」ヨリ上甲板ニ出テ右舷「アンカーベット」ニ至リ海中ニ投ス此

ノ時艦ハ「ホックスル」ノミヲ殘シ前艦橋以下ハ已ニ水中ニ沒シ去レリ依テ游泳中「ハンモック」ノ浮流セルモノヲ認メ之ニ取附キ後「デールブル」ニ繼リ本艦ノ第一「カッター」ニ頼リ龍田ニ收容セラル水中ニ在リシコト約二十分ナリシト云フ

海軍二等看護 中村 軍 治

右ハ小官等ト同一ノ場所ニ在リ右舷ニ向テ直立シ居リシカ第二回爆發ニ因リ震盪症ヲ發シ失神卒倒セシモ須臾ニシテ回復シ直ニ「ポートデッキ」ニ上リ「ポートダビット」ニ吊リアル「ポート」ニ上ラントスルヤ渦中ニ捲入セラレシモ九死ニ一生ヲ得忽ニシテ浮上シ衣囊ノ浮游セルモノニ取附キ「ポート」ニ救ハレ笠置ニ收容セラル本人モ亦游泳ニ巧ナリ要スルニ游泳ノ術ナキモノニシテ生ヲ全ウシタルモノハ殆ト皆無ナリ游泳ハ士卒ノ別ナク益々獎勵練習セシメサルヘカラス

一般兵員及ヒ負傷者ノ精神及ヒ感覺ノ狀態並ニ生理的官能變常ノ有無

第一回海戰以來一攻擊ヲ經ル毎ニ兵員ノ士氣益々振ヒ意氣軒昂勇氣充溢シ眞ニ敵海ヲ吞ムノ概アリ今回第一回ノ水雷爆發ニ際シテモ亦兵員ハ神色自若トシテ毫モ驚怖ノ狀ナク秩序整然而モ沈著且敏捷ニ其ノ職ニ當リシハ感賞ノ辭ナカリキ

第二回ノ水雷ハ無殘ニモ本艦ノ火藥庫ヲ爆發セシメタル結果其ノ附近ニ在リシモノハ幾ト皆負傷シ其ノ生存セル傷者ノ多クハ震盪症ニ因リ失神顛倒シタリシモ自然ニ若クハ海水其ノ他ノ刺激ニヨリ須臾ニシテ醒覺シ或ハ海水ニ捲入セラレ或ハ自ラ海ニ投セリ而テ此等負傷者及ヒ無傷者ハ水中ニ在リシコト五分乃至二十五分時ニシテ其ノ間身ハ慘然タル死境ニ浮沈シツ、モ敢テ自身ノ救助ヲ急請スルコトナク從容トシテ救護者ニ上官ノ所在ヲ指示シ或ハ「殘念、路助奴、復讐スルツ」等ヲ絶叫セシカ如キハ彼等ノ精神ノ明確ニシテ而モ敵愾心ノ勃興セルモノ多カリシヲ立證スルニ餘アリ然リト雖モ此ノ禍難タル元來不慮ノ事ニ屬スルヲ以テ之ヲ彼我艦隊ノ堂々タル砲戰ニ比シタランニハ

各自ノ精神ニ及ス感動ノ影響ニ幾何カノ趣ヲ異ニスルモノアルハ理ノ當ニ然ル可キ者ニシテ是非モナキコトナリ小官ハ爰ニ彼等カ救助セラレテ後數日間精神及ヒ肉體上ニ多少ノ變狀ヲ發生セシコトヲ記セサルヘカラス是全ク突如タル精神感動ノ結果ニシテ生理的現象ト云フノ外ナケン
左ニ負傷者ノ爆沈後ニ於ル精神感覺ノ狀態等ニ就キ調査シ得タル梗概ヲ錄ス

爆沈時負傷者ノ精神及ヒ感覺ノ狀態其ノ他

等級氏名	精神及ヒ感覺ノ狀態	食欲	頭痛	睡眠	嘔吐	口喝	疲勞
四水 原口初太郎	精神確實創部ノ疼痛ヲ感セス爾來約三日間諸種ノ音響及ヒ震動ニ對シ水雷ヲ想起シ身神不安佐病ニ入院後モ尙二三日間正午ノ號砲ノ音ニ驚愕スルノ傾向アリシト	常	無	常態	無	有	無
三水 大井光次郎	精神明確沈沒當時ハ異常ノ感覺ナカリキ爾後一週間各種ノ音響又ハ微ノ震動ニモ驚愕スルノ狀アリ	二週間不振	有	一夜熟睡セス	無	無	無
一水 七田友吉	精神明晰傷部ノ疼痛ヲ覺知シタルハ沈沒後數時間ノ後ナリキ爾後二日間餘ハ音響及ヒ震動ニ驚キ易シ	三日間不振	無	右同	無	無	少シ
二水 小山己之助	右同	一日間缺損爾後四五日間不振	無	右同	有	無	著シ

等級氏名	精神及ヒ感覺ノ状態	食欲	頭痛	睡眠	嘔吐	口喝	疲勞
三水 秋元長次郎	精神明晰傷部ノ疼痛ヲ覺知シタルハ沈没後數時間ノ後ナリキ爾後二日間餘ハ音響及ヒ震動ニ驚キ易シ	二日間不振	有	二日間熟睡ス	無	有	少シ
一機 藤山新吾	右同	四日間不振	劇甚	四日間安眠セ	無	無	著シ
二筆 清藤直衛	右同	常	無	右同	有	無	著シ
一水 二間瀬小吉	右同	三日間不振	劇甚	右同	無	無	著シ
一水 松木幸吉	精神明瞭創部ノ痛感ナカリキ爾後二日間音響及ヒ震動ニ對シ驚愕スルノ傾向アリ	二日間不振	無	二日間安眠セ ス夢多シ	無	無	無
三水 龜田圓吉	右同	二三日間不振	無	右同	無	有	少シ
一曹 水川熊吉	右同	一日間缺損爾後二三日間不振	無	右同	有	無	最著シ
二水 多比良重一	右同	三日間不振	輕微	右同	無	無	無
二水 西岡定太郎	右同	四五日間不振	無	四五日間安眠セ	無	無	少シ
二水 遠竹虎次郎	右同	右同	劇甚	右同	無	無	著シ
二曹 森 太兵衛	精神確實創部ノ痛感ナカリキ爾後二日間音響及ヒ震動ニ對シ驚愕スルノ傾向アリ	八日間不振	無	二日間安眠セ	有	有	著シ

三水 增田龜治郎	精神確實創部ノ痛感ナカリキ爾後三日間音響及ヒ震動ニ對シ驚愕スルノ状アリ	二日間不振	輕微	一夜安眠セ	無	無	少シ
三水 奥野守吉	右同	右同	輕微	右同	有	有	少シ
三水 宮内助三	右同	五日間不振	無	一週間安眠セ	無	無	著シ
一水 垣内才吉	精神確實創部ノ痛感ナカリキ爾後五日間餘ハ些少ノ震動ニモ驚キ易ク佐病入院後尙數日間正午號砲ノ響ニ驚ケリ	二日間殆ト缺損爾後一週間不振	劇甚	二日間安眠セ	無	有	著シ
二水 矢竹鶴三郎	精神明瞭創部ノ痛感ナカリキ爾後約四五日間ハ驚愕スルノ傾向アリ	一日間缺損爾後四五日間不振	劇甚	一週間安眠セ	無	有	著シ
三水 薄 彌助	右同	二日間不振	輕微	二三日間安眠セ	無	無	少シ
二機 松木安次郎	精神明瞭創部ノ痛感ナカリキ爾後五日間各種ノ音響震動ニ驚愕スルノ傾向アリ	常	無	常	有	無	少シ
一水 春山竹熊	自ラ海ニ投セシ時ハ記憶スルモ「ボート」ニ收容セラレルマデハ諸事朦朧トシテ夢幻ノ如シ爾後約三日間諸種ノ音響及ヒ震動ニ對シ驚愕ノ状アリ	三日間不振	無	常	無	有	少シ
二水 末永庄作	右同	一日間不振	輕微	一日間安眠セ	無	無	著シ
一曹 中村軍治	右同	右同	劇甚	右同	無	有	最著シ

等級氏名	精神及感覚ノ状態	食欲	頭痛	睡眠	嘔吐	口喝	疲勞
一機曹 木村六治郎	自ラ海ニ投セシ時ハ記憶スルモ「ボート」ニ收容セラルルマデハ諸事朦朧トシテ夢幻ノ如シ爾後約三日間諸種ノ音響及ヒ震動ニ對シ驚愕ノ狀アリ	二日間不振	輕微	一日間安眠セ	無	無	著シ
二水 渡邊福松	精神異常ナク創部ノ痛感ナカリキ爾後約一週間音響及ヒ震動ニ驚愕シ易シ	三日間不振	輕微	四五日間安眠	無	無	著シ
二水 内田時次郎	右同	二日間不振	無	一週間餘安眠	無	有	少シ
三水 金居兵一	右同 佐病ニ入院後尙正午號砲ノ響ニ驚クコト著シ初ハ床ヨリ蹶起シタルコトアリ	右同	輕微	右同	無	著シ	著シ
二水 是則岩治	精神稍朦朧何等ノ感覺ナシ爾後二三日間各種ノ音響及ヒ震動ニヨリ驚愕シテ水雷ヲ想起ス	一日間全ク缺損爾後數日間不振	輕微	安眠セサルコト約十日間ニ水雷ノ爆發ヲ夢ム	有	有	著シ
三水 若松末松	右同	二三日間不振	輕微	二日間許安眠	無	有	少シ
二機兵 宮下幸吉	右同	右同	輕微	右同	無	無	少シ
二看手 安田幸太郎	右同	二週間不振	輕微	四五日間安眠	無	無	最著シ
二水 志々目宗市	精神朦朧爾後約二日間音響震動ニ對シ驚愕シ易シ	約二日間不振	有	一夜安眠セ	有	有	著シ

三曹 木山助次郎	右同	約四日間不振	無	約三日間安眠	無	無	無
二水 鈴置市郎	右同	約二日間不振	無	右同	無	著シ	著シ
二機兵 永松達實	右同	一日間不振	無	一日間安眠セ	有	無	無
二水 山中三四郎	精神較朦朧爾後四五日間音響及ヒ震動ニ驚愕シ易シ	四五日間不振	劇甚	三四日間安眠セ	無	無	著シ
二曹 澄井豐藏	人事不省爾後二三日間恐怖ノ念甚シク微震ニモ驚愕ス	二三日間不振	劇甚	二三日間不眠	無	無	最著シ
二水 江種嘉三郎	精神比較的明瞭ナリシモ創傷ヲ自覺セス爾後一週間微震ニモ驚愕シ易ク身體常ニ動搖セル如キ感アリ	約三日間不振	有	右同	無	無	著シ
二水 久保田虎太郎	右同	右同	有	約二日間安眠	無	無	少シ
二機兵 前田鶴次	精神明確ナリシモ創部ノ痛感ナカリキ	二三日間不振	無	一夜安眠セ	無	無	少シ
一水 寺澤桑三郎	右同	一週間不振	劇甚	右同	無	無	著シ
二機兵 吉柳 紇	右同	常	輕微	二三日間安眠	無	無	著シ
四水 宮本榮三郎	右同	三日間不振	輕微	約一週間安眠	無	無	著シ
二機兵 庄村初太郎	右同	常	無	常	常	常	無

考 備
上表ハ傷者ノ口供ニ據ル

寄贈品 初瀬沈没後ニ於ル寄贈品ノ品種數量及ヒ寄贈者ノ氏名等ハ主計長其ノ他ノ生存者ニ質スモ審ナラス只小官ハ福岡丸便乗ノ酒保員某ヨリ酒二樽ノ寄贈アリシコトヲ傳聞セシノミ然レトモ生存者ハ皆收容セラレタル各艦船ニ於テ極テ懇篤ナル待遇ヲ受ケ日用品其ノ他ニ毫モ不自由ヲ感セザリキ

被服ノ供給 乗員ハ多ク著服ノマ、水中ニ没シタルモ被服ハ海水ニ濡ヒ到底著用シ難キヲ以テ收容各艦ニ於テ交付シ尙不足ノ分ハ佐世保海兵團ニ於テ交付シ五月十六日臺南丸ヨリ直ニ神戶丸ニ送致セシ者ニハ總テ佐世保海兵團ニ於テ交付セリト聞ケリ准士官以上ハ各艦ニ於テ僚友等ヨリ借用シタリ

戦間負傷者ニ就キ經驗觀察シタル事項

乗員ノ總テハ海中ニ投シタル際冷感ヲ覺エシモノナク亦創傷ノ疼痛ヲ感セシモノナシ稀ニハ救助艇ニ救ヒ上ケラレタル際出血スルヲ見テ自己ノ負傷セルヲ自覺シタルモノ無キニ非サルモ龍田又ハ笠置ニ收容後微痛ヲ覺エ初テ氣附キタルモノ多シ創傷ノ原因ノ如キハ各人ニ就キ調査スルモ記憶セサルモノ多ク又爆發時ノ精神感覺ノ如キモ確答シ得ルモノ殆ト無シ稀ニ電撃様ノ感覺アリシト云フモノアルモ多數ノ者ハ單ニ夢ノ如キ感アリシト答フルノミ然リ事實ニ勝ル眞理ハ無カラシ小官ノ如キモ亦實際確答ニ苦シムヲ如何セン實ニ斯カル瞬間ニ於テ震盪殊ニ腦震盪ヲ發シ人事不省ニ陥リタルモノハ其ノ瞬間何等ノ感覺ヲ有セサルカ少クトモ感覺機ノ涸渇ハ免レサルヘシ然レトモ醒覺後ノ瞬間ニ於テ或觀念ノ湧起スルハ眞ニ較著ナルモノ、如シ現ニ小官ノ如キモ該瞬間ニ於テ外界ノ狀態ヲ目撃セシ時ノ意想ハ誠ニ多様ナリシヲ覺ユタリ

小官ノ調査セル負傷者ノ多クハ救助セラレテ後數日間ハ食欲缺損若クハ不振不眠症等ヲ呈シ身神不安ニシテ多クハ諸種ノ音響及ヒ震動ニ對シ驚愕スルノ傾向ヲ有シ甚シキニ至リテハ佐世保海軍病院入院後尙一週間微震ニモ驚愕シ號砲ノ音響ニ由リ臥床上ニ驟起セルモノアリキ而テ以上ノ三徴候ハ殆ト各人共通ノ徴候ト看做ス可キ者ニシテ其ノ缺如スルハ幾ト希ナリ蓋各人ノ剛應及ヒ身體ノ強弱如何ニヨリ固ヨリ其ノ度ヲ異ニスルナラン驚愕ノ如キ殊ニ然リト

ス此ノ徴候ハ負傷者ト無傷者トニ就テ著シキ差異ヲ認メスト雖モ概シテ傷者ハ無傷者ヨリ其ノ度甚シキノ觀アリキ其ノ他收容後嘔吐ヲ發シ或ハ口渴引飲スルモノアリ又一日乃至數日間頭痛ニ悩ミタル者アリ頭痛ハ主トシテ腦貧血ニ由ルヘク口渴ハ失血ノ結果ニ非シテ主ニ疲勞及ヒ海水ノ嚥下ニ由來シ嘔吐ハ主ニ多量ナル海水嚥下ニ因ル消化管粘膜ノ刺激及ヒ腦ノ震盪等ニ基因スルモノ、如シ蓋生存者中海水ノ一滴タニ嚥下セザリシモノハ罕ナリ隨テ無傷者ト雖モ如上ノ三症狀ハ傷者ニ比シテ甚シキ差異ヲ認ムルコトナカリキ

既記ノ如ク海中ニ投シテ救助艇ニ收容セラレ、マテ一般兵員ノ精神狀態多クハ明確ニシテ救助艇收容後モ自ラ勵ミテ潛機ニ從ヘルモノスラ寡カラサリシト雖モ收容後ニ至リ一時精神朦朧人事不省等ニ陥リシモノ尠カラス然レトモ此等ハ何等特別ノ處置ヲ加ヘシテ自然ニ回復シ各艦ニ收容セラレシ際ハ殆ト外觀上異狀ヲ認ムルモノ少カリシカ如シ茲ニ記載ス可キハ前記驚愕ノ一事ノミ然レトモ其ノ後ニ至リ其ノ他ニ認識スヘキ精神ノ變態ヲ來セシモノアルヲ聞カス

震盪症ハ負傷者全般ニ互リテ調査スルヲ得ザリシモ自己ノ調査シ得タル分ニ就テ觀察スレハ艦ノ後部ニ在リシ者ニ最多ク中央ニ在リシモノニ少ク前部ニ在リシモノニハ絶無ナリ畢竟爆發部ヲ愈々遠サカルニ隨ヒ震動愈々減弱セシニ基カسنハアラス然レトモ生存セル負傷者ニ於テハ盡ク輕症ニシテ創傷ノ輕重大小ニ關係ナキモノ、如シ創傷ニ就テハ前記シタル如ク小官ハ不幸ニシテ當初一ノ實驗ヲモ有セス病院船ニ送致セシ傷者ノ如キ殊ニ然リトス只沈没後五日ヲ經テ福岡丸ニ殘レル傷者ニ就テ實査シ得タルモ而モ皆最輕傷者ノミニシテ當初ノ創況ハ只想像ニ委スルノ外ナキ狀態ニアリ而テ受傷當時ニ於ル出血ノ多少創面汚染ノ程度如何等ニ關シテハ不明ノ分少カラサルモ出血ノ一般ニ僅少ナリシハ眞ナルカ如シ然リト雖モ福岡丸ニ於テ治療セル傷者ノ經過ニ鑑ミレハ一ハ防腐法ノ完全ナリシニ基クヘシト雖モ創傷染毒ノ如何モ自ラ略推知スルニ難カラサルヘシ殊ニ吾人ハ爰ニ今回ノ傷者ハ總テ其ノ創傷ヲ一旦海水ニ浸シタルモノナルコトヲ特記セサルヘカラスサレハ汚染セル創傷ノ海水ニヨリ洗滌セラレタルモノ

モアリシナラン陸岸ヲ距ルコト愈々遠キニ隨ヒ海水ノ愈々清淨ナルハ事實ニシテ斯カル海水ノ創面ニ及ス作用ノ如何ハ多少興味アル點アルモ之ヲ確言スルニ到ラザリキ本艦ノ沈没點ハ最近陸岸ヲ隔ツル約十海里ノ沖ナリシナリ
創傷ノ疼痛ハ艦内ニ收容後數時間ヲ經テ始テ之ヲ自覺シタルモノ多ク而モ其ノ性質輕微ナリシモノ多カリシカ如シ殊ニ挫傷ノ如キハ翌日ニ至リ始テ覺リタルモノアリ負傷者中即死者ノ外ハ挫創、挫傷、擦過創及ヒ熱傷ノ四種最多キヲ占ムルヲ算セリ原因ハ不詳ノモノ多キモ挫傷ハ鐵片木片等ノ衝突ニ因ルモノ、如シ然レトモ挫傷ハ顛倒ノ際甲板若クハ近傍ノ物體ニテ打撲シ或ハ海中ニ投スル際或物體ニ或ハ救助艇收容ノ際艇側ニ衝突シタルモノ等區々ニシテ其ノ何レノ原因カ最多數ヲ占メシヤヲ知ルニ由ナシ熱傷ハ無論火藥爆發ニ因ルヘシ其ノ他ノ創傷ニ至リテハ其ノ數極テ少ク骨折ノ如キハ肋骨々折ノ疑アリシモノ一及ヒ手指骨折ノ一ヲ數フルノミナリキ
斯ノ如ク今回ノ負傷者ニシテ生存セルモノハ幸ニ概ネ輕傷ノミニシテ砲彈ノ爆裂ニ因スル傷者ニ比シ甚シキ慘酷ノ創傷ナカリシト雖モ即死者ニ至リテハ如何ニ複雑ニシテ且慘烈ナリシカヲ想像スルニ難カラス必スヤ猛烈ナル爆傷火傷、全身粉碎等多キヲ占メシナラン蓋斯カル重大ノ傷者ハ多クハ立ロニ致死シ若クハ然ラザリシモ負傷ノ結果運動ノ自由ヲ失シテ遂ニ溺死セシヤモ知ル可カラス救助負傷者ニ輕傷者多カリシヲ一考スレハ思ヒ半ニ過キン思フニ今回ノ出來事ハ稀有ノ奇禍ト稱スヘク實ニ艦船ノ俄然水雷ニ罹リテ急劇ニ爆沈スル時ノ狀態ハ鐵坑ノ地震ニ崩壊シ或ハ火山ノ破裂ニモ比スヘク其ノ慘烈ハ到底筆舌ノ盡ス所ニアラス隨テ遭難者ニ與フル精神感動ハ必ス多大ナルモノ無クンハアラス然ルニ爾後一人トシテ精神ノ病的變化ヲ來セシモノアルヲ聞カサルハ寧ロ奇トスヘシ小官ハ實ニ斯カル稀有ノ原因ヲ有スル負傷者ニ就キ親ヲ經驗且調査シタル事項ノ太々僅少ナルノ已ムヲ得ザリシヲ遺憾トス

(附記) 初瀬沈没地點ノ水深ハ約三十尋ナリト云ヘリ

沈没ノ際被服ハ之ヲ脱スルノ暇ナク著衣ノ儘海水ニ入りタル者多シ靴ハ中ニハ作業上脱シ居タルモノアルモ爆發

後脱靴シタルモノハ極テ稀有ニ屬ス

毛布ヲ包ミ固縛シタル釣床ハ海水ニ浮泛スルモノニシテ「ライフブイ」ニ代用スルノ效アルハ疑ナキ所ナリ然レトモ果シテ幾何時間浸水ニ堪フルヤハ試験ヲ經ルニ非サレハ證明シ難キモ一人一個ノ釣床ヲ有セハ一定時間ノ沈溺ヲ免ル、ヲ得ルハ今回ノ實驗ニ徴シテ明ナリ

聞クカ如クンハ釣床ノ或モノハ沈没ノ翌日マテ尙浮流セシト云フ

又爆沈前緊要書類ヲ搭載セシ短艇ハ艦ト共ニ沈没シタリト聞ク然レトモ浮泛力ヲ有スルモノハ後ニ浮出セシナラン某驅逐艦ニヨリ拾收セラレタル疾病要略ノ一部ノ如キハ翌日マテ浮ヒ居リシモノナリ洋紙製帳簿ハ日本紙製ノモノニ比シ沈ミ易キハ勿論ナリ

初瀬爆沈ノ當時亡失シタル治療品ノ品種數量ハ左ノ如シ

治療用定備品

品名		數量	品名		數量	品名		數量
函納外科器	一具		檢耳鏡	一具		膿盤	三箇	
小外科器	一具		照鼻鏡	一具		消毒盤	三	
攜帶外科器	二		直腸鏡	一		眞銻鹽	六	
拔牙器	一		銀導尿管	一具		眞銻吐痰器	九	
小眼科器	一		洋銀壓舌子	二箇		外科器消毒器	一具	
種痘用具	二		「イリガートル」	二		裝創鋸子	二箇	

品名	数量	品名	数量	品名	数量
二百グラム量硝子	四	三角綳帶	七八	劑	一六八
海綿	二	絹絲	七	藥用瓶	三二
雙眼簾	四	帽子針	五五〇	藥用瓶	一六〇
片眼簾	四	拭革	四	曲物	二〇〇
連綴副板大	三八	氷囊	四五	點眼硝子管	一〇
連綴副板中	四〇	油紙	七〇	藥名紙札	一〇〇
連綴副板小	三三	護謄管	一〇	藥用瓶札	七八〇
フエルト	四一	護謄吸管	三	消毒用刷毛	四
木架蒲團	五	藥飲蓋	二八	西洋手拭	六
木綿	一九〇	硝子尿器	四	鉛筆	二
林簾	一六	陶尿管	四	鉛筆	二
綿花	五〇〇	試驗管	二七	石炭酸	五〇七〇
脫脂綿花	五〇〇	試驗管洗子	二	石炭酸	二五、六五〇
脫脂綿紗	八〇	「ビークル」	三	稀鹽酸	二、六五〇
綿紗小包	三三三	硝子棒	二	硝子酸	一六八
綳帶小包	六七〇	試驗紙	七	「ビクリン」酸	一、一〇五
巴拉賓紙	三〇〇	外用筆	三〇	撒里矢爾酸	三九二
白布蘭涅兒	二八	劑紙	三八〇	單寧酸	一六八

品名	数量	品名	数量	品名	数量
外用品容器	三	銅鍋	一	手術用敷布	二
撥架	四	エスマルク氏驅血帶	一	護謄製手術用枕	二
吊架	五	止血器	八	手術用外衣	一三
携帶外科囊	二	硝子絲卷	一	水牛木葉匙	三
檢水具	一	皮下注射器	三	硝子乳鉢	一
携帶藥籠	四	水牛壓舌子	二	硝子乳鉢	一
携帶連具	五	體溫計	七	陶乳鉢	二
檢尿具	一	檢視模	一	陶乳鉢	二
檢力器	一	試色絲	一	陶膏板	一
體重權衡	二	尺帶	二	拔栓子	二
「バランス」秤	二	護謄灌腸器	二	藥棚瓶	五五
「二グラム」秤	一	護謄注射器	四	如露	一
眞鍮木葉匙	三	小護謄注射器	一八	頓服藥蓋	四
鐵膏篋	二	革帶	二	硝子漏斗	四
雜用鉄鉢	一	腋下副木	一	鐵葉漏斗	四
眞鍮水指	二	下肢木架	二	十「グラム」量硝子	四

品名	數量	品名	數量	品名	數量
明礬	一、五〇〇元	亞拉比亞護謨末	六四〇元	篋麻子油	六四〇〇元
安知必林	五六	鹽加昇汞	一八〇〇	胡麻油	一三、〇〇〇
蒸餾水	一、二〇〇	廿	六九〇	醋酸鉛	八二四
杏仁水	四五〇	撒里矢爾酸汞	三一八	英局方挖吻兒散	九五〇
熔製硝酸銀	一一二	沃度仿謨	二、三〇〇	甘草末	三三〇
硫酸亞錫羅必涅	二	貌羅謨加留謨	九〇〇	乳糖	六七五
百路拔爾撒謨	二、〇二二	格魯兒酸加留謨	九三〇〇	珊篤寧	四〇
次硝酸砒鉛	二、三五〇	沃度加留謨	五、三〇〇	芥子末	一、四〇〇
精製樟腦	二五〇	硝酸加留謨	一、四一〇	酒精	七、四〇〇
鹽酸規尼涅	二、一三八	過滿俺酸加留謨	八四	「メチール」加酒精	一四、四〇〇
噶囉仿謨	九二〇	炭酸結麗阿曹篤	三〇八	武蘭垠酒	二、〇七〇
鹽酸古加乙涅	一四	過格魯兒鐵液	六五〇	廿硝石精	九、〇〇〇
護謨絆創膏	一七五元	硫酸麻個涅史謨	一三、〇五〇	芳香安母尼亞精	一、一〇〇
綿馬越幾斯	一一二	鹽酸莫兒比涅	二二	樟腦精	四、九五〇
龍膽越幾斯	四五〇	重炭酸那篤留謨	一三、一五〇	薄荷精	三八〇
麥角越幾斯	一一二	撒里矢爾酸那篤留謨	四、五〇〇	「スルフオナル」	一六八
個里設林	二、六五〇	柯々阿脂	一〇五〇	苦味丁幾	一九、八〇〇

規定外治療用品

實麥答里斯丁幾	八〇〇元	番木鱉丁幾	八四〇元	強發泡膏	二二四元
沃度丁幾	一、八五〇	阿片錠	二五〇	華攝林	七、六五〇
吐根丁幾	一、一五〇	斯篤利幾尼涅錠	二四〇	酸化亞鉛	六五二
阿片丁幾	一、二六〇	水銀軟膏	一、二三	硫酸亞鉛	一、九〇〇
噶囉仿謨吸入器	一具	「アブラ」フ	五〇元	單鉛硬膏	六六六元
縫合器	一	過滿俺酸加留謨溶水	二五元	阿片	三五
硝子注射器	二〇本	依的兒	四五〇		
試驗用品					
硫酸	一六元	沃度加留謨	五五元	修酸安母紐謨溶水	八五元
澱粉	二五	硫酸ゾルン溶水	八五	加酸硝酸銀溶水	一五〇
加酸格魯兒拔留謨溶水	六二	加里濾液	一三〇		
硫酸銅	四六	「ネツスレル」試藥	九〇		

初瀬遭難當時ノ死傷者ハ左ノ如シ、

一 戰死者

死體ヲ收容セサリシ者

海軍中佐

有森元吉

海軍少佐

子爵仁禮景一

海軍軍醫中監

關文之助

海軍少佐

塚本善五郎

第八章

第二節

第二目 軍艦初瀬

海軍大機關士	山賀代三
海軍中尉	秋山米吉
海軍中機關士	大石親徳
海軍中軍醫	上宮繁吉
海軍少尉	小林貞人
海軍少尉	松原弘綱
海軍少尉	今井與孝
海軍少尉	松崎忠一
海軍少尉	園田藤一
海軍少機關士	三島春江
海軍少機關士	佐藤道久
海軍少機關士	山下重幸
海軍兵曹長	佐藤捨藏
海軍兵曹長	岡崎喜代彦
海軍船匠長	田中治三郎
海軍機關兵曹長	天野嘉重郎
海軍少尉候補生	鈴木重音
海軍少尉候補生	小林精之助
海軍少尉候補生	田中積

海軍少尉候補生	内山義一
海軍少尉候補生	澁江良次郎
海軍少尉候補生	原田隼太郎
海軍少機關士候補生	永原和衛
海軍少機關士候補生	和田村太
海軍少機關士候補生	横田英
海軍少機關士候補生	池野龜之助
海軍上等兵曹	有川貞光
海軍上等機關兵曹	河内山太郎
海軍上等機關兵曹	田所竹造
海軍上等機關兵曹	河添幸作
海軍看護師	吉田義行
海軍上等筆記	齋藤龜彦
海軍一等兵曹	小倉藤八郎
海軍一等兵曹	平原清吾
海軍一等兵曹	池田貞治
海軍一等兵曹	中元市之助
海軍一等兵曹	萬壽壯之助
海軍一等兵曹	木田次郎兵衛

海軍一等兵曹	西村十郎
海軍一等信號兵曹	中原繁太郎
海軍一等船匠手	森元藤市
海軍一等船匠手	田中源太郎
海軍一等機關兵曹	木ノ下仁右衛門
海軍一等機關兵曹	久恆繁太郎
海軍一等機關兵曹	竹下義孝
海軍一等機關兵曹	内村龍之助
海軍一等機關兵曹	大野喜一郎
海軍一等機關兵曹	中村富次郎
海軍一等機關兵曹	小田竹次郎
海軍一等機關兵曹	古川猪之助
海軍一等機關兵曹	岡部淺吉
海軍一等機關兵曹	森元孫次郎
海軍一等筆記	戸田東一
海軍一等廚宰	竹下小吉
海軍二等兵曹	穂吉榮次郎
海軍二等兵曹	増田實
海軍二等兵曹	副島大雄

海軍二等兵曹	脇田精治
海軍二等兵曹	草野重治
海軍二等兵曹	小川初二郎
海軍二等兵曹	早田安市
海軍二等兵曹	唐川善六
海軍二等兵曹	松尾只吉
海軍二等機關兵曹	宇都宮勉
海軍二等機關兵曹	圖師熊太郎
海軍二等機關兵曹	吉永郡次
海軍二等機關兵曹	河野與太郎
海軍二等機關兵曹	久永市之助
海軍二等機關兵曹	兒島仙一
海軍二等機關兵曹	山崎十藏
海軍二等機關兵曹	岩井田善太
海軍二等看護手	増田兼太
海軍二等筆記	河野種吉
海軍三等兵曹	森本剛一
海軍三等兵曹	三好勝一
海軍三等兵曹	棚部兵次郎

海軍三等兵曹	城市三郎次	海軍三等機關兵曹	片山純一郎
海軍三等兵曹	有働五藏	海軍三等機關兵曹	自見繁内
海軍三等兵曹	三品由太郎	海軍三等機關兵曹	山田岩吉
海軍三等兵曹	福瀬傳太郎	海軍三等機關兵曹	木本徳太郎
海軍三等兵曹	佐藤榮	海軍三等機關兵曹	野中土松
海軍三等兵曹	徳田宗一郎	海軍三等機關兵曹	湯淺國彦
海軍三等兵曹	中釜龍吉	海軍三等機關兵曹	春山仁次郎
海軍三等兵曹	田畑百松	海軍三等廚宰	河野長作
海軍三等兵曹	松原竹三郎	海軍一等水兵	山室武熊
海軍三等兵曹	後藤誠次郎	海軍一等水兵	竹本健一郎
海軍三等兵曹	沼淵二三太	海軍一等水兵	大川逸雄
海軍三等兵曹	伊木寅吉	海軍一等水兵	芳野幾治
海軍三等船匠手	山崎茂吉	海軍一等水兵	關康誠
海軍三等機關兵曹	田尻利平	海軍二等水兵	坂本利三郎
海軍三等機關兵曹	關藤敷太	海軍一等水兵	音辻喜作
海軍三等機關兵曹	有村新藏	海軍一等水兵	宮本千三
海軍三等機關兵曹	奥平徳左衛門	海軍一等水兵	横井長太郎
海軍三等機關兵曹	大友次八	海軍一等水兵	鶴飼銀松
海軍三等機關兵曹	大堂惠吉	海軍一等水兵	落合碩太郎

海軍一等水兵	満安八助	海軍一等水兵	杉本彌平
海軍一等水兵	牧野信光	海軍一等水兵	杉尾藤吉
海軍一等水兵	梅北政彦	海軍一等水兵	脇田嘉十郎
海軍一等水兵	高木己之平	海軍一等水兵	黒野直治
海軍一等水兵	神田卯之助	海軍一等水兵	久島枿次郎
海軍一等水兵	日比野鯉三郎	海軍一等水兵	出川與一
海軍一等水兵	長尾梅次郎	海軍一等水兵	岩下直一
海軍一等水兵	鄭正貞	海軍一等水兵	川上千藏
海軍一等水兵	谷上政太郎	海軍一等信號兵	緒方長三郎
海軍一等水兵	木村五平	海軍一等信號兵	仲谷逞作
海軍一等水兵	松尾正平	海軍一等木工	松角新九郎
海軍一等水兵	中山喜平次	海軍一等機關兵	岩田厚一
海軍一等水兵	河原彌吾一	海軍一等機關兵	郡山矢吉
海軍一等水兵	加藤七太郎	海軍一等機關兵	新山太郎
海軍一等水兵	宮島藤一	海軍一等機關兵	高津才一
海軍一等水兵	神谷彌助	海軍一等機關兵	千北善一
海軍一等水兵	内山力矢	海軍一等機關兵	宮崎松男
海軍一等水兵	加藤信太郎	海軍一等機關兵	松永新吉
海軍一等水兵	鶴飼鶴次郎	海軍一等機關兵	花田正三

海軍一等機關兵	貫 留 槌
海軍一等機關兵	福 島 善 藏
海軍一等機關兵	小 出 山 太 郎
海軍一等機關兵	瀬 戸 山 市 二 郎
海軍一等機關兵	玉 利 榮 藏
海軍一等機關兵	後 本 文 次 郎
海軍一等機關兵	西 川 次 郎 八
海軍一等機關兵	長 井 萬 次 郎
海軍一等機關兵	三 浦 金 治 郎
海軍一等機關兵	小 津 忠 兵 衛
海軍一等機關兵	生 田 盛 男
海軍一等機關兵	白 尾 國 九
海軍一等機關兵	木 本 庄 次 郎
海軍一等機關兵	松 宮 寅 吉
海軍一等機關兵	北 郡 助 次 郎
海軍一等機關兵	佐 藤 定 治
海軍一等機關兵	浦 田 銀 治 郎
海軍一等機關兵	高 橋 運 治
海軍一等機關兵	藤 澤 明 太 郎

海軍一等機關兵	阿 部 熊 治 郎
海軍一等機關兵	大 崎 文 彌
海軍一等機關兵	増 田 平 四 郎
海軍一等機關兵	杉 本 宗 太
海軍一等機關兵	中 西 源 吉
海軍一等機關兵	縣 惣 吉
海軍一等機關兵	清 水 重 治
海軍一等機關兵	堀 田 政 次 郎
海軍一等機關兵	藤 井 留 三 郎
海軍一等機關兵	深 迫 嘉 一
海軍一等機關兵	天 野 元 三 郎
海軍一等機關兵	柏 木 藏 次 郎
海軍一等機關兵	阪 口 力 松
海軍一等機關兵	木 村 萬 介
海軍一等主廚	永 安 伊 佐 吉
海軍一等主廚	原 口 平 七
海軍一等主廚	山 崎 次 郎
海軍一等主廚	竹 島 松 次 郎
海軍二等水兵	岡 門 仲 市

海軍二等水兵	杉 本 友 治
海軍二等水兵	竹 本 秀 吉
海軍二等水兵	林 田 松 次
海軍二等水兵	江 口 才 三
海軍二等水兵	佐 嘉 田 吉 次 郎
海軍二等水兵	中 島 和 平
海軍二等水兵	稻 元 盛 吉
海軍二等水兵	日 下 捨 吉
海軍二等水兵	鍋 島 芳 松
海軍二等水兵	新 名 寅 吉
海軍二等水兵	上 田 新 太 郎
海軍二等水兵	湊 川 三 四 郎
海軍二等水兵	田 中 九 平
海軍二等水兵	山 口 彌 太 郎
海軍二等水兵	瓜 生 幸 兵 衛
海軍二等水兵	武 宮 兵 市
海軍二等水兵	三 浦 銀 太 郎
海軍二等水兵	酒 井 佐 四 郎
海軍二等水兵	佐 々 木 與 市

海軍二等水兵	越 山 政 重
海軍二等水兵	堂 園 三 次 郎
海軍二等水兵	松 元 岩 次 郎
海軍二等水兵	高 山 善 袈 裟
海軍二等水兵	杉 田 藤 右 衛 門
海軍二等水兵	松 崎 與 左 衛 門
海軍二等水兵	前 屋 紋 介
海軍二等水兵	古 賀 善 九 郎
海軍二等水兵	太 田 銀 松
海軍二等水兵	杉 野 要 四 郎
海軍二等水兵	中 島 善 助
海軍二等水兵	山 下 亦 七
海軍二等水兵	德 永 峯 吉
海軍二等水兵	田 中 直 起
海軍二等水兵	太 田 久 吉
海軍二等水兵	中 安 陸 平
海軍二等水兵	中 村 武 雄
海軍二等水兵	坂 元 寛 揚
海軍二等水兵	鯨 島 直 左 衛 門

海軍二等水兵	鈴木文太郎
海軍二等水兵	重久政彦
海軍二等水兵	桐原芳太郎
海軍二等水兵	谷口常吉
海軍二等水兵	城戸三代作
海軍二等水兵	牛島末吉
海軍二等水兵	上村當次郎
海軍二等水兵	水野恆吉
海軍二等水兵	服部良太郎
海軍二等水兵	加戸武一
海軍二等水兵	松村繁藏
海軍二等水兵	畔柳末吉
海軍二等水兵	渡邊三五郎
海軍二等水兵	水野良平
海軍二等水兵	森團治
海軍二等信號兵	甲斐政夫
海軍二等信號兵	林甚吉
海軍二等木工	上田隆信
海軍二等木工	坪内彌三郎

海軍二等木工	沖金太郎
海軍二等木工	奎松藏
海軍二等機關兵	瀬戸君造
海軍二等機關兵	吉野秀治
海軍二等機關兵	古谷民三郎
海軍二等機關兵	大田福藏
海軍二等機關兵	木島松三郎
海軍二等機關兵	若江彦太郎
海軍二等機關兵	岸根鶴次郎
海軍二等機關兵	河野善十
海軍二等機關兵	谷山安千代
海軍二等機關兵	野崎平助
海軍二等機關兵	米木林彌
海軍二等機關兵	大槻定七
海軍二等機關兵	座古谷常次郎
海軍二等機關兵	中田繁松
海軍二等機關兵	録田堅吾
海軍二等機關兵	奥木重屋
海軍二等機關兵	内田安太郎

海軍二等機關兵	濱田與三
海軍二等機關兵	藤澤善三郎
海軍二等機關兵	中村四郎
海軍二等機關兵	今井圓
海軍二等機關兵	山藤實平
海軍二等機關兵	坂本丑藏
海軍二等機關兵	高橋初司
海軍二等機關兵	手島善代次
海軍二等機關兵	金九利五郎
海軍二等機關兵	鳥越政次
海軍二等機關兵	黒木實滿
海軍二等機關兵	山神金之助
海軍二等機關兵	藤山善熊
海軍二等機關兵	柏木永吉
海軍二等機關兵	木村八造
海軍二等機關兵	村崎宇太郎
海軍二等機關兵	日高藤一郎
海軍二等機關兵	森田繁夫
海軍二等機關兵	西田藏助

海軍二等機關兵	和田道雄
海軍二等機關兵	川野實滿
海軍二等機關兵	片山三五郎
海軍二等機關兵	鹽栗喜三郎
海軍二等機關兵	一ノ瀬留藏
海軍二等機關兵	河野貞吉
海軍二等機關兵	坂井伊三郎
海軍二等機關兵	渡邊平作
海軍二等機關兵	古賀友吉
海軍二等機關兵	太田爲市
海軍二等機關兵	中島市兵衛
海軍二等機關兵	森山甚右衛門
海軍二等機關兵	花田瀧造
海軍二等機關兵	高木治三次
海軍二等機關兵	國廣安治郎
海軍二等機關兵	井上才策
海軍二等機關兵	起定勇太郎
海軍二等機關兵	七條榮
海軍二等機關兵	村島喜一

海軍二等機關兵	中谷清松
海軍二等機關兵	島熊吉
海軍二等機關兵	吉田安吉
海軍二等機關兵	間浦萬之助
海軍二等機關兵	川浦芳太郎
海軍二等機關兵	沖本信一
海軍二等看護	新里徳清
海軍二等看護	今村敏次郎
海軍二等主廚	尾崎惣七
海軍二等主廚	池田格二
海軍二等主廚	後藤善作
海軍二等主廚	上田寅吉
海軍二等主廚	山路佐右衛門
海軍二等主廚	木ノ下吉之助
海軍三等水兵	大原丑松
海軍三等水兵	羽間房次郎
海軍三等水兵	奥野徳松
海軍三等水兵	潮崎喜一郎
海軍三等水兵	藤野幸吉

海軍三等水兵	桃川福太郎
海軍三等水兵	先勝貞次郎
海軍三等水兵	大谷麻太郎
海軍三等水兵	釣流時太郎
海軍三等水兵	小林永吉
海軍三等水兵	小櫻源太郎
海軍三等水兵	野津松太郎
海軍三等水兵	中西友市
海軍三等水兵	平松文吉
海軍三等水兵	竹田喜代松
海軍三等水兵	森岡吉之助
海軍三等水兵	新原龍次郎
海軍三等水兵	楠瀬一
海軍三等水兵	内藤高尉
海軍三等水兵	近藤米市
海軍三等水兵	酒井市太郎
海軍三等水兵	秋本磯治
海軍三等水兵	田中松治郎
海軍三等水兵	松田豐吉

海軍三等水兵	染川秀夫
海軍三等水兵	梶谷盛
海軍三等水兵	中山傳吉
海軍三等水兵	岡仲富吉
海軍三等水兵	前野繁次郎
海軍三等水兵	古川梅吉
海軍三等水兵	富永定作
海軍三等水兵	平岡兼松
海軍三等水兵	安部光造
海軍三等水兵	秋吉廣藏
海軍三等水兵	森重高法
海軍三等水兵	朴榮之丞
海軍三等水兵	小川庄太郎
海軍三等水兵	上野喜藤太
海軍三等水兵	牧野熊次郎
海軍三等水兵	小川市藏
海軍三等水兵	加留部直一
海軍三等水兵	逆瀬川惠藏
海軍三等水兵	山下清人

海軍三等水兵	原田兵藏
海軍三等水兵	村上幾藏
海軍三等水兵	石井久之助
海軍三等水兵	田中辰喜
海軍三等水兵	内田健藏
海軍三等水兵	水田安馬
海軍三等水兵	坪根吉太郎
海軍三等水兵	井芹鶴彦
海軍三等水兵	勝本市藏
海軍三等水兵	稻田豊
海軍三等水兵	太田源太郎
海軍三等水兵	山田直次郎
海軍三等水兵	山下茂吉
海軍三等水兵	中島正純
海軍三等水兵	松本倉太郎
海軍三等水兵	丸井龜之助
海軍三等水兵	中山純一
海軍三等水兵	順宮蘭平
海軍三等水兵	彌城喜代平

海軍三等機關兵
海軍三等機關兵
海軍三等機關兵
海軍三等機關兵
海軍三等機關兵
海軍三等主廚
海軍三等主廚
海軍三等主廚
海軍三等主廚
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵

杉野作次郎
石津小市
藤松駒吉
高原好平
小田小平
萩原久吉
峯熊治
甲斐唯義
吉永務
八百田信太
藤井安之助
濱地健次
角町彌八
羽野藤次郎
梶原平六
平山福太郎
鐘ヶ江喜作
北島定市
片倉末吉

海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵

池田豐吉
田中玉市
松枝五郎
裴津與一
瀬戸山幸吉
内村新助
中村新藏
谷口正敏
森山嘉八
川越末市
佐藤嘉作
田代松太郎
森松農作
中尾末次郎
甲斐末夫
堤和市
高瀬由太郎
浮邊龜次郎
篠原兼榮

海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵
海軍四等水兵

立迫計佐右衛門
米増宗一
原口正次郎
渡邊藤吉
美坂岩彦
米盛森右衛門
桃北庄吉
大久保喜藏
内田助太郎
金城賀真
角與次郎
舟津直
須田謙一
堤伍三郎
龍口直右衛門
筒井文治
廣崎順造
岩村親慶
仲清彦

海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵
海軍四等機關兵

吉田秀
幾野政隆
野上磯次郎
宗朝雄
東猪之助
中島森一
大曲清一
堀大治
山崎末吉
坂井岩右衛門
村田儀八
伊藤吾七
竹屋理一
福島作松
林田友吉
居石金太郎
國武政雄
川野安彦
德久竹一

海軍四等機關兵	佐藤 關一	海軍四等機關兵	松崎 才二
海軍四等機關兵	西中 政喜	海軍四等機關兵	森 秋吉
海軍四等機關兵	黒木 折造	海軍四等機關兵	武元 榮藏
海軍四等機關兵	楠原 勘吾	海軍四等主廚	日野 幸太郎
海軍四等機關兵	川原 國吉	從 僕	原本 綱吉
海軍四等機關兵	岩井 迫吉次	從 僕	脇田 幸太郎
海軍四等機關兵	宮里 豐治	給 仕	米澤 榮吉
海軍四等機關兵	弓削 順輔	給 仕	袖崎 次郎
海軍四等機關兵	堀田 才藏	給 仕	平間 利次
海軍四等機關兵	大迫 清吉	給 仕	須加崎 清雄
海軍四等機關兵	稻葉 秀六	給 仕	井上 宗六
海軍四等機關兵	爲成 信一郎	給 仕	岩永 勇市
海軍四等機關兵	北里 彌熊	剃 夫	福田 留吉
海軍四等機關兵	井上 鐵造	剃 夫	松宗 久太郎
海軍四等機關兵	藤本 重利	割 烹	伊保 内石松
海軍四等機關兵	瀧上 清治	割 烹	神田 龜吉
海軍四等機關兵	右松 雅雄		

總 計 四百九十三名(自六〇四至一〇九六)

内

六十四

上長官	四名	士官	一六名	候補生	一〇名
准士官	六名	水兵部下士	三一名	水兵部卒	一九三名
機關部下士	三二名	機關部卒	一五八名	其ノ他ノ下士	八名
其ノ他ノ卒	二三名	備 人	一二名		

以上ノ戦死者中ニハ、溺死其ノ他ノ負傷者アリシナランモ、死體ヲ收容スルコト能ハサリシヲ以テ、之ヲ確ムルニ由ナシ、蓋純然タル溺死ハ、恐ラク極テ少數ニ過キスシテ、大多數ハ爆傷ヲ負ヒタルモノト認定ス、

收容後死亡セシ者

溺水。

軍艦初瀬乗組 海軍四等水兵 佐藤 寶 推(一〇九七)

明治三十七年五月十五日軍艦龍田ニ收容シ之ヲ診スルニ顔色藍色ヲ呈シ腹部膨脹脈絶止シ呼吸殆ト廢絶セルモノ、如ク僅ニ心悸ヲ存スルノミ、因テ吐水後人工呼吸法ヲ行ヒ、カンフル、エーテルニ筒ノ皮下注射ヲ行ヒタルモ其ノ效ナク死去セリ

二、負傷者

初瀬遭難當時ノ負傷者ハ、總テ九十二名ヲ算シ、其ノ中五十二名ハ病院船ニ移乗セリ、即チ龍田ニ收容ノ負傷者ハ、同艦ノ光祿島沿岸ニ擱坐シタルカ爲メ、十六日臺南丸ニ移乗シ、其ノ二十六名ハ十七日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ移サレ、殘餘ハ健者ト共ニ福岡丸ニ移乗セリ、而テ神戸丸ハ十七日午後三時三十分佐世保ニ向ケ第三地點ヲ拔錨シ、十九日佐世保ニ入港シタルヲ以テ、之ヲ海軍病院ニ送院シ、又笠置ニ收容ノ負傷者ハ、瀬戸山二等水兵ヲ除ク外、翌十六日一旦悉

ク富士ニ移サレ、十七日ニ至リ布上中軍醫外戦傷者十六名(外三名ノ平病者モ同時ニ送院セラレ)ハ富士ヨリ、瀬戸山ハ笠置ヨリ病院船西京丸ニ入院シ、越エテ十八日白井少佐外七名(外三名ハ公務傷者、一名ハ平病者モ、亦病ニテ同時ニ送院セラレ)福岡丸ヨリ西京丸ニ送ラレ、西京丸ハ二十日戦傷者十四名ヲ福岡丸ニ退院セシメタル後、第三地點ヲ發シ、二十八日吳軍港ニ投錨シタルヲ以テ、十二名ノ傷者ヲ海軍病院ニ送院セリ、左ニ入院者ノ官氏名竝ニ送院月日等ヲ掲記ス、

五月十七日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ送リタル戦傷者ハ左記二十六名トス、

海軍一等機關兵曹	小堀 太平	海軍三等水兵	小林 種一
海軍二等兵曹	長 添 安 次	海軍三等水兵	金 居 兵 一
海軍二等機關兵曹	首 藤 謙 一	海軍三等水兵	大井 光 次 郎
海軍一等水兵	垣 内 才 吉	海軍三等水兵	其 田 久 吉
海軍一等水兵	中 村 和 造	海軍三等機關兵	多 田 品 吉
海軍一等機關兵	佃 實 次	海軍四等水兵	緒 方 房 松
海軍二等水兵	矢 竹 鶴 三 郎	海軍四等水兵	下 園 八 太 郎
海軍二等水兵	江 種 嘉 三 郎	海軍四等水兵	井 之 原 戸 一
海軍二等水兵	渡 邊 福 松	海軍四等水兵	古 里 岷 一
海軍二等水兵	遠 竹 虎 次 郎	海軍四等水兵	原 口 初 太 郎
海軍二等水兵	西 岡 定 太 郎	海軍四等水兵	田 中 喜 代 次
海軍二等水兵	神 戸 忠 左 衛 門	海軍四等水兵	野 口 伊 八
海軍二等水兵	守 米 太 郎	海軍四等水兵	蒲 原 七 太 郎

五月十七日一等水兵瀬戸山安定ハ笠置ヨリ、左記戦傷者十七名及ヒ平病患者三名計二十名ハ富士ヨリ、病院船西京丸ニ送ラル、

戦傷者

海軍中軍醫	布 上 堯 一	海軍二等水兵	鈴 置 市 郎
海軍上等兵曹	瀧 本 逸 一	海軍二等水兵	森 川 多 吉
海軍一等兵曹	古 賀 儀 正	海軍二等機關兵	前 田 鶴 次
海軍一等信號兵曹	山 内 勇 吉	海軍二等機關兵	松 本 安 次 郎
海軍一等機關兵	日 永 田 爲 次 郎	海軍二等機關兵	鐵 井 熊 藏
海軍一等信號兵	大 山 國 松	海軍三等主廚	小 島 吉 五 郎
海軍一等看護	中 村 軍 治	海軍四等水兵	北 川 末 喜
海軍二等水兵	山 中 三 四 郎	海軍四等水兵	福 島 武 二
海軍二等水兵	小 山 巳 之 助		

平病者

海軍一等木工	竹 迫 直 記	海軍三等主廚	矢 野 茂 佑
海軍二等水兵	向 井 徳 太 郎		

五月十八日運送船福岡丸ヨリ左記十二名ヲ、病院船西京丸ニ送致ス、

戦傷者

海軍少佐	白 井 兼 太 郎	海軍少尉	横 田 亨
------	-----------	------	-------

六十八

海軍二等兵曹 松永圓次郎 海軍二等水兵 加藤宗二
海軍二等兵曹 前田三之助 海軍二等水兵 志々目宗市
海軍一等水兵 松本幸吉 海軍二等水兵 久保田虎太郎

公務傷者
海軍二等兵曹 岩坂奎三郎 海軍二等水兵 石田嘉一郎
海軍二等兵曹 高橋三郎

平病患者
海軍三等水兵 伊藤清若

以上送院患者中二十日全治又ハ輕快退院シテ、福岡丸ニ乗船セシモノ、官氏名ハ左ノ如シ、

海軍少佐 白井兼太郎(輕退)	海軍二等水兵 森川多吉(治退)
海軍中軍醫 市上堯一(治退)	海軍二等水兵 鈴置市郎(輕退)
海軍少尉 横田亨(輕退)	海軍二等水兵 志々目宗市(輕退)
海軍上等兵曹 龍本免一(輕退)	海軍二等水兵 小山巳之助(治退)
海軍二等水兵 松本堯吉(輕退)	海軍二等水兵 久保田虎太郎(輕退)
海軍一等看護 中村軍治(治退)	海軍二等機關兵 松本幸吉(輕退)
海軍二等水兵 山中三四郎(輕退)	海軍二等機關兵 松本安次郎(治退)

計 十四名

内 譯(全治退院六名、輕快退院八名)

五月二十八日西京丸ハ、左記十二名ヲ吳海軍病院ニ送院ス、

海軍一等兵曹 古賀儀正	海軍一等信號兵曹 山内勇吉
-------------	---------------

海軍二等兵曹 前田三之助	海軍二等水兵 瀬戸山安平
海軍二等兵曹 松永圓次郎	海軍二等機關兵 鐵井熊藏
海軍一等水兵 加藤宗二	海軍三等主廚 小島吉五郎
海軍一等水兵 大山國松	海軍四等水兵 北川末喜
海軍一等機關兵 日永田爲次郎	海軍四等水兵 福島武二

又遭難傷者ノ中、五月二十日西京丸ヲ輕快退院シテ、福岡丸ニ移レル士官海軍少佐白井兼太郎、海軍少尉横田亨、及ヒ福岡丸ニ於テ治療セル海軍少尉中根正方ハ、五月二十三日同船ノ佐世保ニ入港セル際、傷痕未タ治癒セサルヲ以テ、更ニ佐世保海軍病院ニ入院ス、
傷者創狀經過及ヒ轉歸ノ概要ハ左ノ如シ

(イ) 佐世保海軍病院入院者

右手掌部挫創(業)

軍艦初瀬砲術長 海軍少佐 白井兼太郎(二〇九八)

明治三十七年五月十五月初瀬第一回ノ罹災後前艦橋ニ在リテ敵ノ潛航艇驅逐艦等ノ來襲及ヒ浮流水雷ヲ監視シ居タリシカ第二ノ機械水雷ニ觸レ爆沈セントスルヤ短艇卸シ方ノ令アリシヲ以テ之ヲ傳令センカ爲メ「シホルターデッキ」ニ下リ後チ右舷端舟甲板ノ傍ニ至リ「レールスタシ」ニヨリ「ナグ」ヲ握リ第一「第三」カッター「卸シ」方ヲ指揮セシカ艦ト共ニ海中ニ没シテ負傷シ浮出ノ末釣床ニ取附キ後メステール「浮流セルモノ」ニ泳キ附キ本艦第二「カッター」ニヨリ救助セラレ軍艦龍田ニ收容セラル(受傷ノ原因ハ本人ノ逃ル所ニ「コレハ」スタンション「ナラシ」)之ヲ診スルニ右手掌第二掌指關節部ニ於テ長サ一、

五仙迷ノ横位挫創アリ深サ皮下結締織ニ達シ創縁ノ挫滅甚シカラス出血疼痛共ニ少シ仍テ防腐繃帶ヲ施シ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ十八日西京丸ニ送ラレ二十日輕快退院シ福岡丸ニ歸船ス當時前記創面分泌稍盛ナルモ化膿ノ兆ナシ爾來加療中二十三日佐世保へ歸著セルヲ以テ即時海軍病院ニ送院ス創面已ニ良性肉芽ヲ生シ微量ノ排膿アリ拇指球及ヒ手背ニ輕度ノ腫脹ヲ殘シ示指ノ屈伸妨ケラレ且同指ノ知覺鈍癱ヲ訴フ制腐的裝創法ノ下ニ瘡痕ヲ結成シ右示指掌面ニ知覺癱痺ヲ殘シテ六月十日全治退院ス 經過日數二十六日在院日數通計二十日

右膝關節挫創

軍艦初瀬乗組

海軍少尉

中根

正 方(二〇九九)

明治三十七年五月十五日初瀬ノ水雷ニ罹ルヤ後ノ構製ニ著手シ之ヲ了リテ前艦橋羅針臺上ニ至リシ際午後零時三十四分第二ノ爆發ニ因リ負傷シ水中ニ投シ龍田ニ收容セラル之ヲ診スルニ右膝關節ニ於テ脛骨上端内側ニ長サ二仙迷幅約〇・七仙迷ノ挫創アリ出血疼痛少シ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗ス當時創面化膿ノ兆アリシヲ以テ既ニ施シアリタル防腐繃帶ヲ制腐繃帶ニ改ム二十日之ヲ診スルニ前記創面ハ不良ノ肉芽ヲ蒙リ少シク膿汁ヲ附著シ創圍發炎シ歩行稍障碍セラレタリ爾來加療ヲ繼續シ二十三日佐世保ニ歸著シ即時海軍病院ニ送院ス之ヲ診スルニ創圍腫脹硬結シ廣キ發赤アリテ大腿中部ニ及シ創面分泌物多量ニシテ貧血ヲ呈シ沃度仿謨皮疹ヲ認ム適應加療中六月上旬ニ至リ皮疹治癒シ創面肉芽漸次良性ト爲リ瘡痕ヲ結



(108)

顔面、耳翼、兩手部火傷

ヒテ七月四日全治退院ス 經過日數五十日在院日數四十二日

同

海軍少尉 横田 亨(二〇〇)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際後甲板砲塔右舷側ニ在リテ浮泛力ノ計算ニ從事中第二ノ爆發ニ因リ負傷シ「ボートデッキ」ニ上リ水中ニ投シ圓材ニ取附キ本艦第二「カッター」ニ由リ軍艦龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ顔面全部ニ互リ火傷ヲ負ヒ前額部右耳前ヨリ頬部ニ互リ處々水泡ヲ形成シ頸部ニモ水泡破壊後ノ糜爛面アリ其ノ他右乳嘴突起部左右手指背面及ヒ手背ニ第一度ノ火傷ヲ負ヒ頭髮ハ焦ケテ捲縮ス、依テ左耳翼部及ヒ右乳嘴突起部ニ硼酸軟膏ヲ貼シ其ノ他ニ「ビクリン」酸綿紗ヲ貼シテ繃帶シ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗ス十八日繃帶ヲ更換スルニ前額部ノモノハ已ニ治ニ就クモ其ノ他ノ部ハ依然タルヲ以テ此ノ日西京丸ニ送ラレ二十日輕快退院歸船シ二十三日佐世保ニ歸著シ即時海軍病院ニ入院ス爾來各火傷面次第ニ乾燥シ痂下ニ新皮ヲ形成シテ六月七日全治退院ス 經過日數二十三日在院日數通計十七日

(寫眞第八號參照)

右鎖骨外端脱臼、左顴骨部挫創、左眼瞼、左下腿挫傷、左前膊、右下腿擦過傷(稍重傷)

同

海軍一等機關兵曹 小堀 太平(二〇二)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際海中ニ投シタルモ波浪ノ爲メ引返サレ大砲ノ尖端ニ背部ヲ觸突シタリト云フ龍田ニ收容セラレ次テ臺南丸ニ移乗ス之ヲ診スルニ

左背部全面ニ無數ノ線狀擦過傷アリ右肩胛部少シク腫脹シ壓痛アリ右上肢ノ内外轉ハ自在ナルモ之ヲ提舉スルコト能ハス翌十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ同船ニ於テX光線ヲ以テ檢スルニ近圓ノ諸骨ニ異常ナク唯右鎖骨ノ外端ハ上方ニ脱臼シ強力ヲ用ヒテ之ヲ壓スレハ整復スルモ手ヲ放テハ又直ニ脱臼位ニ復ス其ノ他左額骨部ノ内方ニ小挫創アリテ周圍少シク腫脹シ左上下眼瞼左下腿内側上部ニ挫傷ノ溢血斑左前膊後側上部右下腿脛骨結節部ニ各指頭大ノ擦過傷ヲ認ム加療中十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時創傷ハ全ク治癒シ右鎖骨外端ハ照檢上依然トシテ肩胛骨ト離解シ鎖骨外端脱臼ノ徵候明確ナリ仍テ肘關節ヲ屈曲シテ鎖骨ト固定縛帶ヲ施シ、ニ六月三日頃ニ至リ全ク正位ニ復シテ關節ノ聯繫ヲ營ミ右上肢ノ運動健側ト異ルコトナク毫モ障礙ヲ覺ユサルニ至リ七月十九日全治退院ス 經過日數六十五日

右大腿、左下腿挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍二等兵曹 長 添 安 次(一〇三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷シ軍艦龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ右大腿後外側大轉子ヲ後下方ニ距ル三指幅ノ部ヨリ後下方ニ走ル長サ七仙迷幅ニ仙迷ノ挫傷アリ其ノ周圍少シク腫脹シ表皮剝脱シ皮下溢血アリ、又左下腿上部ヨリ中三分ノ一部ニ至ル迄腫起シ殊ニ膝關節直下部ハ前内外側ニ互ル皮膚ニ掌大ノ帶青赤色斑ヲ呈シ内側ニ於テ拳大ノ溢血ヲ混フ、翌十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時擦過部ハ凡テ痂皮ヲ被ヒ挫傷セル皮膚尙紫色ヲ呈シ左膝關節ハ屈曲

四十五度ヲ越ユル能ハス酒精濕布ヲ貼シ六月七日全治退院ス 經過日數二十三日

腰部擦過傷 頸部、胸部挫傷

同 海軍二等機關兵曹 首 藤 謙 一(一〇三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左腰部ヨリ薦骨部ニ互リ劇シキ壓痛アリ右腸骨前上棘ノ外上方ニ於テ腸骨嵴ニ沿ヒ長サ三仙迷幅ニ仙迷橢圓形ノ擦過傷アリ腰部劇痛ノ爲メ體動不能ナリ其ノ他第七頸椎棘狀突起部ニ壓痛アリ又左右胸部前面ニ壓痛及ヒ呼吸時疼痛アルモ頸胸部ノ骨ニ異狀ヲ認メス、翌十六日臺南九ヨリ經テ病院船神戸丸ニ入院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時右胸第三肋骨ノ内方及ヒ右季肋緣ニ疼痛劇シキ部アリ呼吸困難ヲ訴フルモ他覺的變狀無ク疼痛次第ニ減退シテ五月二十九日治癒シ右腸骨前上棘ノ外上方ニ拇指頭大ナル輕度ノ表皮剝脱傷アリ周圍ニ腫脹壓痛アリテ歩行碍ケラル、モ漸次消散シ六月二日全治退院ス 經過日數十八日

右環指挫斷 右上膊擦過傷

同 海軍一等水兵 中 村 和 造(一〇四)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ右環指末節ハ關節近傍ニ於テ挫斷セラレ創面異物ヲ以テ汚染シ創底ニ銳利ナル斷骨ヲ露出ス其ノ他右上膊後外側上三分ノ一部ニ於テ天保錢大ノ擦過傷アリ、十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時斷端ノ炎症甚シク多量ノ排膿

アリ依テ局所癱瘓ノ下ニ第二第三指骨間關節ノ離斷術ヲ行ヒ創面ヲ開放加療セシモ炎機消退セス延イテ全指ニ及スヲ以テ第一及ヒ第二節背面ニ縱切開ヲ施シ、ニ排膿止ミ肉芽ヲ以テ被ハルルニ至レリ其ノ後沃度仿謨ノ刺激ニ因リ濕疹ヲ發シ經過漸ク遷延セシモ八月四日ニ至リ瘡痕ヲ結成シ十三日全治退院ス 經過日數九十日

後頭部挫創 右大腿火傷 左肩胛、左肘關節、右膝關節擦過傷

軍艦初瀬乗組 海軍一等水兵 垣内才吉(二一〇五)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬遭難ノ際海中ニ投シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ右後頭部ニ於テ乳嘴突起ノ基底ヨリ後方ニ走ル長サ五仙迷ノ挫創アリ創縁稍挫滅ス又右大腿後外側大轉子直下ニ横走セル長サ三仙迷幅一仙迷ノ二度火傷アリ其ノ他左肩胛部ヨリ腋窩ニ移行スル丁字形擦過傷アリ左肘關節部驚突起ノ直上方ニ卵圓形ノ小擦過傷アリ又右膝關節部膝蓋骨ノ上端ニ當リ拇指頭大三角形ノ擦過傷ヲ認ム、仍テ後頭部挫創ヲ縫合シ無腐爛帶ヲ施シ十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時右乳嘴突起ノ基底ニ近ク長サ五仙迷ノ縫合創アリ稍腫脹シ少量ノ排膿ヲ認ム縫絲ヲ切除セルニ細長ナル肉芽面ヲ形成シタルモ五月二十四日ニ至リ創面癒合シ右大腿外側ニ在ル火傷ハ二度ニシテ疼痛ヲ存シ排膿アリ五月三十一日結痂ヲ衣シ其ノ他ノ擦過傷ハ入院前已ニ治癒セリ六月四日全治退院ス 經過日數二十日

前額部挫創 右肩胛部挫傷 左小指挫創

同 海軍一等機關兵 佃實次(二一〇六)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際海中ニ投シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ右外眥ノ直上部ヨリ起リ同肩ノ末端ニ至ル長サ二仙迷ノ挫創アリ右肩胛關節ニ劇痛ヲ訴ヘ關節ハ強直狀ニ固定セラル其ノ他左小指ト環指トノ移行部ニ於テ長サ二仙迷皮下組織ヲ貫ケル挫創アリ十六日臺南九ヨリ神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時右外眥ノ直上部ニアル創面ハ已ニ結痂ヲ衣シ左小指ノ挫創モ亦治癒セルモ右肩胛關節ニ依然劇痛ヲ訴ヘ爲メニ該肢ノ運動不能ナリ頭痛甚シク恐怖觀念ニ苦メラレ些少ノ音響ニモ戰慄シ號砲ヲ聞キテ床上ニ蹶起スルコトアリ眼ハ光ヲ放チ手指震ヒ安眠セス爾後右上肢ノ疼痛ハ次第ニ緩解シ六月ニ入り關節運動自由トナリ同時ニ精神症狀著シク輕快セルヲ以テ六月六日全治退院ス 經過日數二十二日

左顱頂部挫創 左前膊火傷

同 海軍二等水兵 矢島鶴三郎(二一〇七)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際海中ニ投シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左顱頂結節部ノ直上部一仙迷ノ部ヨリ矢狀縫合ニ向テ走ル長サ三仙迷幅一、五仙迷ノ挫創アリ創縁不正ニシテ其ノ兩端ハ只皮膚ヲ貫キ中央部ハ帽狀腱膜ニ達スルモ骨膜及ヒ骨ニ異狀ヲ認メス又左前膊前內側中央部ニ白銅貨大ノ二度火傷アリ表皮剝離シテ真皮ヲ露出シ其ノ創面ヨリ前下方ニ互リ皮膚一般ニ發赤シ灼熱ノ感アリ、十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院

シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス、左顙頂部創面ハ淺クシテ化膿ノ兆ナク五月二十九日結痂シ
六月四日痂皮脱落シテ完全ナル瘡痕ヲ形成シ左前膊尺骨側中央部ニアル火傷面ハ前創ヨリモ
早ク淡紅色ノ脆弱ナル瘡痕ヲ貽シテ治癒シ六月四日全治退院ス 經過日數二十日

右背部挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 西岡 定太郎(二一〇八)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際海ニ投シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診ス
ルニ右肩胛棘上部ニ掌大ノ腫脹ヲ呈シ其ノ中央ニ於テ殆ト棘ニ竝行スル長サ四仙迷幅一仙迷
ノ擦過傷ヲ存シ腫脹及ヒ壓痛アリ同側上膊ノ舉上運動著シク制限セラレ廻轉運動ハ殆ト不能
ナリ、十六日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス、加療中擦過傷ハ
痂皮ヲ被ヒ腫脹疼痛漸次輕減シテ右上肢ノ運動殆ト健態ニ復シ五月三十日全治退院ス 經
過日數十五日

顔面、頸部、兩手部火傷 左前膊擦過傷(稍重傷)

同 海軍二等水兵 神戸忠左衛門(二一〇九)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ海ニ投シ龍田ニ收容セラル、之
ヲ診スルニ(一)顔面ニ於テ鼻梁及ヒ頤下中央部ヲ除キ第一度ノ火傷ヲ呈シ頸部ニ數多ノ島嶼狀
表皮剝脱部アリ(二)左手背面ノ大部ハ表皮剝脱シテ眞皮ヲ露出シ第二、第三、第四指ノ背面モ亦同
シ右手背ノ大部及ヒ腕關節ノ背面モ亦第二度ノ火傷ヲ呈ス其ノ他左前膊ニ於テ腕關節尺骨側



(109)

ヨリ前及ヒ後側ニ互リ約手掌大ノ部表皮剝脱ス十六日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時體溫三十八度九分ニ昇リ顔面及ヒ兩前膊下端以下ニ第一度乃至第二度ノ火傷面ヲ呈シ前額部右眼圍左額部右耳翼上口唇左右手指背左前膊下端ノ後側ニ於テハ稍深ク眞皮ヲ侵シ出血シ易ク疼痛化膿甚シク耳翼附近ニ綠膿菌ノ繁殖ヲ認メ臭氣甚シカリシモ排膿次第ニ減退シテ五月二十五日以降ハ體溫常度トナリ同月下旬ニ至リ多部ハ全ク乾燥シ新皮完成シテ治ニ就キ前額右耳翼及ヒ左前膊下端ニ島嶼狀ヲナシ蠶豆大乃至小指頭大ノ肉芽面數個ヲ貽スノミナリシカ是亦六月十二日ニ至リ治癒シ顔面ニハ色素ヲ貽シ兩手背及ヒ口手指背ニハ白色光澤アル淺在癰痕ヲ呈シツ、七月八日全治退院ス 經過日數五十四日

(寫眞第百九號
百十一號參照)

右顙頂部後頭部挫創 右眼瞼挫傷 右手指火傷

同

海軍二等水兵 江種 嘉三郎(二一〇)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セララル、之ヲ診スルニ(一)右顙頂結節ノ後上方ヨリ前方ニ向ヒ長サ十仙迷ノ線狀挫創アリ同創ノ約中央部ヨリ後下方ニ向ヒ長サ三仙迷ノ皮膚挫裂創ヲ呈ス骨ニ異狀ナシ(二)外後頭結節ノ上方三仙迷ノ部ニ横走セル長サ四仙迷ノ挫創アリ骨質ニ異狀ヲ認メス其ノ他右上眼瞼腫脹シ一般ニ皮下溢血アリテ暗紫色ヲ呈シ右拇指背面中指第一節第二指骨間關節部背面ニ第二度ノ火傷ヲ認メ依テ頭部ノ兩創ヲ縫合シ無腐爛帶ヲ施ス十六日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院

ニ轉院ス兩縫合創ハ共ニ第一期癒合ヲ營ミ其ノ他ノ傷面ハ何レモ速ニ治癒シ五月二十八日全
治退院ス 經過日數十三日

前額部挫創 右手擦過傷

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 守 米太郎(一一二)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラレ之ヲ診スル
ニ右前額結節ヨリ直上方ニ向ヒ長サ四仙迷ノ挫創アリ其ノ他右手背第二、第三掌骨間部及ヒ第
五掌骨ノ基底部ニ當リ各一個ノ長サ二仙迷ノ擦過傷アリ仍テ挫創ヲ縫合シ防腐繃帶ヲ施シテ
十六日臺南九ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス縫合創縁化膿ノ徴ナ
ク縫絲ヲ切除セシニ第一期癒合ヲ營ミ五月二十八日全治退院ス 經過日數十三日

前額部挫創 左腰部挫傷 左示指擦過傷

同 海軍二等水兵 渡 邊 福 松(一一三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラレ之ヲ診スル
ニ右前額結節ノ外上方ヨリ斜ニ上外方ニ向ヒ長サ二、五仙迷幅一仙迷ノ皮下ニ達スル挫創アリ
又左腰部ヨリ薦骨部ニ互リ少シク腫脹シ壓痛アルモ骨ニ異狀ヲ認メス其ノ他左示指第一、第二
指骨間關節部尺骨側ニ豌豆大ノ擦過傷アリ十六日臺南九ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ五月二十
八日佐世保海軍病院ニ轉院ス挫創ハ入院時既ニ痕痕ヲ形成セシモ尙薄弱ナルヲ以テ單ニ保護
繃帶ヲ施シ、ニ左薦腸關節部ノ壓痛及ヒ歩行障礙殆ト消散シ五月二十八日全治退院ス 經

過日數十三日

右肩胛部挫傷 右顙頂部、面部挫創 右上眼瞼挫傷 左下顎隅部擦過傷

同 海軍二等水兵 遠 竹 虎 次 郎(一二三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラレ之ヲ診スル
ニ右肩胛棘ノ外三分ノ一部ヨリ斜ニ下外方ニ向フ長サ四仙迷幅一仙迷ノ挫傷アリ同側上肢ノ
提舉運動少シク制限セラル又右顙頂部矢狀縫合ノ後端ニ蠶豆大ノ挫創アリ鼻梁ニ於テ眉間ノ
直下部ニ横走スル長サ二仙迷ノ挫創アリ創圍稍發赤シ壓痛アルモ鼻骨ニ異狀ナシ右上眼瞼ニ
小皮下溢血アリ左下顎隅ノ前下方ニ蠶豆大ノ擦過傷アリ十六日臺南九ヨリ病院船神戶丸ニ送
院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時前記ノ諸創概ネ治癒シ右肩胛部剝脫傷ハ中央ニ黑色
痂皮ヲ被リ同側上肢ヲ舉上スルニ疼痛ヲ覺ユシモ是亦消退シ五月三十日全治退院ス 經過
日數十五日

左頰部挫創 左右下腿、左前膊、左眼瞼挫傷

同 海軍三等水兵 金 居 兵 一(一二四)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際龍田ニ收容セラレ之ヲ診スルニ左頰
骨部ノ内方ニ縱位ノ二小挫創アリ深サ皮下ニ止リ周圍少シク腫脹シ右下腿脛骨結節部ニ指頭
大ノ二擦過傷ヲ存シ左下腿内踝部ニモ天保錢大ノ皮下溢血斑ヲ認メ其ノ他左眼瞼ノ兩端ニ皮
下溢血アリ同眼珠結膜少シク充血スルノ外眼珠ニ異狀ナシ又左前膊後側上三分ノ一ノ下界ニ

長サ三仙迷ノ擦過傷アリ、十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送り十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス、左頰骨部ノ挫創ハ已ニ兩ナカラ痂皮ヲ衣シ左右下腿前面ニ各鶏卵大ノ溢血斑ヲ存シ壓痛甚シカリシモ次第ニ減退シテ六月一日全治退院ス 經過日數十七日

顛頂部挫創 左大腿挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍三等水兵 小林 種一(一一五)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セララル、之ヲ診スルニ矢狀縫合ノ中央ニ於テ左前方ヨリ右後方ニ走ル長徑四、七仙迷ノ線狀挫創アリ又左大腿前面膝蓋骨ノ上内方四仙迷ノ部ニ二錢銅貨大不正形ノ皮下溢血アリ暗紫色ヲ呈ス、仍テ頭部挫創ニ縫合ヲ加ヘ無腐爛帶ヲ施シ十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス頭部挫創ハ縫合絲ヲ切除セシニ第一期癒合ヲ營ミ左大腿下端ノ皮膚ニ二錢銅貨大ノ紫藍色部アリテ膝關節ノ屈伸ニ際シ疼痛アル爲メ歩行困難ナリシモ速ニ減退シテ五月二十八日全治退院ス 經過日數十三日

背部腰部挫傷 左前膊部火傷

同 海軍三等水兵 大井 光次郎(一二六)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セララル、之ヲ診スルニ左肩胛部ノ中央ニ長サ十五仙迷幅六仙迷横位ノ挫傷アリ又第四腰椎棘狀突起ニ始マリ右脇骨端ノ最高部ヲ横過スル長サ十二仙迷幅五仙迷ノ剝脱傷アリ胸椎ノ下部ニ壓痛劇甚ナリ其ノ

他左上膊後側下端ニ長サ四仙迷幅三仙迷ノ二度火傷ヲ有ス、十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時左肩胛部ノ挫傷ハ腫脹消散セルモ尙壓痛ヲ存シ右腰部ノ表皮剝脱面ヨリ少量ノ排膿アリ火傷ハマルビキ一氏層ヲ暴露シ出血シ易ク疼痛アリ仍テ硼酸華撒林ヲ塗布シ保護綿帶ヲ貼セシニ五月下旬ニ至リ凡テ治癒セシモ右腰部及ヒ同大腿ニ疼痛ヲ貽スヲ以テ在院加療ノ末六月十九日全治退院ス 經過日數三十五日

顔面、兩手部火傷(稍重傷)

同 海軍三等水兵 岡田 久吉(一二七)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ海ニ投シテ龍田ニ收容セララル、之ヲ診スルニ顔面全部ノ皮膚ハ赤褐色ニシテ知覺極テ過敏ナリ兩頰部ニ於テ指頭大乃至豌豆大ノ表皮剝脱部ヲ呈シテ乳頭層ヲ露出ス左右眼瞼縁ハ腫脹シ眼瞼結膜ハ充血スルモ眼球ニ異狀ナシ其ノ他左右手指背面及ヒ之ヨリ腕關節ヲ越ユ前膊下三分ノ一ノ背面ニ互ル火傷アリ其ノ大部ハ表皮剝脱シ眞皮ヲ露出シテ劇痛ヲ訴フ、十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時體溫三十九度ニ昇リ顔面全部兩前膊ノ下三分ノ一以下ニ第一度乃至第二度ノ火傷面ヲ存シ前額右半部兩頰額部兩耳翼右頰部口圍右腕關節後面右手背右第二乃至第五指背面左第一乃至第四指背面ノ處々ニマルビキ一氏層ヲ露出ス疼痛劇シク排膿多量ニシテ臭氣臭ヲ衝キタレトモ化膿次第ニ減退シテ殆ト乾燥シ六月初旬ニ至リ右耳翼及ヒ右手背ニ蠶豆大乃至梅指頭大ノ肉芽面ヲ殘存セシモ六月二十四日全ク治癒シ兩手背及ヒ手指背

面ニ淺表ノ瘡痕ト顔面ニ色素ノ沈著トヲ遺シテ七月八日全治退院ス

經過日數五十四日(寫眞)

第一百十號
十二號參照

顔面、兩手、左右肩胛部火傷 左環指單純骨折(重傷)

軍艦初瀬乗組 海軍三等機關兵 多田 品吉(一一八)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ(一)顔面全部ニ第一度ノ火傷ヲ呈シ兩下顎隅兩耳後及ヒ胸骨把柄上部ニ第一度乃至第二度ノ火傷アリ(二)左右腕關節ヨリ手指背面ニ至ル迄第一度乃至第二度ノ火傷ヲ呈ス其ノ他右肩胛部ニ一個ノ鵝卵大又左肩胛部ヨリ同側上膊上三分一ノ中央部ニ互リ長サ三乃至五仙迷ノ數個ノ紡錘形第一度ノ火傷アリ、十六日臺南丸ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ、十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時顔面及ヒ兩腕關節以下ノ背面全部ハマルビキ一氏層ヲ露出シ疼痛劇烈ニシテ出血シ易ク多量ノ膿汁ヲ排シ綠膿菌ノ繁殖アリ體溫三十八度五分ヲ示ス五月二十六日ニ至リ體溫下降シ爾來漸々肉芽發生シテ六月九日ニ至リ全ク治癒スト雖モ瘡痕收縮ニ因リ左諸指伸展位ニ強直シ握力十二基瓦迷ニ減ス而テ火傷治癒セル後永ク左環指第二節ニ壓痛點ヲ存スルニヨリ細查ノ結果始テ同指骨ニ單純骨折アルヲ確メ得タリシモ其ノ後癒合ヲ營ミ十二月十六日免役退院ス 經過日數二百十五日(寫眞第一百十號參照)

右顙頂部、前額部挫創 顔面、兩手部、右下腿火傷(稍重傷)

同

海軍四等水兵 緒方 房松(一一九)



(110)



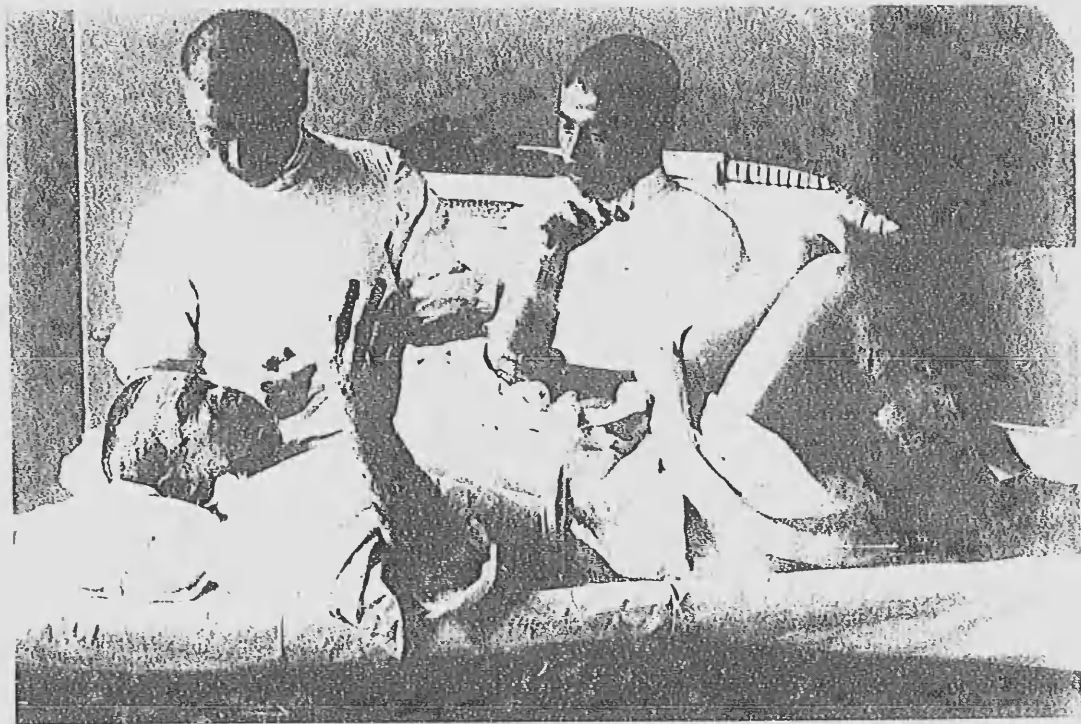
(111)



(112)

(113)





(114)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シテ海中ニ投シ龍田ニ收容セラ
ル、之ヲ診スルニ(一)右顱頂結節部ニ於テ前後ニ走ル長サ三仙迷ノ挫創右前額部ニ長サ二仙迷ノ
挫創アリ(二)顔面ノ大部ハ二度ノ火傷ヲ蒙リ頭髮焦サレテ卷縮シ眼瞼結膜充血ス又左右總指
背面ヨリ前膊中央部ニ至ル迄殆ト全部ニ同度ノ火傷ヲ負ヒ右下腿中三分ノ一部右肘關節鶯嘴
突起部ニ約鶏卵大ノ糜爛面アリ十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病
院ニ轉院ス當時體溫三十八度八分ヲ示シ火傷ハ二度ニシテ乳嘴屑ヲ露出シ疼痛化膿劇シク
惡臭ヲ放チシモ六月ニ入り漸次良好トナリ七月中旬ニ至リ乾燥シ右顱頂部ノ縫合創ハ第一期
癒合ヲ營ミ前額ノ創面ハ肉芽ニヨリテ治癒シ九月十日全治退院ス 經過日數百十八日(寫眞
参照)

左足踵部挫創

同

海軍四等水兵 古里 敏一(二三〇)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ海中ニ投シ龍田ニ收容セラ
ル、之ヲ診スルニ左足踵部中央ヨリ外踝ノ後下方三仙迷ニ達スル長サ七仙迷線狀ノ挫創アリ骨質ニ
異狀ヲ認メス、仍テ縫合ヲ施シ十六日臺南九ヨリ病院船神戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院
ニ轉院ス當時創内化膿ニ陥ルヲ以テ縫合絲ヲ除キ創内ヨリ小木片ヲ抽出セシニ排膿減少シテ
真性肉芽ヲ生シ遂ニ瘢痕ヲ結成シテ六月十六日治癒セリ其ノ後左膝關節ニ疼痛ヲ偶發シ經過
佳サリシカ九月十日ニ至リ全治退院ス 經過日數百十八日

右背部擦過傷

軍艦初瀬乗組 海軍四等水兵 下 蘭 八 太 郎 (二二二)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬沈没ノ際負傷シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右肩胛下角ノ上方一指横徑ノ部ヨリ内下方ニ向ヒ長サ四仙迷ノ擦過傷アリ、十六日臺南丸ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院シ加療ノ末二十八日全治退院ス 經過日數十三日

左下腿、右手背挫傷

同 海軍四等水兵 原 口 初 太 郎 (二二三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ左下腿上部ノ前面及ヒ外面ヨリ以下足背ニ互リ發赤シ壓痛アリ又右手背一般ニ腫脹シテ手指ノ屈伸自由ナラス、十六日臺南丸ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院シ二十八日全治退院ス 經過日數十三日

右下腿挫傷

同 海軍四等水兵 芝 之 原 戸 一 (二二四)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際海ニ投シ負傷シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右下腿前外側ヨリ内側ニ互リ一般ニ少シク腫脹シ脛骨結節部ニ於テ兒掌大ノ部少シク隆起シ溢血斑アリ此ノ部壓痛甚シキモ骨質ニ異狀ヲ認メス、十六日臺南丸ヨリ病院船神戶

丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院ス、爾後腫脹疼痛次第ニ消褪シテ六月二十五日全治退院ス 經過日數四十一日

右背部挫傷

同 海軍四等水兵 田 中 喜 代 次 (二二五)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右肩胛下角ノ少シク上部ヨリ以下五指横徑ノ部ニ著シキ壓痛アリ右下肢ノ運動制限セラル又左肩胛棘ノ上部ニ壓痛アリ他覺的變狀ナシ、十六日臺南丸ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ轉院シ六月四日全治退院ス 經過日數二十日

頭部、顔面、頸部、兩上肢、左踝關節部火傷(重傷)

同 剃 夫 野 口 伊 八 (二二六)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬遭難ノ際負傷シテ海ニ投シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ(一)頭部ニ第三度ノ火傷アリ黒色痂皮ヲ以テ被ハレ頭被ハ汎ク發炎ス(二)顔面ハ前額ノ髮際ヨリ兩耳後側及ヒ下顎下部ニ至ル迄表皮剝脫シ睫毛及ヒ眉毛ハ燃焼シ眼瞼結膜著シク充血スルモ眼球ニ異狀ヲ認メス(三)上肢ハ左右共前膊下三分一ヨリ以下一般ニ第二度乃至第三度ノ火傷ヲ負ヒ殊ニ右手背手指背面前膊下部ノ後面ニハ硬固ナル靱革様黒褐色痂皮ヲ衣シ處々溢血アリ(四)其ノ他頸部ヲ周圍スル帶狀ノ第二度火傷アルモ甚タ輕度ナリ又左足關節外踝ノ直下部ニ鵝卵大ノ第二度熱傷アリ疼痛甚シ、仍テ適應加療ヲ施シ十六日臺南丸ヨリ病院船神

戸丸ニ送院シ十九日佐世保海軍病院ニ入院ス當時體溫三十八度八分時々譫語ヲ發シ夜間安眠
セス精神不安ニシテ屢辭ヲ離レ室内ヲ徘徊シ縋帶ハ濃膿ヲ以テ潤サレ綠色ニシテ甚シキ臭氣
アリ頭被ヲ按壓スルニ多量ノ膿汁ヲ湧出スルヲ以テ一日二回縋帶ヲ更換ス五月二十四日排膿
頓ニ減少シ精神朦朧トナリ肺水腫ヲ發シ血液中ノ白血球甚シク増加シ心音幽微トナル二十七
日精神一旦明瞭トナリシモ暫クニシテ諸症増惡シ此ノ日午後五時死亡ス 經過日數十二日
(寫眞第百十
五號參照)

兩眼險火傷

軍艦初瀬乗組

剃夫 蒲原七太郎(二三六)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際龍田ニ收容セララル、之ヲ診スルニ兩眼
險ノ皮膚微ニ發赤腫脹シ知覺過敏ナリ、十六日臺南九ヨリ病院船神戶丸ニ送院シ十九日佐世保
海軍病院ニ轉院シ加療ノ末五月二十八日全治退院ス 經過日數十三日

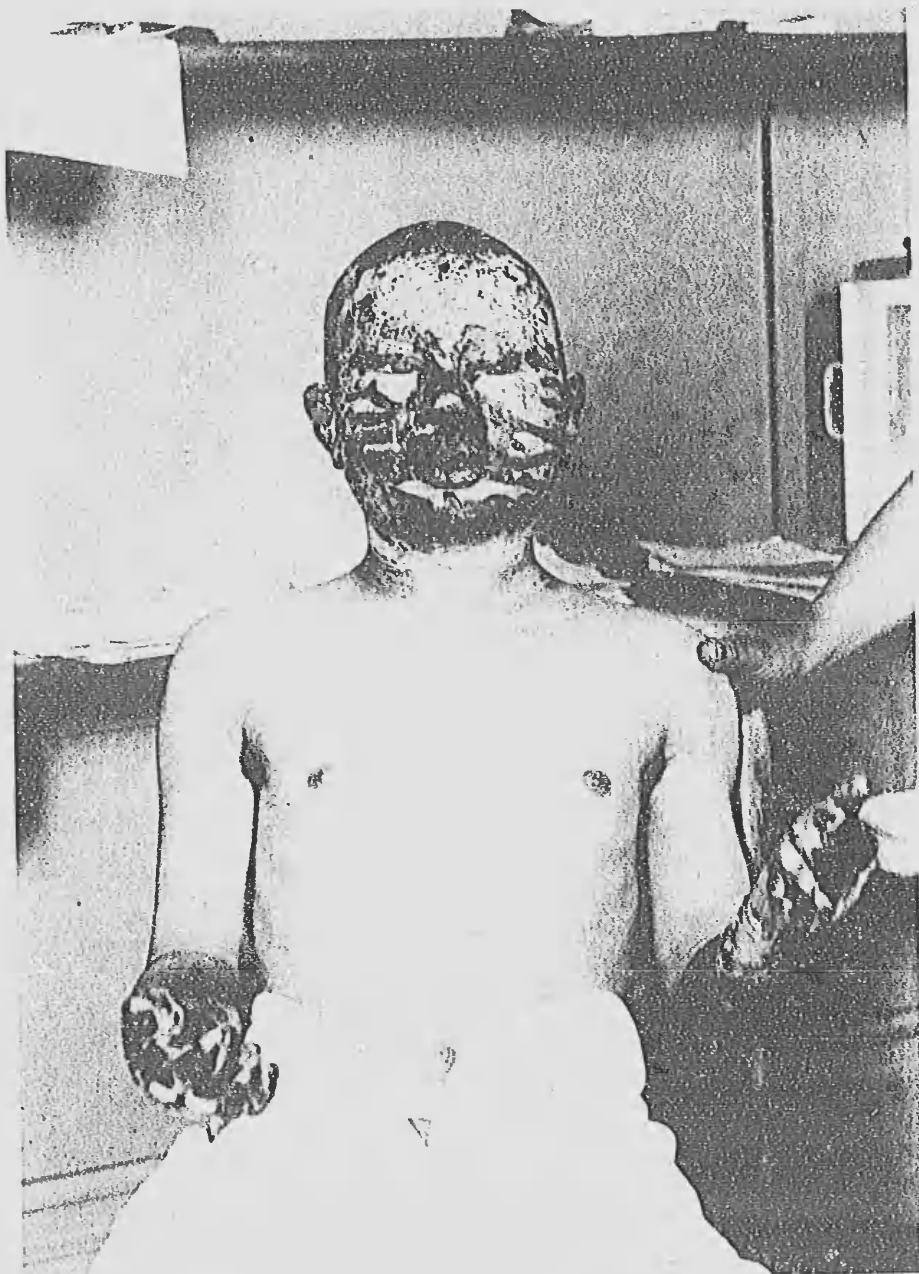
(ロ) 吳海軍病院入院者

軍艦初瀬乗組

海軍一等兵曹

古賀 儀正(一二七)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際上甲板ニ於テ左舷前部砲臺巡視中午後零時三十四分第
二ノ爆發ニヨリ胸部ヲ或物體ニ打撃セラレテ笠置ニ收容セララル、之ヲ診スルニ胸部ニ他覺的變
化ヲ認メサルモ疼痛アリ體動及ヒ呼吸ニヨリ増劇ス翌十六日軍艦富士ニ移乗シ「カンフル」丁幾



(115)

シ塗布ス十七日胸部ノ疼痛増劇スルヲ以テ病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院
ス六月三日ニ至リ胸痛治スト雖モ第二期梅毒ノ徵候ヲ發シ全身水脈腺腫脹ス其ノ他頭痛眩暈
アリ高聲ノ談話ヲ錯聽スルモ緩調ナル呬語ヲ解スルコトヲ得右耳ノ骨導減少シ六月二十七日
第二期梅毒ニ轉病ス(轉病後モ頭痛耳鳴アリ夜間安眠セス輕快退院ス) 經過日數四十三日

右小趾擦過傷 腰部挫傷

同 海軍一等信號兵曹 山内 勇 吉(一二八)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際前艦橋ニ在リテ信號ニ從事中午後零時三十四分第二ノ
爆發ニ由リ負傷シ海中ニ飛込ミ笠置ニ收容セラル之ヲ診スルニ右小趾背面第一、第二趾骨間關
節ヨリ第五蹠骨中央部ニ達スル長サ三、五仙迷幅二仙迷ノ擦過傷アリ深サ皮膚ニ止ル又腰部ニ
疼痛アルモ他覺的變狀ヲ認メス仍テ制腐糊帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移乘シ十七日病院船西京
丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス當時前記ノ諸傷ハ既ニ治癒シ左足踵ニ疼痛アリ右第
二趾爪甲ヲ剝離セルモ入院後ノ損傷ニ係ル六月二十一日全治退院ス 經過日數三十七日

臀部擦過傷

同 海軍二等兵曹 前田 三之助(一二九)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラル之ヲ診スル
ニ左臀部ノ内側ニ小指頭大ノ擦過傷アリ疼痛微ナリ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘ス防
腐糊帶ヲ施シ十八日病院船西京丸ニ送院シ十八日吳海軍病院ニ轉院ス當時左臀部ニ長サ一、五

胸部挫傷

仙迷ノ肉芽面アリ微ニ膿汁ヲ排ス加療ニヨリ六月二十一日全治退院ス

經過日數三十七日

軍艦初瀬乗組 海軍二等兵曹

松永圓次郎(一三〇)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬爆沈ノ際負傷シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左前胸下部ニ疼痛アリ時々咳嗽ヲ發シ血痰ヲ咯出スルモ胸部ニ他覺的徵候ヲ認メス、仍テ「カシフル」丁機ヲ塗布シ安靜ヲ命シ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ十八日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、入院後二三日ニシテ咯血止ム其ノ他異常ナシ六月十三日全治退院ス 經過日數二十九日

前額、兩下腿火傷

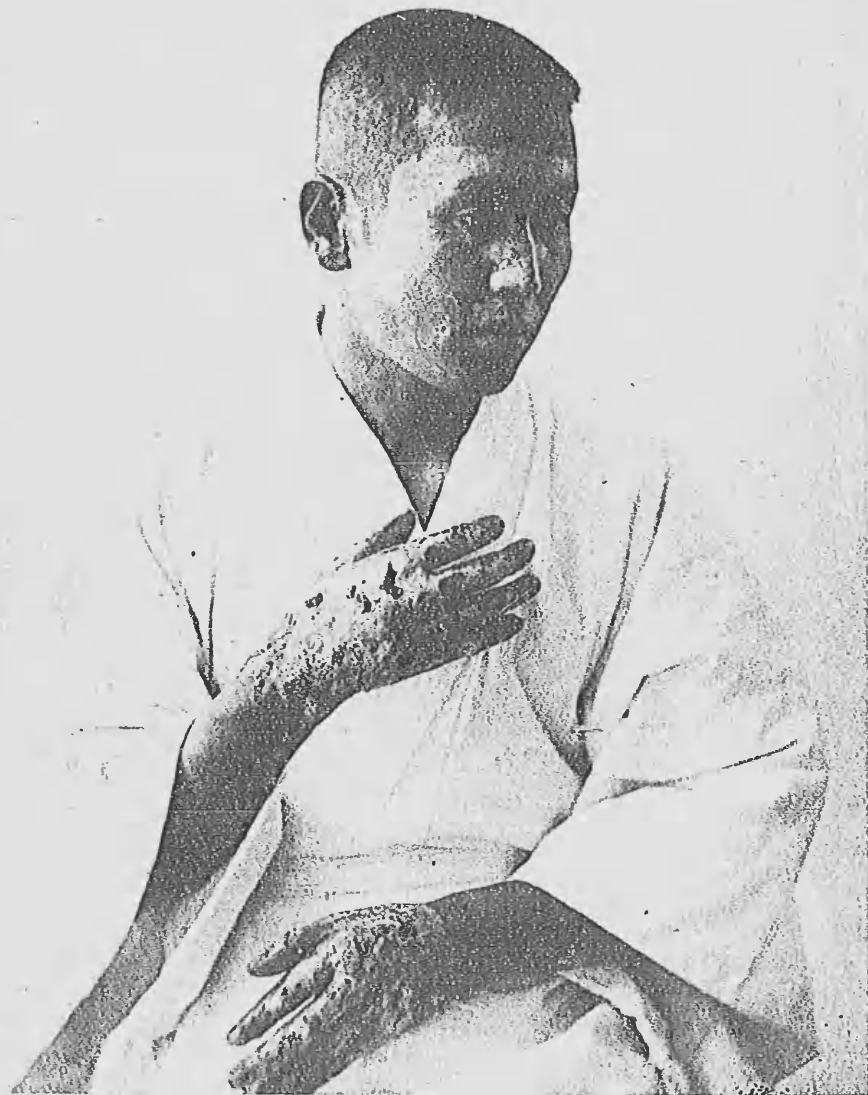
同

海軍一等水兵

加藤 宗 二(一三三)

明治三十七年五月十五日午後零時三十四分初瀬遭難ノ際負傷シ海ニ投シ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ前額右側ニ第二度ノ火傷アリ水疱ヲ形成シ右下腿内側中三分ノ一及ヒ下三分ノ一部ニ第一度ノ火傷アリ又左下腿外側中三分ノ一部ニ第二度ノ火傷アリ、仍テ「ビクリン」酸繃紗ヲ貼シ繃帶ヲ施ス翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ十八日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時前額及ヒ右下腿ノ火傷面ハ全ク治癒シ左下腿ノモノハ數個ノ小指頭大潰瘍面ヲ殘ス加療ニヨリ六月二十五日全治退院ス 經過日數四十一日

顔面、兩手背部火傷



(116)

同 海軍一等信號兵 大 山 國 松 (一三三)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際後艦橋ニ立テ笠置ニ向テ手旗信號中午後零時三十四分第二ノ爆發ニ由リ負傷シテ海中ニ墜落シ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ顔面ハ一般ニ第一度ノ火傷ヲ蒙リ左右腕關節ヨリ總指尖端ニ達スル第二度ノ火傷アリ水疱ヲ形成シ一部表皮剝離シテ眞皮ヲ露出ス、依テ手背ニ次硝酸蒼鉛軟膏ヲ貼シ顔面ニ「ビクリン」酸水ヲ塗布シテ翌十六日富士ニ移乗シ十七日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時顔面ハ色素ヲ貽シテ大半治癒シ左右手背面ニハ大豆大乃至梅實大ノ潰瘍面アリ次第ニ縮小シテ痕痕ヲ形成スルモ收縮ヲ來サス六月二十一日全治退院ス(寫眞第百十
六號參照) 經過日數三十七日

背部、左大腿挫傷

同 海軍一等機關兵 日永田爲次郎 (一三三)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際左舷上甲板中央煙突ノ側ニ在リテ石炭積入口ノ鐵蓋ヲ閉鎖セントスル瞬間午後零時三十四分第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ背部ニ劇痛アリ右肩胛棘部ニ手掌大ノ挫傷アリ又左大腿前面中央部ニ一ノ挫傷ヲ呈ス患者ハ胃部ノ苦悶ヲ訴フ蓋海水ノ嚥下ニ因ルナラン、依テ石炭酸水療法ヲ處シ翌十六日富士ニ移乗ス此ノ日背部ノ疼痛殆ト消散セシモ少許ノ血痰ヲ咯出セリト云フ翌十七日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時挫傷ハ兩ナカラ治癒シ唯上體ヲ左方ニ屈スルニ當リ左脇胸ニ微痛ヲ發スルノミ六月十五日全治退院ス 經過日數三十一日

後頭部(二)左顙頂部挫創 左胸部挫傷(左胸膜炎) 右中環小指擦過傷(稍重傷)

九十

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 瀬戸山安平(二三四)

明治三十七年五月十五月初瀬遭難ノ際上甲板中部左舷煙突側ニ在ル端艇卸シ方ニ從事中午後零時三十四分第二ノ爆發ニ由リ圓材飛來シテ頭部及ヒ背部ヲ撲チ海中ニ投セラレ軍艦笠置ニ收容セラル同艦ニ於テ診スルニ後頭部ニ於テ三角縫合ノ左上方ニ沿ヒ左右顙頂骨ニ跨リ矢狀縫合ヲ横キレル長サ六仙迷ノ挫創アリ頭被ヲ破ルモ骨質ニ異狀ナク該創ト竝行シテ其ノ右下方ニ長サ三仙迷ノ挫創及ヒ左上方ニ長サ三仙迷ノ挫創アリ背部ニ於テハ左肩胛間部ヨリ左季肋線ニ達スル長サ二十六仙迷ノ線狀挫傷アリテ周圍汎ク腫脹シ且皮下ニ氣腫ヲ觸レ疼痛甚シ(但「エツキス」光線前後ニ同ノ檢シ其ノ他右中環小指第一節背面ニ擦過傷ヲ認ム依テ挫創ヲ縫合シ)背部ニ絆創膏ヲ貼シ安ホセシニ午後四時頃ニ至リ背部ノ腫脹著シク加ハリ疼痛甚シク呼吸不利アリ脈搏百三十至ヲ算シ著シキ摩擦音ヲ聴取ス夜ニ入リ譫語ヲ喃々シ安眠セス體溫三八度二分ヲ示ス十六日ヨリ咳嗽頻發血痰ヲ咯出シ(後チ同入ノ譫語アリタリトハ)左肩胛下部ニ水泡音ヲ聴取ス十七日病院船西京丸ニ送院ス當時顔面蒼白苦惱ノ狀アリ左背部及ヒ同季肋部ニ劇痛アリテ咳嗽ニ因リ増劇シ左胸ハ視診上稍膨大シ呼吸運動微弱ニシテ聲動減弱シ前面第五肋骨已下背面肩胛下角以下濁音ヲ呈シ濁音ノ上部ハ清朝ナル鼓音ヲ呈シ心臟濁音界モ亦全ク鼓音ニ變スルヲ認ム仍テ各創傷ニ對シ防腐的處置ヲ施シ左胸部ニ「メントール」水罌法ヲ處シ鎮痛藥ヲ投シ安靜ヲ命セシニ在船中ノ經過佳良ニシテ二十三日體溫常度ト爲リ呼吸及ヒ脈搏共

ニ殆ト常態ニ復シ二十七日左胸ノ鼓音面及ヒ背部ノ皮下氣腫モ亦全ク消散セリ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス同院ニ於テ診スルニ頭部ノ挫創ハ過半化膿ニ陥リ右諸指ノ擦過傷ハ已ニ治癒シ左胸前面第五肋骨以下背面肩胛下角部以下濁音ヲ呈シ摩擦音ヲ聴取ス爾來適應加療ニ依リ六月二十二日ニ至リ胸部濁音面消失シ頭部挫創ハ肉芽ヨリ漸々痕痕ニ移行シテ六月二十九日治癒シ七月二日全治退院ス 經過日數四十八日

顔面、兩手背火傷

同 海軍二等機關兵 鐵井熊藏(二三五)

明治三十七年五月十五月初瀬遭難ノ際汽罐室階梯ノ中段ニ在リテ「ビスケット」ヲ汽罐室ヘ運搬中午後零時三十四分第二ノ爆發ニ由リ負傷シ海中ニ投シ笠置ニ收容セラル之ヲ診スルニ顔面全部ヨリ頸部ニ亙リ汎ク第二度ノ熱傷ヲ蒙リ水疱ヲ形成シ處々ニ表皮剝離シテ眞皮ヲ露出ス左右手背モ亦第二度ノ熱傷ヲ負ヒ特ニ右手背ハ表皮殆ト全ク剝離ス依テ水疱ヲ穿破シテ「ピ」リン酸水ヲ塗布シ繃帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移乘シ十七日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス當時火傷面殆ト乾燥シテ前額部及ヒ右手背ニ數個ノ蠶豆大乃至小指頭大ノ潰瘍面ヲ殘存スルノミ加療ニ依リ六月二十八日全治退院ス 經過日數四十四日

下唇挫創 頭部挫傷 右小指挫創

同 海軍三等主廚 小島吉五郎(二三六)

明治三十七年五月十五月初瀬遭難ノ際最下甲板倉庫ヨリ上甲板ニ「ビスケット」ヲ運搬ニ從事中

第二ノ爆發ニヨリ海中ニ卷キ込マレ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ下唇中央ニ直徑一、五仙迷ノ二個ノ挫創アリテ口腔粘膜ノ之ニ對スル部ニ二仙迷ノ裂創ヲ認ム其ノ他右顙頂部後頭部及ヒ右第五指背面ニ各拇指頭大ノ挫傷アリ、依テ鹽剝水ヲ含嗽セシメ下唇中央ノ創ニハ制腐綑帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移サレ十七日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時挫傷ハ既ニ全ク治癒シ挫創ニハ小硬結ヲ認ムルノミ加療ニヨリ六月十八日全治退院ス 經過日數三十四日

左下腿挫創

同

海軍四等水兵

北川 末喜(一三七)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際前艦橋ニ在リテ信號ニ從事中午後零時三十四分第二ノ爆發ニ遇ヒ海中ニ飛込ミ救助艇ニヨリ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ左下腿外側下三分ノ一部汎ク腫脹シ其ノ中央ニ蠶豆大ノ挫創アリ深サ皮下ニ達ス、依テ制腐綑帶ヲ施シ翌十六日軍艦富士ニ移シ十七日病院船西京丸ニ送院シ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス當時創面已ニ大豆大ニ縮小シ周圍ニ小硬結ヲ殘シ加療ニ依リ六月二十九日全治退院ス 經過日數四十五日

顔面、頸部火傷

同

海軍四等水兵

福島 武二(一三八)

明治三十七年五月十五日初瀬遭難ノ際上甲板ニ在リテメンデリックノ用意中第二ノ爆發ニ遇ヒ負傷シ海中ニ卷キ込マレ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右顔面及ヒ同頸部ニ第二度ノ火傷

ヲ負ヒ水泡ヲ形成ス依テ「ピクリン」酸水ヲ塗布シ綑帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移サレ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時火傷面ノ多部ハ已ニ乾涸シ唯右頰、右耳輪及ヒ下顎部ニ糜爛面ヲ遺シ分泌アリ濕疹狀ヲ呈セシモ加療ニヨリ六月二十日全治退院ス 經過日數三十六日

(ハ) 西京丸ニ入院治療シタル者

右膝關節部挫傷 左耳翼部火傷 左環小指擦過傷 胸部挫傷

軍艦初瀬乗組

海軍中軍醫

布 上 堯 一(一三九)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回水雷爆發後甲板砲塔右舷側ニ於テ救急治療品ノ準備等ヲ指揮セル際第二回ノ爆發ニヨリ負傷シ海中ニ投シ救助艇ニ救ハレ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右膝部一般ニ腫脹シ殊ニ其ノ内側部ニ著シク皮膚ニ變色ナキモ疼痛ノ爲メ歩行稍困難ナリ又左耳翼ヨリ下顎部ニ互リ第一度ノ火傷ヲ呈シ頭髮眉毛焦ケテ卷縮シ右胸前後腋窩線間第五乃至第七肋骨部ニ對シ深呼吸ノ際疼痛ヲ發ス、爆發當時失神セシモ物體ノ衝觸セルアルニヨリ須臾ニシテ醒覺シ自ラ海中ニ投シタルモ敢テ寒冷ヲ覺エス又創處ノ疼痛ヲモ感セサリキ救助艇ニ收容ノ際ハ殆ト人事不省ノ状態ニシテ笠置ニ到ル迄ニ數回ノ嘔吐ヲ爲セリ(嘔吐ハ腦記憶)笠置ニ收容ノ際同艦軍醫官ノ記スル所ニ據レハ面色蒼白、脈搏細微ニシテ精神朦朧タリ依テ興奮劑ヲ投シテ右膝部ニ石炭酸水濕法ヲ施シ火傷ニ「ピクリン」酸水ヲ塗布シ靜臥セシムト翌十六日富士ニ移サル夜來神身不安諸種ノ音響若クハ微細ノ震動ニヨリ驚愕シ易ク頭痛劇甚ニ

シテ食欲ハ殆ト全ク缺如シ煩渴引飲終夜熟睡セサリシモ翌朝ニ至リ以上ノ諸症輕快ス但胸背部ニ疼痛ヲ發シ呼吸及ヒ體動ニヨリ増劇ス依テ富士軍醫官ノ診ヲ受ケシニ他覺的著變ナシ尙前記諸創ノ外左環小指ニ小擦過傷アルヲ發見セリ十七日病院船西京丸ニ入院ス爾來療養セシニ二十日ニ至リ右膝部ノ腫脹殆ト消散シ疼痛モ亦大ニ緩解シ歩行ニ障礙ナキニ至リ火傷ハ已ニ治ニ就キ胸背部ノ疼痛モ緩解シ擦過傷モ亦結痂ス只著シキ神身ノ疲憊不安及ヒ食欲不振ヲ貽スノミナルヲ以テ此ノ日全治退院ス 經過日數五日內在院日數三日

顔面、右手背部火傷 鼻梁部挫創

軍艦初瀬乗組 海軍上等兵曹 瀧本 兎 一(二四〇)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回罹災ノ後後甲板砲塔右舷側通過ノ際第二ノ水雷爆發ニヨリ負傷シ海中ニ投シ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右前額ヨリ頰部ヲ經テ頸部ニ達スル第一度ノ火傷アリ發赤灼熱セル皮膚面ニ點々撒布セル火藥渣粒ノ移入創アリ顔面左半部ニモ亦數多ノ斑點ヲ認ム右手背ニモ同度ノ火傷アリ其ノ他鼻梁ノ中央ニ長サ一、五仙迷ノ挫創ヲ存ス、仍テ「ピクリン」酸水ヲ塗布シ挫創ニ制腐綱帶ヲ裝フ、翌十六日富士ニ移乘シ十七日病院船西京丸ニ送院セラル、二十日輕快退院シ福岡丸ニ歸船ス、當時前記ノ諸傷殆ト治ニ就クモ鼻梁ノ中央ニ長サ約一、五仙迷縱位ノ挫創アリ已ニ結痂シ二十一日一旦全治シタルモ其ノ後約十日ヲ經テ痂下ニ著膿シ周圍發炎スルヲ以テ結痂ヲ除去シテ之ヲ檢スルニ創内異物ノ存在スルヲ認ム依テ之ヲ抽出セシニ約八密迷ノ菲薄ナル小鐵片ニシテ其ノ表面ニハ「ラジン」(其)ノ附著スルヲ認メタリ

抽出後六月三日頃ニ至リ痂下癒合ヲ以テ全治ス 經過日數十九日內在院日數三日

右示指中指火傷 左下腿擦過傷

同 海軍一等水兵 松本 幸 吉(二四二)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後右舷側前部彈藥通路ニ在リテ「ビスケット」揚ケ方ニ從事中第二ノ爆發ニヨリ負傷シ海中ニ捲込マレ、龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右示指及ヒ中指ノ第二節掌面ニ各一個ノ大豆大ノ火傷アリ水泡ヲ形成ス同側環指末節掌面ニ小指頭大ノ皮膚剝脫部アリ又左下腿前面中央ニ小擦過傷ヲ存ス疼痛微ナリ依テ水泡ヲ穿破シ防腐綱帶ヲ施ス翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ十八日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日退院歸船ス、再需診スルニ傷面已ニ乾燥シ外觀上著變ナキモ疼痛アリ火傷モ亦殆ト乾燥ス依テ同船内ニ於テ加療セシニ二十三日全治ス 經過日數八日內在院日數二日

右膝關節部挫傷

同 海軍一等看護 中村 軍 治(二四三)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後後甲板砲塔右舷側ニ在リテ休業患者看護ノ際第二ノ爆發ニ依リ甲板上ニ倒レテ負傷シ海中ニ投シ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右膝關節内上方著シク腫起發赤シ疼痛アリ歩行困難ナリ依テ石炭酸水罌法ヲ施シ翌十六日富士ニ移サレ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日全治退院ス 經過日數五日內在院日數三日

左上膊挫傷

章第八 第二節 第二目 軍艦初瀬 九十五

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 森川 多吉(一四三)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後甲板砲塔左舷側ニ在リテ被曳船用意ノ爲メ「ワイヤー」前甲板ニ搬送スルノ際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ吹飛ハサレ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ左上膊外側ニ於テ其ノ中央部ヨリ肘關節ニ互ル挫傷アリ表皮ノ一部剝離シ疼痛アリ、依テ石炭酸水罌法ヲ施シ翌十六日富士ニ移リ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日全治退院ス 経過日數五日内在院日數三日

左環指挫創 左中指擦過傷

同 海軍二等水兵 山中三四郎(一四四)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回罹災後前甲板右舷側ニ在リテ被曳船作業ニ從事中第二回ノ爆發ニ遭ヒ艦ト共ニ沈ミ軍艦笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ左環指爪節ニ小挫創アリ皮下ニ達シ左中指末節ニモ小擦過創ヲ認ム、依テ制腐繃帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移リ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日輕快退院シ福岡丸ニ乗船ス、爾來該船内ニ於テ加療ヒシニ二十三日痂下癒合ヲ以テ全治ス 受療日數八日内在院日數三日

左上膊、右下腿挫傷

同 海軍二等水兵 鈴置市郎(一四五)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回罹災後右舷「ボートデッキ」ニ在リ「ランチ」ヲ卸シ終リ「メンドリック」ヲ收メル際第二ノ爆發ニヨリ海中ニ捲込マレ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ左上膊中

央及ヒ右下腿中央ニ挫傷ヲ負ヒ共ニ方五仙迷ノ溢血部アリ、依テ石炭酸水罌法ヲ施シ翌十六日富士ニ移乘シ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日全治退院ス 経過日數五日内在院日數三日

右前膊擦過傷

同 海軍二等水兵 小山己之助(一四六)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回罹災後前甲板右舷側ニ在リテ被曳船作業ニ從事中第二ノ爆發ニ依リ負傷シ海中ニ飛込ミ笠置ニ收容セラル、之ヲ診スルニ右前膊中央尺骨側ニ於テ二條ノ線狀擦過傷アリ共ニ長サ五仙迷幅一仙迷ヲ算ス、依テ制腐繃帶ヲ施シ翌十六日富士ニ移乘シ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日全治退院ス 経過日數五日内在院日數三日

前額、左耳翼、右手背火傷

同 海軍二等水兵 志々目宗市(一四七)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回罹災後上甲板後部右舷五番「ケースメート」ノ前方ニ在リテ「メンドリック」收メ方ニ從事中第二ノ爆發ニヨリ負傷シ海中ニ投シ龍田ニ收容セラル、之ヲ診スルニ前額中央髮際部ニ五厘銅貨大類圓形ノ二度火傷アリ眞皮ヲ露出ス左耳翼全面ニ第一度ノ火傷ヲ蒙リ頭髮焦ケテ卷縮ス又右手背小指側中央ニ二度ノ火傷アリ水泡ヲ形成シ疼痛微ナリ依テ各傷ニ「ビクリン」酸綿紗ヲ貼シ繃帶ヲ施シ翌十六日臺南丸ニ移リ更ニ福岡丸ニ移乘シ十八日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日輕快退院シ福岡丸ニ乗船ス、當時傷況佳良ナリ二十三

日全治ス 經過日數八日內在院日數三日

左中示指前額部火傷 右膝部挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 久保田虎太郎(二四八)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後上甲板後部揚艇機ノ傍ニ在リテ「メンデリック」收メ方ニ從事中第二回ノ爆發ニヨリ負傷シ海中ニ捲込マレ龍田ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左中指第一節ノ背側ニ小指頭大、同示指第一節背側ニ大豆大左前額部ニ拇指頭大ノ各一個ノ二度火傷アリ何レモ水疱ヲ形成ス右膝部ハ他覺的著變ナキモ疼痛竝ニ壓痛アリ、依テ火傷ニ「ビクリン」酸綿紗ヲ貼シ綑帶ヲ施シ挫傷ニ「カンフル」丁幾ヲ塗布ス翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ十八日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日輕快退院シ福岡丸ニ乗船ス、當時火傷ハ已ニ治シ右膝部ノ疼痛モ亦大ニ緩解セリ依テ船内ニ於テ加療セシニ二十三日全治ス 經過日數八日內在院日數三日

左足跗關節捻挫

同 海軍二等機關兵 前田 鶴次(二四九)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後後部艦室當直勤務ヲ終リ左舷上甲板前部ノ兵員便所ニ入り便所ヲ出テシ瞬間第二ノ爆發ニ遇ヒ海中ニ投シ笠置ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左足關節少シク腫脹シ運動時關節ノ前側及ヒ跟骨部ニ疼痛ヲ感シ歩行困難ナリ、依テ石炭酸水器ヲ施シ翌十六日富士ニ移サレ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日輕快退院シ福岡丸ニ

乗船ス當時患部ハ外觀上異狀ナキモ尙疼痛ヲ存シ歩行稍障礙セラレ、依テ引續キ加療セシニ疼痛日ヲ追ヒ緩解シ二十四日全治ス 經過日數九日內在院日數三日

左膝關節挫傷 左下腿部擦過傷

同 海軍二等機關兵 松本安次郎(二五〇)

明治三十七年五月十五日初瀬第一回ノ罹災後上甲板ヨリ艦室ニ下ランカ爲メ中甲板前部左舷ニ至リシ際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ笠置ニ收容セラレ、之ヲ診スルニ左膝蓋上部少シク腫脹シ屈伸時疼痛アリ爲メニ歩行障礙セラレ又左下腿ニ小擦過傷アリ、依テ左膝部ニ石炭酸水器ヲ施シ翌十六日富士ニ移サレ十七日病院船西京丸ニ送院セラレ二十日全治退院ス 經過日數五日內在院日數三日

(ニ) 入院ヲ要セス治癒シタル者

右下腿挫創 同部擦過傷

軍艦初瀬艦長 海軍大佐 中 尾 雄(二五一)

初瀬爆沈ノ際前艦橋ニアリ負傷ス(原因不明)右脛骨前面上三分ノ一部ニ大豆大ノ二個ノ挫創アリ深サ皮下ニ達シ又同外側上三分ノ一部ニ小擦過傷アリ、軍艦龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ二十二日全治ス 受療日數七日輕休業ナシ

左前脛部、左足背擦過傷

軍艦初瀬航海長 海軍中佐 千阪智次郎(二五二)

初瀬爆沈ノ際前艦橋右舷側ニ在リテ艦ノ操縦及ヒ曳索用意ヲ指揮セシカ艦ト共ニ沈没シ龍田ニ收容セラル、左前脛部ニ小兒手拳大ノ擦過傷一個、左足背中央及ヒ左足外踝ノ後方ニ拇指頭大ノ各一個ノ擦過傷アリ疼痛輕微ナリ、翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐綱帶ヲ施シ、ニ二十三日全治ス 受療日數八日輕休業ナシ

左前膊部火傷

軍艦初瀬水雷長 海軍少佐 小林惠吉郎(二五三)

初瀬遭難ノ際後艦橋左舷端、ハンモックノ上ニ乗リ「ラン」チ卸シ方ヲ指揮シ終リシ際爆沈ト共ニ負傷ス、左前膊屈側ノ下端ニ於テ腕關節部ニ近ク二個ノ小指頭大火傷アリ水泡ヲ形成シ周圍ノ皮膚ハ少シク潮紅ス、軍艦龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ「ピクリン酸」水ノ濕布ヲ貼セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

背部擦過傷(業)

軍艦初瀬乗組 海軍少尉 中村熊三(二五四)

初瀬遭難ノ際下甲板ニ於テ「ポンプ」ノ監督ヲ了リ後甲板士官室ハ「チ」ヲ出テシ瞬間第二ノ爆發ニ遭ヒ海ニ投シ浮流セル木片ニ因リ負傷ス、左肩胛間部ニ五十錢銀貨大ノ擦過傷アリ、龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐綱帶ヲ施シ、ニ十八日全治ス 受療日數三日輕休業ナシ

左右鼓膜裂創(業)

同 海軍兵曹長 上野直吉(二五五)

初瀬沈没ノ際海中ニ捲込マレ一二回洞中ニ浮沈シ劇シキ水壓ヲ受ケタル爲メ左右兩耳ニ負傷シ耳内壅塞ノ感アリシモ放任セシニ爾來聽力回復セサルヲ以テ三十八年四月五日佐世保海兵團ニ於テ之ヲ診スルニ兩鼓膜ニ米粒大ノ穿孔アリ左側ニハ中耳炎ヲ併存ス、加療ニ依リ五月十五日輕快セルヲ以テ止療トス 經過日數三百六十五日受療日數四十日輕休業ナシ

前頭部挫創 同部擦過傷

同 海軍上等筆記 齋丸雄藏(二五六)

初瀬第一回罹災後上甲板中部右舷側ニ在リテ臨時糧食ヲ配給セル際第二ノ爆發ニヨリ顛倒シ近傍ニアリシ或物體ニ衝突シテ負傷ス前頭部中央ニ長サ約一仙迷ノ縦位ノ挫創アリ深サ皮下組織ニ達ス又左前頭部ニ一個ノ小擦過傷アリ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右足蹠刺創

同 海軍一等兵曹 水川熊吉(二五七)

初瀬第一回罹災後上甲板前部砲塔右舷側ニ在リテ被曳船作業ニ従事ノ際第二ノ爆發ニ遇ヒ負傷シテ海中ニ投ス(受傷ノ原因物ハ)右足蹠中央部ニ小豆大ノ刺創アリ深サ皮下組織ニ止ル龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ絆創膏ヲ貼セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

左大腿挫傷(業)

軍艦初瀬乗組 海軍一等機関兵曹 藤山新吾(二五八)
初瀬第一回罹災後機室ヨリ上甲板右舷中央ニ至リ「ビスケット」ヲ運ハントスルヤ第二ノ爆發ニ
遇ヒ海中ニ投ヌルノ際舷側ニ撞突セテ負傷ス、左大腿外側上三分ノ一部ニ拳大ノ挫傷アリ、疼痛
ヲ伴フ、龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ樟腦精ヲ塗布セシニ十八日全
治ス 受療日數三日輕休業ナシ

左中環指擦過創

同 海軍一等兵曹 木村六治郎(二五九)
初瀬第一回罹災後上甲板前部左舷二番ゲースメートニ在リテ石炭庫ノ防水扉閉鎖ニ從事セル
際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投レ負傷ス(受傷ノ原 因不詳)左中指小指側第三節中央ニ不正橢圓形ノ擦過
創アリ又同環指第一節掌面ノ中央ニ小指頭大不正紡錘形ノ擦過創アリ何レモ深サ皮下ニ止ル、
笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ十九日全治ス 受療日數四
日輕休業ナシ

胸部挫傷

同 海軍一等看護手 安田幸太郎(二六〇)
初瀬第一回罹災後機室ニ在リテ緊要書類ノ殘レルモノナキヤヲ點檢セル際第二ノ爆發ニ遭ヒ
海中ニ投レ負傷ス(原因不明)前胸上部一般ニ疼痛及ヒ壓痛アリ他覺的ニハ著變ヲ認メス龍田ニ收容

セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ樟腦精ヲ塗布セシニ二十三日全治ス 受療日
數八日輕休業ナシ

左下腿挫傷

同 海軍二等兵曹 柚木 伸 助(二六一)
初瀬第一回罹災後後甲板ニ於テ士官室左舷スカイライイトノ防水ニ從事中第二ノ爆發ニ遇ヒ卒
倒ノ際甲板ニ衝突シ(負傷ス、左下腿外側上方ニ小豆大二三ノ皮下溢血ヲ見ルノ外著變ナキモ
疼痛アリ、龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ樟腦精ヲ塗布セシニ十九日
全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右下腿擦過傷 右膝關節部挫傷

同 海軍二等兵曹 澄井 豐 藏(二六二)
初瀬第一回罹災後右舷ボートデッキ五番十二斤砲前方ニ在リ「ラン」チ卸シ方了リテ「デリック」ヲ
收メントスル際第二ノ爆發ニ遇ヒ負傷ス(受傷ノ原因物ハ)右膝關節部少シ腫脹シ膝蓋ノ内下
方ニ拇指頭大ノ擦過傷アリ又前脛部下端ニ拇指頭大ノ淺キ擦過傷アリ龍田ニ收容セラレ翌十
六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十三日全治ス 受療日數八日輕休
業ナシ

左顙頂部挫傷

同 海軍二等兵曹 森 太兵衛(二六三)

初瀬第一回罹災後前甲板ニ在リテ被曳船作業ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(原ハ詳ナ)左頤頂部中央ニ長サ〇五仙迷ノ挫創アリ深サ皮下組織ニ達シ出血及ヒ疼痛少シ笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ絆創膏ヲ貼シ十七日福岡丸ニ移乗シ二十三日全治ス 受療日數八日輕休業ナシ

鼻梁部擦過傷

初瀬乗組 海軍二等兵曹 三 枡多治郎(二六四)

初瀬第一回罹災後前部「フアンネルケーシング」ノ傍ニ在リテ傳令ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(因不明)鼻梁中央部ニ小豆大ノ擦過傷アリ疼痛微ナリ笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ加療セシニ二十日全治ス 受療日數五日輕休業ナシ

右肩胛部擦過傷

同 海軍二等筆記 清 藤 直 衛(二六五)

初瀬第一回罹災後前部「シュルターデッキ」ニ在リテ緊要書類ヲ保護セル際第二ノ爆發ニヨリ負傷ス右肩胛部外上方ニ廣サ兒掌大ノ擦過傷アリ疼痛微ナリ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右中指挫創

同 海軍三等兵曹 本 山 助 次 郎(二六六)

初瀬第一回罹災後上甲板前部右舷側ニ在リテ彈藥昇降口ヨリ「ビスケット」引上ケニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ海ニ投シ直ニ「ピンネース」ニ泳キ著キ笠置ニ收容セラル(因ハ不明)右中指末節ノ小指側ニ小豆大ノ挫創アリ創縁ノ挫滅著シカラス翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十三日全治ス 受療日數八日輕休業ナシ

左右季肋部挫傷

同 海軍三等兵曹 中 熊 萬 平(二六七)

初瀬第一回罹災後「ホックスル」ニ在リテ被曳船作業ニ從ヒシ際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ「チエインパイプ」ノ蓋ニ衝突シ(負傷ス)左右季肋部ニ疼痛及ヒ壓痛アリ深呼吸ニヨリ増劇ス他覺的著變ヲ認メス笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ胸部ニ「カンフル」丁幾ヲ塗布シ十七日福岡丸ニ移乗シ二十日全治ス 受療日數五日輕休業ナシ

顔面火傷

同 海軍一等水兵 二 間 瀬 小 吉(二六八)

初瀬第一回罹災後左舷後部端舟甲板ニ在リテ「デリツグガイ」ニ就ケル際第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷ス顔面處々ニ鵝卵大乃至拇指頭大ノ第一度火傷アリ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ「ワセリン」ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右腰部挫傷

同 海軍一等水兵 春 山 竹 熊(二六九)

初瀬第一回罹災後下甲板防水事業ヲ爲シ上甲板ニ上リ右舷中部ニ至レル際第二ノ爆發ニ遭ヒ共ノ場ニ倒レ或物體ニテ腰部ヲ打撲シ負傷ス右腰部ニ疼痛及ヒ壓痛アルモ他覺的變狀ヲ認メス龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ「カンフル」丁幾ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右下腿部挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍一等水兵 七 田 友 吉(二七〇)

初瀬第一回罹災後下甲板士官室内及ヒ右舷側ニ在リテ防水ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ將官給仕室後部ノ階梯ヨリ中甲板ニ出テ士官昇降口ヨリ上甲板ニ上リ海中ニ投シ負傷ス(原因ハ)右下腿外側上三分ノ一部ニ輕度ノ挫傷アリ笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乘シ患部ニ「カンフル」丁幾ヲ塗布セシニ十八日全治ス 受療日數三日輕休業ナシ

左大腿部挫傷

同 海軍一等水兵 寺澤桑三郎(二七二)

初瀬第一回罹災後左舷「ボートデッキ」前部ニ在リテ航海長ノ傳令ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(原因ハ)左大腿後面上方ノ一部少シク腫脹シ其ノ部ニ二三ノ小溢血ヲ呈シ疼痛及ヒ壓痛アリ笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日更ニ福岡丸ニ移乘シ石炭酸水療法ヲ施シ、ニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

胸部挫傷

同 海軍一等水兵 鈴木健之助(二七三)

初瀬第一回罹災後左舷「ボートデッキ」後部ニ在リテ「メンデリック」ヲ收ムル際第二ノ爆發ニ遭ヒ顛倒セル際甲板ニテ打撲シ(？)負傷ス右前胸部一般ニ疼痛及ヒ壓痛アルモ皮膚ニ變色ナシ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ「カンフル」丁幾ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

肛圍擦過傷(業)

同 海軍一等機關兵 庄村初太郎(二七三)

初瀬第一回罹災後揚鑪機室ニ在リテ事業中第二ノ爆發ニ遭ヒ中甲板ニ出テ第一「ハッチ」ヨリ上甲板ニ上リ右舷「アンカーベット」ヨリ海中ニ投スル際外舷ノ或突起物ニ觸レ負傷ス肛門ノ後方及ヒ左方ニ各一個ノ梅毒頭大擦過傷アリ疼痛輕微ナリ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ「硼酸軟膏」ヲ貼セシニ二十一日全治ス 受療日數六日輕休業ナシ

右大腿部挫傷

同 海軍二等水兵 末永庄作(二七四)

初瀬第一回罹災後左舷「ボートデッキ」後部ニ在リテ「メンデリック」ノ「ガイ」ニ就ケル際第二ノ爆發ニ遭ヒ卒倒シ或物體ニテ撞撃セラレ(？)負傷ス右大腿外側ニ他覺的著變ナキモ疼痛及ヒ壓痛アリ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乘シ患部ニ樟腦精ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右腸骨櫛部挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍二等水兵 多比良重一(二七五)

初瀬第一回罹災後下甲板前部「チェインロッカー」内ニ在リテ錨鎖繰出ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ上甲板ニ上リ海中ニ飛込ミ負傷ス(原因)右腸骨櫛部ニ輕度ノ腫脹アリ皮膚ノ潮紅ナク疼痛微弱ナリ笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ患部ニ樟腦精ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

兩肩胛部挫傷 左顙顳部擦過傷

同 海軍二等水兵 是則岩治(二七六)

初瀬第一回罹災後右舷後部「ボートデッキ」ニ在リテ「デリックガイ」ニ就ケル際第二ノ爆發ニ遭ヒ水中ニ投シ浮出ノ後笠置ニ收容セラル(兩肩胛部挫傷ハ顙顳部擦過ハ弱カ微細ノ破片ナラシ)左右肩胛部ニ疼痛ヲ訴フルモ外觀ニハ異狀ヲ認メス又左顙顳部ニ五厘銅貨大ノ擦過傷アリ疼痛微ナリ翌十六日軍艦富士ニ移リ十七日福岡丸ニ移乗シ肩胛部ニ沃度丁幾ヲ塗布シ左顙顳部ニ絆創膏ヲ貼セシニ二十一日全治ス 受療日數六日輕休業ナシ

右足背部挫創(業)

同 海軍二等水兵 内田時次郎(二七七)

初瀬第一回罹災後上甲板右舷後部揚艇機ノ傍ニ在リテ「ランチ」ヲ卸シ終リ「デリック」ヲ收メメントスル際第二ノ爆發ニ遭ヒ「ボートデッキ」ニ上リ「ダボット」ニテ打タレ(負傷ス)右足背ノ中央ニ小

ナル一個ノ挫創アリ出血及ヒ疼痛微ナリ笠置ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗ス創部ニ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十四日全治ス 受療日數九日輕休業ナシ

左前膊部挫傷

同 海軍二等機關兵 宮下幸吉(二七八)

初瀬第一回罹災後上甲板中央ニ在リテ前罐後部ノ上甲板ニ出ツル防水扉閉鎖ノ際第二ノ爆發ニヨリ負傷ス(負傷ノ原因ハ)左前膊尺骨側ニ疼痛及ヒ壓痛アルモ腫起變色ナシ龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ「カンフル」丁幾ヲ塗布セシニ十八日全治ス 受療日數三日輕休業ナシ

前額部火傷

同 海軍二等機關兵 永松達實(二七九)

初瀬第一回罹災後上甲板中部左舷側ニ在リテ揚艇器ヲ使用中第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷ス前額部中央ニ小指頭大ノ二度ノ火傷アリ水泡ヲ形成シ傷面皮膚少シク發赤ス龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ「ビクリン」酸綿紗ヲ貼セシニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

鼻梁部挫創(業)

同 海軍二等機關兵 吉柳 紇(二八〇)

初瀬第一回罹災後後甲板砲塔右舷側ニ避難シ居リシニ第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ捲込マレ負傷

ス(原因物ハ艦材)鼻樑ノ中央部ニ大豆大ノ挫創アリ深サ皮下結締織ニ達ス龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十四日全治ス 受療日數九日輕休業ナシ

左膝關節挫傷

軍艦初瀬乗組 海軍三等水兵 秋元長次郎(二八二)

初瀬第一回罹災後、ホトルマスト「ノロアト」ツブニ在リテ敵水雷ノ監視ニ從事中第二ノ爆發ニヨリ海中ニ捲込マレ負傷ス(受傷ノ原因物)左膝關節部一般ニ少シク腫脹シ膝蓋ノ内上方ニ於テ僅ニ皮下溢血ヲ呈シ疼痛及ヒ壓痛アリ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ石炭酸水罌法ヲ施シ、ニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

腰部擦過傷

同 海軍三等水兵 奥野守吉(二八三)

初瀬第一回罹災後右舷「ボートデッキ」後部ニ在リ「デリック」ガイニ就ケル際第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷ス、腰部ノ中央ニ五十錢銀貨大ノ淺キ擦過傷アリ疼痛甚シカラス龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ乾綿紗絆創膏ヲ貼セシニ二十一日全治ス 受療日數六日輕休業ナシ

右下腿挫傷 顙頂部火傷

同 海軍三等水兵 増田龜治郎(二八三)

初瀬第一回罹災後上甲板左舷中部ニ在リテ鋼索ヲ前甲板ニ運ハントスル際第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷ス、右前脛部中央ニ小指頭大ノ挫傷アリ又左顙頂部中央ニ拇指頭大ノ二度ノ火傷アリテ水疱ヲ形成ス龍田ニ收容セラレ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ挫傷ニ沃度丁幾熱傷ニ「ビクリン」酸水ヲ塗布セシニ二十三日全治ス 受療日數八日輕休業ナシ

左胸部挫傷

同 海軍三等水兵 宮内助三(二八四)

初瀬第一回罹災後前甲板砲塔右舷側ニ在リテ被曳船作業ニ從事セル際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(原因物ハ)左胸部ニ疼痛及ヒ壓痛アリ體動及ヒ深呼吸ニヨリ増劇スルモ他覺的變狀ヲ認メス、笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ胸部ニ「カンフル」丁幾ヲ塗布セシニ十九日全治ス 受療日數輕休業ナシ

左大腿挫傷

同 海軍三等水兵 若松末松(二八五)

初瀬第一回罹災後左舷端舟甲板ニ在リテ「デリック」ガイニ就ケル際午後零時三十四分第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(原因不明)左大腿外側ノ中央ニ輕度ノ腫脹アリ疼痛及ヒ壓痛アルモ歩行ニ障害ナシ、笠置ニ收容セラレ翌十六日富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ患部ニ石炭酸水ノ罌法ヲ施シ、ニ十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

胸部挫傷 左前膊擦過傷

軍艦初瀬乗組 海軍三等水兵 薄 彌 助(二八六)

初瀬第一回罹災後端舟甲板後部ニ在リテ「デリック」ガ「イ」ニ就ケル際午後零時三十四分第二ノ爆
 發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス(原因)前胸下部一般ニ疼痛アリ體動及ヒ深呼吸ニヨリ増劇スルモ他
 覺的著變ヲ認メス又左前膊後側下三分ノ一部ニ少擦過傷アリ軍艦笠置ニ收容セラレ翌十六日
 富士ニ移サレ十七日福岡丸ニ移乗シ胸部ニ「カシフル」丁幾ヲ塗布シ擦過傷ニ絆創膏ヲ貼セシニ
 十九日全治ス 受療日數四日輕休業ナシ

右前膊、右示指擦過創

同 海軍三等水兵 龜 田 圓 吉(二八七)

初瀬第一回罹災後上甲板後部ニ在リテ「デリック」收メ方ニ從事中第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷シ「ボ
 トデッキ」ニ上リ海中ニ投シ龍田ニ收容セラレ(受傷ノ原因物ハ)右前膊下端尺骨側ニ五厘銅貨大
 右示指第一節ノ背側ニ大豆大ノ各一個ノ擦過創アリ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ創
 部ニ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十三日全治ス 受療日數八日輕休業ナシ

前額部擦過傷

同 海軍四等水兵 宮 本 榮 三 郎(二八八)

初瀬第一回罹災後中甲板四區ヨリ「デ」ブルヲ後甲板ニ致サントシ上甲板中部揚艇機ノ傍ニ至
 リシ際第二ノ爆發ニ遭ヒ負傷ス(原因物ハ)前額部中央ニ拇指頭大ノ擦過傷アリ龍田ニ收容セラレ
 翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ二十二日全治ス 受療日數七日

輕休業ナシ

左下腿挫創

同 給 仕 宮 崎 末 人(二八九)

初瀬沈没ノ際副長ニ飲水ヲ致サン爲メ後艦橋ニ至レル際第二ノ爆發ニ遭ヒ海中ニ投シ負傷ス、
 (原因物ハ)左下腿前面下三分ノ一部ニ小豆大ノ挫創アリ深サ皮下組織ニ達ス龍田ニ收容セラ
 レ翌十六日臺南丸ヲ經テ福岡丸ニ移乗シ防腐繃帶ヲ施シ、ニ十九日全治ス 受療日數四日
 輕休業ナシ

軍艦初瀬遭難者收容顛末

軍艦笠置軍醫長 海軍軍醫少監 横 井 太 郎
同 乗組 海軍中軍醫 音 山 德 松

笠置ハ旅順港警戒ノ目的ヲ以テ初瀬、敷島、八島及ヒ龍田ト共ニ裏長山列島ノ根據地ヲ發シ五月十五日拂曉刻ヲ離レ
 テ單獨旅順ニ向ヒ港外ニ達シテ敵情ヲ偵察シ尙港口東南東沖ニ止リテ敵艦監視ノ任務ニ服セリ午前十一時十五分
 旗信アリ初瀬、八島敷設水雷ニ罹ルト依テ直ニ曳船準備及ヒ總端艇卸方等ニ著手シ、全速力ヲ以テ赴援ス時ニ二
 艦ハ老鐵山高角ヲ距ル約十二海里ノ洋中ニ在リ八島ハ其ノ西方ニ初瀬ハ其ノ東方ニ位置ス而テ初瀬ハ其ノ後部少ク
 沈ミ舵機破損シテ其ノ用ヲ爲サ、ルヲ以テ笠置ハ之ヲ曳航センカ爲メ午後零時十分初瀬ヨリ曳索ヲ「ブープ」ニ取込
 ミメリシニ同三十四分突然第二ノ大爆發ニ遇ヒ瞬時ニシテ沈没ノ悲惨ヲ來サントスルニ至レリ依テ直ニ救命浮標及
 ヒ木材ヲ投シ總端艇ヲ卸シテ之ヲ救助ニ赴カシメ本艦モ亦危險界ヲ脱センカ爲メ南方ニ航過セントスル時敵ノ驅逐
 艦逐次港外ニ現レ須臾ニシテ其ノ數十六隻ト爲リ我カ遭難艦船ヲ襲撃セントス此ノ時ニ當リ救助艇ハ未タ收容者ヲ
 載セテ歸來セス滿艦ノ將卒此ノ間ノ苦心憂悶察スルニ堪ヘタリ午後二時ニ至リ初瀬主計長藤野少監以下百二十四名

ヲ收容シ總端艇揚ケ方終ル頃敵驅逐艦益々猛進シ来リ二時十六分戰闘ノ令下ル距離六千五百乃至七千五百米突敵ハ我カ八尹砲ノ砲撃ヲ受ケ一進一退セシモ我カ第六戰隊ノ来ルニ會シ其ノ砲撃ニ由リ漸ク港口ニ向ヒ退却ス三時五十分打方ヲ止メ四時十分戰闘旗ヲ卸シ八島ヲ掩護シテ第三地點ニ向ヒ六時二十分八島艦長以下八十八名ヲ收容シ十六日午前七時旗艦千歳ニ合ス

天候 此ノ日天候晴ニシテ風波靜穩氣温正午六十二度乾濕ノ差四度氣壓三〇、一一海上淡キ濃氣アリ然レトモ甚シク展望ヲ害スルニ至ラス

治療所ノ設備 此ノ日午後零時四十五分戰時治療所ヲ設備シテ收容者ノ来ルヲ待チ收容人員多數ナルヘキヲ察シ士官室ニ負傷者ヲ收容シ兼テ之カ治療所ト爲シ水雷室ヲ健康者ノ收容所ニ定メタリ此ノ兩室ハ相鄰リテ容積比較的大ニ上甲板ヨリ第五「ハッチ」ノ一階梯ヲ經レハ直ニ此ノ處ニ通スルヲ得ヘシ依テ負傷者運搬員一名ヲ第五「ハッチ」ノ傍ニ置キ健康者負傷者ヲ按配シテ其ノ水雷室ニ入ルヘキヲ將士士官室ニ送ルヘキヲ指示セシム然レトモ遭難者ノ多クハ當時精神遲鈍ニシテ自己ノ負傷セルヲ覺知セス直ニ水雷室ニ入ルモノアリ或ハ身ニ損傷ナキモ負傷アル可キヲ想像シテ士官室ニ來ルモノアリ衣服ノ脱著創面ノ處置毛布ノ貸與等一時頗ル混雜ヲ極メタレトモ漸ク沈靜ニ歸シ後ニ至リ健康者ヲ總テ前部ノ兵員室ニ移轉セシメタリ

收容シタル初瀬人員

端	舟名	上長官	士官	准士官	下士以下	合計
「ビ」	ン	ネ	ー	ス		
第一	「カ」	ッ	タ	ー		
初瀬	「ビ」	ン	ネ	ー	ス	
		一	二	一	九一	九五
						一三
						一四
						一六

總計百二十四名他ノ「カ」及「ビ」傳馬船二隻ハ遭難者ヲ搭載シテ龍田ニ送致セリ

運搬法 遭難者ヲ搭載セル救助端艇及「ビ」傳馬船ヲ艦長室砲門下竝ニ第十九番砲側ニ漕キ寄せシメ此ヨリ艦内ニ收容セリ此ノ部ハ舷側ノ高カラサルト運搬ニ便ナルトヲ以テナリ時恰モ敵驅逐艦十有餘隻ノ追尾ニ遇ヒ須臾モ躊躇スヘキ時ニアラサリシカハ健ナル者傷アル者共ニ皆「ジャコップ」梯ノ助ニ頼リ獨力本艦ニ攀登セリ獨リ重傷者二等水兵瀬戸山安定ハ體動自由ナラサルニ由リ戸塚式擔架ヲ以テ二等機關兵鐵井熊造ハ手指ノ熱傷アルニ由リ吊架ヲ以テ率キ攀ケタリ遭難者中攀登シテ上甲板ニ達セシ後ハ安堵セル爲メニヤ一時其ノ場ニ卒倒スル者アリ然ラサルモ著シキ脱力ノ状態ニ陥ルモノ續出セシヲ以テ直ニ負傷者運搬手ニ命シ一人介助二人介助及ヒ三人徒手運搬法ヲ以テ之ヲ收容室ニ送致セシメタリ擔架ヲ使用セシハ前記二名ノミ今開始テ戸塚式擔架ヲ以テ重傷者瀬戸山安定ヲ運搬セシニ他ノ諸擔架ニ比シ其ノ便利ナルヲ確認セリ

應急處置 豫メ「ラム」酒ヲ收容室内ニ備ヘテ之ヲ服用セシムルト共ニ濕衣ヲ更換シ毛布ヲ與ヘテ靜臥セシメタリ但精神昏睡者ノ濕衣ヲ脱セシムルハ困難ナリシヲ以テ直ニ大鉄ニテ之ヲ剪斷セリ是先般備付ケラレシモノニシテ此ノ際大ニ之カ便利ヲ感シタリ

熱傷ニハ第一度第二度共ニ「ピクリン」酸水ヲ塗布シ著シク表皮ノ剝離セル者ニハ硝著軟膏ヲ貼用シ之ヲ繃帶シタリ創傷アル者ニハ滅菌繃紗ヲ貼シ繃帶ヲ施スコト平時ニ異ルナキモ創面大ナルモノハ海水汚物ノ浸入從テ多キカ故ニ昇汞水ヲ以テ洗滌シ封創器ヲ用ヒテ創縁ヲ縫合セリ蓋豫メ此ノ器ヲ熱氣消毒裝置内ニ安置シタルヲ以テ咄嗟ノ際之ヲ使用スルコトヲ得タリシナリ

遭難者ノ精神状態 遭難者收容ノ當時ハ顔面蒼白四肢厥冷シ全身振頭シテ談話ノ自由ナラサル者實ニ十中ノ七八ニ居レリ而テ溺水ニ因ル前迷ノ状態ハ須臾ニシテ概ネ回復セリト雖モ爆發ニ對スル一種恐怖ノ觀念ニ至リテハ毫モ消散セス皆ニ消散セサルノミナラス却テ旺盛ト爲リタルモノアリ旅順港外ニ現出セル敵驅逐艦ニ向ヒ發砲セシ砲聲ス

ヲ甚シク彼等ヲ戰慄セシメ往々負傷者ヲシテ驟然起立セシムルニ至レリ

初瀬及ヒ八島遭難ノ際醫務ニ關スル報告

軍艦龍田軍醫長海軍大軍醫 工藤伊曾 七

初瀬ヲ旗艦トシテ(梨羽司令)敷島、八島、笠置及ヒ龍田ノ五隻ヨリ成ル艦隊ハ五月十四日午後六時第三地點ヲ出發シ旅順口直接封鎖ノ目的ヲ以テ航進シ龍田ハ十五日午前二時頃隊列ヲ離レテ獨リ南山島沖ニ向ヒ次テ旅順口ニ近ツキ以テ警戒監視ノ任務ニ服セシカ午前十時五十分初瀬敵水雷ニ罹リタルノ電報ニ接シタルヲ以テ速力ヲ疾メテ同艦ニ近ツキタルニ初瀬ノ後部ハ此ノ時已ニ浸水ノ爲メ著シク海中ニ沈降シ加フルニ舵機ヲ損シテ進退自在ナラサルモノノ如ク敷島、八島ハ是ニ於テ各自航路ヲ變シテ避難ノ途ニ就カントス遇八島モ亦機械水雷ニ罹リタル恨事アリ然ルニ午後零時三十四分初瀬再水雷ニ觸レ猛烈ナル爆發ヲ起シ我カ堅牢ナル戰艦ハ恰モ兩斷セラレタルカ如ク瞬時ニシテ沈没ノ不幸ヲ見ルニ至ル本艦ハ直ニ之カ救助ニ從事シ梨羽司令官中尾艦長及ヒ准士官以上十五名下士卒百九十八名ヲ收容セリ收容者ハ凡テ溺水者タルヲ以テ先ツ濕潤セル被服ヲ脱シテ本艦ニアル被服又ハ毛布ヲ被ハシメ傍ヲ治療ニ著手セリ收容所トシテハ士官室及ヒ中下甲板ヲ以テ之ニ充テ戰時治療所ヲ特設スルニ至ラス

初瀬遭難當時ノ負傷者ハ爆傷、挫傷、擦過創ノ順序ニシテ重傷者比較的少ク爆傷及ヒ挫傷ハ主トシテ頭部顔面兩前膊及ヒ兩手部等ノ身體暴露部ニアリ擦過創ハ其ノ形多クハ細長サ約三仙迷乃至八仙迷ニシテ往々挫創ニ移行シ創縁不正ニ或ハ瓣狀ヲナスモノアリ稀ニ組織骨面ニ觸ル、ニ至ル爆傷ニアリテハ其ノ面甚タ廣ク表皮容易ク剝脱シ出血ニ易ク火藥ノ残渣ヲ糝入シ黒色ヲ呈スルモ大ナル異物ノ留存スルモノナク收容當時傷者、健者ノ別ナク渾テ神經頗ル過敏ニシテ往々疑懼煩悶スルモノアリタリ

治療ノ方法 負傷者多數ナリシニ由リ收容ノ際輕重ノ別ナク細帯小包ヲ解キテ應急處置ヲ周到ナラシメ多數ノ海水ヲ飲ミ苦悶スルモノハ吐水ノ法ヲ講セシメ興奮劑ヲ投シタリシニ四等水兵一名ハ反覆セル人工呼吸ニ反應無クシテ

死亡セシモ其ノ他ハ救急法ノ效果空シカラサリキ斯シテ一應ノ治療ヲ加ヘ終リテ騒擾ノ光景稍鎮靜セル後再第二ノ治療ニ著手シ傷病者ヲ輕重ニ區分シ重症者ハ小官及ヒ板谷二等看護之ヲ擔任シ輕傷者ハ三等看護手中野常滿ヲシテ擔當セシメ創面ノ深大ナルモノハ制腐法ニ基キ縫合ノ末制腐細帶ヲ施シ創面ノ淺小ナルモノニハ無腐の細帶ヲ施シ火傷ニハ「ピクリン」酸溶液「ワセリン」等ヲ貼附シ挫傷ニハ石炭酸水、鉛糖水又ハ冷水ノ澀法其ノ他「カンフル」丁幾等ヲ塗布シ肋骨骨折ニハ副板ヲ貼シ卷軸細帶ヲ纏絡シ内服ニハ武蘭堊酒又ハ溫茶ヲ投與セルモ麻酔劑ヲ使用シタルモノナシ

敵ハ我カ軍ノ慘禍ニ乘シ十六隻ノ水雷艇ヲ以テ突如我ニ襲撃ヲ試ム依テ我カ艦隊ハ高砂及ヒ第六戰隊ト合シ龍田ヲ旗艦トシテ之ニ砲火ヲ加ヘシ敵ハ暫時ニシテ港内ニ退却セリ即チ午後三時十分ヨリ同四十五分ノ間ニアリ其ノ後我カ艦隊ハ漸次戰場ヲ遠サカリ第三集合地點ニ向ヒシカ是ヨリ先キ敵ノ攻撃ヲ避ケ自力ヲ以テ徐々航進セル八島ハ午後五時頃ニ至リ浸水増量ノ爲メ將ニ海底ニ沈降セントスルノ悲況ニ迫リタルヲ以テ茲ニ八島乗組ノ士官二名下士卒九十五名ヲ收容セリ歸路太陽已ニ沒シテ濃霧襲來シ咫尺爲メニ辨セサルモ暗ヲ探リツ、航海セシニ午後九時十八分一大激動ト共ニ本艦ハ光祿島東南端ノ岩石上ニ擱岸スルノ不幸ニ遭遇セリサナキタニ人心未タ全ク沈靜セス救助セル人員艦内ニ填塞シテ混雜ヲ極ムルノ時ニ當リ再此ノ難ニ遇フ誰カ驚カサルヲ得ンヤ幸ニシテ當時ノ負傷者ニハ下肢ノ損傷少キヲ以テ互ニ相助ケテ救助艇ニ移乘シ同夜及ヒ翌十六日ノ朝ヲ以テ光祿島上ノ支那民家ニ收容シ此ニ再細帶ヲ更換セルモノアリシカ午前十時臺南丸救助ノ爲メ來著セルヲ以テ初瀬、八島ノ兵員ヲ同艦ニ移シ傷病者ノ治療一切ヲ舉ゲテ之ニ引繼ケリ其ノ際傷病者ニシテ擔架ヲ要セシモノ僅ニ三名アリタルノミ

初瀬負傷者收容報告

假裝巡洋艦臺南丸軍醫長海軍大軍醫 坂元重雅

軍艦初瀬並ニ八島ハ旅順口封鎖監視中敵ノ沈設水雷ニ罹リテ沈没シ其ノ乘員及ヒ負傷者ヲ收容セル軍艦龍田亦光祿

第八章 第二節 第二目 軍艦初瀬

島ノ沿岸ニ坐礁シタル急報ヲ得五月十六日午前八時鹽大澳ヲ拔錨シテ救助ニ向フ航海中患者收容準備ヲナシ後部下甲板三等客室ノ中央ヲ病室ニ充テ此處ニ「ベット」ヲ敷キ毛布及ヒ枕ヲ用意シ後部上甲板中等客室ノ食堂ヲ治療所ニ充テ十分ナル消毒ヲナシ治療器械藥品竝ニ患者衣等ヲ準備ス治療所及ヒ病室ノ容積ハ十分ナレトモ病室ハ下甲板ニ板床ヲ設ケ之ニ藁蒲團ヲ敷キタル假設的ノモノナルヲ以テ名譽アル我カ傷者ニ向テ十分ナル慰安ヲ與フルニ足ラサルハ當時最遺憾トセシ所ナレトモ本艦ノ收容ハ僅ニ一兩日ニ過キス病院船ノ來著ヲ待チテ送院スヘキモノナルヲ以テ暫ク之ニ満足セサルヘガラス午前十時遭難地ニ著シ直ニ傳馬船二艘ニ毛布及ヒ擔架ヲ附シテ龍田ニ送り患者三十三名ヲ光祿島陸上ヨリ收容シ午後七時四十分遭難地ヲ拔錨シテ八時四十一分鹽大澳ニ投錨ス

傷者收容 後部下甲板左舷「ホール」ヲ開キ負傷者ヲ傳馬船ヨリ已ニ用意シタル病床ニ移シ其ノ終了ヲ俟テ患者ノ治療ニ從事ス而テ收容患者ニハ既ニ完全ナル治療ヲ施シタルモノト單ニ應急處置ニ過キサリシモノトアリ火傷患者九名中面部及ヒ兩手部火傷四名面部及ヒ兩手部火傷兼軀幹挫傷一名ハ重症ニシテ右前膊部、面部、左下腿、左前膊部ニ負ヒタルモノ各一名ハ輕症ニ屬シ又身體諸部ニ擦過創乃至挫創ヲ負ヘルモノ少カラス依テ再水疱ヲ針刺シ附著セル黒色ノ異物ヲ去リ剝離セル表皮ヲ除去シテ胡麻油ヲ塗布シ若クハ「ピクリン」酸水ノ塗法ヲ施シ厚ク綿花ニ包ミ挫傷及ヒ挫創患者ニモ適應療法ヲ施シ努メテ患者ヲ慰安スルノ方法ヲ取り珈琲、牛乳等ノ滋養物及ヒ湯ヲ訴フルモノニ稀鹽酸水ヲ與ヘタリ但熱傷者野口伊ハ八加療後體溫四十度五分ニ昇リタルモ正午ハ三十七度八分ニ降り其ノ他ノ傷者ハ一時間毎ニ回診シ其ノ容體ニ注視セシニ概シテ大ナル變化ナカリキ

本艦ノ軍醫部員トシテハ本職及ヒ看護手一人看護一人ノ定員ナレトモ當時幸ニ艦隊補缺員トシテ看護二人ノ乘員アリタルヲ以テ小官及ヒ看護手看護ハ治療所ニアリテ治療ニ從事シ一人ノ看護ト運搬員四名ト病室ニ配置シ患者ノ看護ニ從事セシメタリ而テ火傷患者ノ治療ニ多大ノ時間ヲ要シ速ニ患者ノ治療ヲ終ルコト能ハサリシカ幸ニ福岡丸ノ初瀬、八島乘員收容ノ爲メ來航セルアリ大軍醫鈴木寛之助三等看護手都築實太郎直ニ來艦シテ補助ノ勞ヲ取り十七

日大軍醫延家一太郎中軍醫爾見淳太郎一等看護大鑑金一郎日進ヨリ補助ノ爲メ來艦セル、アリ因リテ以テ十分ナル治療ヲ加フルコトヲ得タリ

傷者輸送 本船ノ附近ニ病院船神戸丸ノ投錨ヲ乞ヒ患者數及ヒ擔架ヲ要スルモノ、員數ヲ信號ニテ通知シ神戸丸ヨリ少軍醫候補生一名看護六人ニ擔架ヲ附シ派遣セラレタルヲ以テ傳馬船二艘ニ之ヲ分チ左舷ノ「ホール」ヨリ傳馬船ニ傷者ヲ移シ始め輕症者ヲ送り次ニ重症者ニ及シ三回二分チ輸送セシニ多少ノ風浪アルニ拘ラス十七日午前十一時五十分ヨリ午後零時三十分ノ間ニ於テ總テ無事移乗セシムルコトヲ得タリ送院患者數ハ二十六名ナリ

軍艦初瀬乘員收容後送報告

給糧船福岡丸軍醫長海軍大軍醫 鈴木 寛 之 助

本船ハ出征艦隊ニ給糧ノ任務ヲ帶ヒ五月八日午後六時佐世保軍港ヲ拔錨シ第三集合地點ニ向ヒ第七回ノ航途ニ上リ五月十日午後三時四十分第三集合地點ニ著シ直ニ在泊艦ニ搭載ノ生糧品供給ヲ開始シ翌十一日拔錨シ午前九時鹽大澳ニ著シ扶桑嚴島ニ給糧シ十二日日本丸ニ十四日朝宮古ニ給糧シ午後一時鹽大澳ヲ拔錨シ午後三時十五分第三集合地點ニ歸リ再在泊艦船ニ供給シ、碇泊セシニ夜ニ至リ濃霧アリ十五日朝ニ至リ濃霧益々加ハリ咫尺ヲ辨セス午後四時ニ至リ艦隊根據地港務部長ヨリ命アリ直ニ錨地ヲ港務部(中)ノ附近ニ轉シ汽力ヲ蓄ヘ出港準備ヲナシ後命ヲ俟テト即時命ノ如クス是本日旅順口港外ニ於テ我カ戰艦初瀬敵ノ水雷ノ爲メ爆沈セシニ依リ其ノ生存者ヲ收容スヘキ任務ヲ命セラレタルニ由ル然ルニ夜ニ入ルモ霧猶霽レス空シク出港準備ノマ、徹宵ス翌朝濃霧更ニ濃キヲ加ヘ寸前ヲ辨セサルニ至リシモ午前十五分直ニ出港シ光祿島南岸ニ至リ龍田ニ在ル初瀬ノ乘員ヲ收容スヘシトノ命アリ同時ニ三浦港務部長本船ニ乘船シ進航スルコト半溼ニ滿タタルニ旗艦ノ命ニ依リ三浦港務部長退船シ港務部員北野中佐代リテ乗船シ濃霧中ヲ進航ス斯テ午後二時三十五分光祿島南岸ノ目的地ト推測シタル位置ニ投錨碇泊シ北野中佐ハ本船ニ尾行シ來レル小汽艇ニ移乗シテ龍田ノ所在ヲ濃霧中ニ搜索ス四時ニ至リ北野中佐ノ汽艇ヨリ約

ノ如ク長汽笛三聲ヲ連鳴シテ龍田ノ所在ヲ認メ得タルコトヲ報スルト同時ニ數日來ノ頑霧漸ク霽レ微ニ龍田ノ檣頭ヲ認ムルヲ得タリ其ノ大ニ霽ル、ニ及ヒ龍田ニ近ク臺南丸ノ泊スルヲ認メ命ニ依リ直ニ臺南丸ニ接舷ス是ヨリ先キ臺南丸ハ龍田ヨリノ急報ニ依リ本船ヨリ先キニ來著シタルモノナリ直ニ先ク臺南丸ニ至ルニ龍田ヨリ收容シタル初瀬乗員中輕重ノ負傷者頗ル多ク坂本臺南丸軍醫長ハ晝食タニ喫スルノ隙モナク之カ治療ニ從事シツ、アリシヲ以テ小官ハ直ニ本船看護手ト共ニ應援シ午後七時ニ至リ全ク負傷者救護ノ事業ヲ了レリ而テ負傷者中重症者及ヒ送院ヲ要スル程度ノモノハ其ノマ、臺南丸ニ留メ健康者竝ニ健康者ト見做スヘキ最輕傷者トヲ本船ニ收容スルコト、決定シ午後七時三十分初瀬ノ乘員梨羽司令官以下准士官以上十七名下士官百七十三名八島乘組石川少佐以下士官一名下士官五十一名ヲ本船ニ收容シ直ニ拔錨シテ第三集合地點ニ向ヒ同夜九時二十分同地點ニ著ス

是ヨリ先キ本船ニテハ收容準備トシテ下甲板前部第二船上及ヒ其ノ周圍ノ空處竝ニ下甲板後部第二船上及ヒ其ノ周圍ニ在ル活牛搭載場ニ活牛飼養ニ供スル藁ヲ甲板上ニ敷キ其ノ上ニ藁ヲ敷キ此所ヲ以テ下士官ノ居所及ヒ就眠所ニ宛テ臺南丸ヨリ毛布百五十枚ヲ借入レ更ニ本船ニ備ヘタル患者用毛布九十枚ヲ加ヘ之ヲ下士官總員用ニ供シタリ士官以上ハ本船一等室内ニ收容シタリシモ元來本船ハ「カーゴシップ」ナルヲ以テ客室ノ數極テ少ク爲メニ候補生數名ハ「ツーフアー」ノ上ニ眠ルノ止ムヲ得サルニ至レリ小官ハ極力收容者ニ慰安ヲ與ヘ且十分ナル利便ヲ圖ルコトニ苦心焦慮シタリシモ奈何ニセン本船ハ原來給糧船トシテ機裝セラレタルモノナルヲ以テ生存者二十分ナル満足ヲ捧クルコトヲ得サリシハ遺憾ニ堪ヘサル所ナリキ然レトモ第三集合地點ニ著シテヨリハ更ニ三笠ヨリ毛布二百二十枚ヲ借入レ一人平均一枚半宛ノ割合トナリ又下士官ノ被服モ應急ノ處置ニ依リ一通リノ體裁ヲ具フルニ至リ且各艦ヨリ日用品等ノ寄贈多カリシ爲メ大ニ本船設備ノ不完全ヲ補フニ至レリ

十七日早朝ヨリ輕症負傷者ノ診療ヲ始メ正午ニ至テ終ル本日八島乘員石川少佐以下五十三名ハ高坂丸ニ轉乘シ更ニ初瀬乗員中笠置ニ收容セラレ次テ富士ニ轉乘シタル初瀬主計長藤野主計少監以下准士官以上四名下士官百五名本船

ニ收容セララル是ニ於テ病院等ニ在ル者ヲ除キ初瀬乗員ノ生存者ハ悉皆本船ニ集合セシナリ此ノ日夕食後梨羽司令官ハ旗艦ヲ敷島ニ指定シ下士以下二名ト共ニ退船セララル又富士ニ於テ受診シタル負傷者中六名ハ已ニ富士軍醫官ニ於テ西京丸ニ入院ノ手續ヲ了シアリシヲ以テ即刻入院セシメタリ

十八日早朝ヨリ負傷者ノ診療ニ從事ス本日白井少佐横田少尉外下士官十名ヲ病院船西京丸ニ入院セシム是輕症ニシテ經過モ亦佳ナルヲ以テ敢テ送院ヲ絶對ニ必要ナリト思惟シタルニアラサレトモ本船内ノ雜沓頗ル甚シキヲ以テ一時病院船ニ送り身心ノ慰安ヲ得シメント欲シタルニアリ

十九日モ早朝ヨリ負傷者ヲ一々診檢シ負傷者略報告ヲ作り患者日誌ヲ調製ス是初瀬軍醫官中布上中軍醫ハ實ニ萬死ニ一生ヲ得テ笠置ニ收容セラレ再富士ニ收容セラレシモ微傷ヲ負ヒタル精神未タ全ク沈靜セサルトノ爲メ尙病院船西京丸ニ在テ靜養中ニシテ不日退院ノ筈ナリシモ此ノ際小官ニ於テ十分ニ負傷者ヲ診檢シ事務ヲ整理シ置カサレハ將來布上中軍醫カ殘務ヲ整理スルニ當リ收拾ノ途ナカラシコトヲ慮リシニ因ル

二十日午食後本船ヨリ入院シタル白井少佐以下五名富士ヨリ入院シタルモノ九名退院歸船ス布上中軍醫モ亦此ノ中ニアリ是本船ハ本日佐世保ニ向ケ拔錨ノ豫定ナルヲ以テ輕傷者ニシテ其ノ經過ヲ害セサル限りハ殘務整理上可及的總員ト共ニ送還ヲ至便トストノ中尾艦長ノ希望アリタルニ因リシナリ午後四時第三集合地點ヲ發シ佐世保ニ向フ各艦ノ總員登艦シテ生存者ノ本國ニ歸ルヲ送ル

二十二日本船收容ノ初瀬負傷者略報告同患者日誌其ノ他必要ノ書類ヲ整理シ一括シテ布上中軍醫ニ引繼ケリ二十三日午前七時六百海里ノ航程恙ナク佐世保軍港ニ歸著シ直ニ佐世保海兵團ニ入り團内ニ殘務取扱事務所ヲ設置セララル茲ニ萬死ニ一生ヲ得タル收容者一同カ綠葉青々タル故山ノ風景ニ接シ喜色面ニ溢レシハ人情ノ當ニ然ルヘキ所ニシテ收容還送ノ任ニ當リタル小官モ始テ重荷ヲ卸シタルカ如ク共ニ歡喜ノ念ニ禁ヘサリキ

本船ニ收容シタル負傷者ハ龍田ヨリ中尾大佐以下三十七名又富士ニ收容セラレ次テ本船ニ移乘シタルモノ十一名ナ

リ負傷ハ孰レモ極テ輕クシテ小ナル挫創、擦過創輕度ノ挫傷、熱傷等其ノ大部ヲ占メ、一モ應急ノ手術ヲ要スルモノナカリキ唯佐世保歸著ノ際白井少佐(右手掌)横田少尉(顔面左耳翼第二度熱傷)ハ尙全治マテニハ約一週日ヲ要スルヲ以テ再佐世保海軍病院ニ入院セリ負傷者ノ詳細ナル狀況ニ關シテハ直接其ノ局ニ當レル布上中軍醫ノ報告ニ譲リ小官ハ單ニ收容還送ノ任務ニ當リタル大要ヲ錄シ茲ニ之ヲ報告ス

第三目 軍艦八島

戰艦八島(二七五噸)ハ、三十七年五月十五日初瀬及ヒ敷島ト共ニ旅順口ノ直接封鎖ニ任シ、初瀬第一回遭難ノ後敷島ニ次テ針路ヲ轉シ、將ニ危險界ヲ脱出セントスル際、午前十一時十分敵ノ敷設セル機械水雷右舷側中央部ニ衝觸シ、未タ幾ナラスシテ又前部ニ第二ノ爆發アリ、艦體爲メニ右舷ニ傾斜シ、浸水次第ニ増加セルモ尙徐ニ航進ヲ繼續シ、午後五時四十四分遇害ノ東北東五海里ノ位置ニ達シタル頃ハ海水右舷側ノ「ネット」臺ニ達シ、到底沈没ノ悲運ヲ免ル可カラサルヲ知り、乗員ハ端舟ニ移乗シ、笠置龍田及ヒ須磨ニ至リテ收容ヲ受ケタリ、又是ヨリ先キ直外將校下士卒非直機關部員及ヒ傷者一名ハ、第二水雷艇及ヒ敷島ノ端舟ニ移リ、高砂ニ至リ收容ヲ受ケタルヲ以テ、遭難當時ノ在艦員七百四十一名ハ、裏長山列島ノ根據地ニ於テ、悉ク營口丸及ヒ熊野丸ニ移サレ、其ノ後ハ假裝砲艦ニ配乗シ、大連灣ヲ根據トシテ旅順港外ニ出動シ、水雷沈置其ノ他ノ戰務ニ從事スルコト年餘ニシテ、三十八年五月三十一日ニ至リ、始テ其ノ沈没ヲ公表セラル、左ニ八島軍醫長海軍軍醫中監佐竹達ノ提出セル八島遭難顛末及ヒ負傷者創狀經過ノ概要ヲ掲グ、

軍艦八島遭難顛末

軍艦八島軍醫長海軍軍醫中監 佐 竹 達

八島ハ梨羽司令官ノ麾下ニ屬シ旅順口直接封鎖及ヒ威嚇ノ目的ヲ以テ五月十日午後六時裏長山列島ヲ發シ十一及ヒ十二ノ兩日ハ旅順ノ方面ニ遊弋シ十三日午前八時三十分根據地ニ歸著シ十四日再同司令官ノ指揮下ニ初瀬、敷島笠置、龍田ト共ニ旅順口ニ向ヒ十五日午前同所沖合ニ達シ旗艦初瀬先頭ト爲リ敷島之ニ次キ八島ハ三番艦ト爲リ老鐵山ノ西南十哩ノ位置ヲ西ヨリ東ニ向ヒ單縱陣ニテ航行セシ午前十時五十分旗艦初瀬ノ位置ニ突如トシテ一大爆發起ル衆相顧ミテ愕然タリ時ニ旗信アリ初瀬ノ後部水雷ニ罹リ舵機ニ故障ヲ生スト嗚呼我カ旗艦ハ實ニ敵ノ機械水雷ニ罹レルナリ是ニ於テ後續艦敷島ハ命ニ依リ徐行シテ危險界ヲ脱セントス八島モ亦之ニ倣ヒ同シク針路ヲ變シ救助艇ヲ卸シテ初瀬ノ急ニ赴カントス時ニ午前十一時十分八島ノ右舷中央部ニ方リ凄シキ爆發ヲ發シ同時ニ艦體ニ激震ヲ感シ未タ一分ヲ出スレテ前部ニモ亦第二ノ爆發ヲ發シ艦體漸次右舷ニ傾斜シテ前部ハ著シク沈降セルヲ以テ水雷艇端舟ノ卸方容易ナラサリシモ漸クニシテ之ヲ終リタル頃ハ敷島ヨリモ端舟ニ隻ヲ送りタリ坂本艦長自ラ御眞影ヲ捧持シテ上甲板ニ出テ續キテ之ヲ小蒸氣船ニ移シ又各部ノ祕密書類及ヒ重要物品ハ之ヲ取繼メテ端艇内ニ運搬シ終リ命シテ直外將校下士卒及ヒ非直機關兵百八十八名ヲ第二水雷艇及ヒ敷島ノ端舟ニ乗移ラシメ以テ先ツ本艦ヲ離レシメタリ時ニ午後零時十分頃ナリ本官等救艇ニ乗シテ心ナラスモ八島ノ舷側ヲ離レテ敷島ニ赴カントシ今ヤ洋上ニ孤立スルノ態トナレリ正午ヲ過クル三十分ト思シキ比義ニ第一回ノ爆發ニヨリ進退ノ自由ヲ失ヒタル初瀬ハ俄然黒焰天ニ沖スト見ル間ニ其ノ艦影ヲ沒シ敷島ハ遠ク南方ニ去リ龍田ハ初瀬ノ難ニ急航シタルヲ以テ艇ノ寄スヘキモノアラサルニ後方旅順口ヲ望メハ敵ノ驅逐艦十數隻舳艫相銜シテ港口ヨリ竊進シ來リ此ノ危機ニ乘シテ我カ艦隊ヲ擊滅セントスルアリ南前方ニ在ル敷島ハ艦ノ周圍ニ向テ發砲シ同艦ノ近傍ニハ砲彈ノ落下スルモノ雨ノ如ク盛ニ水柱ヲ上ケ雙ニ前方ニハ三四ノ艦影ヲ模糊ノ間ニ認メ宛然敷島ト交戦セルモノ、如シ(後チ聞ク所ニ據レハ敷島ノ周圍ニ著彈セント見シハ同艦カ潛行水雷艇アルカト疑ヒテ四面

第八章 第二節 第三目 軍艦八島

ニ向ヒ發砲シタルモノニシテ遠方ニ今ヤ此ノ光景ヲ觀望スル端艇内ノ兵員ハ徒ニ袖手爲ス無ク海上ニ彷徨スルヲ潔シト見エタル軍艦ハ我カ第六戰隊ナリシト)今ヤ此ノ光景ヲ觀望スル端艇内ノ兵員ハ徒ニ袖手爲ス無ク海上ニ彷徨スルヲ潔シトセス寧ロ本艦ト生死ヲ共ニセント煩悶セリ此ノ如キコト少時ニシテ本艦ヨリ端艇呼ビノ信號アリ到レハ則チ手旗信號ヲ以テ高砂ニ至リ收容ヲ求メヨト告ケラル依テ更ニ方向ヲ轉シテ高砂ニ向ヒ我カ一行百八十八名同艦ニ收容セラレタルハ午後一時四十九分ナリキ

高砂ハ是ヨリ再敵前ニ突進シタルニ旗艦龍田ヨリ信號ニ依リ針路ヲ轉シテ歸港シ午後七時五十八分根據地ニ到着セリ小官等軍醫部員ハ高砂ニ收容セラレテ遠ク八島ニ離レ同艦其ノ後ノ狀況ニ就テハ遺憾ナカラ之ヲ見ルニ由ナカリシモ聞ク所ニ據レハ本艦ハ傾斜シツ、南方ニ向テ徐航シ午後五時四十四分遇岩ノ東北東五海里ノ位置ニ達シタル交ハ海水已ニ右舷「ネット」壹ヲ浸シ本艦最後ノ時期迫レルヲ知リ艦長ハ總員ヲ後甲板ニ集メ天皇禮式ヲ吹奏シ軍艦旗ヲ撤シ萬歳ヲ三唱シタル後總員徐ニ乘艇シタリト云フ而テ艦長以下下士卒八十八名ハ笠置ニ砲術長以下下士卒五十三名ハ龍田ニ水雷長以下下士卒四百十二名ハ須磨ニ收容セラレ十七日各艦根據地裏長山列島ニ歸航後須磨ニ收容セラレタルモノハ營口丸ニ其ノ他ハ凡テ熊野丸ニ轉乘セリ

遭難ノ當日艦内疾病休業中ノモノハ三名ニシテ内一名ハ兩側急性扁桃腺炎ヲ患ヒ體溫三十八度以上ニ昇リ朝來釣床ニ靜養セシメモ危急存亡ノ秋痛苦ヲ忍ビテ艦務ニ服シ其ノ他ノ二名及ヒ第二軍揚陸ニ從事中急性腸加答兒ニ罹リ歸著當時疲勞甚シキヲ以テ富士到著迄本艦ニ收容治療中ノ同艦乗組一等水兵山根治吉ノ三名ヲ後甲板ニ集メ看護部員ヲシテ醫務ニ關スル書類ヲ蒐集セシメ後甲板ニ運搬スル折柄水雷艇卸方ニ從事セル一等水兵布藤伊助、左示、中環、小指ニ挫創ヲ負ヒ之ニ裝創處置ヲ施シツ、アリシニ二等船匠手益井新九郎「チエインロツカー」内ニ入り浸水場所填塞ニ從事セシモ該區劃内漸々満水スルニ由リ事業ヲ中止シ下甲板ニ出テ來リ忽チ卒倒シタルニ依リ直ニ救急處置ヲ施シ醒覺スルヲ俟テ直ニ後甲板ニ運搬シ此ニ安臥セシメタリ次テ軍醫部員退去ノ命アリ前記患者ハ小官等保護ノ下ニ避難セシメ共ニ高砂ニ收容セラレタリ卒倒者益井船匠手ハ收容當時尙歩行不能ナリシヲ以テ戸塚式吊架ニ頼リテ

高砂ニ移乗セシメタリ根據地歸港後小官ハ熊野丸ニ乗組ミ笠松中軍醫及ヒ尾形少軍醫ヲ營口丸ニ乗組マシメ又看護手看護各一名ヲ營口丸ニ看護手一名看護二名ヲ熊野丸ニ分乗セシメタリ但小官等退艦後艦内ニテ生シタル負傷者ニ就テハ須磨ニ收容セラレタル兵員中十四名アリシ旨同艦軍醫長ノ報告ニ接シタルヲ以テ治ク検査セシニ孰レモ極テ微傷ニシテ入院ヲ要スヘキモノ無キハ勿論登錄スヘキ程度ノモノ無ク過半ハ既ニ治癒シ僅ニ數名ヲ殘スノミナリキ又取出シタル重要書類ニシテ混雜中再紛失シタルモノアルモ疾病要略、治療品原簿、治療品證憑書類、患者目錄及ヒ醫事日誌ハ幸ヒ無事ナルヲ得タリ治療品中取出シタルモノハ僅ニ攜帶藥籠同連具各四具ニ過キサリシハ遺憾トスル所ナリ

八島遭難當時ノ負傷者ハ左ノ如シ、

左示、中環、小指挫創(業)

軍艦八島乗組 海軍一等水兵 布 藤 伊 助(二一九〇)

明治三十七年五月十五日午前十一時三十分艦載水雷艇卸シ方ニ從事中「メインデリック」ノ「ロングガイ」ヲストリップパーヲ以テ受ケ止メツ、之ヲ把持シアリシニ突然其ノ「ガイ」ヲ牽引セシ爲メ「シーブ」ノ間ニ左手指ヲ挟マレ負傷ス、之ヲ診スルニ左示指末節ノ軟部挫滅シテ第三指骨ヲ露出シ掌面ノ皮膚ハ上方第一、第二指骨間關節部ニ至ル迄挫壞セラレ中指モ同シク指骨ヲ存スルモ軟組織ノ破壞ハ掌面ニ於テ基節ニ及シ背面ニ於テ中節ノ半ニ達シ環指背面ハ第三節軟部ヲ挫滅シテ掌面第二節基根部ニ達スル迄皮膚ヲ挫裂シ小指掌面ニモ挫創ヲ呈ス、依テ應急處置ヲ施シ高砂ニ收容シ十八日西京丸ニ送院ス、病院船ニ於テ全身麻酔ノ下ニ左示、中指ヲ第二、第三指骨間關節ヨリ離斷シ環指ヲ第二指骨上三分ノ一部ヨリ切斷セシニ其ノ後ノ經過佳ナリ二十八日吳海軍病院ニ轉院ス、當時各指ノ斷端ニ多少ノ肉芽面ヲ貽シ少許ノ排膿アリシモ漸次瘡痕ニ

移行シ六月下旬ニ至リ全ク治癒シ左示中指末節、左環指中節上三分以下ヲ失ヒタルヲ以テ兵役ヲ免セラレ七月十七日免役退院ス 經過日數六十三日

右上顎部挫傷(業)

軍艦八島乗組 海軍一等機關兵曹 竹 木 城 吉(一九二)

明治三十七年五月十五日午後九時十八分龍田ノ光祿島東南端ノ岸石上ニ擱坐スルヤ激動ヲ感シタルヲ以テ機關倉庫ノ換氣管ヲ通り上甲板ニ出ツル際本人ニ繼テ數多機關兵攀登シ來リ強ク下半身ヲ壓シ上ケラレ身體ヲ支持スルコト能ハス高サ一間半ノ換氣管上口ヨリ上甲板ニ墜落シテ面部ニ負傷シ十七日熊野丸ニ收容シ十九日病院船西京丸ニ送院ス、之ヲ診スルニ顔面汎ク腫脹シ、臉裂閉鎖ス右犬齒小白齒ニ對スル齒齦ニ腫痛アリ硼酸水濕布貼用及ヒ含嗽ヲ處シニ十八日吳海軍病院ニ轉院ス顔面ノ腫脹及ヒ齒齦ノ炎衝消散シ七月十四日全治退院ス 經過日數六十日

腹部打撲(業)

同 海軍一等水兵 尾 關 鶴 太郎(一九三)

八島遭難ノ際午後五時三十分頃總員集合ノ命アリ第二階梯ヨリ上甲板ニ登ルノ際甲板上ニ顛倒シ腹部ヲ打撲シ疼痛ヲ覺エシモ翌十六日治癒ス

第四目 軍艦曉

驅逐艦曉^(三六)_(四噸)ハ、第一驅逐隊ノ殿艦トシテ、三十七年五月十七日旅順口港外ヲ警戒セシカ、午

後十時二十三分老鐵山ノ南微東三海里ノ海上ニ於テ、敵ノ敷設セル機械水雷ニ觸レテ爆沈シ、乗組員三十六名及ヒ死體三個ハ、白雲、霞ノ二驅逐艦ニ收容セラレタレトモ艦長海軍少佐末次直次郎外十九名ハ溺死シテ死體ヲ收容スルコト能ハス、三十八年五月三十一日ニ至リ、始テ其ノ沈没ヲ公表セラル、左ニ曉遭難ノ際救助ニ從事シタル白雲乗組海軍少軍醫宮川正雄提出ノ報告ヲ掲ク、

軍艦曉遭難者ノ救護

軍艦白雲乗組 海軍少軍醫 宮 川 正 雄

第一驅逐隊ハ第二第三驅逐隊ト共ニ五月十七日午後零時三十分旅順口港外ニ向ヒ警戒ノ任務ヲ帶ヒテ出動シ五時頃豫定ノ位置ニ達シテ指定ノ區域ヲ警戒セリ六時頃第二驅逐隊ヨリ敵ノ驅逐艦ヲシキモノ二隻鵠灣方面ニ向フトノ信號ニ接レタルヲ以テ第一驅逐隊ハ之ヲ擊破センカ爲メ速力ヲ疾メテ航進セシニ途中老鐵山砲臺ヨリ砲撃ヲ被リ敵艦ノ附近ニ落下セシモ損害無ク八時三十分頃ニ至ルマデ索敵ヲ行ヒシモ終ニ得ル所ナシ依テ再豫定ノ警戒位置ニ歸ラントシ十時二十三分老鐵山ノ南微東約三海里ノ海上ニ到リシ時俄然一大爆聲ヲ聽キタルヲ以テ小官ハ直ニ上甲板ニ出テ、後方ヲ觀望シタリシニ隊列ノ後尾ニ方リ火箭ノ揚ルヲ目撃セリ是ニ於テ白雲ハ時ヲ遷サス反航シ探海燈ヲ以テ海面ヲ照ラスニ四番艦曉ハ今ヤ水雷ニ罹リ沈没ニ垂ントシ乗員ハ頻ニ本隊ノ艦名ヲ呼號セリ乃チ反航ト同時ニ「ギグ」及ヒ「ケンバ」ボートヲ用意シ曉ニ接近スルヤ之ヲシテ直ニ救助ニ赴カシメシニ此ノ時已ニ曉ノ艦體ハ中央部ヨリ爆折シテ頭尾ノ兩端ヲ高クシ中央部ヲ低ク水面ニ保チ急速沈下シツ、アリ救助艇ノ達セシトキハ乗員已ニ海中ニ投セルヲ以テ眼界ニ浮沈スル溺者ヲ救助收容シテ一旦本艦ニ引返シ之ヲ上甲板ニ移スヤ否ヤ再救助ニ赴キ遍ク其ノ附近ヲ搜索セシモ艦影已ニ全ク没シテ復タ一物ヲ見ス十一時四十九分ニ至リ歸還ス

是ヨリ先キ小官ハ僚艦ノ遭難セルヲ知り直ニ治療所タル士官室ノ暖爐ニ焚火ヲ命シ此處ニ治療品ヲ準備シ以テ溺者

ノ來ルヲ待チシニ救助艇ハ午後十一時二十一分ニ至リ上等機關兵曹岡木利八外十三名ノ溺者ヲ收容シ來ル依テ直ニ上甲板ニ移シ就中瀕死ノ狀態ニアリタル岡木上等機關兵曹外二名ニ人工呼吸ヲ施シ其ノ他ノ溺者モ當時多少ノ疲勞ヲ覺エサルモノナキニヨリ孰レモ治療所ニ於テ適應治療ヲ施シ回復ニ至ラシメタリ左ニ溺水者ノ狀態及ヒ其ノ處置ニ就キテ概要ヲ述フ

軍艦曉乘組 海軍上等機關兵曹 岡 木 利 八

收容ノ當時ハ殆ト人事不省ナリシカ人工呼吸法ヲ施シ兼テ全身ヲ摩擦シ後チ火酒ヲ飲用セシメシニ漸ク醒覺シ十二時頃ニハ應答稍明瞭トナルニ至ル身體ニ損傷無シ回復後モ數日ノ間甚シキ倦怠ヲ覺エタリト云フ

軍艦曉乘組 海軍一等機關兵 佐 藤 庄 六

收容ノ當時ハ殆ト人事不省ニシテ全身厥冷シ四肢ニ痙攣アリ微ニ呼吸ヲ營ムカ如シ依テ吐水後人工呼吸法ヲ行ヒ樟腦精三「グラム」ヲ皮下ニ注射シ呼吸漸々常態ニ復セシニヨリ溫包摩擦等ヲ施シ、ニ翌十七日午前二時頃言語稍明瞭トナル全身ニ損傷無カリシモ十七日朝來體溫少シク昇騰シ頭痛、心窩苦悶及ヒ甚シキ全身倦怠ヲ訴ヘタリ

軍艦曉乘組 海軍一等主廚 高 光 謙 太 郎

收容ノ當時ハ神識朦朧、身體厥冷、四肢痙攣等ノ症狀アリ脈搏微細ナリシカ吐水後火酒飲用全身摩擦及ヒ溫包等ヲ行ヒシニ十二時頃ニハ應答明瞭トナル全身ニ損傷無カリシモ少シク胃部ニ疼痛ヲ訴ヘタリ

軍艦曉乘組 海軍一等機關兵 田 中 休 太 郎

同 海軍一等機關兵 藤 井 道 矢

同 海軍二等水兵 松 山 豐 吉

身體冷却シ著明ノ疲勞アリテ甚シク四肢ヲ震顫セシモ火酒ノ飲用及ヒ溫包ニヨリ約一時間ヲ經テ健態ニ復ス

軍艦曉乘組 海軍一等兵曹 外 園 末 吉

同	海軍二等兵曹	今 村 五 八
同	海軍三等兵曹	一 村 謙 次
同	海軍一等水兵	若 松 繁 義
同	海軍一等水兵	芝 原 市 平
同	海軍一等水兵	永 田 直 記
同	海軍一等水兵	山 田 卯 藏
同	海軍二等機關兵	古 賀 藤 右 衛 門

四肢厥冷シ疲勞アルモ甚シカラス火酒ヲ與ヘ罐室ニ於テ暖ヲ取ラシメタリ

曉遭難ノ當時ハ春寒尙料峭タルノ時季ニアリタルヲ以テ遭難船アルヲ知ルト同時ニ釣床内ヨリ都テノ毛布ヲ取出シシメ豫メ罐室内ニ於テ加溫シ收容者ノ濕衣ヲ脱セシムルト同時ニ之ヲ以テ身體ヲ被包セシメ又吐水セシムルモ十分ニ奏效セサル者ニ對シ微溫湯ノ中等量ヲ飲用セシメ再之ヲ吐出セシメシニ患者ノ渴ヲ減スルト共ニ海水ノ殘部ヲ容易ニ吐出セシムルノ利アルヲ認メタリ而テ曉遭難者救助ノ際治療所ニ備附ケタル治療品ハ左ノ如シ

總員ノ毛布

「ブランデー」

蒸餾水

皮下注射器

消毒盤

二十倍石炭酸水

硼楊酸

綑帶材料

雜川鉄

木綿 皮膚摩擦用トシテ長サ三尺ノモノ十枚

枕 吐水ノ爲メ胃部壓迫用トシテ五個

衛生酒 火酒八合

溫 湯

樟腦精

封創器

膿 盤

百倍「ピクリン」酸水

護謄管

軍艦曉遭難者ハ、倭艦白雲ニ於テ救助收容シタル前記十四名ノ外、尙霞ニ收容セル生存者三十二名ト死體三個トアリ、其ノ外全ク行衛不明ト爲リ、傷溺者ト認定セラレタル戦死者二十名アリ、

以上三名軍艦霞ニ於テ死體ヲ收容ス、

軍艦曉乗組	海軍中尉	大曲 眞二郎 (二九八)
同	海軍二等兵曹	林 正 熊 (二九九)
同	海軍一等信號兵	定 松 長 市 (二〇〇)
軍艦曉艦長	海軍少佐	末次直次郎 (二〇一)
同 乗組	海軍大尉	尾 中 諦 治 (二〇二)
同	海軍大機關士	井 上 盛 記 (二〇三)
同	海軍大軍醫	小 池 梅 司 (二〇四)
同	海軍大主計	金 子 宗 市 (二〇五)
同	海軍機關兵曹長	秋 山 安 太 郎 (二〇六)
同	海軍二等兵曹	土 橋 兼 吉 (二〇七)
同	海軍二等機關兵曹	森 武 伊 吉 (二〇八)
同	海軍二等機關兵曹	柳 得 藏 (二〇九)
同	海軍一等水兵	原 初 太 郎 (二一〇)
同	海軍一等水兵	野 本 貞 助 (二一一)
同	海軍一等機關兵	淵 上 參 藏 (二一二)
同	海軍一等機關兵	山 本 治 平 (二一三)

以上二十名ハ死體ヲ收容セス、

第五目 軍艦海門

同	海軍一等機關兵	今 村 圓 喜 (二一四)
同	海軍一等機關兵	延 壽 光 雄 (二一五)
同	海軍一等機關兵	榮 國 七 (二一六)
同	海軍二等水兵	森 水 袈 婆 吉 (二一七)
同	海軍二等機關兵	高 柳 忠 一 (二一八)
同	海軍二等機關兵	岩 永 與 作 (二一九)
同	海軍二等機關兵	速 水 滿 藏 (二二〇)

海防艦海門(一三六)ハ、平遠及ヒ第七號、第四號假裝砲艦ト共ニ、三十七年七月五日小平島ヨリ大連灣ニ向ヒ歸航ノ途中、午後六時二十三分、南三山島沖ニ於テ、敵ノ敷設セル機械水雷ニ觸レ艦底ヲ爆破セラレ、僅ニ四分時ニシテ全ク沈没ス、而テ海門乗組員ノ中五十三名ハ、遭難ノ前日ヨリ掃海ノ爲メ陸上ニ舍營シ、端舟モ亦多クハ掃海ノ爲メ派遣セラレタルヲ以テ、百七十名ノ在艦員ハ、一隻ノ端舟ニ移乗セルモノヲ除クノ外悉ク跳リテ海ニ投シ、恰モ甲板上ニ搭載セル掃海用浮標及ヒ釣床ヲ抱持シテ水面ニ泛ヒ、潮流ニ隨ヒテ漂盪セシカ、不幸ニシテ端舟ハ艦ノ沈没ト共ニ顛覆シ、之ニ據ル避難者ハ、一名ヲ除クノ外、總テ溺死セシモ、其ノ他ノモノハ平遠ヨリ派遣セル端舟及ヒ假裝砲艦ニ依リテ救助ヲ受ケ、軍艦三笠ニ移サレ、小倉丸ヲ經テ臺南丸ニ移

乗シ、艦隊補缺員トシテ戦地ニ駐レリ、艦長海軍中佐高橋守道以下二十二名ハ溺死シ、下士卒九名ハ輕傷ヲ負ヘリ、左ニ海門軍醫長海軍大軍醫河原水地提出ノ遭難記事ヲ掲ク、

軍艦海門遭難衛生記事

軍艦海門軍醫長海軍大軍醫 河 原 水 地

本艦ハ命ニ依リ小平島附近掃海ノ目的ヲ以テ七月三日午前第三根據地ヲ出テ午後豫定歸泊所大連灣内大固口ニ至リ投錨ス四日午前七時同所ヲ出テ掃海ノ目的地タル小平島ニ到リ漂泊シ第一第二汽艇及ヒ第一第二「カッター」ヲ卸シ田中少佐、藤村、原ノ二中尉外五十一名ノ兵員ヲ陸上ニ派遣シテ舍營ヲ建設セシメ掃海ヲ爲サシム本艦、平遠、第四砲艦、第十砲艦ハ之ヲ掩護タリ此ノ地ハ老嶺山ヲ左方ニ、黄金山旅順口ヲ左前方ニ望ミ平頭山、龍王塘ハ指顧ノ中ニアリ此ノ日敵艦「ノーウヰク」砲艦驅逐艦數隻龍王塘附近ニ出テ來リシモ更ニ航進セザリキ午後五時本艦ハ歸泊地タル大固口ニ至リ泊ス五日午前七時四十五分昨日ノ如ク平遠第七號假裝砲艦ヲ隨ヘ小平島ニ向ヒ定航路ヲ經テ午後零時半頃同所ニ著シ昨日前陸上ヘ派遣セル掃海隊員ト連絡ヲ取レリ當時田中少佐ヨリノ報告ニ據レハ今朝敵艦「ノーウヰク」驅逐艦等陸上舍營地ヲ砲撃シ又夜間敵水雷艇等時々舍營地附近ヲ射撃スト云フ故ニ本艦及ヒ平遠ヨリ野砲各一門ヲ揚陸シ午後四時七分各艦ト共ニ大固口ニ向ケ歸航ノ途ニ就ケリ此ノ航行序列ハ海門、平遠、第七號及ヒ第四號砲艦トス四時四十二分嶋島ヲ北二十度半西二海里半ノ點ヨリ北七十度東ニ定針シ南三山島南端ヲ距ル約二海里ノ點ニ向ヘリ四時四十四分頃速ニ濃霧襲來シテ島影ヲ見失フニ至ル汽笛ニテ霧中信號ヲ爲シシ、進行シ且危急信號トシテ空砲發射ノ準備ヲ爲シ置ケリ六時二十三分南三山島沖ニ至ラントスルヤ突然船底部ニ當リ轟然タル爆裂ノ音響ヲ放チ非常ノ震動ヲ船體ニ與ヘタリ依テ直ニ總員上ヘノ令アリ又豫テ裝備セル空砲ヲ發射シテ危險ヲ他艦ニ報シタリ本官ハ當日ノ休業患者二名ヲ「ブープ」ニ救ヒ出シ其ノ一名ニ浦田一等看護ヲ附シ（手島三等看護手ハ陸上ガ然地派遣中ニテ主務ス）外舷「ボート」ニ乗移ラシメ他ノ一名ニハ浮標ヲ與ヘ艦ヲ去ラシム然ルニ不幸ニモ浦田看護及ヒ患者ノ一「ボート」ハ「ボートホール」ヲ切斷スル一刹那本艦ノ沈没ト共ニ深ク水中ニ捲込マレ多クノ該「ボート」避難者ト共ニ溺死セリ（該「ボート」者一名ノ詳ル所ナリ）本艦ハ掃海部分ヘ設置センカ爲メ多數ノ浮標ヲ積載シアリシノミナラス初潮沈没ノ當時「ハンモック」ノ大ニ浮上ガ方有スルコトヲ了知シタレハ該事業中ハ常ニ「ハンモック」ヲ上甲板ニ出シ置キタリ故ニ投水前一人トシテ此等浮上物體ヲ所有セサルモノナカリシナラン船體ノ沈没ハ頗ル急速ニシテ本官カ總員上ヘノ號令ヲ聞キ直ニ浦田看護等ト共ニ「ブープ」ニ至リ前記ノ如ク一休業患者ニ浦田看護ヲ附シ外舷「ボート」ニ乗移ラシメ他ノ一休業患者ヲ投水避難セシメテ之ヲ監視シ居リシニ前艦橋ヨリ艦長ハ本官ニ向ヒ左方ヲ指サシ避難ノ方向ヲ示セリ當時海水已ニ上甲板ニ波及シ乗員ハ概ネ避難シ去リ前記「ボート」避難者ノ外殆ト艦内ニ人影ヲ認メス此ノ時ヨリハ（即チ上甲板ヲ沈没シテ後）本艦ハ殆ト墜落ノ狀ヲ以テ沈降シ來リテ忽チ本官ノ足ヲ浸セリ依テ直ニ身ヲ海中ニ投セントセシモ時既ニ遅ク非常ノ潮流襲來シ深ク海中ニ捲込マレ多量ノ海水ヲ嚥下センカ少焉アリテ自然海面ニ浮上スルコトヲ得タリ然ルニ其ノ近傍ニハ多數ノ木片浮標「ハンモック」「ブツシタツプ」等浮游シ遭難者ハ之ヲ抱持シテ君カ代萬歳等ヲ唱フルヲ見タリ時ニ後續艦タル平遠（翌朝同艦艦長ヨリ聞ク所）ハ本艦ノ危急信號タル空砲發射ニ依リ一時進行ヲ停止シテ後進ヲ始メシニ前方ニ當リ人聲ノ囂々タルヲ聞キ徐ニ其ノ方向ニ進行セシメ本艦遭難者ノ一群海面ニ漂流スルヲ發見シ直ニ其ノ外舷「ボート」ヲ卸シテ之ヲ收容シ或者ハ直接平遠ノ舷側ヨリ救助シタリ（身ヲ海中ニ投セシ後ハ何レノ方向ヘ流レシヤ又本艦ノ沈没位置不明トナレリ故ニ爰ニ平遠艦長ノ語ヲ加ヘタリ）本艦ノ沈没當時ハ濃氣依然四圍ヲ蔽塞シ咫尺ヲ辨セス最初ノ爆聲ヲ聞キ船體ノ全然沈没スル迄約四分間ナリ其ノ狀況タル上甲板ニ水ノ至ルマデハ徐々ナリシモ其ノ後ハ艦體恰モ落下スルカ如ク僅ニ數秒時ヲ出テサリント覺ユ本艦沈没後平遠ニ救助セラレシ時間ハ各遭難者ノ位置ニ由リ差異アルモ早キハ十二分遅キハ二十分トス本官等ノ救助セラレシ「ボート」ハ潮流ニ流サレテ平遠ニ到ル能ハス第四號砲艦ニ收容セラレタリ避難者ノ健康狀態ヲ見ルニ概ネ凍冷ノ爲メ身體厥冷ニ言語自山ナラサリキ本官ハ少憩後先ツ自ラ故ラニ吐水シ爾後負傷患者ニ應急處置ヲ施シ該砲艦ニ救助セラレシ總員ニ衛生酒ヲ飲用セシメタリ但遭難者ノ大部分ハ平遠ニ他ハ第四及ヒ第七砲艦ニ救助セラレ負傷者ハ軍

艦三笠ニ於テ應急治療ヲ受ケ生存者百九十八名ハ悉ク小倉丸ニ移乗シ七月十七日臺南丸ニ轉シ艦隊補缺員トシテ其ノ乗組ト爲レリ

前記ノ如ク本艦ノ沈没ハ急卒ナルノミナラス本艦所載ノ汽艇端舟等ハ掃海ノ爲メ陸地ヘ派遣セラレ避難用ニ供スル能ハサリレニ係ラス比較的死亡者ノ少カリシハ一ハ掃海事業時ナリシヲ以テ多數ノ浮標ヲ積載シアリシト一ハ初瀬沈没當時ニ鑑ミ豫メ「ハンモック」ヲ上甲板ニ出シ置キシ等ノ豫備アリシカ爲メナリ今回ノ變災ニ因リ實驗スル所ニ據レハ艦船ノ斯カル變災ニ際シ水中遭難者ノ抱持物トシテハ「ハンモック」ニ如クハナシ空樽「フツシタツプ」木片等ハ水中ニ在テハ容易ニ旋轉シテ常ニ身體ノ位置ヲ變シ易ク爲メニ非常ノ努力ヲ要スルノ缺點アリ毛布ヲ包裹セル「ハンモック」ノ「ゲンパス」ヲ滲透シテ浸水沈没スルノ時間ハ幾何ナルヤ未タ實驗セサル所ナルモ少數ノ時間ニアラサル可シ又沈没當時ニ於ル負傷ノ原因ハ游泳中浮流物體ニ衝突セルニ因ルモノナラン

軍艦海門沈没時溺水戦死者ノ官氏名ハ左ノ如シ、

海軍中佐	高橋守道	海軍一等水兵	徳田吉之助
海軍大主計	塚原喜八	海軍一等水兵	古賀富太郎
海軍上等兵曹	松下善之丞	海軍二等水兵	飛高林七
海軍一等兵曹	宮原峯吉	海軍二等水兵	後藤仁市
海軍一等兵曹	福元幸左衛門	海軍二等水兵	塚本辰熊
海軍三等兵曹	長島長之助	海軍三等水兵	井上又一
海軍一等水兵	徳永善助	海軍二等木工	岡本三之助
海軍一等水兵	小西庄吉	海軍一等機關兵	帖地清次
海軍一等水兵	糸山鶴吉	海軍一等機關兵	山内與保

海軍二等機關兵	稻本松藏	海軍二等機關兵	望月条吉
海軍二等機關兵	中村助太郎	海軍一等看護	浦田藤一

合計 二十二名(自二三三至三四三)

負傷者ノ官氏名傷狀及ヒ入院者入院後ノ經過竝ニ轉歸ハ左ノ如シ、

右足關節捻挫 右下腿擦過傷 右環指挫創(業)

軍艦海門乗組 海軍三等機關兵曹 室田孫次郎(二三三)

明治三十七年七月五日海門沈没ノ際游泳中浮流物體ニ觸レ負傷ス之ヲ診スルニ右足關節捻挫ノ爲メ同關節少シク腫脹シ皮下溢血アリ歩行及ヒ他動運動ニ依リ疼痛ヲ訴ヘ又右足内踝ヲ上方ニ隔ツル二吋ノ部ニ蠶豆大ノ擦過傷アリ右環指掌面ニモ小挫創ヲ認ム七月七日病院船西京丸ニ入院シ八月六日佐世保海軍病院ニ轉院ス當時尙足關節ニ於テ歩行ノ際疼痛ヲ覺エト云フ、八月二十七日全治退院ス 經過日數五十三日

左前額部挫創(業)

同 海軍一等主廚 小原己之吉(二三四)

明治三十七年七月五日海門沈没ノ際游泳中浮流物體ニ衝突シテ負傷ス之ヲ診スルニ前額ノ左側ニ於テ顚顚部ニ近ク長サ三仙迷創縁挫滅シ深サ骨膜ニ達スル挫創アリ七月七日病院船西京丸ニ入院シ創縁ヲ切除シテ縫合ヲ加ヘシニ其ノ一部化膿セルヲ以テ第二期縫合ヲ施シ、ニ瘡合ヲ營ミ八月六日佐世保海軍病院ニ轉院シ十三日全治退院ス 經過日數三十九日

右前額部挫傷 右腸骨櫛部擦過傷

軍艦海門乗組

海軍一等水兵

瀬戸十郎(三四五)

明治三十七年七月五日海門沈没ノ際上甲板前部昇降口ニ衝突シテ負傷ス、之ヲ診スルニ前額左側眉隆起シ距ル上方一時ノ部ニ長サ幅各一、五仙迷ノ挫傷アリ周圍腫脹シ皮膚ニ擦過傷ヲ認メ毛細管出血アリ又右腸骨櫛部ニモ拇指頭大ノ擦過傷アリ七月七日病院船西京丸ニ入院シ十四日全治退院ス 經過日數九日

上口唇挫傷

同

海軍一等水兵

川島國松(一三四六)

明治三十七年七月五日海門沈没ノ際ホールドトップニ於テ砲臺鐵鉋角ニ衝突シテ負傷ス、之ヲ診スルニ上口唇中央部ニ長サ三仙迷幅一、五仙迷ノ横位ノ皮膚剝離傷アリ之ニ對スル口唇粘膜下ニ溢血ヲ認メ七日病院船西京丸ニ入院シ十四日全治退院ス 經過日數九日

左前額、左頬、右足背擦過傷

同

海軍二等水兵

佐伯被五郎(一三四七)

明治三十七年七月五日海門沈没ノ際ホックスルニ於テ掃海用四斗樽ニ衝突シテ負傷ス、之ヲ診スルニ前額左眉外端ヲ上方ニ距ル半時ノ部及ヒ左頬上部竝ニ右足背ニ各蠶豆大ノ眞皮ニ達スル擦過傷ヲ呈シ少量ノ毛細管出血アリ七日病院船西京丸ニ入院シ十四日全治退院ス 經過日數九日

右下顎部挫創(業)

同

海軍一等機關兵曹

山本七三郎(一三四八)

七月五日海門沈没ノ際浮游中或物體ニ衝突シテ負傷ス頤部ヲ距ル半時ノ部ニ於テ長サ三仙迷深サ筋膜ニ達スル挫創アリ創縁銳利ニシテ少量ノ出血アリ依テ石炭酸水洗滌ノ後三針縫合ヲ施シ制腐綳帶ヲ施シ、ニ第一期癒合ヲ以テ七日全治ス 受療日數二日

左鎖骨上窩部擦過傷(業)

同

海軍一等水兵

松本勝平(一三四九)

七月五日海門沈没ノ際浮游中或物體ニ觸レテ負傷ス、之ヲ診スルニ左鎖骨上窩部ニ長サ六仙迷幅三仙迷ノ擦過傷ヲ呈シ微量ノ出血アリ七月十二日全治ス 受療日數七日

左脛骨頭部挫傷(業)

同

海軍一等機關兵

江崎松助(一三五〇)

七月五日海門沈没ノ際浮游中或物體ニ觸レ負傷ス、左脛骨頭部ニ皮下溢血斑アリ該部ニ疼痛ヲ訴フ七月二十一日全治ス 受療日數十六日

左脛部擦過傷(業)

同

海軍一等機關兵

笠井彦太郎(一三五二)

七月五日海門沈没ノ際浮游中或物體ニ觸レテ負傷ス、左下腿前面中央部ニ五厘銅貨大ノ擦過傷アリテ毛細管出血ヲ存ス七月七日全治ス 受療日數二日

第六目 軍艦速鳥

驅逐艦速鳥^(三八)ハ、明治三十七年九月三日午前十時五十五分、小平島沖ヲ十二海里ノ速力ヲ以テ航走中、突然敵ノ敷設セル機械水雷ニ觸レテ爆破シ、艦體ハ中央ヨリ兩斷シテ、汽機室ヨリ沈降ヲ始メ、僅ニ二分時間ヲ出テスシテ全ク艦影ヲ沒セリ、當時其ノ近傍ヲ遊弋セル第五戰隊ノ諸艦及ヒ軍艦霞ハ直ニ救助ニ赴キ、殊ニ軍艦橋立ハ「カッター」二隻ヲ出シテ多數ノ溺者ヲ救助シ、霞モ亦救助艇ヲ送りテ其ノ七名ヲ收容セリ、生存者ハ一旦軍艦橋立ニ收容セラレタル後、嚴島ニ移乘シテ根據地ニ歸著シ、四名ノ傷者ヲ病院船神戸丸ニ送り、其ノ他ヲ臺中丸ニ乗組マシメタリ、遭難當日ハ天候晴朗ニシテ、海上波靜ニ氣溫高シ、海水溫度モ昇騰セルニ關ラス、五十三名ノ乗組員中、二十名ノ戰死者ヲ出シタルハ、水雷ニ觸レテヨリ全ク沈沒スルニ至ルノ間、頗ル急遽ナリシノミナラス、汽機室ヲ爆破セラレテ蒸氣ヲ噴出セル爲メ、汽機室ニ當直勤務中ノ機關部員ヲ擧テ重キ熱傷ヲ負ハシメ、卽死セルカ、若クハ直ニ死ニ至ラサルモ、震盪症ヨリ回復スルノ時ヲ與ヘス、艦ト共ニ葬ラレタルカ爲メナラン、其ノ死傷者ノ機關部員ニ多數ヲ占ムルニ據リテ、慘憺タル爆沈當時ノ實況ヲ推測スルヲ得ヘシ、左ニ戰死者姓名及ヒ傷者ノ狀況經過ノ梗概ヲ掲ク、

軍艦速鳥乗組	海軍中軍醫	石川 宏 平(一九九二)
同	海軍中主計	石 渡 隆 輔(一九九三)
同	海軍兵曹長	津 田 昇(一九九四)

同	海軍一等機關兵曹	神田 清之丞(一九九五)
同	海軍一等機關兵曹	北村 善 吉(一九九六)
同	海軍二等機關兵曹	野田 留 吉(一九九七)
同	海軍二等機關兵曹	野崎 林 藏(一九九八)
同	海軍二等廚宰	只 腰 一 次(一九九九)
同	海軍三等兵曹	北村 六三郎(二〇〇〇)
同	海軍三等兵曹	西 浦 重 次(二〇〇一)
同	海軍三等信號兵曹	高 松 定 吉(二〇〇二)
同	海軍三等信號兵曹	伊藤 長 三郎(二〇〇三)
同	海軍三等機關兵曹	納 唯 次 郎(二〇〇四)
同	海軍三等機關兵曹	木 田 長 松(二〇〇五)
同	海軍一等機關兵曹	吉 澤 彦 四郎(二〇〇六)
同	海軍一等機關兵曹	藤 一(二〇〇七)
同	海軍一等機關兵	足立 福太郎(二〇〇八)
同	海軍二等機關兵	山崎 嘉太郎(二〇〇九)
同	海軍三等機關兵	神藤 源左衛門(二〇一〇)
同	海軍一等機關兵	吉 本 善 吉(二〇一一)

以上二十名ハ速島沈没ノ際戦死シ、死體ヲ收容スル能ハサリシヲ以テ傷溺死ト認定ス、

右拇指挫創兼第二指骨々折 左前膊挫傷

軍艦速島乗組

海軍二等機關兵

高橋 久 義(二〇一三)

明治三十七年九月三日午前十時五十五分速島沈没ノ際負傷シ、嚴島ニ收容セララル、之ヲ診スルニ右拇指第一第二指骨間關節ノ尺骨側ニ起リ第二節ノ背面ニ及セル挫創アリ、掌面ノ皮膚ハ健存シテ兩指節ヲ聯合セシムルモ同指伸筋腱ハ斷タレ第一指骨ノ下半部ハ粉齏セラレテ第一指骨ノ關節面ヲ暴露ス、其ノ他左前膊ノ中央ヨリ腕關節ニ至ル迄一般ニ腫脹シ、壓痛ヲ訴ヘ挫傷面ニ數多ノ擦過傷アリ、骨ニ異常ナシ、依テ創面ヲ清拭シテ皮膚ヲ接著縫合シ、即日病院船神戸丸ニ送院ス、二十日佐世保海軍病院ニ轉院シ、十月六日更ニ舞鶴海軍病院ニ轉療ス、負傷後創面化膿ニ陥リシモ死骨片ヲ摘出セシニ排膿漸次減少シテ拇指ニ不正ノ瘡痕ヲ結ヒ治癒セルヲ以テ三十八年一月二十一日輕快退院ヲ命セラレ、海兵團ニ於テ役務ニ服セシカ患指ノ機能障害ノ爲メ常務ニ堪ヘサルヲ以テ二月二十五日再舞鶴海軍病院ニ入院ス、之ヲ診スルニ拇指第一第二指骨間關節ニ不全強直ヲ貽シ、極度ノ屈曲ヲ營ム能ハス、且外方ニ轉位シ、右拇指球筋ニ瘦削ヲ來シ、握力減少ス、三十八年三月十一日兵役ヲ免セラレ退院ス、經過日數百八十九日、在院日數百五十四日

後頭部挫創

同

海軍一等機關兵曹

乘末 治太郎(二〇一三)

明治三十七年九月三日午前十時五十五分速島沈没ノ際負傷シ、嚴島ニ收容セララル、之ヲ診スルニ

右顱頂結節ノ前上方ニ當リ前後ニ互ル長サ三仙迷ノ挫創アリ、深サ骨膜ニ達ス、依テ創面ヲ清拭シ、縫合ヲ施シテ同日病院船神戸丸ニ送院ス、第一期癒合ヲ營ムヲ以テ十七日臺中丸ニ向ケ全治退院ス、經過日數十四日

面部、左前膊部湯潑傷

同

海軍二等機關兵曹

濱岡 莊之助(二〇一四)

明治三十七年九月三日午前十時五十五分速島沈没ノ際汽管破裂シテ噴出セル蒸氣ニ由リ負傷シ、嚴島ニ收容セララル、之ヲ診スルニ左顱骨部及ヒ顱部ニ天保錢大ノ水泡ヲ形成シ、左外耳輪ヨリ乳頭突起ニ互ルノ部及ヒ左手背面ト小頭球部トニ第一度乃至第二度ノ湯潑傷アリ、仍テ水泡ヲ穿刺シ「ピクリン」酸水濕布ヲ貼シ、同日病院船神戸丸ニ送院シ、ニ熱傷面凡テ乾燥治癒セルヲ以テ九月十七日臺中丸ニ全治退院ス、經過日數十四日

左鼓膜裂創 右顱頂部挫創 面部、頸部、左右前膊、右肩胛部湯潑傷

同

海軍一等機關兵

長谷川 退藏(二〇一五)

明治三十七年九月三日速島沈没ノ際噴出セル蒸氣ニ觸レテ負傷シ、嚴島ニ收容セララル、之ヲ診スルニ頭部顔面及ヒ顱部ハ外耳翼ヲ併セテ其ノ左半部ニ第二度ノ湯潑傷ヲ負ヒ、左外耳道ハ石炭粉末ヲ以テ充塞セラレ、左鼓膜ノ前上部ニ穿孔アリ、聽力ニ百分ノ零ヲ示ス、又顱頂結節ノ少シク前方ニ前後ニ互ル長サ五仙迷ノ挫創アリ、深サ骨膜ニ達シ、何レモ炭末ヲ附著ス、其ノ他右肩胛部右上膊及ヒ左腕背面ニモ第一度乃至第二度ノ湯潑傷ヲ存ス、同日病院船神戸丸ニ入院シ、二十日

佐世保海軍病院ニ轉シ十月六日更ニ横須賀海軍病院ニ轉療ス當時挫創ハ痕痕ニ轉歸シ湯潑傷而已ニ乾燥シテ赤色ノ表皮剝脫面ヲ呈ス左鼓膜臍ノ上方ニ帽子針頭大ノ穿孔アリ穿孔ノ周圍及ヒ外耳道ノ上壁充血スルモ排膿ナシ聽力少シク減弱ス適應加療ノ末鼓膜ノ穿孔閉鎖シ聽力健態ニ復シテ十月二十八日全治退院ス 經過日數五十五日

顛頂部挫創(業)

軍艦速島乗組

海軍中尉

森 下 基

一(三〇一六)

九月三日速島沈没ノ當時艦橋ニアリテ激動ヲ感セシニヨリ回顧スレハ艦ハ罐部ヨリ盛ニ蒸氣ヲ漏ラシ次テ中央部ヨリ折斷シテ沈没スルヤ一旦深ク海中ニ沈ミ再浮上レル時浮流セル木材ニ觸レテ負傷ス顛頂部ノ中央ニ長サ約二仙迷ノ挫創アリ嚴島ニ於テ縫合ヲ施サレ其ノ後少シク漿液ヲ泄ラスノミ第一期癒合ヲ營ミ九月六日全治ス 受療日數三日

腰部挫傷 左下腿擦過傷(業)

同

海軍一等兵曹

森 家 里

吉(三〇一七)

九月三日速島沈没ノ當時後部下士官室ニ在リテ帳簿ノ事務ヲ執レル際俄然激動ヲ感シタルヲ以テ直ニ上甲板ニ逸出シ防水扉閉方ノ命ヲ傳令中艦體ハ次第二中央ニ陷入シ折半シテ直立狀トナリ海中ニ吸引セララルト共ニ負傷ス嚴島ニ於テ之ヲ診スルニ腰部ニ挫傷アリテ肌熱高ク疼痛アリ左下腿内側ニ擦過傷ヲ存ス石炭酸水濕布ヲ施シニ九月十日全治ス 受療日數七日

左右肩胛部、右肘關節部擦過傷(業)

同

海軍一等筆記

塙

善 次(三〇一八)

九月三日速島沈没當時下甲板ニ在リ突然激動ヲ感シタルヲ以テ上甲板ニ逸出シ士官室ニ至リ要書類ヲ蒐集セントセルモ艦體既ニ傾斜シテ其ノ意ヲ果サス中主計ト共ニ「オシユタツ」ヲ取リ救命用トナサントスルノ際艦體折半直立シ海中ニ吸引セラレ游泳中他物ニ衝突シテ左右肩胛部及ヒ右肘關節部ノ皮膚ニ擦過傷ヲ負フ仍テ無腐的裝創法ヲ施シニ九月五日全治ス 受療日數二日

右腓腸部挫傷(業)

同

海軍二等機關兵曹

外

實 光(三〇一九)

九月三日速島沈没ノ際次直員トシテ後部下甲板ニ在リテ食事中激動ヲ感シ上甲板ニ昇レハ艦體既ニ折半シテ直立狀トナレルヲ以テ海中ニ投シタルニ何物ニカ衝突シテ右腓腸部ニ挫傷ヲ受ケ疼痛アリ歩行ニ困難ヲ感セリ依テ石炭酸水濕布ヲ處セシニ九月八日全治ス 受療日數五日

顛頂部挫創(業)

同

海軍三等兵曹

瀧 田 竹 次 郎(三〇二〇)

九月三日速島沈没ノ際非直員トシテ下甲板ニ在リ激動ヲ感シテ上甲板ニ逸出シ前艦橋下ニ於テ用具箱ニテ顛頂部ヲ打撲シ負傷ス顛頂後頭縫合部ニ近ク少シク左側ニ偏シ直徑三仙迷ノ挫

傷ヲ存ス依テ綑帶ヲ施シ、ニ九月十二日全治ス 受療日數九日

左下腿擦過傷(業)

軍艦速鳥乗組 海軍一等機關兵 加納文四郎(二〇二二)

九月三日速鳥沈没ノ際次直員トシテ下甲板前部ニ在リテ當番食ヲ爲シ、カ激動ヲ感シタルヲ以テ上甲板ニ逸出セル際ハ艦體半ハ沈没シテ前半部ハ直立ノ狀トナリ海中ニ吸引セラレ浮キ上レル時、ギヤ箱ニ觸レテ負傷ス、之ヲ診スルニ左下腿内側中央部ヨリ内踝ニ互ル擦過傷ヲ負フ、依テ石炭酸水罌法ヲ處セシニ九月九日全治ス 受療日數六日

左眼骨部擦過傷 兩鼓膜充血(業)

同 海軍一等機關兵 藤田小市(二〇二三)

九月三日速鳥沈没ノ際非直員トシテ士官室便所ヲ修理中激動ヲ感シ上甲板ニ至リ顛倒セシモノト覺ユ艦ノ沈没ト共ニ後部ヨリ海中ニ投シ霞ノ端舟ニ救助セラレタル際海水ヲ吐逆セリ左眼骨部皮膚ニ擦過傷ヲ負ヒ耳痛アリ左右鼓膜ノ充血スルヲ認ム九月九日全治ス 受療日數六日

前額部挫創(業)

同 海軍二等機關兵 關本龜吉(二〇二四)

九月三日速鳥沈没ノ際非直員トシテ前部下甲板ニアリテ休養中激動ヲ感シタルヲ以テ上甲板ニ逸出セル時ハ艦體ハ折半シタル儘右舷ニ傾斜シ顛覆スルト共ニ海中ニ沈溺シ艦橋ニ支ヘラ

レテ暫ク浮揚ル能ハサリシモ終ニ浮出ノ途ヲ求メ辛ウシテ海面ニ出タリト云フ海中ニ没スルノ際艦橋ノ某部ニ觸レ左前額ニ負傷シ長サ二仙迷ノ挫創ヲ有スルモ九月十二日全治ス 受療日數九日

顛頂部挫創(業)

同 海軍二等機關兵 廣瀬梁吉(二〇二五)

九月三日速鳥沈没ノ際非直員トシテ廚房ニ在リ激動ノ爲メ甲板ニ衝突負傷セルモ直ニ上甲板ニ逸出シタル時ハ既ニ蒸氣噴出ノ爲メ前部甲板ニ赴クヲ得ス間モナク艦體ハ折半シ中軍醫中主計共ノ他七八人ト共ニ後部上甲板ニ在リタルニ中央部陥没ノ爲メ後尾直立シ海中ニ沈溺セリ、之ヲ診スルニ顛頂中央ヨリ右側ニ偏シ三仙迷ノ挫創アリ創口ハ哆開ス、依テ制腐綑帶ヲ施シシニ九月七日全治ス 受療日數四日

右下腿刺創 臀部擦過傷(業)

同 海軍三等機關兵 長澤貴一(二〇二六)

九月三日速鳥遭難ノ際非直員トシテ前部下甲板ニ在リ激動ヲ感シ上甲板ニ逸出セル際ハ艦體前半部已ニ直立ノ狀トナリタルヲ以テ次第ニ前部ニ登リ行キタルモ遂ニ身體ヲ支持スル能ハスシテ海中ニ投シ一旦深ク吸引セラレタルモ辛ウシテ浮上スルヲ得タリ投入ノ際浮流セル木片若クハ釘狀物ニテ右下腿外側ニ刺創ヲ負ヒ又臀部ニ小擦過傷ヲ蒙ル、依テ制腐綑帶ヲ施シ、ニ九月九日全治ス 受療日數六日

右前脛部挫傷

軍艦速鳥乗組

司令給仕 指 方 前 夫(三〇二六)

九月三日速鳥沈没ノ當時後部上甲板ニ於テ中主計ト共ニ犬ト戯レツ、アリシニ急ニ激動ヲ感シテ顛倒セリ此ノ時中軍醫ハ士官室ヨリ逸出シ來會セルヲ以テ共ニ「フッシタッブ」ヲ投入セシカ危険ニ迫ルヲ以テ先ツ左舷側ヨリ海中ニ投シタリシニ同時ニ艦ハ右舷ニ傾斜覆没セルヲ以テ幸ニ恙ナキヲ得タリ、負傷ハ初メ顛倒セル際右前脛部ニ挫傷ヲ負ヒタルモノニシテ皮膚稍黒變セルノミ疼痛アリ、九月五日全治ス 受療日數二日

第七目 軍艦平遠

砲艦平遠(二八)ハ濟遠ニ隨ヒ、雙島灣方面ノ警戒監視ニ任シタリシカ、三十七年九月十八日午後七時四十分頃鐵島ノ南西約一海里半ノ位置ニ於テ、浮流セル機械水雷忽然右舷側中央部ニ觸レテ爆發シ、僅ニ四分間ヲ出テスシテ船體全ク沈没セリ、遭難ノ當時海上風波強暴ヲ極メ、剩ヘ單艦航海中ナリシヲ以テ、百方避難ノ方法ヲ講スルモ寸效ナク、二百一名ノ在艦者中、僅ニ四名ノ下士卒ノミ礁脈島ニ漂著シ、萬死ニ一生ヲ得テ、當夜遭難ノ慘況ヲ語レル外總員盡ク殉難セリ、其ノ顛末ニ關シ、左ニ濟遠軍醫長海軍大軍醫境野寬提出ノ報告ヲ掲ク、

軍艦平遠遭難者救助ノ顛末

軍艦濟遠軍醫長海軍大軍醫 境 野 寬

軍艦平遠ハ九月九日午後我カ支隊ニ來リ合シ砲力ノ優勢ナルヲ以テ大ニ支隊ノ爲メニ望ヲ屬セラレ共ニ雙島灣沖ニ遊弋シテ警戒監視ノ任ニアリ十八日濟遠ハハドソン角ニアリ平遠ハ哨艦當直ノ任ニ當リ雙島灣沖ニ出テ、敵ヲ監視

シツ、アリ午後七時頃ヨリ艦首ヲ北方ニ轉シ鐵島ヲ東ニ見テ北進スルヲ認メタリシカ同七時四十五分ヨリ鐵島ニ遮ラレテ艦形ヲ見失ヘリト云フ然ルニ夕方ヨリ吹キ募レル暴風ノ爲メ濟遠ハ午後十一時五十分鐘地ヲ變更セント欲シハドソン角ヲ拔錨シ十九日午前一時三十二分ムルチソン島ニ投錨ス而テ同日朝ニ至ルモ平遠ノ姿ヲ認メサルヲ以テ午前八時三十二分同島ヲ拔錨シテ董家口附近ニ北航シ搜索シタルモ見當ラス更ニ午後零時二十分雙島灣沖ニ達シタルモ依然平遠ノ行衛不明ナリキ而テ第三軍第二回援助砲撃ヲ終リセントアツプス角ヨリ沖合ニ出テ來リタルトキ礁脈島ノ正東二海里ノ處ニ於テ死體ヲ容ル、端舟ヲ發見シタルヲ以テ該死體ヲ引上ケタルニ裸體ナリシモ腹卷ニ「横志八六二」小川名定二郎ノ「マーク」ヲ附シアリ且該端舟ハ平遠ノモノナルヲ確メ又其ノ附近ニ「スカイライト」一個釣床數本ノ浮流セルヲ發見シタルヲ以テ始テ平遠ハ此ノ附近ニテ沈没セルコトヲ想像セシメタリ然レトモ當時ノ天候險惡ニシテ怒濤艦體ヲ翻弄シ利ヘ日没ニ近ツクヲ以テ搜索ヲ止メ午後六時二分此ノ地點ヲ發シテ八時四十七分赤城ト共ニムルチソン島ニ著ス

死體ノ檢案ハ直ニ施行シ先ツ「ギア」箱ニ納メ上甲板ニ安置シ投錨後遺變ヲ剪リ石炭酸水ヲ撒布シ毛布ニテ裹ミ假ニ蓋ヲ釘附ケシテ翌朝ヲ俟テリ

二十日朝風力尙衰ヘス且平遠ヲ搜索スヘキ任務アリテ到底死體ノ火葬ヲ豫定シ能ハサルヲ以テムルチソン島碇泊中死體ヲ「ギア」箱ヨリ出シ赤毛布二枚ニ包ミ更ニ釣床ニテ包ミ腹卷ニ入レアリシ守札ノ内一枚ヲ胸部ニ約八貫目ノ球錘ヲ足部ニ入レ之ヲ縫合シテ索ヲ附シ此ノ索ヲ以テ吊セハ頭部ハ上方ニ來ル可クナシ午前十時三十分總員整列ノ前ニ後甲板ヨリ水葬ス腹卷守札遺變ハ遺物トシテ郷里ニ送ラントス

午後零時三十分ムルチソン島ヲ發シ風波ヲ冒シテ雙島灣沖ニ達セントセシニハドソン角附近ニテ浮流セル機械水雷三個ヲ爆沈シタルカ如キ危險ヲ冒シテ二號假裝砲艦ト共ニ平遠ノ搜索ニ從事ス

午後四時過二號砲艦ヨリ「礁脈島」ニ避難者ヲシキモノアリトノ報ニ接シタリ是ニ於テ本官ハ廚宰ニ粥ノ用意ヲ命シ

置キ四時五十分萩原三等看護手ヲ率井携帶藥籠毛布七枚葡萄酒二本武蘭垓一本「グリーンム」ヲ湯ニ溶セシモノ約一升五合ヲ水筒三個ニ分納セシモノ及ヒ水筒一個ヲ携ヘテ端舟ニ乗リ怒濤ノ上ヲ二號砲艦ニ牽カレテ磯脈島ニ近ツキタルニ山嶺ニ數個ノ人影ヲ認メタリ頓テ彼等ヨリ徒手旗信號ヲナシ浪少キ方面ヲ報スル等急ニ避難者ニ相違ナキヲ知り衆勇躍躍艇ヲ同島ノ東端ヨリ砲艦ヲ離レ風向ニ反セル面(南)ニ回航セシニ果シテ少シク灣形ヲナス處アリ水深クシテ殆ト浪ナシ艇ノ陸岸ニ近ツクヤ否ヤ避難者ハ斷崖ヲ下リ來リタルニ僅ニ四名ノミニシテ或ハ毛布ヲ纏ヒ或ハ縮ミ「シヤツ」一枚ヲ著セリ一見同情ノ感ニ堪ヘサリキ頓テ艇ノ未ダ陸ニ著カサルニ彼等ハ躍リテ艇内ニ入ラントスルヲ制シ其ノ安全ヲ俟チテ之ヲ收容シタリ時ニ午後六時二十分ナリ其ヨリ再假裝砲艦ニ牽カレテ午後七時十七分歸艦シ病室ニ於テ一應診察シ制服ヲ與ヘラレ次テ粥食及ヒ鵝卵ヲ食セシメ此ノ夜ハ何事ヲモ問フコトヲ止メ靜ニ病室ニ安眠セシム

本艦ハ端舟ノ歸艦ト同時ニ錨地ニ向ヒ午後九時五十分ムルチソン島ニ著ス
左ニ氏名收容當時ノ處置各自ノ陳述等ニ就テ記載セン

(一)生存者ノ官職氏名傷名收容當時ノ服裝

軍艦平遠掌砲長 海軍一等兵曹 小 松 金 助
右ハ兩大腿下腿及ヒ臀部表皮剝脫創ヲ負ヒタレトモ既ニ乾燥シ化膿ノ兆ナシ縮ミ「シヤツ」一、腹卷一及ヒ猿股ヲ著スルノミ

同 機關部先任下士 一等機關兵曹 茂 木 泰 藏
右ハ兩下腿表皮剝脫創及ヒ左胸前面挫創ヲ負ヒタレトモ極テ微傷ニシテ殆ト治療ノ要ナシ煙管服及ヒ靴下ヲ著スルノミ

同 乘組 三等水兵 戸 松 啓

右ハ右小指挫創(第一第二指骨間關節ノ外面ニ横ニ淺キ創面)及ヒ右踰趾爪節ノ蹠面ニ一仙迷ノ切創ヲ負ヒ右足内踝ニ表皮剝脫創ヲ有ス(功醫ヲ施)縮ミ「シヤツ」袴下、事業服ノ上衣ヲ著ス

同 乘組 二等主廚 田 中 重 三 郎

右ハ兩前膊及ヒ兩足部ニ表皮剝脫創ヲ負ヒタレトモ既ニ乾燥シ「シヤツ」及ヒ事業服ノ上下ヲ著用ス以上四名共ニ背腰部ノ鈍痛ヲ訴ヘタリ表皮剝脫創ハ孰レモ線狀ヲナシテ散在シ皆磯脈島ノ岸ニ於テ岩石ニ衝突シ負傷シタルモノナラント云フ茂木泰藏ノ胸部挫傷ハ釣床ヲ抱ヘテ長ク漂流セシニヨル

(二)端舟ニ收容當時ノ狀態 四人共ニ極テ健全ノ容貌ヲ呈シ疲勞ノ狀態モ見エス負傷ハ手足ノ微傷ニシテ直ニ處置スヘキ必要モ認メス取敢ヘス携帶シタル「グリーンム」及ヒ葡萄酒ヲ與ヘタルニ喜ンテ共ノ數椀ヲ傾ケ盡シタリ其ノ量歸艦迄一時間ニ「グリーンム」約三合葡萄酒約一合ヲ、ヲ用ヒタリ又七枚ノ毛布ヲ與ヘテ纏ハシメ二號砲艦ヨリ更ニ四枚ノ毛布ヲ借り是ニ於テ每一人三枚餘ノ毛布(彼等ノ有セルモノ二枚、本艦ヨリ携ヘタ)ヲ纏フコトヲ得タリ

(三)避難者各自ノ陳述

小松金助 十八日午後七時四十分頃平遠ハ警戒地ヲ引上ケ錨地ニ向ハントシ磯島ノ南西約一海里半ノ處ニ來リタルトキ轟然爆沈シタルモノニシテ上甲板ニアリタルモノハ撒キ揚ケラル、程ナリキ當時金助ハ下甲板倉庫ニ於テ新聞紙閱覽中ナリシカ同時ニ電燈消エ蒸氣噴出シタルヲ以テ驚キテ上甲板ニ出テタルニ風雨劇シク且暗黒辛ウシテ人聲ヲ聞クノミニシテ物色ス可カラサリキ艦體ハ右舷ニ傾斜シ後部ヨリ沈没ヲ始メタルヲ認メ最後ノ決心トシテ右舷海中ニ飛入リタリレカ頓テ右舷「ダビット」倒レ掛リタレトモ之ヲ避ケタリレカ再左舷「ダビット」ノ傾キ來ルモノアリシカ遂ニ之ヲモ避クルコトヲ得タリ而テ顛覆セル短舟ノ「キール」「スカイライイト」等ニ多人數寄り集ルモノヲ見タレトモ到底不可能ナルヘキヲ知り身邊ニ來レル戸扉ヲシキモノ一枚ニ取リ附キ潮流ニ任せ浮遊セリ然レニ老鐵山水道ノ方向ニ向フヲ以テ聊カ落膽セシカ暫クシテ潮流ノ變化ニ遇ヒ磯脈島ニ向ヒ漂流シ來リ岩石ノ間ナ

ルヲ確メタルヲ以テ之ニ打附ケラレテ身ヲ碎クコトナキヲ期シ約一時間ヲ要シ辛ウシテ岩ト岩トノ間ニ安全ニ上陸スルコトヲ得タリ時二十九日午前一二時頃ナランカト思フ漂流スルコト約六時間上陸ヲ得テ直ニ近邊ノ雜草少許ヲ集メテ敷物トナシ觀衣濕潤ノマ、之ニ臥シテ夜ヲ徹シタレトモ眠ルコトモナク又大ナル苦痛ヲモ感セサリト云フ

茂木泰藏 平遠爆沈ノ當時機關室ニ於テ當直中ナリシカ右舷機關室附近ヨリ海水一時ニ侵入シ忽ニシテ下甲板以上ノ高サニ達シ諸種ノ汽管破裂セシモノ、如ク下甲板一面ノ蒸氣ヲ以テ充タサレタリ暫時ニシテ「ストップ」ノ令艦橋ヨリ傳ハリシヲ以テ「バルブ」ヲ閉チ侵入セル海水ニ追ハレテ上甲板ニ出テ最後ノ手段トシテ海中ニ飛込ミ漂流セル釣床ヲ左ニ抱ヘタルマ、右手ヲ操リ潮流ニ從ヒツ、アリ約五時間位ニシテ礁脈島ニ漂著セリ即チ足跡砂地ヲ踏ムニ至リ喜ヒ道ヒテ上陸シ其ノ儘天明ヲ俟テリ

戸松啓 遭難ノ當時ハ同輩ト雜談セントテ前部賄所ニ行クヤ否ヤ爆發ノ爲メ最上甲板ニ移リシカ間モナク海中ニ轉落シ「同水中ニ没セシモ辛ウシテ水面ニ出テ六尺位ノ圓材ニ取附キタリ此ノ時多クノ叫聲ヲ聞キ釣床「ピズケツ」箱等ヲ持チ來ルアリ「スカイライト」ニ身ヲ託セルモノ等アルヲ認メタリ自分ハ三等水兵石田豐三郎機關兵時田某ト共ニ更ニ浮流セル「ボート」ノ「ショアポール」ニ取附キ約二時間程流レタル後風向キ變シテ礁脈島ニ吹キ附ケラレ陸岸四五間ノ處迄ハ他ノ二人アリシカ共ヨリ見失ヒタリト云フ此ノ夜月入りタル後岩石ノ間ニ漂著シタルモ腰立タス其ノマ、徹夜シ翌朝初テ茂木兵曹ニ逢フ

田中重三郎 准士官室前ニ於テ談話中爆發ヲ聞キ第二「ハッチ」ヨリ上甲板ニ出テタルニ電燈消エ蒸氣噴出スルノ慘狀ヲ極メタリ「ボート」ハ半ハ下リタレトモ人多ク剩ヘ水充チ航海士ノ指揮スルヲ認メタレトモ不可能ナルヘキヲ覺リ徒手海ニ投シ板倉看護手池島二等水兵ト共ニ「ボート」ノ「ショアポール」ニ取附キ礁脈島ニ向ハントシタレトモ逆風ニシテ向フ可カラス轉シテ礁脈島ニ向ハントシタルトキ三等水兵某又來レリ波浪高キ爲メ幾度カ水ヲ

飲ミ困難セシモ礁脈島ノ近邊ニ於テ釣床ノ流レ來ルモノアリ獨リ之ヲ抱キテ同島ノ南端ニ漂著スルコトヲ得タリ此ノ時既ニ月ナカリシト云フ漂著地ハ礁脈島南端ノ岩石ニシテ岩上多人數アルカ如ク聞ユレトモ尙泳カサレハ陸岸ニ達ス可カラス呼ヘトモ答フルモノナシ此ノ夜ハ此ノ岩石ノ間ニ潛ミ翌日午前十時頃泳キテ他ノ避難者アル處ニ達セリ

以上ヲ綜合スルニ平遠ハ雙島灣沖警戒監視中九月十八日午後七時四十分頃鐵島ノ南西約二海里半ノ處ニ於テ機械水雷ニ觸レ僅ニ四分間許ニシテ沈没シタルモノニシテ當時暗夜ニ加フルニ暴風雨ヲ以テシ當直ノモノ、外ハ上甲板ニアラス釣床ハ卸シアリタルノ時ニシテ多數ノ兵員上甲板右舷ニ群集シ右舷ヨリ海中ニ飛入りタレトモ二百名許ノ乗員中幸ニ生ヲ全ウスルヲ得タルハ僅ニ四人(皆游泳ヲ能クス)ニ過キス上甲板ニ出ツルコトヲ得サリレモノモ多カルヘク海中ニ飛込ミシモノモ大ナル「スカイライト」木片等ニ取附キタルモノ端舟ヲ頼ミシタルモノ等ハ覆没若クハ操舵不自由(木片ニ)ノ爲メ却テ沖合ニ押流サレタルカ如ク或ハ割合ニ近キ鐵島ニ上陸セントシテ逆風ニ立チシ爲メ目的ヲ達セサリシナルヘシト云フ

生存者ノ四名ハ皆約五六時間海中ニ漂ヒタルモ屢釣床、木板等ニ身ヲ託シタルマ、爆急セス片手ニテ舵ヲ取ル位ニ止メタルモノナリ四人共ニ此ノ間四五回位ツ、足蹠コーラカヘリニ罹リタルモノ忽チ回復シ潮流ノ具合ニヤ時々海水ノ溫暖ト寒冷トヲ感シタリト云フ鐵島礁脈島等ハ高キ山ナレトモ波間ニ没スル爲メ時々位置ヲ見失ヒタリト云フ礁脈島ニ於テ四人共ニ會同セシハ十九日午前十時頃ニシテ共ヨリ山嶺ニ上リ近海ヲ遊弋スル假裝砲艦ニ向テ呼ヘトモ信號スレトモ遂ニ發見セラレス二十日夕方假裝砲艦カ本艦端舟ヲ率非テ航行スルヲ認メ前記ノ如ク波ナキ處ナドヲ信號シ共ノ受信ヲ見テ始テ蘇生ノ思ヒヲ爲シト云フ

避難者四人ハ十八日夕食ヲ喫セシノミニシテ二十日夕方救助ノ時「グリーン」ヲ與フルマテ約四十六時間絶食シタレトモ二十日正午頃迄差シタル飢餓ヲ感セサリシカ共ノ後著シク飢餓ト寒冷トヲ感シ此ノ際海岸ニアル「ツブ」ト稱ス

ル田螺様ノ貝類ヲ各自二十個許ツ、食シ大ニ元氣ヲ回復シタリト云フ水ハ十九日四人會合ノ後互ニ探検シテ斷崖ヨリ落下スル涓滴ヲ得タリト云フ著衣ハ「一」ニ記セルカ如ク漂流ノ時海水ニ濡ヒタルマ、脱セス體溫ニテ乾燥スルニ至レリ又釣床ヲ携ヘ來リレ一人ハ波浪ノ爲メ海中ニ失ヒ一人ハ取上ケタレトモ常ニ一枚ハ艦内ニテ取出シ置キタル爲メ僅ニ二枚ヲ得タルノミ一人ハ偶漂著セル上衣(此ハ端舟ニアリシ死者小川名定二郎ノモノ)ヲ纏ヒテ僅ニ防寒ノ用ニ充テタリ生存者ノ言ニヨレハ礁脈島ノ北岸ニ死體五個漂著シタリト云フ然レトモ救助當時及ヒ其ノ後モ激浪ノ爲メ近寄ル可カラステ候ノ回復ヲ待チテ處置スルコト、セラレタリ

又本日生存者中ノ下士二名ハ雙島海岸ニ至リ死體其ノ他ノ漂著物件ノ探検ニ赴キタレトモ未タ歸リ來ラス
前記生存者ノ外ニ此ノ慘禍ニ關係セサリシモノハ哨艇トシテ鳩灣方面ニ派遣セラレタル中村少尉外下士卒八名ナリ
左ニ十八日ヨリ二十日ニ至ル天候表ヲ掲ク礁脈島ト殆ト大差ナカルヘシ但礁脈島ハ鐵島ト老鐵山トノ間ニアル一小無人島ナリ

九月	天	候	正午氣壓	氣				正午乾球	同濕球	主ナル風向	風力	本艦位置
				午前	午後	午後	午後					
十八日	雨	午前正午午後 曇 暴風雨	二九・九三	四時 七六	八時 七四	十二時 七三	八時 七〇	七二	六八	西北	一六	雙島沖ヨリナルチン島ノ間
十九日	曇	強風	二九・九九	七三	六六	七三	六〇	六九	六二	北	二四	
二十日	同		二九・八〇	七〇	六九	六八	七四	六四	六二	西	二七	

(附) 十八日午後八時頃即チ遭難當時ノ海水溫度七十度風向北々東、風力五、潮ハ南東ノ方ニ流レ其ノ速力約三節
内外ナリ

軍艦平遠沈没ノ際戦死者ノ官姓名ハ左ノ如シ、

海軍大佐	淺羽金三郎	海軍一等兵曹	蘇武利助
海軍大尉	飯山仁三郎	海軍一等信號兵曹	大泉橋三郎
海軍大尉	毛利陽二	海軍一等信號兵曹	石卷止
海軍大尉	原斌	海軍一等機關兵曹	井上留吉
海軍大機關士	香山直一	海軍一等機關兵曹	中島十太郎
海軍大軍醫	西内條綱	海軍一等廚宰	大島猪之助
海軍大主計	佐藤陸象	海軍二等兵曹	加藤友平
海軍中尉	石田平	海軍二等兵曹	芳賀助太夫
海軍中機關士	齋田都彦	海軍二等兵曹	池谷良助
海軍少尉	中川二郎	海軍二等兵曹	小田權右衛門
海軍少機關士	牧之瀬金藏	海軍二等信號兵曹	中山市太郎
海軍機關兵曹長	成瀬兼吉	海軍二等機關兵曹	青田彦三郎
海軍上等兵曹	長瀬佐平	海軍二等機關兵曹	山田啓五郎
海軍上等兵曹	渡部彌一郎	海軍二等機關兵曹	平木定吉
海軍船匠師	兼尾喜之助	海軍二等機關兵曹	出口古壽
海軍上等機關兵曹	四元仲左衛門	海軍二等機關兵曹	中崎次助
海軍二等兵曹	吉田正二	海軍二等筆記	瀧田巳之吉
海軍一等兵曹	山本松藏	海軍二等廚宰	松浦幸吉
海軍一等兵曹	澁谷長四郎	海軍三等兵曹	金澤乙之助

海軍三等兵曹	辻 本 杉 次
海軍三等兵曹	照 井 丹 治
海軍三等兵曹	筒 井 貞 藏
海軍三等兵曹	佐 藤 寅 之 助
海軍三等兵曹	荒 川 庄 三 郎
海軍三等兵曹	安 齋 藤 七
海軍三等兵曹	薄 寅 三 郎
海軍三等兵曹	藤 澤 大 司
海軍三等機關兵曹	佐 藤 政 十 郎
海軍三等機關兵曹	大 上 謙 造
海軍三等機關兵曹	榎 本 信 太 郎
海軍三等機關兵曹	雜 賀 金 藏
海軍三等看護手	板 倉 次 平
海軍一等水兵	武 藤 平 兵 衛
海軍一等水兵	藤 森 辰 造
海軍一等水兵	加 藤 福 太 郎
海軍一等水兵	野 村 虎 吉
海軍一等水兵	山 本 仲 治
海軍一等水兵	松 原 武 左 衛 門

海軍一等水兵	佐 藤 忠
海軍一等水兵	河 野 善 治
海軍一等水兵	土 屋 龜 吉
海軍一等水兵	武 内 末 太 郎
海軍一等信號兵	松 村 龜 之 助
海軍一等信號兵	久 光 希 一
海軍一等信號兵	服 部 喜 市
海軍一等木工	川 名 運 治 郎
海軍一等機關兵	渡 邊 綱 吉
海軍一等機關兵	佐 藤 政 義
海軍一等機關兵	淺 野 三 代 三 郎
海軍一等機關兵	粕 谷 拾 吉
海軍一等機關兵	渡 邊 健 策
海軍一等機關兵	山 本 幸 造
海軍一等機關兵	伊 藤 吉 作
海軍一等機關兵	田 邊 長 吉
海軍一等主廚	太 田 文 之 助
海軍一等主廚	千 葉 古 壽
海軍一等主廚	淺 野 七 右 衛 門

第八章 第二節 第七目 軍艦平遠

海軍二等水兵	小 島 民 藏
海軍二等水兵	木 部 忠 治
海軍二等水兵	川 村 兼 松
海軍二等水兵	茅 根 賢
海軍二等水兵	内 野 三 之 助
海軍二等水兵	川 崎 宗 治
海軍二等水兵	野 川 七 五 郎
海軍二等水兵	遠 藤 宇 一
海軍二等水兵	森 山 辰 右 衛 門
海軍二等水兵	山 田 周 藏
海軍二等水兵	佐 野 八 郎
海軍二等水兵	山 田 德 次
海軍二等水兵	池 島 五 郎
海軍二等水兵	古 川 仁 之 助
海軍二等水兵	濱 野 連 次 郎
海軍二等水兵	古 谷 野 三 郎
海軍二等水兵	對 馬 藤 吉 郎
海軍二等水兵	須 賀 磯 五 郎
海軍二等水兵	外 山 石 松

海軍二等水兵	庄 子 喜 平
海軍二等水兵	佐 藤 千 代
海軍二等水兵	笠 原 文 八
海軍二等水兵	遠 藤 甚 二 郎
海軍二等水兵	片 石 菊 次 郎
海軍二等水兵	小 野 六 郎
海軍二等水兵	村 田 藤 吉
海軍二等水兵	黒 澤 住 之 助
海軍二等信號兵	三 田 脩 吾
海軍二等木工	一 條 清
海軍二等木工	青 山 代 十 郎
海軍二等機關兵	木 村 松 治
海軍二等機關兵	遠 藤 繁 吉
海軍二等機關兵	服 部 豐 次 郎
海軍二等機關兵	森 太 利 松
海軍二等機關兵	松 澤 堆 三
海軍二等機關兵	小 森 安 平
海軍二等機關兵	鈴 木 永 吉
海軍二等機關兵	入 野 守 太 郎

海軍二等機關兵	米澤源吉
海軍二等機關兵	松本已之松
海軍二等機關兵	近藤芳藏
海軍二等機關兵	木村清
海軍二等機關兵	米良豐作
海軍二等機關兵	大橋祥司
海軍二等機關兵	人見彰一
海軍二等看護	魚住市太郎
海軍二等主廚	大倉常次
海軍二等主廚	武藤辰次郎
海軍三等水兵	山本武助
海軍三等水兵	島村金五郎
海軍三等水兵	坂井熊吉
海軍三等水兵	大磯久三郎
海軍三等水兵	石田豐次郎
海軍三等水兵	村松左一
海軍三等水兵	加藤義三郎
海軍三等水兵	岩瀬房吉
海軍三等水兵	小高喜太郎

海軍三等水兵	杉山彦四郎
海軍三等水兵	太田琴治郎
海軍三等水兵	水野梅吉
海軍三等水兵	日向寺末吉
海軍三等水兵	高見金五郎
海軍三等水兵	立松甚太郎
海軍三等水兵	楠見辰藏
海軍三等水兵	登才吉
海軍三等水兵	小倉文二郎
海軍三等水兵	大水乙松
海軍三等水兵	野末良平
海軍三等水兵	勝山清藏
海軍三等水兵	君塚作治
海軍三等水兵	中村吉男
海軍三等水兵	三浦末太郎
海軍三等水兵	金澤由藏
海軍三等水兵	渡邊留志
海軍三等水兵	佐藤養太郎
海軍三等水兵	西口春吉

海軍三等水兵	片桐喜造
海軍三等水兵	宮川末藏
海軍三等水兵	久保田勝之助
海軍三等水兵	鈴木宗重
海軍三等水兵	淺井銳三郎
海軍三等水兵	伊澤治之助
海軍三等水兵	森仲吉
海軍三等水兵	小川名定三郎
海軍三等水兵	石井梅次郎
海軍三等水兵	梅津和兵衛
海軍三等水兵	相馬富太郎
海軍三等水兵	水谷徳松
海軍三等水兵	茅守房吉
海軍三等信號兵	平山房次
海軍三等信號兵	出浦猿十
海軍三等木工	浦原清治郎
海軍三等機關兵	林元吉
海軍三等機關兵	丹羽爲三郎
海軍三等機關兵	福村直吉

海軍三等機關兵	佐藤大吉
海軍三等機關兵	渡邊善九郎
海軍三等機關兵	飛田春吉
海軍三等機關兵	八幡重勝
海軍三等機關兵	鈴木彦次郎
海軍三等機關兵	木村亮熙
海軍三等機關兵	村松正辰
海軍三等機關兵	寛榮吉
海軍三等機關兵	石井鐵男
海軍三等機關兵	吉田浦次郎
海軍三等機關兵	阿部和助
海軍三等機關兵	高木盛元
海軍三等機關兵	伊藤辨藏
海軍三等機關兵	大久保半登
海軍三等機關兵	織田精一
海軍三等機關兵	柏膳清
海軍三等主廚	赤池幸重
海軍三等主廚	峰田勘治郎
海軍四等水兵	森下新次郎

從 僕	新井 菊次郎	給 仕	森 松 藏
給 仕	柳 原 榮	割 烹	中 島 照之助
給 仕	中 島 榮太郎	剃 夫	石 山 美太郎
給 仕	靜 川 龍 雄		

合 計 百九十七名(自二〇七八至二二七四)

士官以上	十二名	准士官	四名	下士卒	百七十四名
其ノ他七名					

第八目 軍艦濟遠

海防艦濟遠(二四八)ハ二〇三高地攻撃ノ陸軍ヲ援助センカ爲メ、セントアップスヨリ、陸上砲撃ニ從事セル赤城ヲ掩護スルノ目的ヲ以テ、三十七年十一月三十日附近海面ヲ徐航セシニ、午後二時二十四分俄然敵ノ機械水雷ニ觸レ、艦腹ヲ破ラレ浸水甚タ急ニシテ、未タ三分時間ヲ出テサルニ全ク沈没セリ、遭難ノ當時濟遠ニ在艦セル者ハ、總テ二百三十三名ナリシカ、沈没ト共ニ二隻ノ端舟ニ移乗セルモノ、外ハ、釣床其ノ他ノ浮漂物ヲ抱持シテ自ラ海ニ投シ、其ノ百九十五名ハ赤城及ヒ第五號假裝砲艦ノ端舟ニ救助セラレ、戦死者ハ赤城ニ收容後絶命セルモノ二名及ヒ死體三個アリ、三十三名ハ行衛不明ナリ、負傷者ハ總テ二十九名ニシテ、是皆身ヲ以テ免ル、ニ當リ、海面ニ於テ負傷セルモノニシテ、二名ヲ病院船ニ送致シ、其ノ他ハ入院ヲ要セス、二三日ニシテ治癒セルモノ多シ、左ニ濟遠軍醫長ノ遭難記事及ヒ赤城軍醫長竝ニ第五號假裝砲艦臨時乗組軍醫ノ救助報告ヲ掲ケ、以テ當時ノ實況ヲ知ルニ便ス、

軍艦濟遠遭難記事

軍艦濟遠軍醫長海軍大軍醫 境 野 寬

明治三十七年十一月三十日午前七時四十分(一)軍艦濟遠ハ清國盛京省ムルチツシ島東方ノ錨地ヲ發シ午前九時四十分(二)雙島海外ニ假泊ス此ノ日旅順攻圍軍ハ二〇三高地ヲ攻撃スルニ當リ我カ濟遠支隊ハ陸岸ニ接近シ陸上砲撃ノ豫定ナリ即チ赤城ハセントアップスヨリ陸上砲撃ヲ爲サントスルニ際シ本艦ハ赤城掩護ノ目的ヲ以テ二十分揚錨シセントアップスノ北々西二海里一鍵ノ地ヲ漂泊地點トナシ此ノ附近ニ遊弋セリ然ルニ午後二時二十四分セントアップスヘッドノ北西微北一海里九鍵ノ地點ニ於テ北微西ニ向テ徐航スルノ際俄然機械水雷ハ本艦ノ中腹ニ於テ爆發セシヲ以テ艦長ハ右舷ニ迴頭陸岸ニ向ハントシ防水扉閉鎖ノ號音ヲ吹奏セシメタルモ浸水急激ニシテ沈没迅速ナルヲ以テ更ニ總員乗艇ヲ令セラル艦ハ爆發後僅ニ三分間ニシテ全ク沈没セリ
遭難ニ際シ小官ハ唯死セザリシノミ救急ノ處置ハ盡ク坂内赤城軍醫長及ヒ荻澤八島乗組少軍醫ニヨリテ施サレ其ノ後各艦ニ收容セラル、ニ及ヒテハ各軍醫長ヨリ多大ノ便宜ヲ與ヘラレ小官ハ唯極テ遲鈍ナル殘務取扱ヲナシタルノミ三十八年一月十日ニ及ヒ始テ總テノ殘務ヲ終ルニ當リ遭難當時ノ狀況ニ次テ二三項ヲ記載シ以テ本報告トナス

一、天候 當日ハ朝來快晴ニ非ス風波可ナリニ起リ海水ハ全ク黄色ニ變セリ午後二時五號假裝砲艦ノ觀測天候ハ左ノ如シ

天候	氣溫	氣 壓	乾球	濕球	海水溫度	風 力	風 向
晴	四八	三〇・二〇	不明	不明	五七	一一二	W

二、人員及ヒ患者 遭難當日ノ人員ハ准士官以上三二人下士卒二〇五人傭人六人合計三三三人ニシテ受診患者ハ九人内休業一名(無熱ナル急性咽喉炎)アリタルモ救助セラレタリ

三、沈没ヨリ救助セラル、マデノ状況 當時ハ事業中ニ非シテ多クハ下甲板ニアリタルカ如シ爆聲ト震動トニヨリ各人既ニ機械水雷ニ罹リタルヲ知リ舉テ上甲板ニ出テントシタリ後部ニアリシモノハ第三「ハッチ」ヨリ出テタルモ前部第一區ニアリシモノハ何人カ、第二「ハッチ」近傍ヲ黑煙浸水ヲ見テ不可能ヲ叫ビタルカ爲メ第二「ハッチ」方ニ來ラス專ラ偶「カバ」ヲ被ヒ固封セラレタル第一「ハッチ」即チ第一區ノ「ハッチ」ニ上リ之ヲ下ヨリ突き破ラントセシモ遂ニ能ハス此ノ状態ヲ見テ萬一ノ僥倖ヲ期シ不可能ト稱セラレタル第二「ハッチ」方ニ來リシ某兵曹ハ浸水ノ中ヲ一目散ニ馳セテ上甲板ニ出テ來リ遂ニ救助セラレタリ是即チ該兵曹ノ語ル所ニシテ第一區ニアリシ人員ハ此クシテ戰死セシナリ艦室ニ於テ當直セシモノハ其ノ消息全ク不明ニシテ其ノマ、艦ト共ニ沈没セシモノナリ入浴中ノモノ萩原看護手及ヒ他二人アリシカ爆聲ト共ニ扉ヲ排セントセシモ既ニ至ミタルモノカ容易ニ開カス極力蹴飛ハレ辛ウレテ逃レ出テタレトモ一水兵ノ外ハ盡ク溺死セリ蓋裸體ノマ、ナルノミナラス是マデ温湯内ニアリシコト、テ凍死セルニ非サルカトハ同水兵ノ語ル所ナリ

本艦爆聲ヲ發シ未タ傾斜ヲ始メサル時既ニ水中ニ飛入り泳ケルモノ數人ヲ目撃シタリ此等ハ同運命ニ陥レル諸艦ノ渦水ヲ起シ深ク水中ニ捲込マレシヲ嘗テ聞ケルカ爲メナリト云フ然レトモ本艦沈没ノ際ハ渦巻未タ起ラザリキ
見張番トシテ「トップ」ニアリシモノハ爆聲震動ヲ感スルヤ直ニ下リ來リ救助セラレタリ長ク此處ニアラハ傾斜ノ結果投ケ出サルヘカリシナリ艦橋附近ニアリシモノニ比較的死者多カリシハ煙突ノ近傍ニシテ吸引セラル、傾向アリシニ非サヤト云フ艦長ハ艦ト共ニ水中ニ入りタル後誰モ英姿ヲ再見シタルモノナシト云フ右舷ニ傾斜ヲ始ムル前多クハ兩舷「ダヴィット」ニ出シアリシ端舟ニ乗組ミタリ其ノ數不詳ナレトモ滿員ナリキ其ノ他ノモノハ或ハ右舷或ハ左舷ヨリ海中ニ多クハ徒手ニテ飛入りタリ余ハ後甲板ニ出テ同處ニ來レル中川一等看護及ヒ右舷端舟ニ乗ラントシテ其ノ近傍ニ身構ヘセル休業患者ヲ見タルヲ以テ速ニ看護ヲシテ同患者ヲ呼ハシメ之ニ釣床ヲ携

ヘ浮游スヘキヲ諭シタリ是端舟ハ覆没ノ恐レナキ能ハス釣床ハ必ス浮游スヘキヲ信シ且僚艦モ近傍ニアルコト、テ咄嗟ノ際此ノ如キ考案ヲ出シタリシナルカ此ノ端舟ハ幸ニシテ二隻共ニ目的ヲ達シタリシヲ以テ見レハ考案ハ拙ナリキ然レトモ患者ハ此クシテ救助セラル、コトヲ得又疾病増悪スルコトモナク日ナラス全治シタルハ幸福ト言ハサル可カラス

「ブームス」ニ取入レアリシ第一「カッター」ニ乗ラントシテ之ヲ操縦セントシタルモノハ遂ニ其ノ目的ヲ達セス或ハ負傷或ハ戰死スルノ運命ニ遇ヘリ

海中ニ入りシモノハ釣床、樽其ノ他ノ木片ニヨリ浮游シ救助艇ヲ俟チタリ此ノ際敵ハ此ノ遭難者ニ向テ發砲シタリト云フ小官ハ釣床ヲ抱キテ左舷ヨリ海中ニ躍リ入り一旦水中ニ没入シタルモ忽チ浮キ上リ「スクリュ」ニ押附ケラレタリシカ一波ノ押流スト同時ニ艦體ハ全ク没入シ去リタリ是ヨリ唯浮游ヲ期シタリシカ終ニ手指麻痺レ釣床ヲ持チ換フルコト能ハサルニ至レリ

是ヨリ先キ本艦ノ奇異ナル黑煙ヲ掲クルヲ見タル赤城及ヒ五號砲艦ハ直ニ其ノ水雷ニ觸レタルヲ覺リ急航遭難地點ニ來リ極テ迅速ニ端舟傳馬船ヲ卸シ極力救助ニ務メタル結果比較的多數ノ人員救ハレタルハ幸福ナリキ若シ單艦ナランカ或ハ又夜中ニシテ遠望シ能ハサル際ナラハ到底此ノ如キ好結果ハ得ラレザリシナラン寒冷ハ復其ノ漂著生存ヲ許サ、ルナリ

水中ニ漂流セルモノカ最早ク救助セラレタルハ約四五分ヲ出テサルヘシ即チ本艦ノ端舟ニ由リ救ハレタルモノナリ最遅カリシハ一時間ニ及ヘルカ如シ遭難ハ二時二十四分ニシテ赤城最後ノ收容艇歸艦ハ三時四十五分、五號砲艦最後ノ救助艇ハ三時二十五分ニ歸艦セント云フ其ノ後海面全ク暗ニ葬ラル、マデ分遣汽艇ハ熱心ニ遭難者搜索ニ従事セリ

四、救助セラレタル時ノ状態 小官自身ノ經驗ニ據レハ水中ヨリ端舟ニ引上ケラル、ヤ風ノ爲メ放浪迅速ニナリシ

故カ寒冷頻ニ來リ戰慄開牙容易ニ止マズ明瞭ニ語ル能ハス手足ノ運動意ノ如クナラス繩索ヲ握幹ニ括附ケ以テ砲艦ニ引上ケラレタリ同舟ノ兵員ニハ此ノ如ク衰ヘシモノナク皆活潑ニ「ジャコブスラダー」ヲ上リタリ其ヨリ救急處置ヲ施サレタル凡テノ事實ハ余ハ翌日之ヲ聞ケルノミ衣類ハ水中ニ投シタルモノハ總テ更衣セサル可カラズ乃チ收容艦ニ於テ臨機衣類ヲ給セラレタリ准士官以上ハ收容艦ノ士官ヨリツレツレ衣類ヲ與ヘラレ防寒ニ困リシコト全クナシ

五、傷病者及ヒ死者 救助セラレタルモノ總計百九十五人ニシテ外ニ死體三個及ヒ收容後死亡二名アリ死體不明ノモノ三十三人ナリ

	准士官以上	下士卒	備人	合計	負傷
現員	二二	二〇五	六	二三三	
戰死	七	二六		三三	
五號砲艦收容	九	九八		一〇七	内傷者 二一
赤城收容	六	五(死體及ヒ收容後死亡)		九三	内傷者 八

傷者二十九人アリ挫傷十九挫創五、切創二、關節捻挫一、刺創一、外聽道異物(海水)一ニシテ胸部肩胛部挫傷、左腰部及ヒ右大腿挫傷ノ二名ハ送院ノ必要ヲ認メシモ他ハ孰レモ輕傷ニシテ入院セシメス二日乃至十八日ニシテ全治ス本遭難ニ關シ生シタル病者無シ死體ハ「アンペラ」ニ包ミテ五號砲艦ノ下甲板ニ安置シ青泥窪著ノ翌日同所ニ於テ火葬ス

六、生存者合併、回航及ヒ解散 十二月一日風波烈シク出航ス可カラス赤城及ヒ五號砲艦ハ共ニ雙島灣ニ假泊シ僅ニ

信號ニヨルノ外交通スルコト能ハス

二日朝風波較收ルヲ俟チ赤城ヨリ收容者及ヒ死體ヲ五號砲艦ニ轉乘セシメ午前九時雙島灣ヲ發シテ青泥窪ニ向フ日没ノ時著臺中丸ニ横著ケス總員ノ半數臺中丸ニ移リ半數ハ五號砲艦ニ殘ル

三日五號砲艦ニ殘レル全員臺中丸ニ移ル

十三日附ヲ以テ本艦ノ定員ヲ廢セラシ

十四日臺中丸ニ收容ノ人員ハ山城丸ニ移ル

十五日臺中丸ニ收容ノ人員ハ山城丸ニ移リ再總員ニ合併ス

十八日總員營口丸ニ移ル

十九日午前七時三十分青泥窪發

二十一日午後二時佐世保著海兵團ニ入ル此ノ日兵員ハ同海兵團ニ送籍ス是ヨリ准士官以上ハ佐世保鎮守府附ニテ同團内ノ一室ヲ殘務取扱所ト爲レ毎日出勤殘務ノ整理ニ從事ス

七、遭難者精神感覺ノ狀態ニ就テ 多クハ精神興奮シタレトモ遭難ノ當夜兵員ハ不眠ニ苦シシコトナシ同夜荻澤少軍醫ノ巡回セラレタル際能ク肝聲ヲ放ツヲ實見シタリト云フ之ニ反シ准士官以上ハ殆ト終夜睡眠セシモノナシ百感交々來リテ終夜睡眠ヲ催サ、リシト異口同音ニ語ルハ實際ナリ然レトモ第二夜ヨリハ決シテ斯カルコトナク常ノ如ク睡眠安カリキ

精細ナル検査ヲ遂ケタルニハ非サレトモ輕度ノ重聽ヲ覺エシモノ多カリシカ如シ

八、書類其ノ他ノ亡失 前記ノ狀態ナルヲ以テ疾病要略書類其ノ他何物ヲモ持出スコト能ハス凡テ亡失ニ歸シタリ

此ノ事タルヤ獨リ軍醫部ノミナラス各部盡ク然リシナリ

九、經驗觀察事項 先ツ此ノ如ク機械水雷敷設及ヒ浮流ノ危險アル方面ハ單艦航行ヲ危險トス本艦ノ場合ニ於テ他

ニ砲艦赤城等ナカリセハ平遠ノ覆轍ヲ蹈ミシハ明ナルコト既ニ記載シタルカ如シ

(イ)水中ニ投スル前冬季裸體トナルハ惡シ「フランネル」製襦袢袴下ヲ著用セルモノ浸水後直ニ水ノ浸淫ヲ見サリシハ某中尉ノ實驗ニ係レリ理論上流動セル冷水カ直接温暖ナル皮膚ニ觸レテ奪温スルト衣服ヲ介シテ冷却スルコトハ乙ノ場合ニ於テ長時間ヲ要スルヤ明ナレハナリ況ヤ一旦水面ニ引上ケラル、ノ際裸體ナレハ放温最速ナルノ理アルニ於テヲヤ

(ロ)身ヲ託シテ海面ニ浮ハンニハ釣床ニ如クモノナキカ如シ釣床ヲ片腕ニ抱クヘキヤ或ハ釣床ノ長サニ兩手ヲ擴ケテ其ノ兩端ヲ固定スヘキヤハ茲ニ斷シ難シト雖モ冬季ニアリテハ兩手ニテ抱擁シ頭部ノミ水面ニ出スノ外ナケン何トナレハ此ノ如クセサレハ寒冷ノ爲メ速ニ痲痺來リ比較的早ク釣床ヲ放離スルニ至ルヘケレハナリ釣床ヲ括レル索ノ解ケテ合セ目弛ミ次第ニ水中ニ沈降セシ實例アリタリト云フ是ニ由リテ之ヲ考フレハ若シ餘裕アラハ釣床ノ弛マサルヤウ括リ方ヲ點檢スルノ必要ハ十分認ムヘキナリ其ノ他釣床ノ合目ヲ下ニシテ抱カハ浮游力ヲ増加スト云フ理論上然ラサル可カラス釣床ノ浮游時間ハ不明ナリ他ノ浮游物トシテ多クノ人カ腦裡ニ存スル樽「ブレイカー」類ハ全然不可ナリ此等ハ轉々トシテ固定セス見ル間ニ頭部水中ニ没シタルマ、苦悶溺死スルニ至ルト云フ

(ハ)此ノ如キ遭難ノ時極テ沈著ナルハ必要ナルコト言フ俟タヌ又游泳巧ミナリトモ水中ニ入ルノ後之ヲ爲サ、ルヲ以テ勝レリトス唯頭部乃至鼻口ノミナリトモ水面ニ長ク出ツルヲ以テ満足セサル可カラス

(ニ)此ノ如キ遭難ノ時水中ニ入ラハ可及的他人ト分離セサルヲ可トス救助艇ハ群集ノ方ニ向テ漕クヲ常トシ單獨ノモノハ往々發見セラレサルノ虞レナキニモアラサレハナリ

(ホ)救助者ヲ見テ或ハ救助艇ノ舷ニ接シテ所謂氣ヲ許スコトヲ戒ムヘシ某ハ救助艇ニ接近シタルヤ今マテ抱ケル釣床ヲ放シタルカ爲メ忽チ沈降シテ之ヲ救フニ術ナカリシト云フ

軍艦濟遠爆沈ノ際、溺没シテ其ノ死體ヲ收容スル能ハサリシ者ハ、同艦艦長海軍大佐但馬惟孝以下三十三名ニシテ、赤城ニ收容セラレタル後絶命シタルモノ二名、救助艇ニ依リ死體ヲ收容シ得タルモノ三名ヲ合セテ、總計戰死者三十八名ニ達シ、負傷者ハ、赤城ニ於テ救助シタルモノノ中八名、五號砲艦ニ收容セラレタル生存者中二十一名ヲ數ヘ、合計二十九名ナリ、孰レモ輕微ノ創傷ニシテ、送院ヲ要セシモノハ僅ニ二名アリシノミ、左ニ戰死者姓名、死傷者ノ狀況及ヒ入院者入院後ノ經過轉歸概要ヲ掲ク、

海軍大佐	但馬惟孝	海軍二等機關兵曹	内村磯吉
海軍大機關士	中根金太郎	海軍三等兵曹	上野專吉
海軍少尉	柏木辰生	海軍三等兵曹	森田勘作
海軍少尉	森田寛一	海軍三等信號兵曹	山本五六
海軍兵曹長	山本庄藏	海軍三等看護手	萩原萬吉
海軍兵曹長	島田戸市	海軍一等水兵	甲斐小一郎
海軍上等兵曹	都志見浦治	海軍一等水兵	長友又市
海軍一等兵曹	江下友吉	海軍一等木工	飯田彦助
海軍一等船匠手	古賀爲次郎	海軍二等機關兵	板本五三
海軍二等兵曹	西田萬太郎	海軍一等機關兵	高橋治三郎
海軍二等機關兵曹	津村彌次郎	海軍一等機關兵	長野槌藏
海軍二等機關兵曹	木場與三次	海軍一等主廚	松本榮藏

海軍二等水兵	野村 藤太郎	海軍三等機關兵	山田 末造
海軍二等水兵	木庭 善七	海軍三等機關兵	小柳 九八
海軍二等信號兵	井 芹 巖	海軍四等機關兵	島本 芳太郎
海軍三等水兵	紙屋 早市	海軍四等機關兵	村 島 清
海軍三等信號兵	栗田 小助		

合 計 三十三名(自三四七七至三五〇九)

以上戦死シテ其ノ死體ヲ收容スル能ハス

軍艦濟遠乗組 海軍三等機關兵曹 森 利三郎(三五〇)

明治三十七年十一月三十日午後二時二十三分雙島灣ニ於テ軍艦濟遠沈没ノ際海ニ溺レ浮游中救助艇ニ由リテ午後三時四十五分赤城ニ收容セラル、之ヲ診スルニ顔面蒼白人事不省ニ陥リ四肢厥冷ス眼珠ハ上竄シテ瞳孔稍縮小シ心音幽微ニシテ不正脈搏ハ殆ト指頭ニ感セス呼吸運動全ク消失セリ全身外表ニハ認ム可キ異常ヲ呈セス、依テ樟腦依的兒ノ皮下注射人工呼吸法全身溫保皮膚ノ摩擦等ヲ施シ、ニ一時の心動ノ亢奮ヲ來セシモ呼吸及ヒ脈搏再來セス心音再沈衰シ午後三時五十五分死亡ス

同 海軍二等機關兵 東田 三吾(二五二)

同前午後三時四十五分赤城ニ收容セラル、之ヲ診スルニ顔面蒼白人事不省四肢厥冷眼珠上竄瞳孔散大シ全身筋肉弛緩呼吸絶止ス心音ハ幽ニ存在スルモ脈搏指頭ニ感セス全身外表ニハ認ム可キ異常ヲ呈セス依テ樟腦依的兒ノ皮下注射人工呼吸法全身皮膚ノ摩擦身體溫保等ノ救急療

法ヲ施シ、モ心音依然トシテ回復セス呼吸モ亦再來セス午後三時五十分死亡ス

軍艦濟遠乗組 海軍三等機關兵曹 勝田 政市(二五二)

同 海軍一等水兵 折田 敬三(二五三)

同 海軍一等信號兵 寺崎 策一(二五四)

明治三十七年十一月三十日午後二時二十三分雙島灣ニ於テ軍艦濟遠沈没ノ際溺死シ死體ハ赤城ノ救助短艇ニ由リ收容セラレ本艦前部下甲板治療所ニ運搬セラル、之ヲ檢案スルニ顔面蒼白口唇紫藍色眼珠上竄瞳孔散大四肢厥冷全身筋肉肛門弛緩心音ヲ聴取セス脈搏ナシ全身ノ外表ニハ認ム可キ異常ナシ俯臥位ト爲シ背部ヲ壓スルニ鼻腔及ヒ口腔ヨリ泡沫流出ス以上ノ所見ニ因リ海ニ溺レ浮游中失魂シ短艇ニ救助セラレテ本艦ニ到著ノ瞬時死亡シタル者ト認定ス

左胸部、右肩胛部挫傷(業)

軍艦濟遠乗組 海軍三等廚宰 西川 末彦(二五五)

明治三十七年十一月三十日軍艦濟遠沈没ノ際第一「カッター」卸シ方準備中未タ全ク卸シ終ルニ至ラス本艦ノ沈没ト共ニ水中ニ陥リ同「カッター」ノ「マスト」ニ衝突シ左胸部及ヒ右肩胛部ヲ打撲ス左胸前面呼吸ニヨリ増痛シ右肩胛部ニ表皮剝脱溢血アリ十二月二日病院船神戸丸ニ入院ス、之ヲ診スルニ左胸前下部ニ於テ甚シキ壓痛アリ理學的檢査上異常ヲ認メス咳嗽咯痰ナシ又右鎖骨上窩ヨリ同背面ノ肩胛棘ニ至ル迄汎ク腫脹シテ處々ニ擦過傷ヲ存シ骨ニ損傷ナキモ右上肢ノ運動甚シク碍ケラル鉛糖水ノ罌法ヲ處シ胸部ニ固定縋帶ヲ施シ二十八日佐世保海軍病院

左腰部、右大腿挫傷
左前膊、左下腿、右大腿擦過傷（業）

軍艦濟達乘組
海軍一等信號兵
福永喜市(三五二六)

明治三十七年十一月三十日軍艦濟遠沈没ノ際第一「カッター」ニ乗艇セシカ同艇ノ顛覆スルニ當リ舷側ニテ打撲シ負傷後、レシザフアインダー」ノ臺ヲ携ヘテ浮游中第五號砲艦ニ收容セラル、左腰部、右大腿等ニ挫傷アリ歩行困難ナリ、十二月二日病院船神戶丸ニ入院ス、之ヲ診スルニ第一腰椎ヨリ第四腰椎ノ左側兒頭大ノ部平等ニ腫脹シ中央ニ擦過創アリ壓痛著シク右大腿前面中央モ亦一般ニ腫脹シ皮下溢血ヲ存ス其ノ他左前膊背面下部左下腿内側上部右ブーパルト氏韌帶ノ外半部ニ各指頭大ノ擦過傷ヲ認ム、仍テ鉛糖水ノ罌法ヲ處シ腫脹疼痛殆ト消褪シ擦過傷ハ總テ治癒ス、二十八日佐世保海軍病院ニ轉院シ三十八年一月八日全治退院ス 經過日數三十九日

赤城ニ收容セラレタル者

創傷名	負傷ノ原因及ヒ創傷狀況摘要	官職	姓名	番號
左外皆部擦過傷(業)	「ボート」ノ舷ニテ打撲シ左上眼窩縁ノ外方即チ外皆部ノ表皮剝脱シ皮下流血ス十二月一日全治ス 受療日數一日	大尉	岡田政二郎	(三五七)

右前膊・右環指挫創(業)	御眞影奉移ノ爲メ硝子ヲ打碎カントシテ右前膊下部及ヒ右環指挫創ヲ負フ孰レモ淺シ十二月一日全治ス 受療日數一日	少尉 成富保治 (二五二八)
右上眼瞼挫創	原因不明右上眼窩緣ニ一小挫創アリ淺シ十二月一日全治ス 受療日數一日	船匠師 寺家清兵衛 (二五二九)
左上眼瞼挫創	原因不明左上眼瞼ニ淺キ挫創アリ十二月一日全治ス 受療日數一日	三機曹 佐々木七之丞 (二五三〇)
右腓腸部・足背挫傷(業)	第二「カッター」顛覆ノ時「ギア」ニテ挟ム右腓腸部及ヒ同足背ノ挫傷ニシテ歩行差支ナシ十二月一日全治ス 受療日數一日	一水手 上田登 (二五三一)
左拇指挫傷	「フエンダー」製作事業中遭難セル爲メ其ノ打チツ、アリシ「スパイキ」ト槌トノ間ニテ槌打シ左拇指挫傷ヲ負フ十二月一日全治ス 受療日數一日	二水手 藏原義延 (二五三二)
左上眼窩緣挫創	原因不明左上眼窩緣ニ一小挫創アリ淺シ十二月一日全治ス 受療日數一日	二水手 兒玉啓治 (二五三三)
右臀部挫傷	原因不明右臀部挫傷輕シ十二月一日全治ス 受療日數一日	二機兵 野村八郎 (二五三四)

五號砲艦ニ收容セラレタル者

創傷名	負傷ノ原因及ヒ創傷狀況摘要	官職	姓名	番號
左膝部挫傷(業)	第三「カッター」ニテ遭難者救助收容ニ從事中 「カッター」ノ「サイド」ニテ打撲ス左膝蓋ノ挫傷ニ レテ關節ニ異常ナシ十二月一日全治ス 受療日 數一日	一 曹	山部 光平	(二五二五)

創傷名	負傷ノ原因及ヒ創傷状況摘要	官職	姓 名	番 號
右膝關節部 右示指挫傷 (義)	廚宰事務室内ニアリ爆聲ヲ聞キテ扉ヲ排レ出テ シテ之ヲ蹴飛ハレタルカ爲メ負傷ス右膝關 節及ヒ右示指ノ挫傷ニシテ十二月一日全治ス 受療日數一日	一 宰	松林泰助	(二五二六)
右足背挫傷	原因不明左足背少シク腫起ス疼痛アリ十二月一 日全治ス 受療日數一日	二 機曹	鎌田軍治	(二五二七)
右季肋部擦過 傷	原因不明右季肋部ニ兒掌大ノ表皮剝脱アリ深部 異常ナシ十二月一日全治ス 受療日數一日	二 機曹	米多比信雄	(二五二八)
右趾挫傷 (義)	第一區ニ於テ木片ヲ踏ミ負傷ス右趾趾爪節趾面 ニ淺キ挫創アリ歩行ニ堪フ十二月一日全治ス 受療日數一日	一 水	鯨島至誠	(二五二九)
左膝部挫傷 (義)	艦體傾斜ノ時左舷ヨリ飛ヒ込ミ後部水雷發射管 ノ前部ニ觸レ左膝關節部挫傷ヲ負フ歩行障礙ナ ク十二月九日全治ス 受療日數九日	一 水	打田兼富	(二五三〇)
右下腿挫傷 (義)	第一區ヨリ水雷發射管室ニ通スル入口ニ衝突シ テ負傷ス右腿挫傷ニシテ歩行差支ナシ十二月 五日全治ス 受療日數五日	一 水	千貫盛熊	(二五三一)
左頸頂部血腫	原因不明左前頸頂部ニ血腫ヲ形成ス速ニ吸收セ ラレ十二月五日全治ス 受療日數五日	一 水	吉野金市	(二五三二)
右下腿左大 腿打撲	原因不明右下腿左大腿ノ打撲ニシテ歩行ニ殆 ト差支ナシ十二月一日全治ス 受療日數一日	一 水	行本琴四郎	(二五三三)
右下腿挫傷 (義)	第一「ハッチ」ヲ上ラントシテ階段間ニ挟ミ右下腿 前面ニ挫傷ス十二月七日全治ス 受療日數七日	一 水	田口富次郎	(二五三四)
左上眼瞼切創 (義)	第一「カッター」配置ニシテ同「カッター」オール操 作中「レザ」バントニ觸レテ負傷ス左上眼瞼縁 ニ一仙迷長ノ切創アリ縫合ス十二月一日全治ス 受療日數一日	一 主	高見福松	(二五三五)

左頸骨部右 大腿挫傷(義)	爆聲ヲ聞キ下甲板第一區ヨリ第二區ニ至ラント シ防水扉ノ位置ニ於テ此處ニ當置セル「コール シユート」ニ衝突シテ右大腿中部ヲ打撲シ次テ 機關「ハッチ」ヲ昇ラントスル際其ノ圍壁ニ衝突 シ顔面ヲ打撲ス左頸骨部發赤シ疼痛肌熱亢進シ 右大腿前面ニ挫傷アリ十二月一日全治ス 受療 日數一日	二 水	西 鄉 展	(二五三六)
左拇指捻挫 (義)	第一區ヨリ第二區ニ來リ病室前ニ於テ機關部 「デーブル」浮流シアルモノニ頭キ顛倒ノ際甲板 ニ衝當リ左拇指關節部ニ捻挫アリ十二月一日全 治ス 受療日數一日	二 水	金森喜太郎	(二五三七)
左手掌切創	原因不明左環指根ニ接シ手掌ニ縱ニ長サ三仙迷 皮膚切創アリ十二月五日全治ス 受療日數 五日	二 水	村本七藏	(二五三八)
左拇指球刺創	原因不明左拇指球ニ刺創アリ十二月五日全治ス 受療日數五日	二 機兵	河本政市	(二五三九)
右拇指挫傷 (義)	「ボート」ニ乗ラントスル際「ボートホール」ニテ擦 過ス左拇指第二節背面挫傷ニシテ十二月一日全 治ス	二 機兵	谷井豐治	(二五四〇)
左趾挫傷 (義)	第一「カッター」ノ「セール」ギヤヲ取り出シ之ニヨ リ浮游セントスル際同「ギヤ」ニテ負傷ス左趾趾 挫傷ニシテ關節等異常ナシ十二月一日全治ス 受療日數一日	四 主	森澤千代太郎	(二五四一)
左膝部挫傷	原因不明左膝關節ノ周圍ニ紫色ヲ呈シ脛骨結節 部潮紅疼痛著シ十二月一日全治ス 受療日數一日	割	林 代次郎	(二五四二)
右外耳道異物 竄入(義)	後甲板左舷ヨリ釣床ヲ抱キ水中ニ躍入ル其ノ後 左耳充塞ノ感アリト云フ聴力ノ遲鈍ハ海水浸水 ニ原因スルモノト認ム耳鏡ナキヲ以テ耳内ノ狀 況明ナラス十二月一日全治ス 受療日數一日	給 仕	武藤源八	(二五四三)

第八章

第二節 第八目 軍艦濟遠

軍艦濟遠遭難者救助報告

軍艦赤城軍醫長海軍大軍醫 坂内千代喜

本艦ハ山田第七戰隊司令官ノ命ニ依リ第三軍應援ノ爲メ十一月二十九日午前六時青泥窪ヲ發シ午後五時雙島灣ニ到リ翌三十日午前十時四十五分セントアッブス頭ノ北西側ニ隠レテ鳴潮嘴砲臺及ヒ鴻灣東南方ニ在ル敵ノ野砲陣地ニ間接射撃ヲ加ヘ以テ午後二時至三時敵モ亦我ニ對シテ間接射撃ヲ開始シタル結果午後一時四十分左舷側水面ヲ打チ炸裂セル彈片ハ艦内ニ於テ二名ノ負傷者ヲ生シ内一名ヲ治療所ニ收容治療セリ此ノ間射撃ハ益々劇甚ヲ加ヘ砲聲殷々トシテ爆煙海ヲ蔽ヘリ此ノ酣戰中午後二時十九分セントアッブス頭ト礁脈島トノ中間ヲ徐行セシ濟遠ハ俄然黑煙中天ニ飛進シ次テ危險旗ヲ掲揚スルヲ認メタリ依テ直ニ砲撃ヲ中止シ錨ヲ拔キ之カ救助ニ赴キ總員ノ釣床用毛布ヲ前部下甲板ニ運搬シ多量ノ衛生酒ヲ準備セリ又負傷者運搬手ヲシテ輕症者ハ直ニ機械室ニ收容シ重症者ハ前部下甲板ニ收容ス可キヲ命シ應急ニ備フ二時二十三分濟遠ハ右舷ニ傾キ沈没セリ同三十七分濟遠沈没位置ノ附近ニ至リ投錨シ救助艇二隻ヲ卸シ人員救助ニ努ム第一回ハ約六十人ヲ收容シテ午後二時四十分本艦ニ著シ更ニ第二回ノ收容ニ赴キ約三十人ヲ收容シテ午後三時四十五分本艦ニ著ス

此ノ日正午ヨリ午後四時ニ至ル間ノ天候ハ晴ニシテ甲板溫度四十五度ヨリ四十六度乾球四十五ヨリ四十四ノ間ニアリテ濕球ハ四〇ヲ示シ氣壓三〇・六〇ヨリ三〇・五二ノ間ニ在リ而テ三乃至四ノ速力ヲ有スル西風ト南ヨリ北ニ向フ潮流トニヨリテ海面荒浪ヲ起シ收容頗ル困難ヲ極ム

移乗及ヒ運搬 收容艇ノ溺者ヲ救助シテ舷側ニ著スルヤ可及の速ニ多數ノ重症者ヲ前部下甲板ニ收容スルノ必要アルヲ以テ運搬手ハ勿論非直ノ本艦兵員ヲシテ徒手法ニヨリ艇内ヨリ本艦ニ移シ直ニ前部下甲板ニ收容セリ本艦ノ如キ低舷ノ艦ニアリテハ假令波浪高ク艦艇共ニ動搖スルトモ擔架ヲ用フルニ比シ短少ノ時間ヲ以テ直接治療所ニ運搬シ得ルノ便アルヲ信ス少數ノ輕症者ハ自ラ本艦ニ移リ或ハ他ノ介保ニヨリ本艦ニ乗移リタルヲ以テ直ニ機械室ニ導

キタリ

收容者ノ處置 前部下甲板治療所ニハ毛布、衛生酒及ヒ乾キタル木綿ヲ準備シ看護手、看護ヲシテ收容者ノ濕衣ヲ脱セシムルト同時ニ症狀ノ程度ヲ觀察セシメ近圍ニ集マレル本艦下士卒ヲシテ直ニ毛布ニ包マシメ全身皮膚ヲ摩擦セシメ武備衛生酒等ヲ與ヘ厚ク毛布ヲ纏絡シテ溫包セリ機械室ニ收容セシ輕症者ハ濕衣ヲ脱スルト同時ニ本艦兵員ノ私用乾布ヲ以テ全身ノ皮膚ヲ摩擦セシメ毛布ヲ纏ヒ衛生酒ヲ給與セリ前部ニ收容セシ重症者モ漸次症狀ノ輕快スルヲ待チテ順次機械室ニ移轉セシメタリ失神狀態ニ陥リシ重症者ニ在リテハ海水ヲ吐逆セシメ後シルツエスター氏人工呼吸法ヲ行フト同時ニ毛布ヲ纏ヒ全身ノ皮膚ヲ摩擦シ樟腦依の兒ノ皮下注射胸部ノ輕打等百方回復ニ努メタリシモ不幸ニシテ二名ノ死亡者ヲ出セリ三名ハ已ニ眞死ニ陥リタルモノニシテ蘇生セズ

此ノ間治療所員及ヒ負傷者運搬手ハ全力ヲ竭シテ溺者ノ救護ニ從ヒ合計九十三名ヲ收容シ(内死體三)全ク其ノ處置ヲ終リタルハ午後六時ナリトス收容者ハ左ノ如シ

士 官

四名

准士官

二名

下士卒及ヒ傭人

八十七名

内 譯

水兵部下士

七名

同上卒

四三名(内死體一)

信號部下士

二名

同上卒

二名(内死體一)

機關部下士

五名(内死體一)

同上卒

二〇名

直外下士

〇

同上卒

五名

傭 人

三名

第八章 第二節 第八目 軍艦濟遠

百七十三

溺水者ノ一般症狀 溺者ハ一般ニ軍服若クハ事業服ヲ著シ靴ヲ穿チシ者アリシモ軍帽ヲ戴キシ者ナク蒼白ナル顔面ハ黒色粉末様物ヲ附着シ口唇紫藍色ヲ呈ス四肢厥冷弛緩性痙攣ヲ來シ言語不明ニシテ高度ノ寒戰アリ呼吸及ヒ脈搏緩徐トナリ眼球上竄ノ傾キアリ知覺ハ殆ト脱失スルカ若クハ著シク鈍麻トナリ精神朦朧泉鈍ナルヲ多シトスルモ往往却テ精神ノ興奮ヲ來シ大聲疾呼噪狂狀ヲ呈セシモノアリ殊ニ第二回收容ノ溺者ニアリテハ前記症狀益々加ハリテ身神ノ沈衰ヲ來シ假死狀態トナリ甚シキハ人事不省ニ陥リ若クハ死ニ至リシモノアリ而テ輕症者ハ收容後約一時間ニシテ舊ニ復シ救護ヲ補助セシモノアリ重症者ニアリテハ午後七時ヨリ八時ノ間ニ殆ト回復シタリ溺水者ノ多數ニ就キ入水ヨリ收容迄ノ狀況ヲ尋ヌルニ「總員上」ノ號令ニヨリテ乗組員ハ一同上甲板ニ出テ第一ニ釣床ヲ後部上甲板ニ排列シ總員退艦ノ令ニヨリ艦體沈没以前ニ已ニ退艦配置ニ從ヒ短艇ニテ避難セシモノアリ或ハ釣床若クハ「グレイチング」ノ如キ浮力ヲ有スル物體ヲ抱キ海中ニ飛入リシ者アリ或ハ艦ノ沈没ト同時ニ前記ノ浮游物體ヲ抱キ海中ニ入リシモノアリ(何レニシテモ海中ニ投シ人員ハ一回海中ニ沈ミ水面ニ浮ヒ上ルヲ常トスルモノ)入水ノ初メハ甚シキ寒冷ノ感覺ナク精神明瞭ナルモ筋肉ノ運動漸次困難トナリ一回把握セシ物體ヨリ他ノ物體ニ移ルコト能ハサルニ至リ次第テ精神恍惚甚シキハ人事不省ニ陥ルモノ、如シ身體ヲ支フル浮游物ニ就キ最善良ナルハ釣床ナルカ如シ殊ニ其ノ合目ヲ下方ニ向クルヲ良トス否ヲサレハ合目ヨリ水ノ侵入ヲ來シ浮力ヲ減スルコト早キカ如シ空槽若クハ短艇備附ケノ「ブレイカー」ハ浪アル海上ニ於テハ軸轉甚シクシテ固定ニ困難ヲ感シ身體疲勞スルニ至レハ放棄スルノ止ムヲ得サルモノ、如シ現ニ空槽ヲ抱キツ、浮游セシ者ニシテ行衛不明トナリシ者アリト云フ

游泳術ノ熟否ト死亡トノ比例ニ就テハ此ニ判定スルコト困難ナリ其ノ行衛不明者及ヒ死亡者中生前却テ該術ニ巧ナリシ者多カリシカ如シ

此ノ日午後五時七分溺者救護中拔錨シ再セントアップス頭ニ到リ砲撃ヲ行ヒ五時五十分四面漸ク暗キニ至リテ砲撃ヲ止メ雙島灣ニ歸航シ六時三十九分同灣ニ投錨ス

患者及ヒ收容者ノ後送 收容者ハ十二月一日ヲ以テ五號砲艦ニ乗セ青泥窪ヘ後送ス可キ豫定ナリシモ當日ノ天候ハ終日西風劇シク波浪高クシテ其ノ目的ヲ達スルコト能ハス翌二日午前七時三十五分五號砲艦ニ移ス而テ戰鬪負傷者一等水兵川戸茂平ハ本艦青泥窪ニ歸港ノ際十二月六日午前病院船神戶丸ニ送レリ其ノ休業日數六日

軍艦濟遠遭難者救助記事

第五號假裝砲艦ニ於テ

軍艦八島乗組海軍少軍醫 萩澤 忠 三 郎

遼東半島西海面ニアリテ強行封鎖ニ從事セル濟遠支隊ハ特ニ來會セル軍艦赤城ト共ニセントアップスヘッドヨリ陸上砲撃ヲ行ヒ以テ陸軍ノ旗幟背面總攻撃ヲ援助スヘキノ命ニ接シ十一月三十日午前九時三十分赤城先ツ雙頭灣ヲ發シテ南下シ十時三十分本艦モ亦拔錨シ濟遠ト共ニ南航ス既ニシテ赤城ハセントアップスヘッドノ陸岸ニ迫リ十一時十五分ヨリ間接射撃ヲ開始ス濟遠ハ同頭ノ北々西二海里一鏈ノ地點ニ本艦ハ之ト赤城トノ中間ニ遊弋シ後方援護ト陸上ニ於ル監的報告通信ノ連絡トヲ主ル此ノ日天氣清明ニシテ風波穩ニ將士皆出テ、望見ス忽ニシテ老鐵山西方砲臺ニ砲火起リ右舷(離岸ト)約四百米突ニ於テ水柱ノ迸ルヲ見ル續テ又一發飛來シタルモ同シク何等ノ被害ナシ午後二至リ少シク浪立ツ突如トシテ「總員上」續テ「總員」ボート「卸シ方」ノ令ヲ聞キ後甲板ニ出テ見ルモ未タ其ノ何ノ故タルヲ知ラス時ニ「濟遠」ト呼フモノアリ眼ヲ轉スレハ何ゾ圖ラン濟遠ハ實ニ其ノ艦首ヨリ水ニ襲ハレツ、アルナリ時正ニ午後二時二十五分ナリ本艦ハ全速ヲ以テ之ニ近ツキ相距ルコト約四百米突ニ至ルヤ司令塔ニ狂波ヲ被ルト見エシ濟遠ハ卒然トシテ姿ヲ沒シ去リ只海上點々タルハト浮游物トノ間ニ遭難者ヲ滿載セル二艘ノ端舟浪ニ弄セラレテ漂フノミ即チ本艦ハ進航ヲ止メ總員端舟ヲ卸シテ救助ニ從事ス(本艦端舟ハ「シンゾルバンク」四挺立「デヤン」三艘ニ挺機傳馬船一艘ナリ)既ニシテ濟遠ノ端舟來著シ約二十名ヲ本艦ニ移シテ再救難ニ赴ク時ニ赤城モ亦急航シ來リテ救助ニ努ム當時氣溫華氏四十八度海水溫度五十七度氣壓三〇、一七西風ニシテ其ノ力一乃至二波頭少シク碎ケ而テ潮流南ナリシ爲メ後ニハ八船共ニ流サ

レテセントアップスヘッドヲ超エテ南偏セシニヨリ老鐵山頂砲臺及ヒ鳩灣假設砲臺ヨリ我ニ向テ數十發ノ砲彈ヲ送
リシモ幸ニ一ノ命中彈ナカリキ

端舟ノ來往スルコト數回本艦ニ收容シ得タル遭難者ハ准士官以上九名下士卒及ヒ傭人九十八名合計百七名ナリ而
テ濟遠ノ端舟漕手及ヒ早ク之ニ移乗セル數名ノ外凡テ一度水中ニ陥リタルモノニシテ其ノ強ク寒冷ニ犯サレタルモ
ノハ本艦ニ著セシ際失神ノ狀態ニアリキ其ノ他精神確固タルモ運動全ク不能トナレルモノヲ合シテ十八名ヲ算セリ
境野軍醫長、垂井中機關士モ亦然リ其ノ自動運動ハ殆ト全ク失ヒタリキ

是等運動機能ノ亡失セルモノヲ收容スルニ舷側積入口ヲ開カント欲セシモ浪高クシテ之ヲ開クニ由ナシ依テ太キ
「ロープ」ヲ以テ牽狀ニ若クハ上胸部ニ於テ帶狀ニ緩結シ以テ吊上シタリ當時水面ヨリ舷側ノ高リ約十呎ナリシカ幸
ニ是カ爲ニ皮膚擦過傷スラモ出スコトナカリキ是恐クハ「ロープ」ノ大ナリシト皆服ヲ著シ居タルトニ因ルナルヘシ
其ヨリ徒手運搬法ニヨリテ各收容所ニ致セリ

余ハ始メ變ヲ知ルヤ直ニ上甲板士官室ニ治療所ヲ設ケタリ同室ハ面積百二十平方尺、二個ノ出入口アリテ中央ニ長
サ六尺幅三尺四寸ノ食卓アリ以テ手術臺ニ代フヘク其ノ直上ニ二十一平方尺ノ天窗及ヒ側壁ニ直徑八寸ノ圓窓二個
アリテ光線ノ射入比較的良ナリ夜ハ又二個ノ十六燭光電燈ヲ點シ得ヘク而テ蒸氣溫室管ノ通スルアリ位置上安全
ヲ保シ難キモ下甲板以下ニハ適當ノ場所ナキヲ以テ同所ハ實ニ艦内最良ノモノト信セシナリ準備終リテ後チ患者ハ
同所ニ致スヘク艦内殘留非番直員ニ命セリ既ニシテ遭難者續々來ルニ及ヒ其ノ來艦ノ際注視スルニ急ニ治療ヲ要ス
ヘキ負傷者ナク主トシテ寒冷ノ被害多ク殊ニ士官ハ初メ上甲板後部ナル中等船客食堂(暖爐ヲ)ニ收容セルモ艦内狹隘
ナルヲ以テ一時治療所ヲ徹シ在來ノ診療所(舊一等運糧士官室ニシテ「ベッド」ヲ除キ床面積二十五平方尺、側壁ニ長サ三尺
八寸幅一尺七寸ノ机アリ直徑八寸ノ圓窓二個及ヒ十六燭光電燈一箇ヲ備フ)ヲ之ニ充テ士
官室ニ遭難將校ヲ收容シ下士以下ハ凡テ前部下甲板兵員室(床面積約千八百平方尺)ニ收容シ而テ豫メ具ヘタル鐵砲形煖
爐ニ點火セリ

遭難者中寒冷ニ侵サルハコト甚シカラサルモノハ其ノ欲スル所ニ任セテ煖爐ニ近ツカシメタルモ運動ヲ失ヘル十八
名ハ凡テ火氣ニ近ツカシムルヲ禁シ被服ヲ去リ乾燥セル布片ヲ以テ皮膚ヲ拭ヒ且摩擦ヒシメ直ニ毛布ヲ被ラシメテ
横臥セシム藥劑トシテハ始メ「ブランデー」酒ヲ用ヒタルモ貯フルモノ少カリシヲ以テ直ニ缺乏セリ依テ士官室ニ蓄
ヘタリシ「オーツカ」酒ヲ以テ藥劑ニ使用セリ

本艦ニハ看護ノ乘組メルモノナク又初メ特ニ患者ノ運搬ニ任シタル主廚ハ須臾ニシテ割烹ノ事ニ從ハシメタルヲ以
テ凡テ當直外兵員ノ手ニ委ネ又ハ濟遠兵員ノ健康者ヲシテ看護ノ任ニ當ラシメサルヲ得サリキ故ニ些力遺憾ノ點ナ
キニ非サルモ兵員ノ熱心ト勉勵トニ依リテ大蹇ナキヲ得タルハ幸ナリ

艦ハ三時二十五分端舟ヲ收メ航シテ雙頭灣ニ至リ四時五分投錨ス時漸ク夕食時トナレルモ未タ以テ濟遠ノ兵員ニ對
シ食ヲ供スル能ハサルヲ以テ乾麵包ヲ以テ一時ノ餓ヲ凌カシム

前記十八名ノモノモ漸次回復シ來レルヲ以テ負傷者ノ治療ヲ始メタルニ治療ヲ乞ヒ來レルモノ總數二十一名ナリ而
テ強ク寒冷ニ侵サレタルモノハ身神ノ回復セル後ニ於テ訴ヘ來レルヲ以テ全ク治療ヲ終リシハ八時五十分ナリキ負
傷者ノ多クハ沈没ノ際物體ニ衝突セルモノニシテ左腰部打撲傷、左胸部及ヒ右肩胛部打撲傷ノ二名ノ外凡テ執務ニ
差支ナキ輕傷ナリキ

被服ノ甚シク濕潤セルモノ又ハ煙管服ノ儘避難シタルモノ五十名ニハ本艦兵員ノ被服ヲ貸與シ雜品ハ各自蓄フル所
ヲ以テ分テリ

總員ニ食ヲ供シタルハ七時四十分ナリシカ此ノ時ハ前述十八名ノモノモ起キ出テ、談シツ、食ヲ取ルニ至レリ
士官ニハ本艦備附ケノ毛布ヲ以テ四枚宛ヲ分チ得タリ兵員ニハ本艦兵員カ貸與セラレタル増シ毛布ヲ分與セシニ三
人ニ對シニ枚ノ割トナレリ元來本艦ハ午後十時ヲ以テ燈爐ヲ消火スルコト、ヒシモ當夜ハ此ノ如キ次第ナルヲ以テ
終夜焚火スルコト、爲シ一人ノ當番ヲ附セリ而テ濟遠兵員ハ之ニ近ク臥セシメ本艦兵員ハ之ニ遠ク又ハ他ノ水夫室

等ニ臥セリ夜二時氣温三十八度當室内ハ六十度ヨリ八十度最低温度ノ處ニテ五十四度ニ保タシムルヲ得タリ
赤城收容者八十八名ノ内數名ハ殆ト死ヨリ蘇生セルモノニシテ他ニ三個ノ死體アリ遂ニ同生ニ至ラサリシト聞ク本
艦收容者ニ比スルニ彼ハ重ク是ハ輕キノ感アリ是恐クハ水中ニアリシ時間ノ長短ニ因ルモノナラン本艦ノ救助艇ヲ
收メタル時間ヨリ考フルニ本艦ニ收容セルモノハ最長キモノニシテ約五十分ヲ超ユルモノナシ而テ本艦ハ赤城ヨリ
モ早ク遭難點ニ近ツキ得タルト兼ネテ又早ク水中ニ入レルモノ程潮流ニ依テ多ク流サレ反テ赤城ニ救ハルハ、ニ便ナ
ル位置ニ至リシ等ノ關係モアルナランカ
本艦乗組兵員ハ曾テ一回或ハ數回ノ遭難經驗アルモノニシテ當時實ニ熱心ナル同情ト驚クヘキ沈著ノ態度トヲ以テ
救助ニ從事シタルハ小官ノ特ニ記セントスル所ナリ
翌十二月一日風波ノ爲メ出港スル能ハス僅ニ距リテ投錨セル赤城トノ交通モ絶タレテ同所ニ碇泊ス此ノ夜ニ於ル狀
態昨夜ニ同シ凡テ平靜トナレルノミ

凡ソ人此ノ如キ奇難ニ遭遇シ多少ノ精神感動ヲ起スハ當然ニシテ爾後種々ノ刺激ニ因リテ衝動スルモ亦其ノ常ナリ
是等ハ自然ノ回復ニ委スルノ外ナキモ幾分ノ慰安ヲ與ヘント欲シ口ニ任セテ一二話柄ヲ試ミタリ然レトモ本艦便乗
中不眠症ヲ起セルモノ等ニ接セサリキ十二月二日浪收ル乃チ赤城ニ收容セラレタル士官准士官六名下士以下八十二
名合計八十八名ヲ本艦ニ受容シ午前八時四十分雙頭灣ヲ發シテ午後六時青泥窪ニ著シ直ニ下士以下半數九十名及ヒ
准士官以上十一名ヲ臺中丸ニ移シ翌三日殘留セル濟遠乗組員及ヒ死體ヲ臺北丸ニ移ス

第九目 軍艦高砂

巡洋艦高砂^(四二二)ハ、三十七年十二月十二日旅順港外ノ哨區ニ就キ、封鎖監視ノ任務ニ服セシ
カ、十一時五十分頃忽然浮流セル機械水雷ニ觸レ、左舷側中央水準線部ニ大ナル破孔ヲ生シタ

ルヲ以テ、直ニ防水手段ヲ施シ、モ其ノ效ナク、海水速ニ侵入シテ艦體次第ニ左舷ニ傾斜シ、到
底沈没ヲ免ル、能ハサルヲ見ルヤ、艦長ハ無線電信ヲ以テ救ヲ僚艦ニ求メタリ、此ノ夜高砂ニ
遠カラサル位置ニ在リテ漂泊セル音羽ハ、高砂ノ探海燈火ヲ目標トシテ、速ニ之カ救助ニ赴キ、
端舟ヲ派遣セル頃ハ、高砂既ニ沈没シテ、乗員ノ少數ハ二隻ノ端舟ニ移リ、其ノ他ハ總テ海ニ投
シ浮游セルヲ以テ、暗夜風雪怒濤ヲ冒シテ之カ救助ニ努メ、遭難當時ノ乗艦者四百三十六名ノ
中、士官以下百六十二名ヲ收容シ、内准士官以上三名下士卒六名ハ、音羽ニ於テ救急法ヲ行ヒシ
モ、其ノ效ナクシテ凍死シ、准士官以上二十二名、下士卒二百四十四名、軍屬八名ハ當夜收容ニ
漏レ、總テ二百八十三名ノ戦死者ヲ生シ、軍醫部ニアリテハ、一名モ生ヲ得タルモノナシ、之カ救
療顛末ニ關シ、左ニ音羽軍醫長ノ報告ヲ掲ク、

軍艦高砂遭難者救療顛末

軍艦音羽軍醫長海軍大軍醫 日下昌次郎

音羽ハ命ニ依リ十二月十二日日没後ヨリ旅順口沖ノ哨區ニ就キ以テ封鎖監視ニ從事セシカ十一時五十分頃高砂ノ哨
區ニ方リ突然探海燈火ノ暗ヲ破リテ閃々タルヲ認メタリ十三日午前零時三分高砂ヨリ電報アリ曰ク「我レ機械水雷
ニ觸ル直ニ來レ」ト是ニ於テ音羽ハ直ニ高速力ヲ以テ之カ援助ニ赴ケリ零時四十分高砂ヨリ更ニ「傾斜増ス危シ地
點ニ在リ探海燈ヲ振ル」トノ無線電信ニ接ス零時四十五分高砂ノ探海燈火滅シ新ニ點々タル艦燈ノ水面ニ明滅スル
ヲ見ルアルノミ一時八分探海燈ヲ以テ該方面ヲ照射スルニ高砂ハ既ニ著シク傾斜シテ將ニ沈没セントスルノ悲境ニ
アリ依テ時ヲ移サス「ピンネース」一隻「カッター」二隻及ヒ傳馬船二隻ヲ卸シ之カ救助ニ赴カシメシニ須臾ニシテ高
砂ハ沈没シ去リテ全ク艦影ヲ認ムル能ハス我カ探海燈下ノ水面ニハ投水者群集シテ慘憺タル光景ヲ呈シ叫喚ノ聲ハ

風ニ伴ヒテ音羽ニ達シ轉タ悲懷ノ感アラシメタリ而テ派遣セル救護艇員ハ我カ探照燈下ニ溺者ヲ搜索シ得ルニ隨ヒ挺手之ヲ舟上ニ引揚ケ滿ソルニ及ヒテ本艦ニ引返シ再救助ニ赴キ孰レモ二三回ノ往復ヲ爲シツ、極力之カ救助ニ励メタリ

高砂溺者ノ多クハ木片、釣床其ノ他ノ浮游物ニ頼リテ水面ニ浮ヒ游泳スルモノハ極テ少ク當時ノ氣溫華氏三十二度海水溫度四十七度ヲ示シ潮風強吹シテ其ノ力四ニ及ヒ波浪高ク之ニ加フルニ飛雪繽紛トシテ面ヲ打チシカハ艇ノ操縦極テ困難ニシテ艇員ノ動作自在ナラス故ヲ以テ舟ヲ溺者ニ近ツクルモ波浪ニ妨ケラレテ目的ヲ達セサリシコト一再ニ止ラス或ハ端舟ヨリ與ヘラレタル「オール」ヲ把握シタルヲ以テ靜ニ引寄せ艇側ニ近ツキタル瞬間ニ深ク没シ去リタルモノアリ幸ニ救助セラレタル者ト雖モ艇内ニ收容スルニ至ル迄ニ多クノ艱苦ヲ嘗メタルモノ少カラス殊ニ「ピンネース」ニアリテハ舷側高キカ故ニ收容ニ對スル困難一層甚シキヲ加ヘ時間ヲ費セルコト他艇ニ比シテ多カリキ之ニ反シ傳馬船ハ舷低ク輕快ナルヲ以テ頗ル收容ニ便ナリシト云フ溺者ヲ端舟ヨリ本艦ニ收容スルニ際シテモ波浪舷側ニ碎ケ端舟一上一下シテ好位置ニ接舷セス剩ヘ暗夜纔ニ洋角燈ノ光ニ頼リテ作業セサルヲ得サルヲ以テ萬事意ノ如クナラス止ムヲ得ス一人宛「ホイップ」ト拵トニテ甲板上ニ引揚ケ時間ト勞力トヲ要セシコト實ニ少カラザリシナリ斯ノ如ク救助ニ從事スルコト約三十分ニシテ慘憺タリシ海面ノ光景ハ再寂寞タル水面ト爲リ復喧囂セル人聲ヲ聞カサルニ至ル午四時四十二分搜索ヲ止ム

收容シタル高砂乗員ハ左ノ如シ

高砂艦長	海軍大佐	石 橋 甫
同機關長	海軍機關中監	森 永 頼 太郎
同航海長	海軍少佐	小 倉 寛 一郎
同軍醫長	海軍々醫少監	鹿 野 寅 吉

同主計長	海軍大主計	齋 藤 宗 三 郎
同分隊長心得	海軍中機關士	勝 木 政 次
同乗組	海軍少尉	伊 東 綱 九
同乗組	海軍少機關士	加 藤 利 三 郎
同乗組	海軍少主計	榑 幹
同乗組	海軍上等機關兵曹	原 口 萬 之 進
同乗組	海軍上等機關兵曹	中 原 清 之 進
同乗組	水兵部下士	十 七 名
同乗組	機關部下士	十 名
同乗組	水兵部卒	八 十 四 名
同乗組	機關部卒	三 十 三 名
同乗組	其ノ他ノ卒	五 名
同乗組	軍 屬	二 名
合 計		百 六 十 二 名

收容所準備 十三日午前零時四十分高砂ヨリ「傾キ増ス危シ云々」ノ第二次電報ニ接スルヤ小官ハ先ツ收容所ヲ左ノ如ク定メタリ

- (一)健康者收容所 下甲板中央部ニ在ル機關室及ヒ「ボイラールム」周圍ノ溫暖ナル通路
- (二)重症者 下甲板病室附近ノ甲板
- (三)輕症者 下甲板病室後部ノ「コンパアトメント」ノ甲板

右ノ如ク收容所ヲ定メ小官ハ堀井少軍醫ト共ニ艦内ニアル軍醫部員ヲ督勵シテ手術室(本艦ノ手術室ハ艦裝ノ當時小官ノ考
リ而テ手術ヲ要スル際ニハ室内ノ寢床ヲ取去リ之ヲ次ノ室ナル浴室ニ運ヒ室ノ中央部ニ藥室内ノ手術臺ヲ据附ケ手術所トナスモノ)ヲ整頓シ創傷ニ
ニシテ該室ノ甲板ハ浴槽ニ便スル爲メ「タイル」ヲ敷キ且室内無益ノ裝飾ヲ避ケ可及的消毒シ易カラシムルノ目的ヲ以テ艦裝セリ)ノ整頓シ創傷ニ
對スル諸般ノ準備ヲ命シ又一方ニアリテハ溺者ニ對スル準備トシテ毛布三百枚ヲ二分シ病室前ノ收容所ト上甲板ト
ノ二箇所ニ配布シ稀釋セル温火酒及ヒ温湯ヲ病室ノ前面ニ備ヘ豫メ軍醫部員ノ配置ヲ定メ遭難者ノ來著ヲ待チシニ
幾ナラスシテ收容セシハ高砂端舟ノ乗員三十七名ナリキ

收容 高砂所有ノ「カッター」ニ乗シテ午前一時二十五分本艦ニ到着セシ第一回ノ收容者ハ機關長森永頼太郎主計長
齋藤宗三郎少主計柳幹上等機關兵曹原口萬之進外下士卒十數名ニシテ避難ノ際倒レ懸リタル側砲ニ艇側ヲ破壊セラ
レテ海水艇内ニ侵入シ且「オール」ノ多數ヲ流失シテ僅ニ二本ヲ貽スノミナルカ故ニ總員海水ヲ汲ミ出シツ、潮流ニ
隨ヒ辛ウシテ本艦ニ到着スルヲ得タリ然レトモ寒冷ニ暴露セル時間短カリシ爲メ幸ニ凍死ノ感作ヲ受ケタルモノナ
カリキ

前者ノ到着後數分ヲ經テ第二回ニ到着セル高砂所屬ノ「カッター」ニハ乗員約二十名アリ艇體ニ毫モ損害ヲ蒙ラサリ
シヲ以テ孰レモ健全ナリ而テ輕休業患者二名實ニ此ノ内ニ在リ休業者ハ肛門膿瘍切開後ノ患者ニシテ病衣ヲ著シタ
ル儘避難シタリシナリ抑高砂遭難ニ際シ生存者中ニ一名ノ看護部員ヲ見サルニ拘ラス尙能ク休業患者ノ生存スルヲ
得タリシ事實ハ是眞ニ高砂軍醫部員ノ職責ヲ完ウシタルヲ證スルモノニシテ遭難ノ際先ツ患者避難ノ策ヲ講シ後チ
平素定メラレタル配置ニ戻リ動作シツ、アリテ未タ上甲板ニ出デサルニ先チ艦ト共ニ沈没セシモノナルカ如ク收容
者中稻垣大軍醫以下看護部員ヲ浮游中ニ認メタルモノナシト謂ヘルニ徴シテ知ルヘキナリ

第三回以後ノ收容ハ盡ク本艦ノ端艇及ヒ傳馬船ニ據ル救助總數百三十名内外ナリ艦長石橋甫航海長小倉寛一郎軍醫
長鹿野寅吉中機關士勝木政次少尉伊東綱九少機關士加藤利三郎實ニ此ノ内ニアリ

實施シタル救急法 (一)健全ナル收容者ハ先ツ上甲板ニ於テ濡衣ヲ脱セシメ毛布二枚宛ヲ貸與シ下甲板病室ノ前ニ

於テ豫テ準備セシ温衛生酒ヲ飲マシメ前記病室前部ノ温暖ナル收容所ニ一時休息セシメ後チ暫時ニシテ順次本艦
内ニ貯藏シアリタル新被服ヲ給與セリ

(二)凍死ノ感作ヲ受ケタルモ輕キモノハ上甲板ニ於テ濡衣ヲ脱シ毛布ニ換ヘ創傷ヲ負ヘルモノハ治療所ニ赴カシメ
凍死者ハ病室後部ノ甲板上ニ收容シ次ノ處置ヲ施セリ

(イ)傷者ノ處置 輕傷者ノ多クハ四肢ノ挫創若クハ挫傷ニシテ出血等ノ著シキモノナカリキ而テ收容所ニハ當時
重輕症ノ別ナク一時ニ輻湊シ來リシヲ以テ輕傷ニ對シテハ單ニ一時的應急處置ヲ加ヘ重症者ノ治療了リテ後チ
再創傷部ヲ精細ニ検査シ創面ハ制腐ノニ處置シ裝創綑帶ヲ貼用セリ

(ロ)凍死ニ罹リ知覺神經其ノ機能ヲ減退シ思考力多少衰ヘ五官機能錯亂セルモ未タ人事不省ニ陥ラサル輕度ノ全
身寒凍作用ヲ蒙リタル者ニ對シテハ凍死療法ノ法則ニ據リ之ヲ緩ムルコト急速ニ過キサル様特ニ注意シ當初ヨ
リ健全ナル收容者ト區別シ健者ト同一ノ温暖ナル收容所ニ運ハサル様嚴重ニ監督シ先ツ後部ノ下甲板ニ移シテ
少量ノ火酒ヲ飲マシメ冷濕布ヲ以テ十分全身ヲ摩擦シ更ニ回復ニ赴ク迄毛布上ヨリ長時間摩擦シ前記ノ症狀同
復スルヲ俟チテ健康者ト同シク温暖ナル收容所ニ移セリ

前記輕症ナル凍死患者ノ數ハ合計十二名ニシテ回復ニ赴キシ時間ハ每一人約三十分間ヲ費シタリ此ノ如ク治療時
間比較的長時ニ互リタルニ拘ラス治療ノ效果極テ佳良ナリキ

(三)重症患者ニ對シテハ我カ軍醫部員ハ全力ヲ竭シテ之カ救助ニ從事シタリ而テ重症患者ヲ上甲板ヨリ治療所ニ收
容スルニハ擔架ヲ使用スルカ如キ迂遠ノ方法ニ據ラス悉ク徒手運搬法ヲ以テシ所謂速是命ナレハ實ニ寸刻ヲ爭ヒ
可能的迅速ニ運搬シ來ラシメ急速ニ被服ヲ脱セシメ患者ヲ俯臥位ニ置キ胃部ニ小枕ヲ敷キ壓迫ヲ加ヘテ海水ヲ吐
逆セシメ更ニ仰臥ニ變位シ鼻腔口腔内ノ異物粘液ヲ驅除シテ開通ニ注意シ肩胛間部ニ枕ヲ置キ人工呼吸ヲ行フト
同時ニ樟腦依の兒ノ皮下注射ヲ施シ冷濕布ヲ以テ全身ヲ摩擦シ前胸部ヲ濕布片ニテ輕打シ尙皮膚ヲ毛布片ニテ摩

救護艇内ニハ可及の多數ノ毛布或ハ防寒外套ヲ搭載スルヲ最必要ナリト認ム即チ艇内ニ於テ溺者ヲ迅速ニ脱衣セシメ毛布ヲ纏絡スルカ若クハ外套ヲ著用セシメナハ必スヤ凍死ノ幾分ヲ未發ニ防遏シ得ルノ效果アラシ一例ヲ舉ゲテ之ヲ示セハ勝木中機關士ハ浮游中本艦ノ救助艇ニ收容セラレタルモノニシテ水中ニアリシ時ハ強ク寒冷ヲ自覺セサリシモ救ハレテ水中ヲ脱シ端舟内ニ移ルヤ俄ニ非常ノ寒冷ヲ覺エ寒戰咬牙シ身神共ニ頗ル疲憊ヲ覺エシモ濡衣ヲ脱シ防寒外套ヲ著セシ後チ若干時ヲ經テ全ク回復セリト云ヘルカ如キ氣溫ノ海水溫度ニ比シ著シク低落セルヲ以テ氣中ニ出ツレハ體溫ノ傳導作用俄然旺盛トナリシニ因ルモノナルヘシ蓋海水ニ浮游中未ダ全ク被服ノ濡潤セサル間ハ體溫ノ傳導作用過激ナラサルノミナラス浮游中ニ於テモ尙且多少ノ運動ヲ營爲スルモノナレハ僅ニ溫ノ放散作用ヲ増シ靜止狀態ニ於ルヨリハ保溫狀況佳良ナルヘシ當夜ノ氣溫ハ三十二度ニシテ海水溫度ハ四十七度ナレハ其ノ差十五度ナリ故ニ全身濡潤セハ氣中ニアリテ靜止セルヨリハ寧ろ海水中ニ在リテ浮游セハ溫ノ傳導作用比較的ニ少ク從テ氣中ニ於ルヨリハ比較的ニ長ク寒冷ノ侵襲ニ抵抗シ得ラルヘシ迄寒ノ候ニ於テ溺者ヲ端舟内ニ收容セハ可及の迅速ニ濡衣ヲ脱却セシメ一時毛布等ヲ纏絡セシムルヲ最良ノ策ト爲ス

軍艦高砂軍醫長 海軍軍醫少監 鹿野 寅吉(二五八五)

高砂遭難前後ノ狀況ニ就キ開キ得タル所ヲ綜合スルニ鹿野軍醫少監ハ沈没ノ前夜十一時半頃迄士官室ニ在リ私室ニ入りタルハ十二時前後ナラン見エ白地浴衣一枚ニテ海水艇中ノ浮漂シ遭遇スル事變急發シ寢衣ヲ救助艇ニ拾收セシムルナリ其ノ海中ニアリテ救助艇中ノ浮漂シ遭フ見ルヤ「オレハトモ助カラヌオモハ早ク行ケ」トノ語ヲ傍人ニ放チタルアリテ傍ニ浮漂セシタ難者ノ一人カ慥ニ開キタリト云フ鹿野少監ノ如キハ他患者ニ比シ割合ニ早ク收容セラレタルニ拘ラス到著後數分ヲ出テシメタルニ因ルモノナラン

軍艦高砂乗組
海軍少尉
伊東 綱丸（三五八六）

凍死。

同航海長 海軍少佐 小倉寛一郎(三五八七)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際海ニ投シ午前二時十分音羽ニ收容セラル、當時精神朦

臍トシテ全ク無欲状態ヲ呈シ呼ヘハ幽ニ無力性單語ヲ應答ス少量ノ液體ヲ吐逆セシメタリ顔面淡紫藍色ヲ呈シ瞳孔散大シテ對光線反應微弱ナリ脈搏ニハ觸レスト雖モ明ニ低調緩徐ノ心音ヲ聴取ス全身外表ニ認ムヘキ損傷ナシ救急處置ヲ加ヘシモ其ノ效ナク心音次第ニ衰ヘ數分時ヲ經テ死亡ス

凍死。

軍艦高砂乗組 海軍一等兵曹 河野 繁 造(二五八八)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際海ニ投シ午前十時十分音羽ニ收容セラル當時顔面淡紫藍色ヲ呈シ四肢未タ全ク厥冷セス瞳孔散大スレトモ對光線反應アリ微細緩徐ノ脈搏ヲ觸知シ呼吸運動ハ極テ微弱ニシテ殆ト休止スルカ如ク神識朦朧タリ全身外表部ニ外傷ヲ認メス救急法ヲ施シ、モ其ノ效無ク次第ニ無欲状態トナリ十數分ヲ經テ死亡ス

凍死。

同 海軍二等機關兵曹 向井 徳 藏(二五八九)

同 海軍一等機關兵 田中 金 助(二五九〇)

同 海軍二等水兵 北川 治 助(二五九一)

同 海軍三等水兵 森下 仁 太郎(二五九二)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際海ニ投シ午前十時十分音羽ニ收容セラル當時尙低聲呻吟ノ聲ヲ放チ顔面淡紫藍色ヲ呈ス四肢厥冷瞳孔散大シ光線ニ對スル反應僅微ニシテ脈搏ニ

觸レス不正ノ心音ヲ聴取ス但全身外表部ニ外傷ヲ認メス救急法ヲ施シ、モ其ノ效無ク數分時ヲ經テ死亡ス

凍死。

同 海軍一等水兵 中井 末 吉(二五九三)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際海ニ投シ午前十時十分音羽ニ收容セラル當時精神少シク朦朧トシテ頻ニ獨語シ且寒戰セリト云フ音羽ニ收容セラル、ヤ先著セル僚友ハ同人ノ無事收容セラレタルヲ見驢喜ノ情ニ禁ヘサリケン自己ノ處置セラレタルカ如ク直ニ濕衣ヲ脱却セシメ毛布ニテ被ヒ下甲板ニ伴ヒ此ノ處ニ衛生酒ヲ與ヘテ溫暖ナル健康者ノ收容所ニ導キ甲板上ニ横臥セシメタリト云フ爾後十數分ヲ經テ收容者ノ一人機關室周圍ノ通路ニ横臥シ呼ヘトモ應セス死者ナルヤモ知レスト衛生伍長ノ報告ニ接シタルヲ以テ急キ治療所ニ運搬セシメテ檢スルニ顔面淡紫藍色ヲ呈シ瞳孔反應ナク心音ヲ聴取セス試ニ救急法ヲ施シ、モ其ノ效無ク已ニ全ク絶命セリ恐ラクハ凍死者ヲ煖ムルコト早キニ過キタルカ爲メ無欲暗眠状態ニ移行シ終ニ致命シタルモノナラン

右踝關節捻挫

同 海軍一等信號兵曹 大槻 善 太郎(二五九四)

明治三十七年十二月十三日午前零時五分高砂沈没ノ際墜落セル砲彈ニ敷カレテ右足關節ニ負傷シ音羽ニ收容後診スルニ右下腿下三分一部位以下同足ノ尖端ニ至ル迄一般ニ發赤腫脹シ殊ニ

内外踝部ニ著シク足關節ノ運動著シク制滅セラレ疼痛アリ歩行容易ナラス、依テ石炭酸水巻法ヲ處シ同日病院船神戶丸ニ入院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉シ十二月三十日更ニ吳海軍病院ニ轉療セシニ腫脹疼痛漸次消散シテ三十八年一月十九日全治退院ス 經過日數三十七日

右腕關節捻挫 左下腿挫創 右下腿擦過傷

軍艦高砂乗組 海軍二等水兵 堀 熊 市(二五九五)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷ス(原因)音羽ニ於テ診スルニ右腕關節ノ周圍一般ニ腫脹シ背面ニ壓痛アリ屈伸運動妨ケラル共ノ他左下腿前面ニ小ナル挫創及ヒ其ノ右側ニ擦過傷ヲ存ス同日病院船神戶丸ニ入院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉シ三十八年一月十一日全治退院ス 經過日數二十九日

右膝關節部挫傷

同 海軍三等水兵 高 見 儀 平(二五九六)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷ス(原因)音羽ニ於テ診スルニ右膝關節部一般ニ腫脹シ殊ニ膝蓋骨ノ周圍ニ甚シク壓痛疼痛アリ關節ノ運動自由ナラス、依テ石炭酸水巻法ヲ處シ同日病院船神戶丸ニ入院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉シ三十八年一月十一日全治退院ス 經過日數二十九日

右足背挫傷

同 海軍三等水兵 八 塚 又 太郎(二五九七)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷ス(原因)音羽ニ於テ診スルニ右足背一般ニ腫脹シ處々ニ溢血ヲ認メ舶機骨部ヲ健側ニ比スルニ著シク隆起シ限局性ノ壓痛アリ右股腺ニ炎症ヲ續發シテ歩行困難ヲ訴フ、依テ石炭酸水巻法ヲ處シ同日病院船神戶丸ニ送院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉療シ腫脹疼痛漸次消散シテ三十八年二月十日全治退院ス 經過日數五十九日

右拇指、左小指挫創 臀部擦過傷

同 海軍三等水兵 西 山 岩 吉(二五九八)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷ス(原因)音羽ニ於テ診スルニ右拇指末端ハ爪甲ヲ併セテ挫滅セラレ第二節ノ指骨端ヲ露出シ又左側小指根部掌面ヨリ斜ニ第二節ノ背面ニ走ル長サ四仙迷ノ挫創アリ其ノ他右臀部ニ數多ノ小擦過傷ヲ認メ、依テ制腐的裝創處置ヲ施シ同日病院船神戶丸ニ入院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉シ三十日更ニ吳海軍病院ニ轉療セシニ兩創共ニ瘡痕ヲ結ヒテ三十八年一月二十八日全治退院ス 經過日數四十六日

右示指挫創兼第三指骨々折 右小趾挫創 左足背挫傷

同 海軍二等機關兵曹 山 路 種 吉(二五九九)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷ス(原因)音羽ニ於テ診スルニ右示指第三節尖端ノ軟組織ヲ喪ヒ第三指骨ヲ中央ヨリ折斷シ摩札ヲ觸知ス又右小趾根部ニ横走スル挫創アリ左足背面第二、三、四趾根部ニ輕度ノ挫傷ヲ認メ、依テ制腐的裝創處置ヲ加ヘ同日病院船神戶丸ニ入院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉シ三十日吳海軍病院ニ轉療セシニ骨折ハ其ノ後癒著シ挫創ハ

療痕ヲ結ヒテ三十八年二月十八日全治退院ス 経過日數六十七日

百九十

以下十名ハ極テ輕傷ニシテ、其ノ症狀ヲ特記スヘキ價値ナシ、依テ單ニ病名及ヒ姓名ヲ表記ス、

創傷名	創況及ヒ経過摘要	官職	姓名	番號
腰部挫傷	十二月二十一日全治ス 受療日數八日	一等水兵	武地幸次郎	(二六〇〇)
左環指擦過傷	微傷ニシテ十二月二十四日全治ス 受療日數十日	同	新後由吉	(二六〇一)
左、右小指擦過傷	十二月二十二日全治ス 受療日數九日	一等機關兵	深尾秀男	(二六〇二)
左大腿挫傷	十二月十四日全治ス 受療日數一日	二等水兵	岸善太郎	(二六〇三)
右足背挫傷	微傷ニシテ十二月二十一日全治ス 受療日數八日	二等機關兵	植木關音	(二六〇四)
胸部挫傷	十二月十七日全治ス 受療日數四日	三等水兵	安村繁市	(二六〇五)
左示指挫傷	微傷ニシテ十二月二十六日全治ス 受療日數十三日	四等水兵	酒井倉吉	(二六〇六)
右肩胛部挫傷	微傷ニシテ十二月十四日全治ス 受療日數一日	同	鶴谷良一	(二六〇七)
左小指擦過傷	十二月二十二日全治ス 受療日數九日	同	梶谷竹之助	(二六〇八)
右小趾挫創	淺キ裂創狀ニシテ十二月二十七日全治ス 受療日數十四日	四等機關兵	坂口七郎	(二六〇九)

前掲目下音羽軍醫長ノ報告ニ係ル凍死者九名負傷者十六名ノ外、聯合艦隊附屬敷設隊附海軍大軍醫島本又太郎ノ追加報告ニ基キテ、尙傷者四名ヲ増加ス、内二名ハ病院船神戸丸ヲ經テ内地ノ海軍病院ニ轉送セラレタルモノニ屬ス、即チ左ノ如シ、

右下腿挫創

軍艦高砂乗組 海軍二等水兵 柳川秀次郎(二六二〇)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷スト云フ、翌十四日聯合艦隊附屬敷設隊ニ於テ診スルニ右下腿外側下三分ノ一部ニ一錢銅貨大ノ不正圓形淺挫創アリ其ノ中央ニ黒褐色ノ壊死組織ヲ附著シ創縁ハ鋭クシテ堤防狀ニ腫起シ紫紅色ヲ呈ス、十二月二十二日病院船神戸丸ニ送院シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉院ス、當時肉芽遲鈍ニシテ出血シ易ク頑固ノ潰瘍面ト爲リ三十八年三月六日吳海軍病院ニ轉療、一錢銅貨大暗赤色不良ノ創面ヲ呈セシカ適應加療ニ依リ三月二十八日全治退院ス 経過日數百五日

左右中耳炎

同 海軍三等機關兵 出原種助(二六二二)

明治三十七年十二月十三日高砂沈没ノ際負傷スト云フ、十四日聯合艦隊附屬敷設隊ニ於テ診スルニ外聽道著シク充血シテ石炭粉末ヲ附著シ聽力ハ左右接耳ニシテウエーベル氏法左陽性、右陰性ナリ、依テ耳道ヲ清拭シテ綿栓ヲ施シ十八日病院船神戸丸ニ送院ス、當時左右鼓膜潤濁シ槌骨把柄部ニ於テ血管ノ怒張スルヲ認ム頭痛耳鳴アリ聽力ハ左右共ニ三百分ノ觸ヲ示ス加療ニ依リ自覺症狀頗ル快癒シ二十八日佐世保海軍病院ニ轉院シ三十八年一月二十五日全治退院ス 経過日數四十三日

衰弱症(業)

第八章 第二節 第九目 軍艦高砂

百九十二

軍艦高砂乗組

海軍三等水兵

北村實太郎(三六二)

溺水ノ爲メ全身疲勞シ精神不安ノ狀アリシモ二十二日全治ス

經過日數九日

臀部挫傷

同

海軍一等水兵

角野政吉(二六三)

輕傷ニシテ二十三日全治ス

受療日數十日

高砂遭難ノ當時戰死シタルモノハ、軍艦音羽ニ收容セラレタル士官三名、下士卒六名ノ凍死者ヲ併セテ二百八十三名ニ達シ、准士官以上二名、下士卒三名ノ死體ハ、旅順港外ニ於テ我カ軍艦ノ收容スル所ト爲リタレトモ、其ノ他ノ准士官以上二十名、下士卒二百四十一名軍屬八名ハ、終ニ死體ヲ收容スルコト能ハス、

一、死體ヲ收容セシモノ

十二月十五日八重山死體ヲ收容ス

海軍大尉

川副正治(二六四)

十二月十三日八雲死體ヲ收容ス

海軍上等兵曹

登平次郎(二六五)

十二月十五日八重山死體ヲ收容ス

海軍一等信號兵曹

藤井幾藏(二六六)

同前

海軍一等機關兵曹

藤井金三郎(二六七)

同前

海軍一等水兵

落合市藏(二六八)

小計

五名

二、死體ヲ收容セサリシモノ

海軍中佐	中山 鋳次郎
海軍大尉	深 柄 彦 熊
海軍大尉	木 村 昌 二
海軍大尉	森 永 尹
海軍大機關士	松 尾 三 平
海軍大機關士	三 井 昌 尾
海軍大軍醫	稻 垣 久 逸
海軍中尉	菅 野 桂 三 郎
海軍中尉	大 塚 林 八
海軍中尉	松 原 管 太 郎
海軍少尉	細 山 田 敬 二
海軍少尉	後 藤 彌 七 郎
海軍少尉	備 俄 璋 助
海軍少尉	増 田 薫
海軍兵曹長	伊 藤 長 重
海軍機關兵曹長	杉 中 利 太 郎
海軍上等兵曹	志 摩 龜 吉
海軍船匠師	小 野 友 次 郎
	島 田 秀 四 郎

海軍上等機關兵曹	大 辻 眞 次 郎
海軍一等兵曹	宮 地 久 吉
海軍一等兵曹	橋 本 武 雄
海軍一等兵曹	一 坪 富 太 郎
海軍一等兵曹	吉 村 太 一
海軍一等兵曹	仲 田 良 太 郎
海軍一等兵曹	鹽 谷 巳 之 資
海軍一等兵曹	鈞 井 悅 治
海軍一等兵曹	岩 中 廣 助
海軍一等船匠手	石 井 榮 三 郎
海軍一等機關兵曹	向 井 清 七
海軍一等機關兵曹	後 藤 順 次
海軍一等機關兵曹	富 永 五 郎
海軍一等機關兵曹	大 久 保 貞 次 郎
海軍一等機關兵曹	小 林 與 助
海軍一等機關兵曹	河 崎 外 吉
海軍二等兵曹	中 山 德 太 郎
海軍二等兵曹	清 水 若 松
海軍二等兵曹	岩 村 孫 六

海軍二等兵曹	濱原好太郎	海軍三等兵曹	海野與八
海軍二等兵曹	尾崎淺次郎	海軍三等兵曹	新上卯太郎
海軍二等兵曹	廣津實太郎	海軍三等兵曹	黒澤胤輔
海軍二等兵曹	中村用助	海軍三等兵曹	大信九市
海軍二等兵曹	木下高市	海軍三等兵曹	藤田熊槌
海軍二等兵曹	木村柳作	海軍三等兵曹	河西三平
海軍二等兵曹	岡田竹馬	海軍三等機關兵曹	深谷榮次郎
海軍二等信號兵曹	杉田幸太郎	海軍三等機關兵曹	龜井芳一
海軍二等信號兵曹	藤重友輔	海軍三等機關兵曹	福島熊喜
海軍二等船匠手	谷本喜一郎	海軍三等機關兵曹	莊喜藏
海軍二等機關兵曹	大西季太郎	海軍三等機關兵曹	瀬野喜市
海軍二等機關兵曹	岡本徳松	海軍三等機關兵曹	青木惣吉
海軍二等機關兵曹	森重三助	海軍三等筆記	阿座上勝一
海軍二等機關兵曹	藤村寅治	海軍三等廚宰	關谷淺五郎
海軍二等機關兵曹	木本龜吉	海軍一等機關兵	山口儀一郎
海軍二等機關兵曹	山下増太郎	海軍一等機關兵	山本里之兒
海軍二等看護手	今井柘之助	海軍一等機關兵	末光作郎
海軍二等筆記	森川槌太郎	海軍一等機關兵	八木寅之助
海軍二等廚宰	拜原金藏	海軍一等機關兵	安尾實藏

海軍一等機關兵	山崎惣三郎	海軍一等看護	矢倉晃
海軍一等機關兵	清宗七五郎	海軍一等看護	賀門靜太
海軍一等機關兵	田枝文一郎	海軍一等主廚	秋山庄助
海軍一等機關兵	平賀稻藏	海軍一等主廚	三木熊之助
海軍一等機關兵	清水森太郎	海軍一等水兵	山田美代槌
海軍一等機關兵	三好庄藏	海軍一等水兵	河村桂二
海軍一等機關兵	鈴木權藏	海軍一等水兵	福島徳松
海軍一等機關兵	鹽見徳次郎	海軍一等水兵	中尾秀太郎
海軍一等機關兵	小川千代次	海軍一等水兵	土屋茂平
海軍一等機關兵	飯綱峯藏	海軍一等水兵	柏原辰藏
海軍一等機關兵	勝谷求馬	海軍一等水兵	竹井春藏
海軍一等機關兵	石井幾太郎	海軍一等水兵	若山眞雄
海軍一等機關兵	森安治	海軍一等水兵	喜田彌右衛門
海軍一等機關兵	櫻井源次郎	海軍一等水兵	神田榮作
海軍一等機關兵	木村初吉	海軍一等水兵	猪熊文三郎
海軍一等機關兵	國則銘吉	海軍一等水兵	濱田文吉
海軍一等機關兵	清水宇藏	海軍一等水兵	野上清信
海軍一等機關兵	奥田賢吉郎	海軍一等水兵	松本與太郎
海軍一等機關兵	秋倉榮次郎	海軍一等水兵	松本元市

海軍一等水兵	中尾常次	海軍二等水兵	井口敬五郎
海軍一等水兵	細川祥一	海軍二等水兵	福重豐
海軍一等水兵	灰谷榮作	海軍二等水兵	片山幸藏
海軍一等水兵	大藤章一	海軍二等水兵	小林泰藏
海軍一等水兵	和泉元初太郎	海軍二等水兵	熊谷重次郎
海軍一等水兵	三好雪太郎	海軍二等水兵	島岡六三郎
海軍一等水兵	山田鍋吉	海軍二等水兵	中筋林右衛門
海軍一等水兵	福家淺吉	海軍二等水兵	服部豐助
海軍一等水兵	篠原一	海軍二等水兵	中井多聞
海軍一等水兵	永瀬榮一	海軍二等水兵	川端仁太郎
海軍一等水兵	淺川克四郎	海軍二等水兵	中村泰治
海軍一等水兵	梶原德一	海軍二等水兵	日開友三郎
海軍一等信號兵	吉金權三郎	海軍二等水兵	井上甚右衛門
海軍一等信號兵	溝口重吉	海軍二等水兵	大西信次
海軍一等信號兵	岡田惣次郎	海軍二等水兵	安田茂郎
海軍一等木工	熊野松治	海軍二等水兵	大島源衛
海軍二等水兵	樋爪英	海軍二等水兵	石井梅藏
海軍二等水兵	増見新作	海軍二等水兵	中島吉太郎
海軍二等水兵	山本亦五郎	海軍二等水兵	藤木菊次

海軍二等水兵	田中末松	海軍二等機關兵	錦織卓一
海軍二等水兵	中村洋元	海軍二等機關兵	原菊次郎
海軍二等水兵	上野山繁太郎	海軍二等機關兵	吉本梅造
海軍二等水兵	唐津麻富三郎	海軍二等機關兵	中條長松
海軍二等水兵	西村馬次郎	海軍二等機關兵	池田章太郎
海軍二等水兵	石川強太郎	海軍二等機關兵	春日井銀吉
海軍二等信號兵	小林繁松	海軍二等機關兵	馬淵國吉
海軍二等信號兵	篠内彌太郎	海軍二等水兵	永井幸太郎
海軍二等信號兵	中田正三	海軍二等水兵	桑田宗三郎
海軍二等信號兵	西村吟治	海軍二等水兵	出石勘太郎
海軍二等木工	村上房夫	海軍二等水兵	板東新助
海軍二等機關兵	武内實男	海軍二等水兵	小西駒造
海軍二等機關兵	三輪喜丈	海軍二等水兵	若杉國三郎
海軍二等機關兵	原政太郎	海軍二等主廚	佐藤辰次郎
海軍二等機關兵	佃兵一	海軍二等主廚	枅井芳楠
海軍二等機關兵	上田市三郎	海軍三等水兵	關本巳之助
海軍二等機關兵	長野善次郎	海軍三等水兵	東元才次郎
海軍二等機關兵	木下庄太郎	海軍三等水兵	中田利三郎
海軍二等機關兵	高島隆市	海軍三等水兵	藤代寅次郎

海軍三等水兵	藤原正太郎	海軍三等水兵	立田 樽一
海軍三等水兵	水野龍之助	海軍三等水兵	金光新次郎
海軍三等水兵	寺井長藏	海軍三等水兵	野津愛次郎
海軍三等水兵	寺内市平	海軍三等水兵	田中春吉
海軍三等水兵	後藤熊吉	海軍三等水兵	杉本岩太郎
海軍三等水兵	向井巳之助	海軍三等水兵	手錢由五郎
海軍三等水兵	山本時雄	海軍三等水兵	井上留吉
海軍三等水兵	日笠圭次郎	海軍三等水兵	中西絶海
海軍三等水兵	住田武一	海軍三等機關兵	上杉信次郎
海軍三等水兵	熊野虎楠	海軍三等機關兵	眞野彌三郎
海軍三等水兵	川崎酉藏	海軍三等機關兵	遠藤拾藏
海軍三等水兵	深田次郎吉	海軍三等機關兵	山本長太郎
海軍三等水兵	黒田作次郎	海軍三等機關兵	杉田貫二
海軍三等水兵	内藤太一郎	海軍三等機關兵	大原正見
海軍三等水兵	森下清吉	海軍三等機關兵	瀧上市太郎
海軍三等水兵	松内安次郎	海軍三等機關兵	河合繁次郎
海軍三等水兵	下井松之助	海軍三等機關兵	渡部鶴吉
海軍三等水兵	板澤竹次郎	海軍三等機關兵	粹谷豊吉
海軍三等水兵	植木福市	海軍三等機關兵	田中興作

海軍三等機關兵	萱野春次	海軍四等水兵	外崎正世
海軍三等機關兵	岡本梅松	海軍四等機關兵	森照壹
海軍三等機關兵	大石梅吉	海軍四等機關兵	國本精市
海軍三等機關兵	金本五四六	海軍四等機關兵	大林駒市
海軍三等機關兵	大畑吉松	海軍四等機關兵	酒井政次
海軍三等機關兵	原田辰吉	海軍四等機關兵	西村芳松
海軍三等機關兵	太田五市	海軍四等機關兵	平岡一夫
海軍三等主廚	谷田岩吉	海軍四等機關兵	兼行輔千代
海軍三等主廚	岡野龍太郎	海軍四等機關兵	渡邊友穂
海軍三等主廚	戸根文三郎	海軍四等機關兵	島山國利
海軍三等主廚	山本小太郎	海軍四等機關兵	高島一正
海軍四等水兵	河田隆五郎	海軍四等主廚	眞柴兵次郎
海軍四等水兵	仲野彌市郎	海軍四等主廚	小川卯平
海軍四等水兵	伏見九市	割烹	桑垣兵一郎
海軍四等水兵	讀山信章	給仕	別所猪三太
海軍四等水兵	鴻野宗善	給仕	山下源一
海軍四等水兵	金光瀬平	給仕	吉川重男
海軍四等水兵	橋本榮太郎	給仕	綴博子
海軍四等水兵	新川峯正	給仕	村上一太郎

給仕 宮本秀次 剗夫 石原造酒三
給仕 石橋啓太郎

小計 二百六十九名(自二六九
至二八七)

總計 戰死者 二百八十三名

戰傷者 二十名

第三節 衝突擱坐ニ因ル沈没

第一目 軍艦吉野

巡洋艦吉野(四二二)ハ、千歳、吉野、春日、八雲、富士ノ序列ヲ以テ、五月十四日旅順港外ヨリ山東角沖ニ向ヒ航進中、十五日午前一時頃、濃霧忽チ襲來シテ、咫尺ヲ辨ス可カラサルニ至ル、同三十分豫定ノ如ク千歳ニ從ヒテ針路ヲ變換セシカ、同四十分ニ至リ後續艦春日突然左舷側ニ現レ、其ノ撞頭ヲ以テ吉野ノ後部水平線下ニ衝突セリ、是ニ於テ艦長ハ直ニ機關ノ運轉ヲ停止シ、防水作業ヲ令セルモ、浸水速ニ増加シ著シク右舷ニ傾斜シ、到底艦ヲ救フ能ハサルヲ察シ、總員ヲシテ乘艇退去セシム、而モ不幸ニシテ右舷側ニアル端艇ニ移乗シタルモノハ、艦ノ沈没ト同時ニ顛覆シ、避難者多クハ之カ爲メニ深ク海底ニ沈ミテ、再水面ニ出ツルモノ少ク、當時ノ在艦者四百二十三名中、艦長以下三百十九名溺死シ、生存者百四名ハ吉野ノ第二「カッター」及ヒ春日ノ救助艇ニ依リテ、春日及ヒ千歳ニ收容セラレタリ、其ノ救療實況ニ關シテハ、左ニ吉野、春日及ヒ千歳軍醫長ノ報告ヲ掲ク、

軍艦吉野遭難報告

軍艦吉野軍醫長 海軍大軍醫 美濃部 録治

明治三十七年五月十四日千歳、吉野、春日、八雲、富士ノ五隻ハ單縱陣ヲナシテ旅順港沖ヨリ引上ケタル後南東微南ニ針路ヲ取リテ進ミ午後九時ニ至リ四直哨兵ヲ配備セリ

五月十五日午前一時十分頃ヨリ濃霧急ニ襲來シテ咫尺ヲ辨セス纔ニ前進艦ノ速力信號燈ヲ見ルコトヲ得シノミ午前一時三十分吉野ノ速力ハ十海里ニシテ北ニ東ニ變針スルノ豫定ナリシカ果シテ其ノ針路ヲ變シツ、アリシヤ否ヤ詳ナラサレトモ午前一時四十分頃軍艦春日俄然左舷側ニ現レ其ノ撞頭ヲ以テ本艦左舷側ノ第二號發電機室ト十二機火藥庫トニ跨レル水線下部ニ轟然衝突セリ是ニ於テカ艦長ハ直ニ機關ヲ停止シ最初ニ防水扉閉鎖次ニ防漏席出シ方ヲ令シ下甲板以下ノ防水扉閉鎖終ルヤ總員上ヘ總端舟用意ノ號令アリ是ヨリ先キ小官ハ睡眠中ナリシカ衝突ノ震動ト共ニ起床シ急速服裝ヲ纏ヘ直ニ病室ニ至リシニ重症患者ナカリシニ由リ患者避難ノ方法ヲ講スルノ必要ナク疾病要略及ヒ原簿ノ如キ緊要書類ハ已ニ上甲板ニ持チ出シタルコト明瞭ナリシヲ以テ上甲板ニ赴キ後命ヲ待テリ當時本艦ニ於テハ一等看護手藤本龜太郎ハ治療品原簿及ヒ其ノ他緊要書類ヲ攜帶シ二等看護松家勝美ハ疾病要略ヲ持出シ二等看護河田峯吉ハ攜帶藥籠ヲ用意スヘク規定シアリシカハ孰レモ其ノ配置ノ如ク活潑ニ作業シ小官ノ上甲板ニ至リシトキハ端舟用意ノ號令アリシニ由リ諸兵員ト共ニ動作シ居レリ次テ小蒸氣船及ヒ傳馬船ヲ除クノ外大艇第一及ヒ第二「カッター」ハ舷外ニ出シテ引キ鉤シ方ヲ終リ上甲板「ハッチ」ノ入口ヲ閉鎖セリ總テノ準備ヲ終リタルトキハ已ニ浸水上甲板ニ達シ防漏席ハ遂ニ展張スルコト能ハサリシハ遺憾ト云フヘシ傳馬船小蒸氣船ハ未ダ舷外ニ出スニ及ハスシテ總員整列アリ萬歳ヲ三唱シ未ダ終ラサルニ艦體急速ニ右舷ニ傾斜シ右舷「ブームス」ノ波浪中ニ入ラントスル時總員乘艇退去ノ號令アリ而テ艦體ハ衝突ノ時ヨリ凡ソ三十分間ヲ經過シテ東經百三十二度三十三分北緯三十八度六分ノ地點ニ於テ水深約三十五尋ノ海底ニ沈没セリ

艦體ノ沈没セントスルヤ急劇ニ右舷側ニ傾斜シタル爲メ同側ニアリシ大艇及ヒ第一「カッター」ハ「ダビット」等ノ傾

例ト共ニ水中ニ墮入セラレテ顛覆シ僅ニ二名ノ外盡ク死歿セリ然レトモ第二「カッター」ハ御眞影ヲ移載シ且多數ノ將校下士卒ヲ收容シ軍艦春日ニ至リ再救助ニ來リシト云フ

藤本一等看護手、松家二等看護、河田二等看護ノ三名ハ既定ノ配置ニ從ヒ能ク職務ヲ盡セシモ遂ニ艦ト共ニ殉スルニ至レリ但一旦端舟ニ乗シタル後顛覆ノ爲メ命ヲ失ヒシヤ否ヤハ詳ナラス

日下中軍醫ハ小官ノ上甲板ニ出テシ時ハ已ニ大橋ノ附近ニアリ依リテ總員乗艇配置ニ從ヒ大艇ニ轉乘スルヲ至當ト信スル旨ヲ告ケ置キシモ遂ニ乗艇ニ及ハスシテ戰死シタルモノ、如シ

小官ハ總員乗艇配置ニ依レハ汽艇ナリシモ該艇ハ已ニ引キ卸スコト能ハサル場合ナルニ由リ「フライングブリッヂ」ノ後部ニ佇立シ居リ艦ノ傾斜ト共ニ水中ニ没セシモ幸ニ春日ノ大艇ニ救助セラレ一旦千歳ニ收容セラル、コトハナリ懇篤ナル待遇ト周到ナル施療トヲ受ケ五月十七日艦隊根據地ニ至リ病院船西京丸ニ入院シ五月二十八日吳ニ著シ全治退院シ五月二十九日吳鎮守府ニ至リ吳海兵團附ニ補セラレタルヲ知リ直ニ赴任セリ

艦體傾斜ノ際ヨリ最後マテ見タル士官ハ左ノ如キモ孰レモ戰死シ其ノ他候補生以上ノ消息ハ全ク不明ナリ（生存セルニ「カッター」及「春日」ノ航海長竹内大尉ハ前艦橋ニアリ一番分隊長心得小林中尉ハ右舷「ブームス」上ニ於テ後ヲ組マン大艇ニ救助セラレタリ）

トセリ二番分隊長ニシテ當直將校ナリシ黒澤大尉ハ衝突後ハ防水扉及ヒ防漏扉ノ事業ヲ指揮シ居リシモ其ノ後ハ不明ナリ

艦長佐伯大佐ハ前艦橋ニ在リテ嚴明ナル號令ヲ下シ一意防水ニ盡瘁シ遂ニ其ノ成ラサルヲ見ルヤ轉シテ乗員救助ノ手段ヲ盡シ其ノ後浸水艦内ニ充滿シ艦體將ニ覆没セントスルヤ副長心得廣渡少佐ヲ招キテ握手訣別シ次テ總員ヲ呼集シテ萬歳ヲ三唱シ遂ニ艦ノ沈没ト共ニ悲壯ナル戰死ヲ遂ケラレタリ

此ノ厄難ニ際シ生存シタル者及ヒ死歿セシ者左ノ如シ

生存者 百四名

内

上長官	一名	士官	五名
准士官	一名	水兵部下士	七名
機關部下士	四名	其ノ他ノ下士	二名
水兵部卒	五十三名	機關部卒	二十二名
其他ノ卒	五名	備人	四名
死歿者	三百十九名		

内

上長官	二名	士官	二十二名
准士官	八名	水兵部下士	二十五名
機關部下士	二十二名	其ノ他ノ下士	十一名
水兵部卒	百二十八名	機關部卒	七十五名
其ノ他ノ卒	二十三名	備人	三名

右ノ外遭難當時在艦者ニ非サリシモノアリ即チ一等機關兵曹河野儀三郎ハ舞鶴海軍病院ニ一等水兵八百屋才吉ハ佐世保海軍病院ニ入院中ニシテ一等水兵元木卯三郎ハ舞鶴海軍病院ヲ退院シ五月十一日佐世保海兵團ヲ發シ歸艦ノ中途ニアリ又一等機關兵野田京三郎ハ第三回旅順口閉塞隊ニ加ハリシカ行衛不明トナレリ（以上ノ四名ハ前記此ノ遭難ノ爲メニ負傷セル下士卒ハ一名モナカリシモ軍醫長美濃部大軍醫ハ吉野沈没ノ際海上ニ浮游スルコト約二

時間ニシテ春日ノ大艇ニ救助セラレ深夜濃霧ノ間洋中ニ漂泊シ五月十五日午前八時十七分千歳ニ收容セラレシカ五月十六日ヨリ右側肺炎ノ症狀ヲ發シ翌十七日病院船西京丸ニ入院シ二十八日全治退院セリ死歿者中死體ヲ拾收シ得

タルモノ三名アリ即チ三等機關兵高柳政治郎ハ富士ニ於テ一等水兵村上豊治及ヒ三等機關兵島崎外次郎ハ春日ニ於テ引揚ケタル後一應救急處置ヲ施サレタルモ遂ニ無効ナリキ
死歿者官職姓名ハ左ノ如シ

海軍大佐	佐伯 閣	海軍少尉候補生	小島 高彦
海軍少佐	廣渡 顯一	海軍少尉候補生	近藤 鎌吉
海軍大尉	末松 兵市	海軍少尉候補生	宮城 胖
海軍大尉	竹内 兼藏	海軍少尉候補生	迎 爲次郎
海軍大尉	黒澤 鴻藏	海軍少尉候補生	村田 熊猪
海軍大機關士	竹内 三千三	海軍少機關士候補生	石田 流芳
海軍大主計	弘瀬 鶴馬	海軍少機關士候補生	新貝 岩吉
海軍中尉	小林 幾之助	海軍少機關士候補生	伊藤 卓二
海軍中機關士	利府 齊	海軍上等兵曹	村尾 保太郎
海軍中機關士	島村 吉次郎	海軍上等兵曹	井上 武市
海軍中軍醫	日下 亮平	海軍船匠師	藤木 光次郎
海軍少尉	曾布川 新平	海軍上等機關兵曹	山田 龜槌
海軍少尉	市岡 源三	海軍上等機關兵曹	下元 庄馬
海軍少尉	久繼 理一	海軍上等機關兵曹	小林 孝救
海軍少尉	松崎 正明	海軍上等機關兵曹	飯田 林太郎
海軍少機關士	土井 弘	海軍上等機關兵曹	中川 龜一

海軍一等兵曹	田中 熊市	海軍一等機關兵曹	近江 莊太郎
海軍一等兵曹	天野 禎次郎	海軍一等看護手	藤木 龜太郎
海軍一等兵曹	木原 輝夫	海軍一等廚宰	稻澄 國治郎
海軍一等兵曹	加藤 寅吉	海軍二等兵曹	福重 孫右衛門
海軍一等兵曹	細田 久次郎	海軍二等兵曹	二宮 廣吉
海軍一等兵曹	三上 政市	海軍二等兵曹	速水 寅尾
海軍一等兵曹	片岡 末五郎	海軍二等兵曹	澤田 彌三吉
海軍一等兵曹	丹羽 乙造	海軍二等兵曹	中田 熊之助
海軍一等信號兵曹	平田 好太郎	海軍二等兵曹	長松 一三
海軍一等信號兵曹	下野 啓祐	海軍二等兵曹	幹圭 辨
海軍一等信號兵曹	黒杭 忠次郎	海軍二等兵曹	末松 佐七
海軍一等船匠手	足立 孫三郎	海軍二等信號兵曹	村木 助造
海軍一等機關兵曹	寺川 實次郎	海軍二等機關兵曹	伊勢村 助治郎
海軍一等機關兵曹	宮脇 惠一郎	海軍二等機關兵曹	白石 關太郎
海軍一等機關兵曹	森安 太郎一	海軍二等機關兵曹	近藤 二三吉
海軍一等機關兵曹	吉岡 寅吉	海軍二等機關兵曹	木山 乙市
海軍一等機關兵曹	八木 萬吉	海軍二等機關兵曹	元重 三市
海軍一等機關兵曹	八木 喜作	海軍二等機關兵曹	古賀 音三郎
海軍一等機關兵曹	岡本 龜一	海軍二等筆記	井上 章雄

海軍二等尉宰	竹本友次郎	海軍三等機關兵曹	河岡善太郎
海軍三等兵曹	伊藤拾次郎	海軍一等水兵	寺本源松
海軍三等兵曹	中島兵一郎	海軍一等水兵	山本伊與治
海軍三等兵曹	新谷隆藏	海軍一等水兵	樫木猪之助
海軍三等兵曹	服部惠吉	海軍一等水兵	柴崎信哉
海軍三等兵曹	阿部長吉	海軍一等水兵	坂本文次郎
海軍三等兵曹	大塚吉之助	海軍一等水兵	淺野三七次
海軍三等兵曹	河村久藏	海軍一等水兵	岡部喜久彌
海軍三等兵曹	大森兵吉	海軍一等水兵	羽原九右衛門
海軍三等兵曹	太田新吉	海軍一等水兵	藤原榮治
海軍三等信號兵曹	中川寅藏	海軍一等水兵	下野頼敏
海軍三等船匠手	玉置留松	海軍一等水兵	西本三平
海軍三等機關兵曹	藤井甚一	海軍一等水兵	高橋俊一
海軍三等機關兵曹	野村惣之介	海軍一等水兵	松本絹次
海軍三等機關兵曹	三橋覺次郎	海軍一等水兵	村尾太一
海軍三等機關兵曹	宮田兵馬	海軍一等水兵	太田實藏
海軍三等機關兵曹	藤井彌一	海軍一等水兵	藤井藤吉
海軍三等機關兵曹	河西實次郎	海軍一等水兵	村越與五郎
海軍三等機關兵曹	林陸輔	海軍一等水兵	白石類三郎

海軍一等水兵	沖本五郎右衛門	海軍一等機關兵	山村治兵衛
海軍一等水兵	村上豐治	海軍一等機關兵	大島隆二
海軍一等水兵	佐々木喜太郎	海軍一等機關兵	河地榮次郎
海軍一等水兵	宮武徳次郎	海軍一等機關兵	三輪和作
海軍一等水兵	石田鐵次	海軍一等機關兵	板谷万吉
海軍一等水兵	岩崎政吉	海軍一等機關兵	黒田九平
海軍一等水兵	高橋隆	海軍一等機關兵	杉島幸市
海軍一等水兵	正清榮吉	海軍一等機關兵	福島忠次
海軍一等水兵	西川彌吉	海軍一等機關兵	三好熊吉
海軍一等水兵	川崎安次郎	海軍一等機關兵	有岡喜一
海軍一等水兵	中井常右衛門	海軍一等機關兵	谷山伊之助
海軍一等水兵	柴田茂十郎	海軍一等機關兵	柏木熊治郎
海軍一等水兵	伊藤吉藏	海軍一等機關兵	篠崎健助
海軍一等水兵	坂崎春吉	海軍一等機關兵	飯泉松五郎
海軍一等水兵	正田金三郎	海軍一等機關兵	松木兵助
海軍一等信號兵	森本磯吉	海軍一等機關兵	高松寅三郎
海軍一等信號兵	稻田紋藏	海軍一等機關兵	岡田利三郎
海軍一等信號兵	山崎榮之助	海軍一等機關兵	高木忠藏
海軍一等木工	今岡龍三郎	海軍一等機關兵	杉浦時松

海軍一等機關兵	中村儀助	海軍二等水兵	品川恆一
海軍一等機關兵	日下菊三郎	海軍二等水兵	松澤豐藏
海軍一等機關兵	筒井又七	海軍二等水兵	小藤磯三郎
海軍一等機關兵	福田朝	海軍二等水兵	中山石太郎
海軍一等機關兵	小櫻孫市	海軍二等水兵	原田勝藏
海軍一等機關兵	安藤安次郎	海軍二等水兵	井上和吉
海軍一等機關兵	佐藤元吉	海軍二等水兵	杉本美喜藏
海軍一等機關兵	岡本捨市	海軍二等水兵	針生留之助
海軍一等主廚	古關富助	海軍二等水兵	片岡政治
海軍一等主廚	今井文治郎	海軍二等水兵	時安光藏
海軍一等主廚	山崎常藏	海軍二等水兵	眞田野榮治郎
海軍一等主廚	村上正三	海軍二等水兵	池田久太郎
海軍二等水兵	谷口音次郎	海軍二等水兵	大西和三郎
海軍二等水兵	角常藏	海軍二等水兵	市橋兵藏
海軍二等水兵	石井鹿松	海軍二等水兵	小川音吉
海軍二等水兵	川口市松	海軍二等水兵	信岡佐次郎
海軍二等水兵	尾關甚兵衛	海軍二等水兵	水谷仲藏
海軍二等水兵	村西永太郎	海軍二等水兵	村瀬利三郎
海軍二等水兵	高木兵太郎	海軍二等水兵	田中又次

海軍二等水兵	中間定一	海軍二等水兵	富山平次郎
海軍二等水兵	砂山房次郎	海軍二等水兵	鬼頭庄七
海軍二等水兵	磯部兼吉	海軍二等水兵	眞木鶴次郎
海軍二等水兵	西門廣一	海軍二等水兵	西井三之丞
海軍二等水兵	小林康一	海軍二等水兵	風呂山造
海軍二等水兵	青山由太郎	海軍二等水兵	篠木英吉
海軍二等水兵	秋木武助	海軍二等水兵	桑山勝三郎
海軍二等水兵	山下金藏	海軍二等水兵	富田儀一
海軍二等水兵	横山宗五郎	海軍二等水兵	山口和吉
海軍二等水兵	太田金藏	海軍二等水兵	山口唯七
海軍二等水兵	伊藤庄太郎	海軍二等水兵	水野龜吉
海軍二等水兵	内田嘉吉	海軍二等水兵	星太吉
海軍二等水兵	飯田龍太郎	海軍二等水兵	川端宇三郎
海軍二等水兵	見原兼吉	海軍二等信號兵	山本虎之進
海軍二等水兵	清水増吉	海軍二等信號兵	有道由松
海軍二等水兵	加藤元吉	海軍二等信號兵	濱本乙一
海軍二等水兵	岩崎鐵藏	海軍二等木工	梶原初吉
海軍二等水兵	坂井田代次郎	海軍二等木工	沼田榮策
海軍二等水兵	津田八重和	海軍二等木工	能町常次郎

海軍二等機關兵	一 圓 友	海軍二等機關兵	前田竹次郎
海軍二等機關兵	住田安吉	海軍二等機關兵	伊藤茂吉
海軍二等機關兵	野村政市	海軍二等機關兵	春 一 郎
海軍二等機關兵	沖野義一	海軍二等機關兵	阿部常右衛門
海軍二等機關兵	藤村熊次郎	海軍二等機關兵	梶原菊松
海軍二等機關兵	生田益太郎	海軍二等機關兵	目良庄吉
海軍二等機關兵	渡邊鐵藏	海軍二等機關兵	鈴木 徹
海軍二等機關兵	小川專一	海軍二等看護	松家勝美
海軍二等機關兵	高橋光衛	海軍二等看護	河田 肇 吉
海軍二等機關兵	袴田才次	海軍二等主廚	池田三次郎
海軍二等機關兵	長崎又三郎	海軍二等主廚	廣野要次郎
海軍二等機關兵	宇田忠兵衛	海軍二等主廚	松本 九 助
海軍二等機關兵	川端文助	海軍三等水兵	松浦耕作
海軍二等機關兵	岩水五郎吉	海軍三等水兵	木田榮太郎
海軍二等機關兵	古橋 與 作	海軍三等水兵	阿部岩治郎
海軍二等機關兵	山際辰之助	海軍三等水兵	藤井宗太郎
海軍二等機關兵	西村辰五郎	海軍三等水兵	鹽崎彌惣吉
海軍二等機關兵	井上 秀 吉	海軍三等水兵	田 邊 四 郎
海軍二等機關兵	近木太吉	海軍三等水兵	伊藤庄三郎

海軍三等水兵	中木熊四郎	海軍三等水兵	森 章 治
海軍三等水兵	大平濱次郎	海軍三等水兵	井戸川金三郎
海軍三等水兵	萩野周三郎	海軍三等信號兵	鈴木 英 男
海軍三等水兵	清水太市	海軍三等木工	益田榮次郎
海軍三等水兵	西 仁 太 郎	海軍三等機關兵	氏 本 繁 延
海軍三等水兵	鈴木 山 藏	海軍三等機關兵	野田與左衛門
海軍三等水兵	鈴木 春 吉	海軍三等機關兵	山本是四郎
海軍三等水兵	阿久久吉	海軍三等機關兵	高柳政治郎
海軍三等水兵	田丸留吉	海軍三等機關兵	辻 友 吉
海軍三等水兵	中谷伊之助	海軍三等機關兵	折戸 彦 助
海軍三等水兵	堀内 猶 藏	海軍三等機關兵	大橋傳治郎
海軍三等水兵	平井榮三郎	海軍三等機關兵	島崎外次郎
海軍三等水兵	藤江外吉	海軍三等機關兵	松根吉太郎
海軍三等水兵	中 松 廣 助	海軍三等機關兵	岡本重太郎
海軍三等水兵	小 新 七	海軍三等機關兵	宮本圓次郎
海軍三等水兵	木戸勘次郎	海軍三等機關兵	八尾保太郎
海軍三等水兵	西 安 次 郎	海軍三等機關兵	今村 藤 吉
海軍三等水兵	小倉作太郎	海軍三等主廚	平井文次
海軍三等水兵	松井利平	海軍四等水兵	篠原信義

海軍四等水兵	藤川圓太郎	海軍四等機關兵	小谷幸吉
海軍四等水兵	山根清太郎	海軍四等機關兵	田野芳松
海軍四等水兵	吉富三右衛門	海軍四等機關兵	中川春吉
海軍四等水兵	上重實之丞	海軍四等機關兵	西原政次郎
海軍四等水兵	氏川龍一	海軍四等機關兵	小南喜太郎
海軍四等水兵	黒木庄八	海軍四等機關兵	矢口玉造
海軍四等水兵	森下勇	海軍四等主廚	堀内房次郎
海軍四等水兵	中山友吉	給仕	田原勳
海軍四等水兵	矢板兵助	剃夫	河島金作
海軍四等機關兵	柿木善七	剃夫	小松福彌
海軍四等機關兵	西川房吉		
合計	三百十九名(自三八〇至五九八)		

五月十五日春日吉野衝突状況竝ニ吉野乗員溺者收容及ヒ救療顛末

軍艦春日軍醫長海軍々醫少監 立花保太郎

五月十三日拂曉ヨリ旅順港外ニアリテ封鎖監視ニ從事シタル我カ艦隊ハ千歳吉野春日八雲富士ノ五隻ニシテ千歳ヲ先導トシ順次之ニ隨ヒ單縦陣ヲ制リ日夜洋中ヲ警戒航行セリ越エテ十五日午前一時十分ニ至リ俄ニ濃霧襲來シテ四邊ヲ辨セス時ニ艦隊ハ速力増加航路變針ノ時期ニ在リ諸艦逐次回轉運動中一時四十分我カ春日ハ突然「ブツッ」ントシテ異大ノ響音ヲ發スルト同時ニ船體激動ヲ感シ暗中其ノ艦首ヲ以テ吉野ノ左舷後部大橋ト後艦橋トノ中間部ニ衝突セリ此ノ咄嗟本艦ハ全速後退ヲ行ヒ直ニ前後艦橋ニ探海燈ヲ照シ周圍ヲ照ラシ、モ深霧ノ爲メ近圍瞭々ト

シテ一物ヲモ見ル能ハス加フルニ南風強ク巨浪舷側ヲ打ツノ聲高ク爲メニ吉野トノ呼應相通セス衝突ノ瞬間吉野ノ邊影ヲ認メシ外今ヤ其ノ何レニアルヤ明ナラス一同頻ニ其ノ損害程度如何ヲ慮リツ、アリシカ暫クニシテ吉野ヨリ「某區滿水我人命ノ救助ヲ要ス」トノ無線電信ニ接セシヲ以テ直ニ「カッター」ヲ下シ吉野ノ所在ヲ索メ救助ニ赴ケリ時ニ午前二時十五分ナリ該「カッター」未タ吉野ヲ探リ得サル中吉野ハ沈没ノ不幸ニ陥リ二時四十五分吉野ノ「カッター」一隻士官五名准士官一名下士卒七十餘名ヲ擁シ幸ウシテ本艦ニ達シ救助セラレタリ就中其ノ一部ハ全然艇内ニ乗組ム能ハスシテ或ハ舷縁ニ憑リ或ハ單ニ泳著キシモノアリ其ノ言ニ依レハ吉野ノ短艇ハ左舷ニ於ルモノ前記一隻ノ外ハ悉ク覆没セシナラン殊ニ右舷側「ピンネース」「カッター」等ニハ多數ノ士官兵員乗組ミタルモ未タ艦側ヲ去ラサル間ニ吉野右舷ニ傾斜シ次テ沈没シ其ノ煙筒及ヒ櫓等ノ爲メ乗艇皆壓沈セラレタルモノ、如シト因テ三時四分更ニ本艦「ピンネース」ヲ下シ看護手ヲ乗組マシメ携帶藥籠武庫彈匣等ヲ携ヘ溺者救助ニ赴ケリ該艇ハ海上ニテ偶然漂流中ノ美濃部軍醫長以下六名ヲ救出シ歸途ニ就クヤ本艦ノ位置ヲ見失ヒ數時間北方ニ漂流中千歳ノ碇泊セルニ邂逅シ該艇ニ收容セラレ根拠地ニ至ル又三時三十分更ニ「カッター」ヲ下シ近圍ニ漂流シ來レル溺者ヲ救出セシム然レトモ當時尙四圍暗黒風浪高ク收容頗ル困難ニシテ救助艇ハ暗中救ヲ呼フノ聲ヲ便リニ四方ニ馳セ或ハ木片及ヒ其ノ他ノ浮游物ニ據リ浮漂中ノモノ或ハ游泳中ノモノヲ收拾シ日出ニ至ルノ間引續キ二十餘名ヲ救助セリ此ノ間我カ衛生部員ハ軍醫以下負傷者運搬手十數名全方ヲ竭シテ溺者ノ救護ニ從ヒ重症者ハ後部治療所ニ輕症者ハ下甲板兩側通路ニ收容セリ其ノ數前後通計九十七名外ニ死體二アリ左ノ如シ

准士官以上

六名

下士卒並ニ傭員

九一名

内 譯

水兵部下士

五名

同 卒

五〇名

第八章 第三節

第一目 軍艦吉野

二百十三

信號部下士	一名	同 卒	二百十四
機關部下士	四名	同 卒	二二名
直外下士(筆記)	一名	主 廚	二名
給 仕	三名	割 烹	一名
死 體	二		

機關部卒	一	水兵部卒	一
------	---	------	---

前記ノ第一回吉野「カッター」ニ乗シテ到着セシ兼常機關長内藤(精)大尉、黒岩中尉、波川小川ノ兩少尉、柴田上等兵曹及ヒ下士卒七十餘名ハ何レモ多少ノ海水ヲ嚙下シ就中黒岩中尉外下士卒十數名ハ殊ニ多量ノ海水ヲ嚙下シ苦悶且疲憊ノ狀ヲ呈シ精神一時朦朧タリ第二回以下逐次收容シタル溺者ハ何レモ午前四時過ニ至リ救出セラレタルモノナルヲ以テ沈没後二時間内外ハ海上ニ漂流シ必死ノ勞力ト寒冷トノ爲メ一層衰弱甚シク溺水ト共ニ多少ノ挫傷及ヒ擦過傷ヲ受ケタルモノ甚タ多ク當夜十二時ノ海水溫度ハ五十二度甲板溫度ハ五十六度ヲ示シ加フルニ風浪強カリシヲ以テ冷却殊ニ甚シク長時間浸水セシ結果殆ト凍死ニ垂ントセルモノモアリキ就中固ク浮游物ヲ抱キシマ、人事不省ニ陥リ艦内ニ運搬セラル、ノ際既ニ死亡セルモノ二人アリ又治療所ニ至リテ蘇覺スルヤ一時騷狂狀ヲ呈シ大聲ニ呼號スルアリ類ニ佛名ヲ連唱スルアリ與奮劑トシテ葡萄酒ヲ與ヘントスレハ毒藥豈飲ム可ケンヤト拒絶シ且周圍ニ集レル運搬者ヲ凝視シテ怒レルモノ、如ク惧ル、モノ、如ク恰モ敵艦ニ捕獲セラレタルノ狀ヲ呈セルモノアリキ蓋事變突如トシテ瞬間ニ起リ且深更ナリシヲ以テ熟眠中ヨリ蹶起シテ避難セシモノニアリテハ事ノ真相如何ヲ解スルニ暇アラス所謂五里霧中ニ彷徨スルコト多時力竭キ神衰ヘ人事不省ニ陥リシモノモ多カルヘシ是等ハ激甚ノ精神變動ノ結果唯一意敵ノ襲來ニ遇ヒ終ニ敵艦ニ收容セラレタルモノト感セシモノナランカ

重症者ノ運搬及ヒ一般溺者ノ處置 重症ナル溺者ニシテ失神セシモノハ第一著ニ治療所ニ收容スルノ必用アルヲ以テ他ノ比較的輕症者ニ先ダチ「トッブ」用形規定擔架ヲ用ヒ短艇ヨリ直ニ甲板上ニ引上ケタリ是當時波高ク短艇ノ動搖甚シク且艇内ニ多數ノ收容人員アリ到底底狀擔架其ノ他長形ノモノヲ使用スル能ハサリシニ因ル上甲板ヨリ治療所ニ至ルノ間ハ悉ク徒手運搬ニ據レリ此ノ如キ危急ノ場合患者ノ生死寸刻ヲ爭フ際艦内ノ如キ短艇離ニ在リテハ擔架ヲ使用スルカ如キ迂遠ノ方法ヲ採ル能ハス速是命ナレハ徒手運搬ヲ措テ他ニ上策ナシ況ヤ重大ノ負傷ナキニ於テヲ其ノ他重症者ノ幾分及ヒ輕症者ハ下甲板舷側ニ開口セル水雷取入レ口ヨリ收容セリ

治療所ニ於テハ臨機晒木綿ヲ二三尺ニ引裂キタルモノ數十ヲ作り手拭用トシ近圍ニ集レル本艦下士卒ニ配付シ一人ノ溺水者ニ一人ノ介保ヲ附シ自ラ手指ヲ口ニ送りテ吐セシムルト同時ニ速ニ其ノ濕衣ヲ脱シ前記木綿巾ヲ以テ全身皮膚ヲ摩擦シ病衣ヲ纏ハシメ又ハ止ムヲ得ス單ニ毛布ヲ纏ハシメ衛生酒ヲ與ヘ輕症者ハ之ヲ下甲板兩側通路ニ導カシメテ該通路ハ機關室上部ニ位シ兩側前後共ニ裝甲板ニ圍繞セラル從テ艦内最暖キ場所ニシテ且兩通路間ニ幾多ノ中間橫行通路アリ優ニ數十人ヲ收容シ得ヘク本艦ニ於ル負傷者收容所トシテ定メラレタルモノナリ

重症者ハ治療所ニ於テ極力救急療法ヲ加ヘ失神者ニ對シテハ先ツ手術臺上ニ俯セ胃部ニ枕ヲ置キテ海水ヲ吐逆セシメ更ニ仰臥ニ保チ一方ニ於テハシルヅエスター人工呼吸ヲ行フト同時ニ一方ニ於テハ布片ヲ以テ全身皮膚ヲ摩擦シ樟腦依的兒ノ皮下注射、胸部輕打等百方回復ニ努メ漸ク蘇生ニ近シキタルモノニハ「ヂン」武園埴或ハ艦内所藏ノ葡萄酒等ヲ與ヘ治療所「デッキ」或ハ「ツファー」上ニ仰臥セシメ厚ク毛布ヲ纏ヒ溫包セリ此ノ如キ重症者約五人就中二人ハ已ニ眞死ニ陥リタルモノニシテ蘇生セズ

重ナル溺水者負傷者及ヒ死體檢案記事左ノ如シ

海軍三等水兵 庄 田 德 松

明治三十七年五月十五日旅順封鎖監視警戒航行中吉野沈没ノ際海中ニ溺レ多量ノ海水ヲ嚙下

シ本艦ニ收容當時ハ顔面蒼白四肢厥冷脈搏細微嘔吐譫語ヲ發シ殆ト人事不省ニ陥レルヲ以テ樟腦依的兒ノ皮下注射全身ノ溫包與番劑ノ内服ニ依リ漸次醒覺シ頭痛腹痛四肢倦怠等ヲ訴フ、依テ適應療法ヲ施ス

海軍二等機關兵 片岡好太郎

右同斷多量ノ液體ヲ嘔吐シ精神昏朦嘔吐ヲ獨語ス、救急療法ヲ施シ覺醒後眩暈及ヒ激甚ノ頭痛ヲ訴フ

海軍一等兵曹 中野房吉

右同斷精神少ク朦朧多量ノ液體ヲ嘔吐シ疲憊ノ狀アリ救急療法ノ結果速ニ回復シ腹痛腹部膨滿及ヒ激甚ノ頭痛ヲ訴フ、依テ下劑ヲ投シ適應療法ヲ施セリ

(此ノ外尙二三ノ救急法ヲ施シテ速ニ回復シ下甲板群集中ニ移サレタルモノアリ混雜ノ際其ノ姓名及ヒ記事ヲ逸セリ)

右拇指挫傷(業)

軍艦吉野乗組 海軍三等水兵 鷺野久治郎(五九九)

吉野沈没ノ際下甲板防水扉閉鎖ニ從事中負傷ス、之ヲ診スルニ右拇指ニ挫傷ヲ負ヒ溢血ナレト雖モ疼痛甚シク拇指ノ運動自在ナラス、依テ石炭酸水器法ヲ施ス

腰部挫傷(業)

同 海軍一等機關兵 三村千萬(六〇〇)

吉野沈没ノ際船體右舷ニ傾キ次テ左舷ニ搖返シノ爲メ左舷ニアル三斤砲身ニ壓セラレテ負傷ス之ヲ診スルニ腰部ニ壓痛ヲ有シ屈伸ノ時疼痛殊ニ甚シク活潑ナル歩行ヲ營ム能ハス依テ黄岩擦劑等ノ處置ヲ施ス

背部左右下腿擦過傷(業)

同 海軍二等機關兵 吉田豐左衛門(六〇一)

吉野沈没ノ際海中ニ溺レ游泳中被服著用ノマ、軀幹四肢ノ激シキ運動ヲ行ヒタルノ結果自己ノ衣服ヲ以テ身體ヲ摩擦シテ負傷ス之ヲ診スルニ背部一般及ヒ兩下腿後面ニ擦過傷ヲ負ヒ特ニ左背部及ヒ左下腿後面ノモノハ皮膚腐ノ炎症腫脹ヲ兼ネ漿液ノ分泌著シ依テ硼酸軟膏貼用等ノ處置ヲ施ス

左鼠蹊部挫傷(業)

同 給仕 青木留吉(六〇二)

吉野沈没ノ際右舷ニ傾斜シ右舷側ノ短艇内ニアリテ木材ヲ以テ左鼠蹊部ヲ打撲セリ、之ヲ診スルニ陰阜及ヒ左鼠蹊部腫脹シ溢血斑ヲ呈シ疼痛甚シ依テ石炭酸水器法ヲ施ス

死體檢案記事

軍艦吉野一等水兵 村上豐次郎

軍艦吉野三等機關兵 島崎外二郎

明治三十七年五月十五日吉野沈没ノ際海中ニ溺死シ本艦ノ救助短艇ニテ死體ヲ收容ス、之ヲ檢スルニ人事不省顔面蒼

白眼球上置、瞳孔散大、四肢厥冷、全身筋肉肛門弛緩シ、心音ヲ聴取セス脈搏ニ觸レス、全身外表ニ認ムヘキ異常ナシ、俯セテ背部ヲ壓スレハ鼻口腔ヨリ液體流出ス

軍艦吉野遭難者救護状況

軍艦千歳軍醫長海軍大軍醫 三輪 春吉

軍艦吉野衝突ノ不幸ニ遭ヒテ沈没スルヤ軍艦春日ノ「ピンネース」ニ救助セラレタル後更ニ本艦ニ收容シタル遭難者ノ状況左ノ如シ

海軍大軍醫 美濃部 録治(六〇三)

明治三十七年五月十五日午前一時四十分頃吉野遭難ノ際船體ト共ニ沈没シ再浮出シテ木片ニ取附キ海水中ニアルコト約一時間ニシテ春日ノ「ピンネース」艇ニ救助セラレ午前八時十七分本艦ニ收容セララル、多量ノ海水ヲ嚥下シ胃痛甚シク身體モ亦疲勞シ關節痛筋痛アリ但打撲等ノ痕跡ナシ、興奮劑ヲ處シ莫比水ノ注射次硝酸著鉛ノ内用ニヨリ症状著シク輕減シ十七日病院船西京丸ニ入院(右胸着面下部ニ水泡着アリ、少スニ二十八日全治退院シ吳海兵團附ヲ命セラル)

海軍二等兵曹 鞍谷 林八

海軍二等水兵 中村 要助

明治三十七年五月十五日午前一時四十分頃軍艦吉野遭難ノ際第二「カッター」ニ乗組ミ軍艦春日ニ救助セラレシカ後他ノ乗員救助ノ爲メ案内者トシテ春日ノ「ピンネース」ニ乗組ミ搜索救助ヲ爲シ午前八時十七分本艦ニ收容セララル身體疲勞スルノ外異狀ナシ興奮劑ヲ處シ休養セシム

海軍三等兵曹 竹村 倉之進

海軍一等水兵 藤原 金重

海軍一等水兵 白井 鈴三郎

明治三十七年五月十五日午前一時四十分頃軍艦吉野遭難ノ際船體ト共ニ沈没シ再浮出シテ木片ニ取附キ海水中ニアルコト約一時間ニシテ春日ノ「ピンネース」ニ救助セラレ午前八時十七分本艦ニ收容セララル身體疲勞ノ外異常ナシ興奮劑ヲ處シ休養セシム

海軍一等機關兵 米津 樂太郎

明治三十七年五月十五日午前一時四十分頃軍艦吉野遭難ノ際「ピンネース」ニ乗組ミタルニ船體ノ沈没ト共ニ「メンマスト」ニ壓セラレ該艇モ亦沈没シ一時水中ニ吸入セラレシモ再浮出シ圓村ニ取附キ海水中ニアルコト約一時間ニシテ春日ノ「ピンネース」ニ救助セラレ午前八時十七分本艦ニ收容セララル左肩頭、右前胸及ヒ右膝關節ニ疼痛ヲ訴フルモ腫脹ナク身體疲勞ス興奮劑ヲ處シ患部ニ樟腦精ヲ塗布シ膝關節ニハ一％鉛糖水罨法ヲ施シ休養セシム

第二目 軍艦大島

砲艦大島(六四噸)ハ、遼東西岸ノ敵兵ヲ威嚇砲撃スルノ目的ヲ以テ、三十七年五月十五日鹽大澳ヲ發シ、十六日午後五時ニ至ル迄、陸上ニ在ル敵兵ヲ射撃シ、後チ沖合ニ向ヒテ航過セシカ、十七日午前二時頃ヨリ、濃霧四塞シテ咫尺ヲ辨セス、不幸ニシテ後續艦赤城ノ衝突ヲ受ケ、右舷側中央機關部ヲ破損シタル爲メ、海水速ニ浸入シ、三時三十八分ニ至リ、終ニ沈没ノ悲運ニ陥リ、乗組

總員百三十七名ハ、赤城、秋津洲及ヒ自艦ノ端舟ニ移乗シテ赤城ニ收容セラレ、次テ根據地ニ歸
港ス、

軍艦大島沈没當時ノ衛生報告

軍艦大島軍醫長海軍大軍醫 渡 邊 開 吉

大島ハ第六戰隊ノ諸艦ト共ニ塔山及ヒ金州城ヲ砲撃スヘキ命ニ接シ五月十五日午前四時鹽大澳ヲ出發シテ十六日午
前十一時塔山沖ニ到著シ午後零時三十分ヨリ塔山及ヒ其ノ附近ニ散在セル敵ノ兵候兵ヲ砲撃シテ午後五時ニ至リ砲
撃ヲ止メ西南方ノ航路ヲ取りテ航行セリ然ルニ十七日午前一時四十分頃ヨリ急ニ濃霧ニ襲ハレタルヲ以テ司令官ノ
命ニ依リ投錨セントスル瞬間軍艦赤城ト衝突シ右舷中央機關部ニ大損害ヲ蒙リ之カ爲メ浸水甚シク機關室ノ如キハ
一分時内外ニシテ全ク満水セリ次テ鄰接セル治療所及ヒ士官室ニ浸水セ「コリシヨンマツト」ノ效力ニ依リ一時其ノ
勢ヲ減シタリシモ潮水ハ漸次艦ノ各部ニ侵入シ到底艦體ヲ救助スルノ見込ナキヲ以テ艦長ハ三時三十分總員ヲ集合
シ萬歳ヲ三唱シ赤城、秋津洲及ヒ本艦ノ端舟ニ分乗シ終ルヤ否ヤ本艦全ク沈没セリ時ニ五月十七日午前三時三十八分
ナリ總員ハ軍艦赤城ニ收容後午前七時秋津洲ニ轉容セラレ十八日午後七時二十五分根據地ニ歸著ス

兵員ノ動作 軍艦赤城ト衝突スルヤ總員直ニ其ノ部署ニ就キ動作セリ即チ防水扉閉鎖「コリシヨンマツト」出シ方「ボ
ンブ」ニテ排水方端舟出シ方及ヒ受持要書類其ノ他ノ官品出方ニ盡カセル等危險且難中ニ急劇ナル動作ヲ爲シ、
モ幸ニシテ死傷者無ク只端舟移乗ノ際胸部ニ輕度ノ打撲傷ヲ負ヒシ者一名アリタルノミニシテ乗員ノ全部悉ク生存
收容セラレタルハ不幸中ノ幸ト謂フ可シ

遭難當時本艦ノ看護部員ハ二等看護手松井竹二二等看護後藤尙一ノ二名ニシテ何レモ敏活ニ動作シ治療室ニ在リテ
平素定ムル所ニ遵ヒ小官監督ノ下ニ必要書類ヲ取り纏メ居ル間ニ端ナクモ治療所ニ浸水ヲ始メタリ之カ爲メ治療品
出納簿醫事日誌疾病要略ノミヲ携帶シテ一度上甲板ニ出テタレトモ本艦ノ最後ニハ尙多少ノ時間アルヘシト信シ

再治療所ニ降リテ其ノ他ノ書類ヲ取出シ終リ次テ古キ書類ヲ取出サントセシニ浸水ノ爲メ其ノ目的ヲ達スル能ハス
依テ看護手ヲシテ治療用器械類ヲ出サシメ小官ハ「ハツチ」中央部ニ居リテ是等ノ官品ヲ上甲板ニ取り舉ゲタリ時ニ
浸水ハ深クシテ看護手下半身ヲ水中ニ没シナカラ沈著ニ立チ働キタルハ賞スルニ餘アリト信ス取出シ得タル書類
及ヒ器械類ハ左ノ如シ

醫務上必要書類

疾病要略

悉皆

醫事日誌

三十七年一月一日ヨリ五月十六日ニ至ル迄ノ分

治療品出納簿 二冊

本年ニ關係アル分ノミ

患者日誌 體溫表及ヒ處方箋

三十七年一月一日ヨリ五月十六日ニ至ル迄ノ分

人員日表

同 斷

患者目錄 人員月表 患者月表

同 斷

體重報告 種痘結果表

三十七年五月十六日ニ至ル迄ノ分

患者週報

三十七年一月二十八日ヨリ五月十六日ニ至ル迄ノ分

要書類

三十七年五月十六日ニ至ル迄ノ分

違書類綴

同 斷

雜書類綴

同 斷

軍醫官服務規則 一冊

治療品經理規程 一冊

治療品關係書類

三十五年度ヨリ三十七年五月十六日ニ至ル迄ノ分

第八章 第三節 第二目 軍艦大島

治療用器械類

品名	數量	品名	數量	品名	數量
函納外科器	一具	照鼻鏡	一具	匄秤	一具
小外科器	一具	直腸鏡	一具	二瓦秤	一具
攜帶外科器	一具	銀導尿管	一具	皮下注射器	一具
拔牙器	一具	裝創鑷子	二具	護謨灌腸器	一具
齒科器	一具	攜帶藥籠	一具	嚼囉仿謨吸入器	一具
小眼科器	一具	攜帶連具	二具	縫合器	一具
種痘用具	一具	檢尿具	一具		
檢耳鏡	一具	檢力器	一具		

其ノ他ノ藥品消耗療用品定備療用品ハ百方手ヲ盡シタレトモ遂ニ船體ト共ニ沈没亡失セシムルノ止ムヲ得サルニ至レリ
兵員ノ精神狀態 船體ノ沈没迄ハ沈著敏活ニ動作セシモ赤城ニ收容後間モナク秋津洲ニ轉容セラレタル頃ハ是迄勞
働セシ疲勞ノ出デタルノミナラス既ニ吾艦ヲ失ヒタル爲メ孰レモ愁然トシテ力ナケニ見エタルモ幸ニ著シキ精神變
狀ヲ呈シタルモノナカリキ

第三目 軍艦愛宕

砲艦愛宕(六二)ハ、三十七年十月以降、旅順龍城ノ敵ニ對スル密輸入ノ防遏ニ從事シ、隍城島ヲ根
據トシテ天候ノ許ス限り出港シ、晝間ハ老鐵山水道及ヒ廟島列島附近ヲ巡航シ、夜間ハ主トシ

テ隍城島ニ碇泊セリ、此ノ時ニ當リ渤海灣内風浪漸ク荒ク、加フルニ艦體ノ小ナルヲ以テ其ノ
動搖甚シク、乗員ノ困難眞ニ名狀スヘカラサリキ、

同年十一月六日午前七時三十分、北隍城島ヲ發シ哨區ニ就カントシ、七時五十五分全速力ヲ以
テ隍城島水道ヲ通過ノ際、不幸ニシテ暗礁ニ擱坐シ、前部彈藥庫下ニ損傷ヲ受ケタルヲ以テ、前
部下甲板ハ速ニ浸水ヲ蒙リ、八時五分總員退去ノ令ニヨリ、乗員一部ツ、退艦ヲ始メシカ、其ノ
間浸水益々加ハリ、諸般ノ救助モ其ノ效ヲ奏セス、艦首ヨリ徐々ニ沈降シ、八時二十一分急速右
舷ニ傾斜シテ沈没シ、艦ノ後部左舷ノ一部ト煙突及ヒ櫓トヲ水上ニ露スノミ、沈没ノ際乗員ノ
殆ト半數ハ、海中ニ投シ或ハ墜落セシモ、本艦ノ端舟及ヒ軍艦薄雲、水雷艇小鷹第七十一號、第
十一號假裝砲艦ノ端舟等ニ救助セラレ、悉ク無事ナルヲ得タリ、乗員中准士官以上五名、下士卒
三十五名ハ、軍艦薄雲ニ乗シテ青泥窪ニ至リ臺南丸ニ移サレ、艦長以下准士官以上八名、下士卒
五十三名ハ、軍艦和泉ニ乗シテ翌七日臺南丸ニ收容セラレタリ、臺南丸ニ收容後ハ、同艦ニ於テ
青泥窪ノ警備ニ從事シ、兼ネテ港外圓島附近ヨリ北三山島ニ至ル海面ノ浮流水雷搜索及ヒ密
輸入船ノ監視ニ任シタリ、(軍醫長加藤安吉報告ニ據ル)

第九章 陸軍トノ共同作戰

第一節 鴨綠江畔ノ陸軍援助

第一目 軍艦宇治